

with enoco  
2012.4 - 2017.3

e n

o c

o と

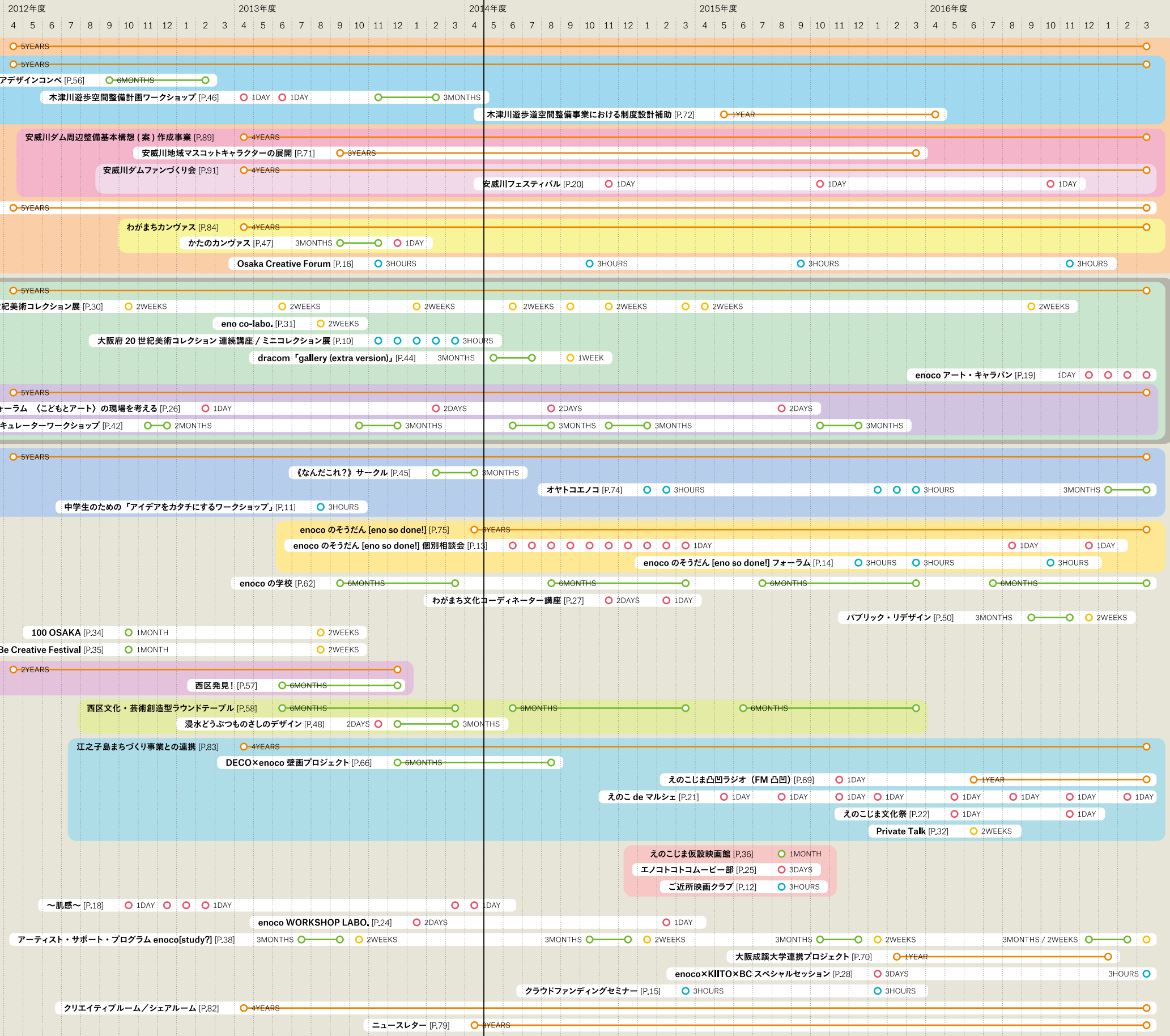
— 江之子島文化芸術創造センターのつかいみち —

大阪府立 江之子島文化芸術創造センター / enoco





# 大阪府立江之子島文化芸術創造センター/ enoco [P.115]



**enocoと**

— 江之子島文化芸術創造センターのつかいみち —

## はじめに

2012年4月に新しく開館した大阪府立江之子島文化芸術創造センター/enocoも、2017年で5周年を迎えることになりました。5年という期間は私たちが運営を担う指定管理の区切りでもあるので、これを節目に、これまでの活動を記録しておこうとまとめたのが本書です。

スタートアップのこの5年は、所轄の大阪府文化・スポーツ課（当初は文化課）にとっても、指定管理者の私たちにとっても、まさに試行錯誤の5年間でした。5年という指定管理の期間は、大阪府の他施設と比べると比較的長い期間です。これがもし1年とか3年といった短いスパンで成果を求められる施設であったら、これほどじっくりと悩むこともできなかったでしょう。そういう意味では幸いでした。

開館当初、江之子島という町名の知名度の低さもあって（本当に誰も知らない）、都心の便利な場所にあるにも関わらず、施設の認知度は一向に上がりませんでした。また施設のことは知っていても、「何をやっているのかよくわからない」という意見を、度々耳にしました。確かに、クリエイティブなジャンル全般を対象にすると宣言したものの、それは幕の内弁当のようでもあって、これといった特徴のない施設に映ったことは否めません。その背景には、enoco設立の経緯も関係しています。最初の指定管理者を決めるプロポーザルの募集要項を読み返してみると、そこには担うべき業務として、大阪府の美術コレクションの管理・活用と貸館業務に加えて、新しく再開発の進む江之子島エリアのまちづくりや、そこに交流・対話・協働の拠点づくりとプラットフォーム形成支援事業というよくわからない事業（詳しくは本文を読んで下さい）が加わり、更には近代建築をリノベーションした歴史的建築物の活用も任されるなど、幕の内弁当でもこれほど詰め込まないだろうというくらいに、脈絡なくたくさんの事業が並んでいました。ちょうど2010年に第2次大阪府文化振興計画が策定され、従来のように社会に保護される

文化から、社会を支える文化への転換が求められ、文化の予算が大幅に削減されていた時期です（今もそうですが）。そんな状況下で新たに文化施設を建設することは極めて難しく、ちょうど江之子島の広大な府有地を民間に売却する計画があり、その地に残っていた近代建築は保存するというので、渡りに船ではないですが、そこに文化施設という機能を結びつけたのです。そしてこの小さな近代建築にこそぞとばかり、様々な文化事業が詰め込まれました。ちょっと大げさな喩えですが、府の文化芸術事業のノアの方舟といった側面があったのです。

しかし、本当にただ詰め込んだだけというわけでもありません。もう少し俯瞰的に眺めれば、そこには大阪の文化行政の大きな2筋の流れを見出すことができます。府と市、経済界がオール大阪で取り組んでいた「水都大阪」の都市再生の動きと、enocoの前身に当たる大阪府立現代美術センターのアートフェスティバル「大阪・アート・カレイドスコープ」による、都市の中でのアートの実践です。共通して「都市」というキーワードを持つ2つの流れが交差したのが、2009年に開催された「水都大阪2009」でした。建築家やまちづくりに取り組む人たちと、アーティストやアートの裏方として動く人たちがそこで出会い、中之島をフィールドに協働のプラットフォームが形成され、都市の魅力を高めるアート、公共空間の可能性を切り開くアートの可能性が示されたのです。その後「水都大阪」は水都大阪パートナーズによる「水都大阪フェス」へ、アートの動きは「おおさかカンヴァス推進事業」へと展開し、全国的にも注目を集めて高い評価を得るプロジェクトへと成長していきます。このような流れを背景に、enocoが文化芸術の創造によって、「大阪という都市の魅力の向上に資する」施設として計画されたことは、必然でもありました。

enocoは3年目から、幕の内弁当状態を脱して、その存在意義を明確に打ち出すべく、「アートやデザインで社会課題を解決する

ための拠点化」を目指しました。事業にメリハリをつけ、このプロジェクトは社会課題の解決に役立つかどうかという観点から、全ての事業を見直しました。館内の活動にとどまらず、積極的に地域やコミュニティの現場に出て行くようにしました。アートやアーティストには、既成の体制や規制、つまり当たり前になってしまっている状況に揺さぶりをかける力があります。あるコミュニティに対して、どのような利害関係からも独立したアーティストが異邦人として入り、作品の制作や作品という場の人々を巻き込むなかで、新たなコミュニケーションや出来事を誘発していきます。またアーティストのアイデアを実現するプロセスで、公共空間に張り巡らされた様々な規制が顕在化され、その乗り越えを通じて公共空間の活用の幅が広がっていきます。

デザインは、いうまでもなく社会の問題を解決する強力な手段です。しかし社会の問題、特に公共空間にどこまでデザイナーが関わっているかということ、そのポテンシャルを十分に活かし切れているとは言えません。行政内では、デザインは単に表層の美しさを装う余剰的なものという認識がまだ根強く、様々な規制が公共の仕事をデザイナーに依頼することを難しくしています。その一方で、これからの市町村はブランディングが重要ということで、逆説的ですがクリエイティビティが持ち上げられている風潮もあり、デザインに対する理解やクリエイターとのコミュニケーションが不足している市町村からは、単に格好いいだけのポスターや、面白いだけのプロモーションツールが次々に生みだされています。

重要なのは、そのような社会課題を私たち enoco が解決するのではなく（そんなことはできません）、行政やクリエイターと協働しながら、地域や組織が自ら解決に向かって歩みを進められるようサポートする、そのような環境づくりを進めることだと私たちは考えてきました。

社会課題に取り組む市民を支援する行政やその仕組みを、更にサポートするのが enoco の仕事。ということでも、5年経った今でも相変わらず enoco は「何をやっているのかよくわからない」わけですが、当初のわかりにくさとは、全く別の質のわかりにくさが前景化していきました。

具体的な成果は始めています。私たちがお手伝いをしてつくったプラットフォームを活かし、独自に地域活性化に取り組む地域が出てきています。私たちがコーディネートしたクリエイターに、直接業務を依頼してデザインにチャレンジする市町村も出てきています。私たちの本当の成果は、私たちがサポートした人や組織や地域がその後、自分たちで何をなしたかで決まります。その成果が見えるまでには時間がかかるし、本当の成果が出たときには、それは既に私たちのものではなく、その人たちのものになっているのです。

そんなよくわからない enoco の5年間で少しでも理解いただけたらと、このドキュメントをまとめました。タイトルは「enoco と -江之子島文化芸術創造センターのつかいみち-」です。「enoco と」は、本書で紹介している事業が常に誰かとの協働の成果であることを表すと共に、enoco 自体が誰かと誰か、地域や組織をつなぐ接続詞の「と」でありたいとの想いを込めました。そしてサブタイトルの「つかいみち」にあるように、皆さんが enoco を使いこなすガイドブックのように本書を活用したり、「と」の役割を果たそうとされている方々にとっての参考書になれば嬉しいです。



## 目次

<b>002</b> .....	<b>はじめに</b>
<b>006</b> .....	<b>本書のつかいみち</b>
<b>008</b> .....	<b>タイムスパン別事業紹介</b>
<b>009</b> .....	<b>3HOURS</b> 大阪府20世紀美術コレクション連続講座/ミニコレクション展 中学生のための「アイデアをカタチにするワークショップ」 ご近所映画クラブ〜3時間で映画を作る〜 enocoのそうだん [eno so done!] <sup>1</sup> 個別相談会 enocoのそうだん [eno so done!] <sup>2</sup> フォーラム クラウドファンディングセミナー Osaka Creative Forum
<b>017</b> .....	<b>1DAY</b> 創造人を肌で感じるツアー 〜肌感 hada kan〜 enocoアート・キャラバン 安威川フェスティバル えのこじまマルシェ えのこじま文化祭
<b>023</b> .....	<b>3DAYS</b> enoco WORKSHOP LABO. 「美梱のいろは」 エノコトコトコムービー部 アートフォーラム（こどもとアート）の現場を考える enocoわがまち文化コーディネーター講座 enoco × KIITO × BRITISH COUNCIL スペシャルセッション
<b>029</b> .....	<b>2WEEKS</b> 大阪府20世紀美術コレクション展 eno co-labo. Private Talk
<b>033</b> .....	<b>1MONTH</b> 100 OSAKA Be Creative Festival えのこじま仮設映画館
<b>037</b> .....	<b>3MONTHS</b> アーティスト・サポート・プログラム enoco[study?] インタビュー：堀川すなお（アーティスト） 市民キュレーターワークショップ dracom 「gallery (extra version)」 《なんだこれ?》サークル 木津川遊歩空間整備計画ワークショップ かたのキャンパス 浸水どうぶつものさしのデザイン パブリック・リデザイン インタビュー：増永明子（デザイナー）
<b>055</b> .....	<b>6MONTHS</b> 木津川遊歩空間アイデアデザインコンペ 西区発見！ 西区文化・芸術創造型ラウンドテーブル インタビュー：松原真美（西区役所 まち魅力創造課） enocoの学校 インタビュー：林佑磨（enocoの学校2期生） DECO × enoco 壁画プロジェクト

<b>067</b> .....	<b>1YEAR</b> クリエイティブカフェ えのこじま凸凹ラジオ（FM凸凹） 大阪成蹊大学× enoco連携アートプロジェクト 安威川地域マスコットキャラクターの展開 木津川遊歩道空間整備事業における制度設計補助
<b>073</b> .....	<b>3YEARS</b> オヤトコエノコ enocoのそうだん [eno so done!] インタビュー：東映道（河内長野市 総合政策部 都市魅力戦略課） enocoニュースレター
<b>081</b> .....	<b>4YEARS</b> クリエイティブルーム・シェアルーム 江之子島まちづくり事業との連携 わがまちキャンパス インタビュー：河田泰之（泉南市埋蔵文化財センター） 安威川ダム周辺整備基本構想(案)作成事業 安威川ダムファンづくり会 インタビュー：下村良希（前安威川ダム建設事務所所長）
<b>095</b> .....	<b>5YEARS</b> 大阪新美術館建設準備室との連携 インタビュー：菅谷富夫、植木啓子（大阪新美術館建設準備室） 大阪府20世紀美術コレクションの活用 タチヨナ× enoco インタビュー：小島剛（一般社団法人タチヨナ） 大学間連携 インタビュー：松下岳生（大学間連携事務局長） 木津川遊歩空間整備 インタビュー：萩信之、田崎真吾（西大阪治水事務所） プラットフォーム形成支援事業
<b>116</b> .....	<b>5YEARS 「enocoについて」</b> インタビュー：enocoの人 忽那裕樹（プラットフォーム部門チーフディレクター） 甲賀雅章（館長） 高岡伸一（企画部門チーフディレクター）
<b>130</b> .....	<b>12YEARS 「大阪府の文化行政」</b>
<b>133</b> .....	<b>40YEARS 「大阪府20世紀美術コレクションの形成」</b>
<b>135</b> .....	<b>80YEARS 「大阪府工業奨励館附属工業会館について」</b>
<b>138</b> .....	<b>150YEARS 「江之子島と大阪」</b>
<b>143</b> .....	<b>enocoをより深く知るためのインタビュー</b> 後藤哲也（デザイナー / 江之子島アート&ライフ事業ディレクター） 寺浦薫（大阪府 都市魅力創造局 文化・スポーツ課） 吉澤弥生（共立女子大学文学部准教授 / 社会学者） 米田雅明（ON THE BOOKS店主） 岩淵拓郎（編集者 / メディアビクニック） 佐藤千晴（大阪アーツカウンシル総括責任者） 雨森信（Breaker Projectディレクター） 大谷煥（DANCE BOX代表）
<b>160</b> .....	<b>enoco的キーワード解説</b>
<b>169</b> .....	<b>事業一覧</b>
<b>182</b> .....	<b>あとがきにかえて。</b>
<b>184</b> .....	<b>編集後記・奥付</b>

# 本書のつかいみち

本書はenocoの5年間の活動の記録をまとめ、さらにその成果や培われたノウハウを、同じく文化芸術に関わる多くの方々に使っていただけることを目指してつくられています。そのため、通常の活動報告書のように実施順に事業が並ぶのではなく、enocoがこの5年間に生み出した成果を、タイムスパン（事業期間）とネットワーク（人）によって整理し、収録しています。本編に進む前に、この「本書のつかいみち」に目を通していただくことで、ただの記録集を超えた、より一層有用なアーカイブとしてみなさんに使っていただけることを願っています。

## タイムスパン別に事業の成果を知る

本書の最大の特徴は、過去から未来へと向かうタイムライン（時間軸）ではなく、3時間から150年までの15段階のスケールに分けられたタイムスパン（時間の幅）によって、enocoが取り組んできた55個の事業を紹介している点にあります。地図がその縮尺（スケール）を変化させることで異なる意味を持つように、enocoの活動もその時間のスケールによって様々な意味や役割を見出すことができます。それぞれのタイムスパンで実現可能な事業内容や、そこでの成果は何かということを知ることができます。

## ネットワークによって人を知る

enocoが歩んだ5年間を振り返りこれからを考えるために、enocoに関わりのある方々にインタビューをしています。多様な分野や立場におられるみなさんは、enocoが「プラットフォーム」としてつないできたネットワークを象徴しています。各インタビューページには「市民」「行政職員」「専門家」「クリエイター」というひとまずの区分けで、インタビューを受けてくださった方々を紹介する「インタビューネットワーク図」（次頁参照）をつけています。

## キーワードを知る

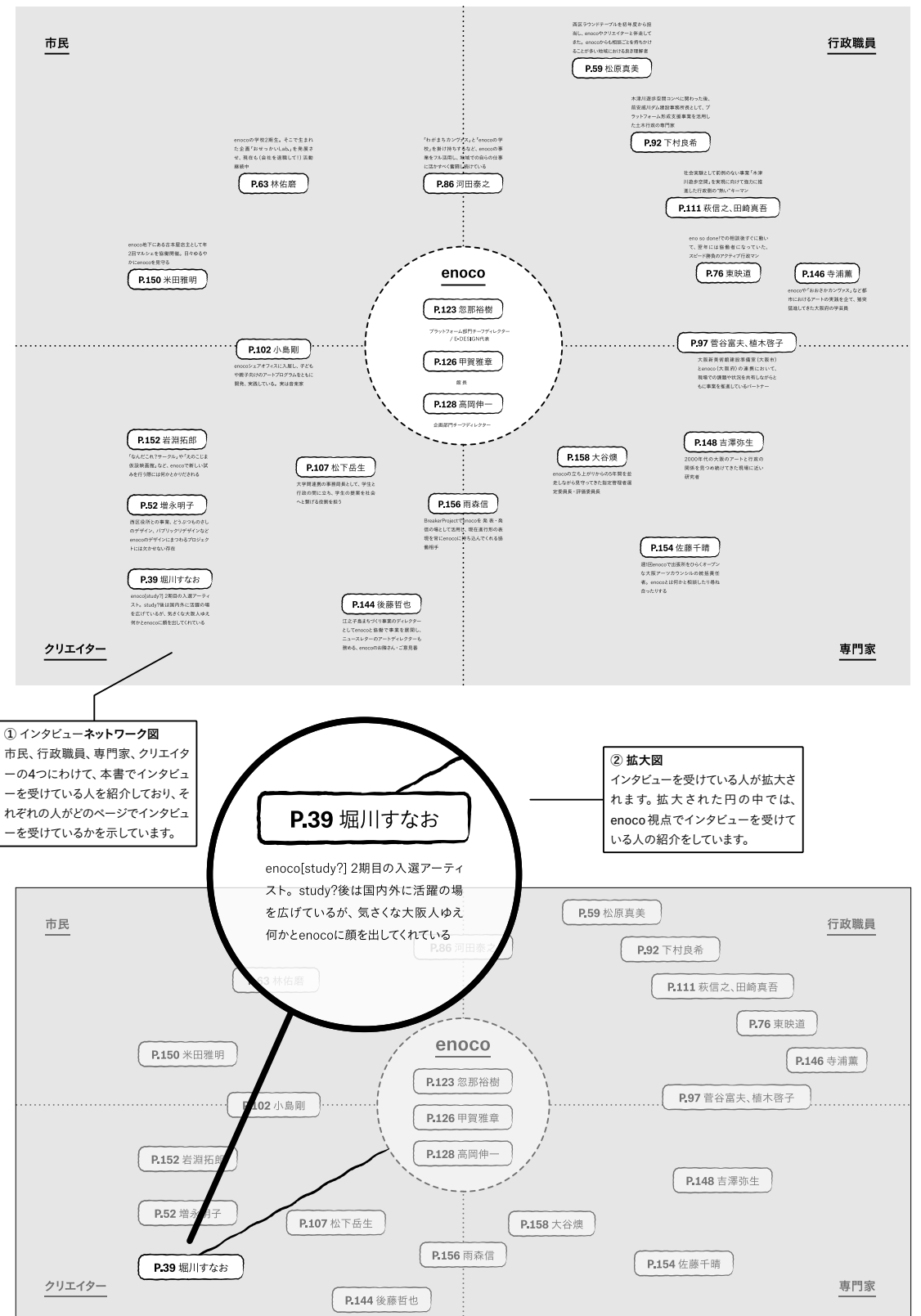
本書の後半では、enocoの5年を整理する中で、そしてenocoと関わりのある方々にインタビューする中で見えてきたキーワードを50選び、enocoの視点も交えながら解説をしています。文化芸術の基礎用語はもちろん、一般化しつつある専門用語、行政のあり方や社会的状況にまつわる語まで様々。各キーワードに主要な参照ページもつけていますので、読み終えてから眺めるも、各キーワードにつながるページを再読するも、これ自体を活用するも、自由にお使いください。

## タイムスパン別事業紹介の読み方

タイムスパン別に分けられた各事業紹介ページでは、まずどのような成果が生み出せるかが提示されています。その中から、今の自分が抱えている課題や問題の解決につながるものが発見できます。また「事業のコツ」では、その成果を達成するために必要なポイントをわかりやすく提示しています。それぞれの状況に合わせてアレンジし、しかるべき成果につなげていってください。



## インタビューネットワーク図の読み方





### タイムスパン別事業紹介

enocoの5年間でどのような成果が生まれたかに着目し、とっておきの55事業+αを、タイムスパン別に紹介していきます。

## 3HOURS

- 1 美術について理解するきっかけをつくる
- 2 自治体が所蔵する美術作品を気軽に活用する
- 3 アイデアを生み出し、伝えることの楽しさを知る
- 4 クリエイターという職業を理解する
- 5 初対面のメンバー間にチームワークを生み出す
- 6 地域の隠れた魅力を発見し共有する
- 7 行政職員・市民の個別具体的な悩みや課題に応える
- 8 実務に役立つ文化施設をつくる
- 9 地方自治体の課題とその解決の糸口を共有する
- 10 行政職員どうしの交流を促し、連帯感をつくる
- 11 アーティストやクリエイターのプロジェクト、社会活動の実現を資金面からサポートする
- 12 事業の趣旨と、これまでの取り組みの内容を広く発信する
- 13 国内外の先進事例から、質の高い議論をつくりだす



- ① 美術について理解するきっかけをつくる
- ② 自治体が所蔵する美術作品を気軽に活用する



講師との距離が近いゼミのような形式でのレクチャーとし、対話が生まれるようにした

#### 事業概要

##### » 大阪府20世紀美術コレクション 連続講座/ミニコレクション展

大阪府20世紀美術コレクションを代表する作家をテーマに掲げ、大阪府の主任研究員による講座を定期的で開催。併せて展示室に作品を少数展示することで、実物を見ながら理解を深められる内容とした。

2013年11月13日 浅野竹二 コーモアとベース 20世紀を生きた京都の超俗の版画家  
 2013年12月11日 須田烈太 具象と抽象 司馬遼太郎と歩き描いた『街道をゆく』  
 2014年1月8日 上前智祐 具体美術協会と上前智祐 集合と稠密のコスモロジー  
 2014年2月12日 三尾公三 70年代具象絵画の変貌、エアークラッシュと雑誌『フォーカス』  
 2014年3月12日 前田藤四郎 関西モダニズム版画の誕生と変遷

講師：中塚 宏行（大阪府都市魅力創造局文化課 主任研究員）

参加人数：43名

※前後でミニコレクション展として、講座で取り扱った作家の作品を扱う展示を広く一般にも公開した

#### 関連事業

- ▷ 40YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの形成
- ▷ 5YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの活用
- ▷ 2WEEKS 大阪府20世紀美術コレクション展

#### 実施のコツ！

##### » 展示がおまけで付いてくる

展示会のギャラリートークではなく、もっと気軽に開催できる連続企画として、最も小さい展示室を使った展示付きのレクチャーという形式を考えた

##### » 対話重視のゼミ形式

参加者を10名の少数に絞ることで、大学のゼミのような、一方的な聴講ではない対話を重視した内容とした

##### » 昼と夜の2回開催

毎回、平日の昼・夜の2回開催とすることで、昼間が参加しやすい高齢者層と、夜間でないで参加できないオフィスワーカーの両方に対応できるようにした

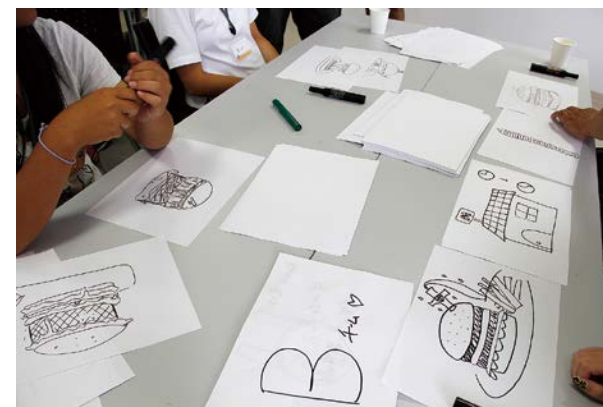
##### » 一回からでも参加しやすい

「作家」という軸にしたため、途中からでも、興味のある作家の回に、参加できるようにした

コレクションの展示会を頻繁に開催することは予算や労力の面で難しいので、活用機会を増やす手軽な方法として考えた企画です。また、部屋が小さすぎて稼働率の低いルーム3をもっと活用したいということもありました。堅苦しい講義ではない少人数でのお茶会のような雰囲気は、とっつきにくいと思われがちな20世紀美術の入口としては良かったと思います。



- ③ アイデアを生み出し、伝えることの楽しさを知る
- ④ クリエイターという職業を理解する



お題の一例「1個10万円のハンバーガー。さてどんなの?」(3分間で1枚仕上げる)

#### 事業概要

##### » タチヨナ×enoco企画

##### 中学生のための「アイデアをカタチにするワークショップ」

現役のプロのクリエイターからアイデアの出し方・ひらめき方を学び、そのアイデアを「絵」にして相手に伝える楽しさを共有するワークショップ。言葉ではなかなか伝わりにくいことを絵にすることによって、そのイメージをお互いに共有しより深い理解につなげていく。一連の作業を通して、絵が日常的に使えるコミュニケーションツールであるということを実際に体験してもらった。

2013年8月4日 14:00～16:00

講師：中村征士（アートディレクター）

参加人数：9名

共催：タチヨナプロジェクト(NPOcobon)

#### 関連事業

- ▷ 5YEARS タチヨナ×enoco企画

#### 実施のコツ！

##### » プロの手法をアレンジする

クリエイターの発想手法を中学生向けにアレンジし、様々なお題に基づいて絵を描く「大喜利」方式を採用した

##### » 大人からのフィードバックを得る

Facebookのグループページをつくり、描かれたイラストを即時的にアップし、その場にはいない大人たちに共有しフィードバックをもらうことで子どもたちの自信に繋がった

##### » 同世代を集める

子ども向けワークショップでは対象年齢から外れることも多い「中学生」に限定し、同世代同士で発言しやすい環境をつくった

従来の子ども向けワークショップは中学生も対象となっていることもありますが、小学生と一緒に参加することをためらう中学生も多いのではないかと思います。このワークショップは同世代だけということもあって、伸び伸びとお題に取り組んでいました。またプロのクリエイターとの関わりにより、クリエイターへの職業理解も進んだのではないかと思います。



## 5 初対面のメンバー間にチームワークを生み出す

## 6 地域の隠れた魅力を発見し共有する



enocoの中だけでなく、周辺も「ロケ地」として活用(enoco隣にある喫茶店の外観を使用させてもらった)

### 事業概要

#### » ご近所映画クラブ～3時間で映画を作る～

フランスの映像作家、ミシェル・ゴンドリー氏が開発した「映像ワークショップ」を元に構成されている、少数のメンバーが「企画し」「計画をたて」「撮影をする」の3段階を経て3時間で1本の映画をつくるというワークショップ。2009年よりNPOremoがゴンドリー氏の公認を受け、enocoのシェアオフィスに居を構えている一般社団法人タチヨナとも協働しながら、全国各地で実施しているものをenocoでも開催した。

・2015年3月21日 10:00～14:00

・2015年8月22日 11:00～15:00

指導・進行: NPO remo [記録と表現とメディアのための組織]

参加人数: 63名

共催: 一般社団法人タチヨナ

### 関連事業

▷ 5YEARS タチヨナ×enoco企画

▷ 1MONTH えのこじま仮設映画館

### 実施のコツ!

#### » リテイクしない

作成したシナリオに基づき順撮り、リテイクなしで勢よく撮影していくことで表情豊かな作品が生まれた

#### » 役割を明確にする

チーム内での役割分担を明確にし、多様な意見を活かした合意形成を促した

#### » 全員が出演者になる

全員出演という条件により、参加者全員の参加度を高めた

#### » 撮影地域を限定する

撮影場所をenoco近隣に限定し、様々な視点から「地域」を映し出した

自己紹介もそこそこに怒濤の映画づくりが始まりますが、初めて会った人同士でも思いもよらないチームワークを見せてくれるのがこのワークショップの面白さです。必要な小道具等も、あるものを使ったり即興でつくったりするため、参加者のDIY精神に驚かされることもしばしば。地域の魅力発見プログラムとしてはもちろん、多くの人がカメラやスマートフォンで日常的に動画撮影に親しんでいることから、企業研修や学校授業でも活用できる可能性があります。



## 7 行政職員・市民の個別具体的な悩みや課題に応える

## 8 実務に役立つ文化施設をつくる



数多くの人を集めて講演会を行っているようなゲストから、直接アドバイスを受けることができる

### 事業概要

#### » enocoのそうだん[eno so done!] 個別相談会

市町村職員や地域活性化に取り組む市民等を主な対象に、enoco館長、ディレクター、そして各ジャンルの一線で活躍する専門家がアドバイザーとなって、各々の抱える課題に対してマンツーマンで、じっくりと相談にのる個別相談会をシリーズ開催。地域活性化や市民協働、プロモーション、そしてクリエイティビティの活用などをテーマに実施した。

[2014年度] (全15回)

6月12日 アドバイザー: 甲賀雅章(enoco館長)

6月26日 アドバイザー: 大南信也(NPO法人グリーンバレー理事長)

7月10日 アドバイザー: 忽那裕樹(enocoプラットフォーム部門チーフディレクター)

7月24日 アドバイザー: 塩山諒(NPO法人スマイルスタイル代表)

8月7日 アドバイザー: 渡辺豊博(NPO法人グラウンドワーク三島専務理事・事務局長)

8月28日 アドバイザー: 甲賀雅章(enoco館長)

9月18日 アドバイザー: 茶谷幸治(ツーリズムプロデューサー/一般社団法人大阪あそび委員会代表理事)

10月2日 アドバイザー: 甲賀雅章(enoco館長)

11月12日 アドバイザー: 河井孝仁(東海大学文学部広報メディア学科教授)

11月20日 アドバイザー: 忽那裕樹(enocoプラットフォーム部門チーフディレクター)

12月11日 アドバイザー: 日下慶太(コピーライター/写真家/セルフ祭顧問)

1月29日 アドバイザー: 中島淳(株式会社140B代表取締役)

2月19日 アドバイザー: 醍醐孝典(株式会社studio-Lディレクター)

2月26日 アドバイザー: 忽那裕樹(enocoプラットフォーム部門チーフディレクター)

3月26日 アドバイザー: 藤原明(りそな総合研究所 リーナルビジネス部長)

相談件数: 25件

[2016年度]

8月25日、26日 アドバイザー: 甲賀雅章(enoco館長)、忽那裕樹(enocoプラットフォーム部門チーフディレクター)、河上友信(空間デザイナー/ GLAN FABRIQUE inc. 代表)

10月8日 「大相談会」の一環で開催(※詳細は次ページ)

12月14、15、20、21、22日 「デザイン相談会」 アドバイザー: 増永明子、山内庸貴、池田敦、タナカツツヤ、鎌坂兼充(「パブリック・リデザイン」展に連動して開催)

相談件数: 15件

### 関連事業

▷ 3YEARS enocoのそうだん[eno so done!]

▷ 3HOURS enocoのそうだん[eno so done!]フォーラム

### 実施のコツ!

#### » しっかりと時間をかける

十分にコミュニケーションが取れるように1件あたり約90分の時間を取った

#### » 個別で相談を受ける

公開の場では難しい突っ込んだ話を、マンツーマンの個別相談にすることで具体的にアドバイスできるようにした

#### » コーディネーターが加わる

enocoのスタッフがコーディネーターとして同席し、議論を円滑に進めた

#### » 調整役を置く

相談で出た課題とアドバイスを整理し、一般化してカルテを作成、WEBで公開して共有できるようにした

第一線で活躍する専門家をアドバイザーに招きましたが、マンツーマンというシチュエーションがハードルを上げたのか、応募は思ったより多くありませんでした。行政課題の多くは一度のアドバイスで解決する単純なものではありませんが、参加した方々のほとんどは有意義な気づきを得て帰りました。この相談をきっかけにして、その後も継続してenocoと関わりをもつ方が増えていったことも特筆すべき効果です。



## 9 地方自治体の課題とその解決の糸口を共有する

## 10 行政職員どうしの交流を促し、連帯感をつくる



フォーラム後に講師を囲んで即席合同相談会が行われることも

### 事業概要

#### » enocoのそうだん[eno so done!]フォーラム

2014年度に実施した個別相談の結果から、地方自治体が共通して抱える課題として「市民協働」「シティプロモーション」そして「アートの活用」の3つのテーマを抽出し、2015年度は各テーマに基づく3回のフォーラムを開催。専門家による基調講演と先進的な取り組みの事例報告、そしてパネルディスカッションを行った。2016年度は「大相談会」として個別相談と組み合わせ開催。

第1回 2015年12月4日「市民協働」14:00～17:30

講師：松下啓一(相模女子大学人間社会学部社会マネジメント学科教授)

事例紹介：鶴見活性化 楽園会議/安威川ダム

共催：大阪府都市魅力創造局文化・スポーツ課 参加人数：30名

第2回 2015年12月21日

「戦略的な広報-PR冊子作りからシティプロモーションまで」14:00～17:30

講師：河井孝仁(東海大学文学部広報メディア学科教授)/中島淳(株式会社140B代表取締役)

事例紹介：千葉県四街道市/奈良県生駒市/大阪府河内長野市

共催：大阪府都市魅力創造局文化・スポーツ課 協力：公共コミュニケーション学会関西支部

参加人数：52名

第3回 2016年3月4日「都市はアートに何をもらすか」18:30～21:00

パネラー：北澤潤(現代美術家、北澤潤八雲事務所代表)/曾我部昌史(建築家/神奈川大学工学部建築学科教授)/廣野研一(グランフロント大阪TMO事務局長/三菱地所大阪支店副支店長)/忽那裕樹(ランドスケープデザイナー/enoco PF部門チーフディレクター)

共催：大阪府都市魅力創造局文化・スポーツ課 参加人数：38名

第4回 2016年10月8日「大相談会」13:30～16:30

ゲスト：古田菜穂子(岐阜県国際観光戦略顧問/山形県ASEAN戦略アドバイザー)、影山裕樹(編集者/プランニング・エディター)、河上友信(空間デザイナー/GLAN FABRIQUE inc. 代表)、甲賀雅章(enoco館長) 参加人数14名

### 関連事業

▷3YEARS enocoのそうだん[eno so done!]

▷1.5HOURS enocoのそうだん[eno so done!] 個別相談会

### 実施のコツ!

#### » リサーチをプログラムに反映させる

昨年度の個別相談によるリサーチに基づいて、フォーラムのプログラムを組み立てた

#### » 同じ悩みを持つ者を集める

第1回と第2回は参加者を行政職員に限定して、行政固有の課題を議論しやすくし、同じ悩みを共有できるようにした

#### » 理論と実践をつなぐ

専門家の講演と行政職員が取り組む先進事例をセットで用意し、登壇者全員のパネルディスカッションで理論と実践をつなぎ、参加者が自身の活動に取り込みやすくなるようにした

#### » しっかり交流する

フォーラム終了後に交流会の場を設け、参加者同士の交流を促した

同じ悩みを抱える行政マンが多く参加する、熱気のあるフォーラムとなりました。フォーラム終了後に参加者が登壇者の前に列をつくり、長時間にわたって相談に乗ってもらっている様子が印象的でした。行政の施策は先行事例の模倣になりがちですが、地域に固有の課題に即して考え、独自に立案できるようになってもらえればと思います。



## 11 アーティストやクリエイターのプロジェクト、社会活動の実現を資金面からサポートする



アーティストによるプレゼン。事前にenocoによるアドバイスをを行い、アーティストの個性を活かしたプレゼン内容にした

### 事業概要

#### » クラウドファンディングセミナー

クラウドファンディングサイトを運営するFAAVO 大阪と大阪府による、環境活動分野における協定締結を踏まえて、環境活動等の社会活動や、アートプロジェクトといった文化活動におけるクラウドファンディングの普及啓発をはかることを目的に、enocoを会場にしたセミナーを開催。基礎知識から成功事例の紹介に始まり、具体的な企画の練成からプレゼンまで、一連のプロセスをサポートして成功に導く継続的なプロジェクトとして開始した。

第1回：2015年3月18日 18:00～21:00

第2回：2016年1月27日 18:30～21:00

主催：大阪府、FAAVO 大阪、enoco

[発表内容(第2回目)]

・地域の森林と共に育つ GROW UP furniture kitの開発  
アルブル木工教室 米地徳行

・アートデスマッチを開きたい!  
コタケマン(異空間演出家)

・「森の天空広場」を創りたい!  
NPO 法人 里山倶楽部 寺川裕子

・ベイエリアを渡船で回るロゲイニングを行いたい!  
前田茂樹(大阪工業大学渡船部)

アドバイザー：川辺友之(株式会社NFL代表)、甲賀雅章・忽那裕樹(enoco)

### 実施のコツ!

#### » 運営事業者と組む

FAAVO 大阪と大阪府の連携に enoco が加わることで、クリエイティブ分野やまちづくり活動に、クラウドファンディングを広げることができる考えた

#### » 説明会で終わらさない

単なるクラウドファンディングのレクチャーや企画の募集だけでなく、企画内容の改善や資金計画、魅せるプレゼン方法まで、トータルでサポートできる体制をつくった

アーティスト・クリエイターの企画や、市民によるまちづくり活動はどれも資金の獲得が大きな課題ですが、予算面でも enoco が役立てないかと始めたプロジェクトです。お金がないのは行政も同じなので、公的な事業もクラウドファンディングで実現できないかと考えています。まだ試行錯誤の段階ですが、セミナーでプレゼンされた企画のなかには、既に資金獲得に成功して事業を実施したグループも出てきています。





2.5HOURS

## 12 事業の趣旨と、これまでの取り組みの内容を広く発信する

## 13 国内外の先進事例から、質の高い議論をつくりだす



海外からもゲストを招き、海外の先進事例を知るとともに、ゲストに対して大阪の現状をアピールする機会とする

### 事業概要

#### » Osaka Creative Forum

プラットフォーム形成支援事業として、2013年から毎年秋に大規模なホールを会場に開催したフォーラム。アメリカのブライアントパークやシンガポールの都市デザインなど、海外の成功事例のキーパーソンを大阪に招いて先進事例を学ぶと共に、国内各都市の注目すべき動きと比較しながらの議論を通じて、プラットフォームの独自性と手法、しくみ、プロセス等の可能性を明らかにしようとした。

2013年11月15日 18:30~21:00

「新しいパブリックの形はここにある - プラットフォーム形成支援事業の試みと可能性 -」

会場：大阪市中央公会堂 小会議室 / 主催：大阪府、enoco

基調講演：Norman Mintz(アメリカ、PPS 取締役)

パネリスト：西村浩(建築家)、山崎亮(コミュニティデザイナー)、  
忽那裕樹(enocoPF 部門チーフディレクター / ランドスケープ・デザイナー)

2014年10月24日 18:00~20:30

「まちの魅力のつむぎ出しかた - まちが魅力的であり続けるためのプラットフォームとは? -」

会場：朝日生命ホール / 主催：大阪府、enoco

基調講演：Eliza Choo(シンガポール、国家開発省アーバンデザインディレクター)

パネリスト：木下斉(エリア・イノベーション・アライアンス代表理事)、  
嘉名光市(大阪市立大学)、忽那裕樹

2015年9月4日 18:00~20:30

「新しいパブリックはいかに持続可能なものとなるのか - まちが魅力的であり続けるためのプラットフォームとは? -」

会場：大阪市中央公会堂 小会議室 / 主催：大阪府、enoco

パネリスト：薬谷浩介(日本総合研究所 首席研究員)、馬場正尊(建築家 / Open A 代表)、忽那裕樹

2016年11月11日 18:30~21:00

「パブリックスペースが開く、都市の未来」

会場：朝日生命ホール / 主催：大阪府、enoco

パネリスト：山名清隆(ミズベリング・プロジェクト事務局 代表)、山崎亮、忽那裕樹

### 関連事業

▷ 5YEARS プラットフォーム形成支援事業

### 実施のコツ!

#### » 幅広い関心を集める

海外と国内の先進事例を担ったキーパーソンを招聘し、enocoではなく外部の大きなホールを会場として、多様な関心層をターゲットとした

#### » 今後を見据える

注目すべきテーマで多くの人の関心を引き、プラットフォーム形成支援事業の今後の可能性の検討、及び手法の周知を図った

#### » 議論の深度を分ける

フォーラムの翌日には enoco を会場に、同パネリストによる人数限定のディスカッションを実施し、よりプロ向けの突っ込んだ議論を行った

なかなか大阪に呼ぶことのできない注目すべき人物を招聘することで、主催する私たちも多くの学びを得ることができました。参加者も皆熱心で、特に地域活性化やエリアマネジメントを担う職員が多く、翌日開催する人数限定のスペシャルセッションでは、活発な議論が交わされました。



## 1DAY

- 14 各界で活躍するクリエイターとの密なコミュニケーション機会を提供する
- 15 まちの多様な楽しみ方、見方を発見する
- 16 美術コレクションを活用し、教育活動をおこなう
- 17 子供が本物の美術作品に触れ、想像力を育む
- 18 複数の地域・市民活動が一堂に集う
- 19 将来の地域活動を支える新たなファンを増やす
- 20 子供も参加することで活動を次世代へつなぐ
- 21 地域住民を中心とした新しい来館者層の獲得
- 22 地域のクリエイターや店舗とのネットワークづくり
- 23 地域の人が気軽に参加し、施設や事業内容に興味を持つきっかけをつくる

- 14 各界で活躍するクリエイターとの  
密なコミュニケーション機会を提供する
- 15 まちの多様な楽しみ方、見方を発見する



犬の散歩コースと一緒に歩くなど、日常生活に同行することでクリエイターの素顔をみることができ

#### 事業概要

##### » 創造人を肌で感じるツアー 肌感 ～hada kan～

OSAKA 旅めがね等の着地型観光を展開する株式会社インブリージョンとの共催企画。各界で活躍するクリエイター（創造人）に、仕事場や普段よく訪れる場所や店などを案内してもらうことで、その感性や世界観に肌で触れてもらおうスペシャルツアー。定員5名という少人数でおよそ半日を一緒に過ごす設定にしたことで、クリエイターとじっくりコミュニケーションできる環境を提供した。

第1回	2012年10月13日	鯉坂兼亮(デザイナー/ SKKY.inc・iTohen)
第2回	2012年10月20日	中立公平(クリエイティブ・プロデューサー/ KIO・TACT/FES)
第3回	2012年10月27日	江弘毅(編集者・著述家/140B)
第4回	2012年12月15日	村上美香(コピーライター/文筆家)
第5回	2013年1月26日	澤田亮(プロデューサー/株式会社ケイオス代表)
第6回	2013年2月15日	茂木美佐(ジェラート職人/ジェラテリア・チルコドロー)
第7回	2013年2月23日	田中宏幸(よしもとアドミニストレーション本部長)
第8回	2013年2月25日	山崎紀子(シネ・ヌーヴォー支配人)
第9回	2014年3月22日	石原由美子(チアリーダー)
第10回	2014年3月23日	中川和彦(スタンダードブックストア代表)
第11回	2014年4月6日	谷口仁則(テレビ映像制作会社ワークオン代表)

※肩書きは全て当時

参加人数:37名(のべ)  
共催:株式会社インブリージョン

#### 実施のコツ!

##### » あの人の「日常」をめぐる

各界で活躍するクリエイターには、仕事場や普段よく行く場所や店などを案内してもらうよう依頼し、その人の「日常」を追体験できる内容となることを重視した

##### » ツアーコンダクターが同行する

時間管理やコミュニケーションを円滑にする役割としてツアーコンダクターが同行し、プログラム上の「日常」をうまく演出するよう努めた

##### » 規制を超えるために協働する

参加費を徴収するまちあるきツアーは旅行の販売に当たるので、アイデアやスキルの面だけではなく、規制上も旅行業会社であるインブリージョンとの協働は不可欠だった

##### » プレミア感と価格のバランス

5名という参加者の少なさをカバーするために参加費がやや高いため、いわゆる「知っている人にとっては憧れの人」をゲストに設定した

参加した人の満足度は異常に高いプログラムでしたが、半日を一緒に過ごすという濃密な体験と価格設定(¥3,000~5,000)がハードルを上げたのか、集客にはかなり苦労しました。誰でも知っている有名な人であれば集客は簡単ですが、それでは趣旨がずれるし収支が全く合いません。本プログラムではゲストに、趣旨を理解頂いて謝金も低く抑えてもらいましたが、それでも補助金等を活用しないと収支は合わず、観光商品として定着させるのは難しい内容でした。



- 16 美術コレクションを活用し、教育活動をおこなう
- 17 子供が本物の美術作品に触れ、想像力を育む



対話型鑑賞は5~30名程度(1クラスずつ)で行う。オリジナルの可動展示パネルを持ち込むので教室での実施も可能

#### 事業概要

##### » enoco アート・キャラバン

「大阪府20世紀美術コレクション」はenocoでの展覧会の他、大阪府内での様々な場所での展示とともに、全国の美術館等への貸出展示も積極的に行っているが、さらにより多くの人にコレクションの存在やenocoの活動を知ってもらうための草の根運動として、府内の学校や施設での出張展示を開始した。enocoのコレクション活用事業の特徴の一つとしてある「参加型」の要素を取り入れたプログラムもあわせて実施した。

2016年度～

実施場所数:6カ所(2017年3月時点)  
2016年12月9日 大阪成蹊短期大学附属こみち幼稚園  
2016年12月15日、16日 豊能町立東ときわ台小学校  
2017年1月18日、25日 大阪府立港南造形高等学校  
2017年1月31日 千早赤阪村立千早小吹台小学校  
2017年2月16日、17日 大阪市立森之宮小学校  
2017年3月9日 寝屋川市立田井小学校

#### 関連事業

- ▷40YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの形成
- ▷5YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの活用
- ▷2WEEKS 大阪府20世紀美術コレクション展
- ▷2DAYS アートフォーラム(こどもとアート)の現場を考える

#### 実施のコツ!

##### » 体験学習と組み合わせる

対話型鑑賞や造形ワークショップ、展覧会企画ワークショップなどの体験学習を組み合わせることでより深く作品に親しんでもらった

##### » 展示パネルを開発する

展示用の専用パネルをクリエイターに製作してもらい、教室など展示するための壁面がない場所でも展示できるようにした

##### » 行政と連携する

行政の担当部署を通して、府内の小中学校、府立高校・支援学校すべてに実施希望調査(公募)を行い、府内遠方の学校にも訪問した

対話型鑑賞では、子供たちから想像を超える多くのユニークな意見が出ました。子供たちの目を通して私たちが改めて作品に向き合うことになり、そこから多くの新しい気づきを得ました。高校への出張で実施した展覧会企画ワークショップはその完成度の高さを急遽実際にenocoで展示することになったのもひとつの成果です。



- ⑱ 複数の地域・市民活動が一堂に集う
- ⑲ 将来の地域活動を支える新たなファンを増やす
- ⑳ 子供も参加することで活動を次世代へつなぐ



「自然に学ぶ」「文化に学ぶ」「ダムに学ぶ」「つなぐプログラム」という4つのテーマに分類した多彩なプログラムを展開

#### 事業概要

##### » 安威川フェスティバル

安威川ダム及び周辺の「活用と保全」に向けたプラットフォームづくりの具体的なアクションとして、「出合いの場としてのダムをめざして」をコンセプトに安威川ダムファンづくり会が運営主体となって開催するフェスティバル。安威川ダムおよび周辺について広く市民に知ってもらう/安威川ダム周辺の地域の方、下流の方に参加してもらい交流機会を増やす/来場者の方にダム周辺の資源を活用して楽しみながら学んでもらう/市民の方に安威川(ダム)周辺へ誇りと愛着を持ってもらう、安威川ダムのファンになってもらうということを目的としている。

2014年11月16日 安威川フェスティバル2014  
2015年10月31日 安威川フェスティバル2015  
2016年10月16日 安威川フェスティバル2016

主催:安威川ダムファンづくり会

(茨木市観光協会、大林組・前田建設工業・奥村組・日本国土開発特定JV、オプスデザイン、安威川上流漁業協同組合、茨木市環境教育ボランティア、NPO法人 nature works、淀川管内河川レンジャー、茨木芸術中心、大阪府立茨木高等学校、NPO法人 cobon、bioa、大阪産業大学、大阪府立江之子島文化芸術創造センター、いばらば北部応援隊、千提寺 farm、大阪府、茨木市)

[来場者数] 約1,300名(2016年度)  
[関係者協力] 約300名、48団体(2016年度)  
[プログラム数] 45件(2016年度)

#### 関連事業

- ▷4YEARS 安威川ダム周辺整備基本構想(案)作成事業
- ▷4YEARS 安威川ダムファンづくり会
- ▷3YEARS 安威川地域マスコットキャラクターの展開

#### 実施のコツ!

##### » 現場で学ぶ

ダム整備エリアで開催することで、来場者実際にダム周辺地域を様々なプログラムを通して見てもらい、より深く人や自然から学び、交流する機会とした

##### » ファンづくり会内での連携を高める

ファンづくり会を構成する3つの部会が中心となって、行政や企業と連携して実施するプログラムを企画し、各部会にあてられた予算を結集させてフェスティバルを運営した

このフェスティバルは地元の協力や市街地の活動団体の支援、様々な関係者の力を結集して実現しています。プログラムを提供する団体にとってはそれぞれの活動の発表の場であると同時に、プログラム実施者同士の出合いの場ともなっています。家族連れなどにも気軽に参加していただけるフェスにすることで、これをきっかけにダムや地域に興味を持ってもらう場としても機能しています。



- ㉑ 地域住民を中心とした新しい来館者層の獲得
- ㉒ 地域のクリエイターや店舗とのネットワークづくり



普段は搬入専用駐車場として使用している場所を活用し、オープンな雰囲気をつくった

#### 事業概要

##### » えのこdeマルシェ

年4回季節ごとに、enocoの駐車場を中心に開催するマルシェ。enoco北側タワーマンション竣工を見据えて、地域の人が気軽にenocoを訪れるきっかけづくりとなることを目指し、2015年度より開始した。毎回、共同企画者やコーディネーターを設定し、テーマを変えて実施している。

2015年5月16日 11:00~18:00 「春の古本市!」  
2015年8月22日 17:00~21:00 「おとなの夜市」  
2015年11月21日 11:00~17:00 「古本市[アートブック特集]」  
2016年1月30日 11:00~17:00 「都会の冬に、ちび火とマルシェ」  
2016年5月14日 11:00~17:00 「特集/古本と園芸」※えのこ文化祭と共催  
2016年8月27日 16:00~21:00 「特集/おとなの夜市」  
2016年11月23日 11:00~17:00 「読書&食欲の秋」※えのこ文化祭と共催  
2017年2月25日 11:00~17:00 「世界旅行」  
来場者数:8,479名(のべ) ※1回平均約1,000名

#### 関連事業

- ▷4YEARS 江之子島まちづくり事業との協働
- ▷1YEAR えのこ凸凹ラジオ
- ▷1DAY えのこ文化祭

#### 実施のコツ!

##### » 季節感を出す

季節ごとにテーマを変えることで毎回足を運ぶ楽しみや意味をつくりだす

##### » 滞留時間を延ばす

ワークショップやミニFM放送といったプログラムも実施し、滞留時間を長くする工夫をする

##### » 無理のない出店料を設定する

立地や認知度を考慮し、出店料は500円という安価で設定している

##### » ノウハウを蓄積する

消防・保健所申請も行い、マルシェ開催のノウハウを蓄積していく

enocoイチの人気イベント。家族連れが多いのが特徴で、隣のマンションだけでなく区内から自転車でも来られるお客さんも多いです(駐輪場が足りません...)。enocoの事業で関わったクリエイターなどにも出店をお願いすることで、他のマルシェにはない幅の広さや、出店者同士の新しい繋がりを生み出しています。また公立施設で開催しているマルシェという信頼感からか、共同企画者の方や出店者の方に、他のマルシェの開催者などからお声がかかることもあります。





## 23 地域の人が気軽に参加し、施設や事業内容に興味を持つきっかけをつくる



マンションとenocoの間にある公開空地では屋外向けのプログラムを展開した © 2016 Nobuya Fuke

### 事業概要

#### » えのこじま文化祭

2016年春にタワーマンションが竣工し、「江之子島まちづくり事業」の南地区の施設がすべてオープンすることに伴い、A&L マネジメント(DEBOBOCO)が管理運営する2つのスタジオやenocoの存在を知ってもらうためにまちびらきイベントを開催。「えのこdeマルシェ」と連動して開催するとともに、それぞれのスタジオでもライブやヨガや卓球等、屋外エリアでは「えのこじま凸凹ラジオ」生放送を行い、江之子島二丁目地区全体を回遊できるようにした。今後は年1回の開催を予定している。

第1回目:2016年5月14日 えのこじま文化祭2016SS

第2回目:2016年11月23日 えのこじま文化祭2016AW

主催:A&L マネジメント(DEBOCOBO)、enoco

### 関連事業

▷ 4YEARS 江之子島まちづくり事業との協働

▷ 1YEAR えのこじま凸凹ラジオ

▷ 2YEARS えのこdeマルシェ

### 実施のコツ!

#### » 親しみのある名をつける

特定の年齢層や参加者層に限らない、様々な世代の方に気軽に参加してもらいやすい「文化祭」とした

#### » まちをひらく

「えのこdeマルシェ」と連動して開催し、江之子島地区外の人にまちに遊びにきてもらうきっかけをつくった

#### » 施設のテーマを分ける

enocoはマルシェ(古本市)、タワーマンションのFLAGスタジオは音楽、板状マンションのマークスタジオは体を動かす体験教室など、各施設のテーマを分けることで、場所の使い方の様々な事例を示した

#### » 屋外で魅せる

各施設の間にあるオープンスペースを活用し、まちの一体感を高めた

2016年春にenoco北側のタワーマンションの入居が始まり、多くの方が江之子島で暮らし始めました。都心部のマンションということではいきなり密なコミュニケーションをとるようなプログラムは向かないと思い、気軽に立ち寄れる「文化祭」という形式にしました。幸いにも新しい住民の方も多く参加してくださりとても賑わいました。マンションからは、enocoは裏側しか見えないという立地の悪さがありますが、このようなまち全体を使ったイベントを通して、少しずつ親しみを持ってもらえればと思います。



## 3DAYS

- 24 プロの美術品梱包技術を身につける
- 25 多様化する美術品の現状を把握し、様々な課題を共有する
- 26 様々な視点からのまちの魅力を発見する
- 27 映画監督がワークショップで映画をつくる
- 28 美術を通して子どもたちの感性や想像力、コミュニケーション能力を育む
- 29 美術の現場と教育の現場が課題を共有し、交流する
- 30 アートやデザインを活用した地域づくりの事業立案ができる人材を育成する
- 31 地域や組織の課題を明確にし、行動へとつなげる
- 32 社会におけるアート・デザインの役割を再考する
- 33 プロジェクトの効果測定や評価の手法を身に付ける

## 24 プロの美術品梱包技術を身につける

## 25 多様化する美術品の現状を把握し、様々な課題を共有する



普段コレクションの運送・展示業務をお願いしているカトーレックの方に講師を依頼した

### 事業概要

#### » enoco WORKSHOP LABO. 美梱のいろは

関西の美術館をはじめ様々な美術品の運送・梱包・展示を行っている、美術品梱包のプロ、カトーレック株式会社のスタッフを講師に、美術作品の状態にあわせた梱包資材の選び方、紐の縛り方やテンションの掛け方、梱装箱の作り方など、梱包方法の解説とデモンストレーションを行い、実際に美術品梱包を体験した。もともとはスタッフ向けの研修として企画されたが、美術梱包を学ぶ講座はなかなかないため、一般公開イベントとして実施した。

2014年1月25日 絵画・額装の日

2014年1月26日 彫刻・陶芸・機材の日

(好評につき、翌年2015年2月7日に1日集中講座を実施)

講師：カトーレック株式会社

参加人数：延べ20名(2日間)

### 実施のコツ！

#### » 研修を公開する

美術梱包の講座はあまりないため、スタッフ向けの研修を一般の参加者にもオープンにし、関心を持つ人たちが学ぶことのできる機会をつくった

#### » 作品を持ち込む

美術館の所蔵品レプリカや若手アーティストの作品の借り受け、参加者による作品持ち込みも可能とし、様々な美術品の形態にも対応した

#### » 立場を逆転させる

普段は発注する立場の参加者が受講生側に戻るという立場の逆転が、互いの疑問や問題をぶつけあうことを可能にした

スタッフ向けの研修をオープンにすることで、スタッフの技術習得だけでなく、ギャラリー運営者、アートセンター職員、若手アーティストなどの参加があり、多様化する美術品の現状の把握、様々な課題の共有ができました。講師を務めた美術運送の専門スタッフにとってもこういったレクチャーの機会は初めてであり、その技術や経験を活かす新たな場を提供することもできたと思います。梱包方法だけでなく作品に適した梱包材の選び方などについてもレクチャーがあり、新しい発見がありました。



## 26 様々な視点からのまちの魅力を発見する

## 27 映画監督がワークショップで映画をつくる



文字通りenoco周辺を「トコトコ」歩きながら参加者それぞれの視点で撮影を行う

### 事業概要

#### » エノコトコトコムービー部

大阪出身の2人組映画監督、大力拓哉・三浦崇志とともに江之子島周辺をトコトコと歩いて散策しながら、手持ちカメラ、ウェアラブルカメラなどを使って自由に撮影するワークショップ。《えのこじま仮設映画館》の一環で実施した。参加者が撮影した作品は、講師によって編集され一本の映画作品として「仮設映画館」開館中に上映した。

ワークショップ：2015年8月2日、3日

上映会：2015年8月30日

講師：大力拓哉・三浦崇志(映画監督)

協賛(機材提供)：パナソニック株式会社

参加者数：11名(ワークショップ)

### 関連事業

▷ 1MONTH えのこじま仮設映画館

### 実施のコツ！

#### » プログラムから講師をつくる

講師にとってもはじめてのワークショップで、プログラムづくりから協働して行った

#### » 講師の独自性を残す

最後に1本の映画作品に編集して上映するというゴールを設定し、映画監督である講師の独自性を活かした

#### » 参加者の幅を広げる

協賛でウェアラブルカメラの機材提供を受け、カメラを持つことが難しい小さな子供でもワークショップに参加できるようにした

文字通りトコトコと散歩しながらの撮影でしたが、風景の切りとり方や撮影のクセなど、同じ場所にいるのにこんなにも違うものを見ているのかと驚きました。散歩から帰ってきて撮った映像をみんなで観るという時間もとてもよかったです。個人差があるので編集にはだいぶ苦労されていましたが、出来上がった作品は江之子島をトコトコと歩きたくくなるような、大力さん・三浦さんの「作品」になっていました。



## 28 美術を通して子どもたちの感性や想像力、コミュニケーション能力を育む

## 29 美術の現場と教育の現場が課題を共有し、交流する



通常の美術展ではなかなかできない床に座っての鑑賞。視点が低くなることで見えてくるものもある

### 事業概要

#### » アートフォーラム〈こどもとアート〉の現場を考える

enocoと大阪新美術館建設準備室の協働企画。子どもを対象としたアートワークショップと、大人を対象としたトーク&ディスカッションの2部で構成されたフォーラムを毎年開催。ワークショップでは、小学生から中学生までを対象に、大阪府20世紀美術コレクションを活用して、作品を鑑賞するだけでなく、作品を用いて展覧会づくりをしたり、対話型鑑賞の後に作品のコピーで絵本を制作したりと、実物の美術作品を所蔵している施設だからこそできるワークショップを企画した。トーク&ディスカッションでは、子どものワークショップの成果を共有したあと、毎回ゲストを招いて事例を学び、最後に参加者全員によるディスカッションで理解を深め、課題を共有した。トーク&ディスカッションでは、美術関係者と教育関係者の参加が多かった。

第1回:2013年2月9日

主催:大阪市、大阪府

企画運営:enoco、NPO cobon

第2回:2014年2月15・16日

主催:大阪新美術館建設準備室、enoco

第3回:2014年8月8日・11月1日(8月10日開催予定が台風で延期)

主催:大阪新美術館建設準備室 共催:enoco

企画運営:キッズプラザ大阪

助成:一般財団法人 地域創造

第4回:2015年8月26・29日

主催:大阪新美術館建設準備室 共催:enoco

ワークショップ協力:キッズプラザ大阪

助成:一般財団法人 地域創造

### 関連事業

▷5YEARS 大阪新美術館建設準備室(大阪市)との連携

▷5YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの活用

### 実施のコツ!

#### » 専門家に助けを借りる

対話型鑑賞などの子ども向けワークショップでは、専門のスキルと経験を持つNPOやキッズプラザ大阪のサポートを得た

#### » 子供の想像力を信じる

対話型鑑賞では大阪府20世紀美術コレクションの中心をなす抽象絵画を意識的に用いたが、子どもたちからは様々な想像が生まれ、他の発言を聞くことで見方もどんどん変化した

#### » 対象年齢を考慮する

一言で子どもといっても年齢によって理解度や関心は大きく異なるので、対象年齢を変えたりグループに分けたりと工夫を重ねた

本物の美術作品を用いることで、子どもたちのモチベーションも高まったようです。欧米の美術館では子どもたちが床に座って対話型鑑賞を行ったり、自由にスケッチをしたりする風景が日常ですが、日本でもこのような実証を重ねて定着していけばと思います。また学校の教育現場はカリキュラムや施設の制約などで美術教育に課題が多く、公立の文化施設がもっとサポートできるような仕組みづくりが必要だと痛感しました。子どもの対象年齢としては、中学生は忙しいのか関心が低いのか参加者が非常に少なく、微妙な年頃でもありワークショップの進め方も難しかったです。初回は1日での開催としましたが、時間的な問題と、大勢の大人が見守るなかでの作業は子どもたちが萎縮してしまうので、2回目からは2日間に分け、成果物の展示や映像によって1日目の内容を共有するようにしました。



## 30 アートやデザインを活用した地域づくりの事業立案ができる人材を育成する

## 31 地域や組織の課題を明確にし、行動へとつなげる



企画立案ワークショップではenoco 館長甲賀が入り、アドバイスなどを行った

### 事業概要

#### » enoco わがまち文化コーディネーター講座

#### 〜アートやデザインを活用した地域づくりの担い手育成プログラム〜

地域文化の魅力発信や地域活性化、市民と協働してのまちづくりなどの行政課題や社会課題に対して、アートやデザイン、地域の文化、地域固有のモノやヒト・コトを活かした企画や事業を立案し、実践するための基礎を学ぶ講座。実際の事例から学ぶレクチャーと体験型ワークショップの2部制とし、基礎的な知識と技術・応用力を身につけることを目的とするプログラム構成とした。また、年度末に振り返りワークショップを行い、参加者同士の課題等を共有する場とした。

2014年11月6日 13:00~17:30 (レクチャー)

2014年11月7日 10:00~18:00 (レクチャー&フィールドワーク&ワークショップ)

2015年2月6日 13:00~17:00 (振り返りワークショップ)

講師:山出淳也(NPO法人 BEPPU PROJECT 代表理事)、寺浦薫(大阪府文化課主任研究員)、甲斐健(かたのキャンパスプロデューサー)、増永明子(デザイナー)、松本雄吉(維新派主宰)、泉英明(ハートビートブラン代表/水都大阪パートナーズプロデューサー)、enoco スタッフ

協力:大阪府

助成:一般財団法人 地域創造

### 関連事業

▷3YEARS わがまちキャンパス

▷6MONTHS enocoの学校

### 実施のコツ!

#### » 可能性の幅を広げる

レクチャーでは、大阪内外の事例、アートだけではなくデザインの事例も取り上げ、様々な可能性を示した

#### » 受講者を見極める

受講生には地域の人を巻き込んでのワークショップファシリテーターとなる立場の人も多く予想し、多様な人々と合意形成をしながら企画を立てる簡単な流れを体験できる内容とした

#### » 現場を知る

過去にイベント等が行われている場所(中之島 GATE)を対象とし、フィールドワーク体験も実施した

#### » 継続的な関わりをつくる

レクチャー&ワークショップ終了1ヶ月後に中間アンケート、3ヶ月後に振り返りワークショップを行い、参加者が自分の抱える課題を掘り下げることができるようにした

参加者層は、行政職員、文化施設職員、NPO等のスタッフと多岐に渡り、特に行政職員の方からは、他の自治体の職員や施設の指定管理者側の方との横のつながりを持つことができる機会は貴重だという声がありました。この講座を受講し、現在抱えている課題が明確となり、「eno so done!」に相談に来られるというケースもいくつかあり、実際に行動に移してくださる方がいたことが何より嬉しいです。





## 32 社会におけるアート・デザインの役割を再考する

## 33 プロジェクトの効果測定や評価の手法を身に付ける



チームに分かれて、手法のひとつである「セオリーオブチェンジ」を実践し、講師から直接コメントをもらった

### 事業概要

#### » enoco×KIITO×BRITISH COUNCIL スペシャルセッション

##### 「課題解決に向けたアートとデザインの役割と可能性」

アートやデザインが様々な課題解決に対して重要な役割を果たすという認識が高まっており、enocoも社会課題解決に取り組む拠点として活動しているが、それをしっかりと評価し、次につなげていくプロジェクトのデザインまでには至っていない。そこで同様の課題を抱える神戸のデザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)、英国の公的国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルと共同で、アートやデザインプロジェクトの効果測定・評価手法の必要性を学び、今後の活動に役立てていくことを目指し、プロジェクトの評価モデル開発において世界的に定評のある英国のコンサルティング会社 abdi から講師を招き、レクチャーとワークショップ形式で実践的に学ぶプログラムを実施。明確な目標設定と評価指標に基づいたプロジェクトプランニングができるようになるために、プロジェクトがもたらす成果や効果とその測定・評価手法の意義と役割、「セオリー・オブ・チェンジ」「インパクト/アウトカム」などの概念、プランニングのプロセスを実践的に学んだ。

2016年1月22日 クリエイティブフォーラム「アートとデザインプロジェクトの未来形」

会場: enoco

2016年1月23日、24日 連続ワークショップ「社会変革を起こすプロジェクトデザイン」

会場: KIITO

講師: ジェーン・マッシー (abdi CEO)

主催: 大阪府立江之子島文化芸術創造センター (enoco)、デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)、ブリティッシュ・カウンシル

参加者数: クリエイティブフォーラム: 88名 / 連続ワークショップ: 40名

### 実施のコツ!

#### » 他の組織と課題共有

KIITO、ブリティッシュ・カウンシルとの共催で、課題の共有と幅広い層への波及効果を狙った

#### » 2段階形式で実施する

まずフォーラムで全体像を掴み、翌日から2日間連続で少人数でのワークショップに参加するという2段階の形式の集中講義とした

#### » フォローアップを行う

終了後に参加者に向けてアンケートを実施。ワークショップで学んだ手法などの活用状況や学んだことに対する質問や疑問を拾った。それをもとに、翌年度にフォーラム・ワークショップ参加者を対象にフォローアップ企画を実施した

企画段階の際、ブリティッシュ・カウンシルとの打ち合わせは内容を詰めていくというよりは、今回のプログラムで学ぶ「セオリー・オブ・チェンジ」「ロジック・モデル」などのキーワードを理解する「予習」のような印象があり、KIITO 担当者や打ち合わせ内容の確認作業が、ほぼ理解度を確認する作業になってました。広報活動などの資料作成にもとても苦労しました。しかし、この3日間で学んだ手法はソーシャル・デザインに取り組む専門家が備えている思考法、デザイン手法と共通するものが多いと感じました。enoco が掲げる「クリエイティブ思考で社会課題解決に取り組む」という目標を達成する上では、備えるべき思考法のひとつではないかと思います。



## 2WEEKS

- 34 所蔵コレクション内の隠れた名作に光をあてる
- 35 所蔵コレクションへの市民の関心を高める
- 36 現代作家の視点を通して、  
所蔵コレクションの新たな魅力を発見する
- 37 地域で活躍するイラストレーターとのつながりを生み出す

### 34 所蔵コレクション内の隠れた名作に光をあてる

### 35 所蔵コレクションへの市民の関心を高める



収集に携わった大阪府の学芸員によるセレクション展「眼と心とたち」展示風景 撮影：表 恒匡

#### 事業概要

##### » 大阪府20世紀美術コレクション展

大阪府の所蔵品である大阪府20世紀美術コレクションを展示する無料展覧会の定期的な実施。展示内容に合わせてギャラリートークや講演会を行い、作品に対する理解を深めてもらう機会を設けた。

2012年10月9日～28日「エノコジマ・セレクション ～ザ・大阪ベストアート展関連作品を中心に～」

展示総数：14点

2014年1月9日～25日「上前智祐展 一時を刻むー 点描・マッチ・縫い・版画」

展示総数：59点

2014年6月17日～29日「ミクロコスモスー大阪府20世紀美術コレクションより」

出品作家：エドワード・ウェストン、河口龍夫、藤本由紀夫、李禹煥、粟津潔、ほか

展示総数：24点

2014年9月23日～10月5日「津高和一 展 ～抽象のエスプリ～」

展示総数：18点

2014年11月21日～12月5日「齋藤真成展 [パラレル]」

展示総数：19点

2015年3月20日～4月4日「眼と心とたち」学芸員N」が会場だった大阪府20世紀美術コレクション」

展示総数：60点

2015年4月24日～2015年5月16日「マイク・カネミツ/金光松美ーふたつの居場所」

展示総数：40点

2016年9月1日～18日「須田烈太展 -『街道をゆく』挿絵原画 海外のみちをゆく-」

展示総数：95点

#### 関連事業

▷40YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの形成

▷5YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの活用

▷5YEARS 大阪新美術館建設準備室との連携

▷4MONTHS dracom 「gallery (extra version)」

▷3MONTHS 市民キュレーターワークショップ

▷2WEEKS eno co-lab

▷1DAY enocoアート・キャラバン

▷3HOURS 大阪府20世紀美術コレクション連続講座/ミニコレクション展

#### 実施のコツ！

##### » テーマで魅せる

作家など展覧会にテーマ性を持たせ、コレクションとしての特徴を活かした企画を心がけた

須田烈太の『街道をゆく』シリーズなど、一定の固定ファンがいる作品は外部への貸出機会は多いのですが、それ以外にもたくさんの方の名作や注目すべき作家がいることを知っていただきたいと enoco で定期的に展覧会を開催しています。ただ、展示室は普段は一般に貸ギャラリーとして使っていただき、それが施設の収入になるので、コレクション展示を長い期間数多く開催すればよいというわけでもないのが、多様な機能を担う enoco としては悩みどころです。



### 36 現代作家の視点を通して、 所蔵コレクションの新たな魅力を発見する



現代の作家の版画作品と作家がセレクトしたコレクションの版画作品が並んでいる 撮影：草木貴照

#### 事業概要

##### » eno-co-labo ふるさかはるか「木版風景：木はわたしの鏡」

大阪府が所蔵する大阪府20世紀美術コレクションと関西で活動するアートに関わる人々との協働作業を通じて、コレクションの新たな魅力を発見する展覧会。コレクションの中核をなす「現代版画コレクション」と、大阪を拠点に活動している木版画家ふるさかはるか氏とのコラボレーション。コレクション中から「風景」を連想させる木版画作品を中心に作家にセレクトしてもらい、自身の作品とともに展示をする。eno-co-labは「enoco」「collaboration(協働作業)」「laboratory(実験所)」をかけたあわせた造語。

2013年8月1日～11日

#### 関連事業

▷40YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの形成

▷5YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの活用

▷1MONTH Be Creative Festival

▷2WEEKS 大阪府20世紀美術コレクション展

#### 実施のコツ！

##### » 技法に着目

版画の中でも、浮世絵など昔から日本にあった技法であり、日本の風土によって培われてきた木版画にあえて絞って展示することで、版画技法の多様さや表現の幅があることを伝える

##### » 現代作家の視点でみせる

作家自身の作品もあわせて展示することで、昔からある技法でも様々な新しい表現が可能であることを提示する

##### » 制作風景を伝える

作家のアトリエを再現する展示を行い、木版画の素材や制作の様子を見せることで技法や作家の仕事について知ってもらう

今回のふるさかさんの作品(新作)は江之子島で採取した土を使った絵の具をつくり、それで版画を刷りました。版木も展示したので、反転した画面、版木に重ねて載せられる絵の具など作家の仕事がリアルに伝わってきました。展示したコレクション作品もそのようにして刷られたのだからかという想像力をかき立てられ、そういった視点でみる作品はまた生き生きとした魅力を発していたように思います。



### 37 地域で活躍するイラストレーターとのつながりを生み出す



トークイベントはプライベートの飲み会を来場者が覗きみる／見守るようにまわりを囲むというかたちで実施した

**事業概要**

» Private Talk

関西を拠点に活動する若手イラストレーター6名による展覧会。各作家が“プライベート”をテーマに作品を制作して展示するとともに、自らの活動を紹介する資料も展示した。会期中トークイベントを開催し、関西を拠点にイラストレーションの活動を続けているメンバーがイラストレーターの活動についてプライベートな内容も交えて語った。

2016年6月21日～7月10日

出展者(五十音順): タダユキヒロ、とんぼせんせい、西武アキラ、makomo、山内庸資、yamyam

展示協力:NO ARCHITECTS

トークイベント:「イラストレーターとのミーティング」2016年6月25日開催

ゲスト:竹内厚(編集者)

共催:江之子島A&L事業(DECOBOCO)

参加者数:45名(トークイベント)

**実施のコツ!**

» 企画内容を委ねる

イラストレーター相互の関係性や個々の違いをなるべくストレートに見せるため、企画はイラストレーターに委ねた

» 聞きにくいを聞き出す

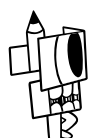
トークでは参加者に質問シートを配布し、普段は聞きづらい「プライベート」な質問ができるようにした



タダユキヒロ



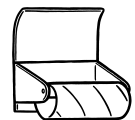
とんぼせんせい



西武アキラ



makomo



山内庸資



yamyam

普段アーティストと接することが多いので、仕事の進め方など、イラストレーターの方たちの仕事ぶりを知ることができるいい機会でした(ただ、美術作家としての活動経験のある人も多くあまり変わりはありませんでしたが…)。元々、イラストレーターとのご縁はあまりないenocoでしたが、参加したすべての方に、この後enoco関連の事業で協力・参加いただき、いい機会になりました。



## 1MONTH

- 38 地域のクリエイターと市民に対して施設の理念やコンセプトを表明する
- 39 協働のベースとなる地域のクリエイターと短期間でネットワークを形成する
- 40 何はともあれ多くの人に足を運んでもらう
- 41 施設の使いこなし方をアピールする
- 42 アートを媒介とした子どもたちの夏休みの居場所をつくる
- 43 多様な人々の参加が可能な文化的コミュニティを生み出す



### 38 地域のクリエイターと市民に対して 施設の理念やコンセプトを表明する

### 39 協働のベースとなる地域のクリエイターと 短期間でネットワークを形成する



展示風景。パネルによる参加クリエイターの紹介とクリエイターが提示する「大阪」を実物や写真等で展示した

#### 事業概要

##### » 100 OSAKA

大阪を拠点に活躍する様々なジャンルのクリエイターに、それぞれの視点で「大阪」を提示してもらった企画展示。多くのクリエイターを巻き込みながら、従来のステロタイプな「大阪」とは異なる、クリエイティブな「大阪」をここから発信していこうという、enocoの基本姿勢を示す機会とした。またクリエイターのプロフィールを合わせてパネル展示することで、大阪のクリエイティブシーンを俯瞰することもできる。2回目の2013年は「U35」と題して、35歳以下の若手に絞った展示とした。

#### 【開催日時】

「100 OSAKA Vol.1」  
2012年10月9日～28日

「100 OSAKA Vol.2 U35」  
2013年8月1日～11日

#### 関連事業

▷ 1MONTH Be Creative Festival

#### 実施のコツ！

##### » 根拠のない数字

アート、デザイン、音楽、パフォーマンス、料理、ライター、建築、まちづくりなど、考え得るあらゆるジャンルから、大阪で活動するクリエイターに声をかけた。根拠のない100という数字を掲げることで、これまで全くつながりのなかった様々なジャンルのクリエイターに声をかけることができた

##### » 表現の幅を認める

各クリエイターが提示する「大阪」の内容や展示形態については、写真1枚から映像、能舞台まで、可能な限りクリエイターの意向に沿って、表現の多様性が示せるよう努めた

##### » データベースを意識する

逆に各クリエイターのプロフィールについてはフォーマットを定め、大阪のクリエイターに関するデータベースとして、今後の事業にも活用できるようにした

ほぼ2名のスタッフで、思いも寄らないアイデアを提示してくる100名のクリエイターを相手に準備を進めるのは大変でしたが、このときのつながりが、後のenocoの様々なプロジェクトで活かされることになりました。参加者総数192名（Vol.1とVol.2で8名重複）のうち、5年間で85名のクリエイターと協働することになりました。特にグラフィックデザイナーやライター・編集者、建築・まちづくり系のクリエイターとの協働が多く生まれています。



### 40 何はともあれ多くの人に足を運んでもらう

### 41 施設の使いこなし方をアピールする



ニシハラノリオによるカブリモノをエントランスに展示。自由にかぶってSNSなどに投稿してもらったことを促した

#### 事業概要

##### » Be Creative Festival

enocoのグランドオープン記念したフェスティバル。大阪府20世紀美術コレクションの展示や、その会場にて行うダンス公演、地域の小学生とワークショップを行い制作した作品の展示、アーティストがenocoのアトリエを使って制作した作品の展示、フリースペースを活用しての古書市、トークイベントなど多彩なコンテンツを展開した。またこのフェスティバル期間中に、一般から募集していた愛称の審査会も行い「enoco」という愛称が決定した。2013年にも開催した。

#### グランドオープン企画「Be Creative Festival2012」

2012年10月9日～28日

- ・ 100 OSAKA 展 Vol.1
- ・ ニシハラ★ノリオ「カブリモノ・ギャラリー」
- ・ 「大阪！しでかす観光」上映
- ・ エノコジマ ブランディング会議&愛称公開審査会
- ・ Monochrome Circus「Dance in Building」
- ・ エノコジマ古書ノ市&約100人の本棚展
- ・ セレノグラフィカ「絵を踊る / 絵と踊る」
- ・ KIO「DOLLS」ほか

来館者数：7,222名

#### 「Be Creative Festival2013」

2013年8月1日～13日

- ・ 100 OSAKA Vol.2 U35 展
- ・ eno-co-labo. vol.1 本版風景：木はわたしの鏡
- ・ FIELD TRIP PROJECT/遠足プロジェクト展
- ・ 「TACT/FEST 2013」連携プログラム：劇団こぶす「ひつじ」ほか

来館者数：2,722名

#### 関連事業

▷ 1MONTH 100 OSAKA  
▷ 2WEEKS eno co lab

#### 実施のコツ！

##### » 建物全体を使う

展示室だけでなく、エントランスや多目的ルームなども展示会場として活用した

##### » マイナスをプラスに変換する

ホールがないことを逆手にとり、展示空間や裏口でのダンス、演劇公演などを展開した

##### » プログラムの複合化

展示、ワークショップ、パフォーマンス、トークなど様々なプログラムを展開することにより、来館者層の拡大を狙った

多種多様なコンテンツを混在させることを意識し、今後のenocoの方向性や使い勝手を探るような1ヶ月でした。コレクション展示とパフォーマンスのコラボレーション、子供向けのワークショップ、古書市をはじめ、この中で実施したプログラムや試みとその後のenocoの自主企画に繋がっているものもあり、enocoにとっても重要な実験の機会だったように思います。



42 アートを媒介とした子どもたちの夏休みの居場所をつくる

43 多様な人々の参加が可能な文化的コミュニティを生み出す



自分で使い方を考える「映画館」なので、床に座っての鑑賞も可、椅子も企業協賛を受けて様々なものを用意した

事業概要

» アートでつなぐみんなの実験場— えのこじま仮設映画館

夏休みの1ヶ月間、ギャラリー空間内に仮設の「映画館」をつくり、夏休みの1ヶ月の間、作品上映と様々な映画・映像にまつわるワークショップ、イベントを開催した。シアター・ラボ・ロビーから構成される会場では「みる/つくる/はなす・もちよる」という3つのテーマのもと、映画・映像作品の上映会や、多彩なクリエイターによる映像制作ワークショップ、映画について考えるトークイベントなどを実施。参加者の関心に応じて自由に遊び方や関わり方を選ぶことのできるプログラムを毎日開催し、多様な人々の参加を促し地域における新しい文化的コミュニティベースをつくった。さらに事業実施方法のメソッド化を行い、他の地域でも実践可能なモデルケースとなることを目指した。

2015年8月1日～30日

[プログラム]

- ・ プレイイベント remoscope workshop in enoco
- ・ オープニングトーク「映画館という存在のこれから」
- ・ 上映会「大人も子どもも楽しめる短編映画上映会」
- ・ 常時上映プログラム:4つの上映プログラムを日替わりで上映
- ・ ラボプログラム:気軽に映画や映像を撮影できるラボを設置
- ・ 「映画館をつくらう—映画館製作部—」
- ・ 「映画のしくみ工作部」
- ・ 大力拓哉・三浦崇志「エノコトコトムービー部」
- ・ 「ご近所映画クラブ〜3時間で映画を作るワークショップ〜」/「ご近所映画をみる」
- ・ SCOPP「みんなできらう!コマドリアニメーション」
- ・ 林勇気「速くをみるために」
- ・ ジョナス・メカス《ウォールデン》上映会
- ・ 「とびだせ!一般批評学会 THE MOVIE」
- ・ 「この夏、みんなが撮った写真を持ち寄って上映する会」
- ・ 「妄想映画祭の公開ミーティング」

空間設計:アトリエカフエ / 企画協力:プログラムコーディネイト:岩瀬拓郎  
 協賛:バナソニック、インターオフィス 協力:キネプレ、神戸映画資料館、一般社団法人タチョナ、remo [NPO 法人記録と表現とメディアのための組織] 助成・協力:大阪市  
 参加人数:948名

関連事業

- ▷ 3DAYS エノコトコトムービー部
- ▷ 3HOURS ご近所映画クラブ〜3時間で映画を作る〜

実施のコツ!

» 誰もがイメージできるテーマにする

一般にもイメージしやすい「映画館」というテーマを設定することで、美術に興味がない層にもアピールすることを狙った

» 自分でつくる

単に「みる」だけでなく「つくる」「はなす」という参加型プログラムを展開することで繰り返し訪れる機会をつくった

» 夏休みの自由研究にもなる

カメラやスマートフォンで映画や映像を撮る、映像の仕組みを学ぶプログラムを実施し、夏休みの自由研究等にも活かすことのできるような内容にした

初めて実施した「夏休み企画」でしたが、ターゲットやテーマのリサーチ不足があり、常に人が行き交う場となるところまでは至りませんでした。子供たちの居場所をつくるには、単に場所をつくるだけでなく、そこにいつもいる「大人」としてのスタッフの存在が必要不可欠ではないかと思いました。ワークショップ等へのプログラムへの参加者満足度は高く、enocoにとっても新しいクリエイターとの出会いがあったと同時に、参加クリエイター同士の新たなネットワーク形成にも貢献できました。



3MONTHS

- 44 アーティストが社会や地域と関わる挑戦や実験の場をつくる
- 45 アーティストの仕事に対する市民の理解度を高める
- 46 美術コレクションの新たな活用方法を考案する
- 47 鑑賞するだけではなく、市民と美術作品の関わりを生み出す
- 48 学芸員の仕事や美術館の役割についての理解を促す
- 49 演劇と美術の新しいコラボレーションのかたちをつくる
- 50 地域の子どもの居場所をつくる
- 51 前例のないアートワークショップをつくる
- 52 公共空間の利活用、維持管理のアイデアを地域住民とつくる
- 53 管理運営を担う地域の人材を発掘する
- 54 地域が持つ資源や魅力をアートの力で発信する
- 55 市民協働の仕組みと仕掛けをつくる
- 56 区民の防災意識を高める
- 57 官民が一緒になって考える仕組みを生み出す
- 58 行政職員にデザインの意味と重要性を認識してもらう
- 59 クリエイターが公共的な仕事に関わる経路を生み出す

## 44 アーティストが社会や地域と関わる挑戦や実験の場をつくる

## 45 アーティストの仕事に対する市民の理解度を高める



展示会の会場は個展に最適なルーム2を使用。会期は2週間設定した(写真は#2アーティスト・堀川すなおの展示)  
撮影:植松琢磨

## 事業概要

## » アーティスト・サポート・プログラム enoco [study?]

アーティストを公募し、3ヶ月間 enoco のアトリエルーム等で制作を行い、最後に個展を開催する若手アーティスト支援プログラム。社会に対して自らの制作活動を拓いていくことをテーマとし、enoco と協働あるいは enoco のサポートを受けながら公募で選出されたプランのもとに制作を進めていく。公募は毎年度1組選出とした。

## [入選アーティスト]

2013年度 友枝望

制作期間:2013年7~9月

展示会:「CLUSTER」2013年10月5日~19日

2014年度 堀川すなお

制作期間:2014年9~12月

展示会:「解釈と行為 SEEING AND PRACTICING」2015年1月10日~24日

2015年度 湯川洋康・中安恵一

制作期間:2015年9~12月

展示会:「流暢な習慣」2016年1月10日~30日

2016年度 冬木遼太郎

制作期間:2016年12月~2017年2月

展示会:「A NEGATIVE EVAGINATE」2017年3月11日~26日

## 実施のコツ!

## » 徹底的に公開

審査~制作までプロセスを可能な限り開示した(オープンアトリエ、ワークショップなどの参加型プログラムの実施、中間発表の実施や最終報告書の提出を必須条件とした)

## » 地域や公共機関とアーティストをつなぐ

アーティスト個人ではアクセスが難しい地域や公的機関へのアプローチを enoco がバックアップすることにより、アーティストの活動やテーマの幅を広げた

## » この先をつくる

公募の審査員には関西で活動する学芸員、コーディネーター、研究者などを招き、今後の活動に向けてのネットワークづくりの機会とした

周辺地域の住民の集まりに飛び入り参加する、高校に向向いてワークショップをする、動物園の裏側に潜入させてもらうなど、アーティスト自身も果敢に行動してくれました。3ヶ月という期間はじっくりと制作するには短い時間ではありますが、その中でも中間発表やワークショップという条件が課されるためハードではありますが、その勢いがあるからこそ、新たな挑戦や実験ができるのだと思います。



プロジェクト関係者に尋ねる

## Project Related Interview 01

アーティスト・サポート・プログラム enoco[study?]

## 堀川すなお

(アーティスト)

2016年9月9日 @enoco

聞き手:榊原充大(RAD) + 高坂玲子(enoco)

堀川さんは enoco[study?] の2年目の入選アーティストですね。

堀川: そうです。公募時に「社会との関わり」が重視されていたのが印象に残っています。普段の制作は、日常的によく目にしている“もの”をみんながどのように捉え、コミュニケーションの中でどのように共有しているのか、ということに関心があります。でも当時の制作の仕方は、自分ひとりのもの見方で発展させていくという方法だったんです。ちょうど自分の見方だけではなく、他の人がどのようにものを見ていて、それを他人とどのように共有しているのかについて考えたいと思っていたところでした。study? ではワークショップなどでもできるということなので、企画書を書いて応募して、選んでもらいました。今の自分の制作は、他者と関わることからつくられているのですが、そのように発展できたのは study? での経験が大きいですね。人との関わりの中で、人のものの考え方、伝え方、解釈の仕方、そして共有の仕方から何が伝わっていて何が伝わっていないか、それが一体なんなのか、ということにどんどん視点が変わっていききました。今まで一人だったのが、もっと広い捉え方をできるようになりました。高坂: enoco はパブリックな施設ということもあり、やりたいプランのための場や環境を設定する、協力する役割を担うという意識を持っています。そのアーティストに適した環境を整えるというか。ワークショップもそのアーティストにあわせて実施場所やターゲットを変えています。

堀川: ワークショップ経験者に話を聞きに行ったり、実際に自分がワークショップを受けに行ったりしました。そこで私の場合は学校に行くといいいのではないかと、スタッフの方に繋いでもらい、高校に出張したんです。でも実際にみると、私が頭の中で思い描いている通りには進まないんです。ワークショップ前に、人はこのようにものを捉えて、このような言葉を選ぶのではないかなど、長年考え続けてきた自分のものの捉え方から、他人のものの捉え方を想像して予想を立てていたのですが、いざやってみると思わぬところで全く私が想像していなかったところに全員が向かったり、私の言葉が思わぬ捉えられ方をされたりと、自分と他人の捉え方の違いに気付くことができ、すごく勉強になりました。

—enoco と高校と、両方でワークショップをしたんですね。

堀川: enoco でやったワークショップは、目の前にあるものを目を見て描く際に、目を見た瞬間に「これは何か」が分かった状態だから、描く時にはもう既に今まで知っているものとして勝手に処理して描いているんじゃないか、という仮説が前提になっています。つまり目の前にある物体を見ているのではなく、“コップ”や“イス”という既に知っているイメージを通して見ているということです。本当はものってもうちょっといろいろな側面があるのに、このように見ましょと教えられたような処理の仕方をしてると思うんです。その処理の部分がどうな

っているのか見たいということで、中身が見えない箱の中に手を入れてその感覚を描く、みたいなことをやってもらいました。目で見て描くのと、感触で描くので、繋がりはありません。ただ、その時はそれで終わって発展はなかったです。

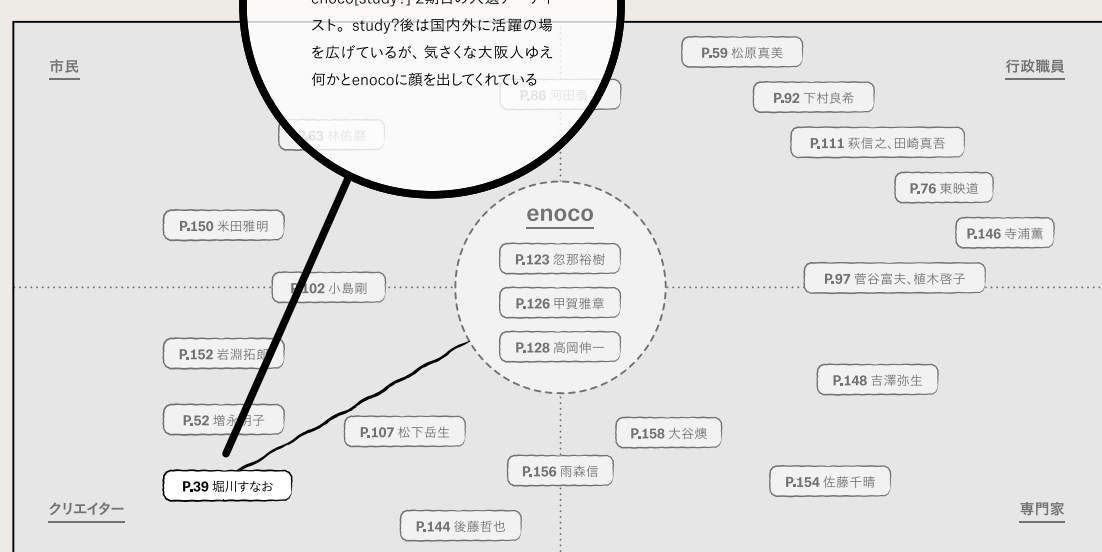
一方で高校ではものを描く前に一度言葉を通すというワークショップをしました。具体的には、始めに2人1組になってもらいます(以下AとB)。次に私が、Aに見えないようにBにものを渡し、そのものの形をAに伝えてもらいます。そして、Aはその言葉を受け取った通りに線で描きます。それが終わると先ほどとは逆に、私がBに見えないようにAにものを渡し同じようにやらせよう、ということをしました。普段、言葉を使って意思疎通はしているけど言葉から発想される互いのイメージは違うじゃないですか。言葉はどのように伝わって、どのように伝わらなくてっていうのを見てみたいと思いやってみました。

高坂: 反応はどうでしたか?

堀川: ワークショップは違う生徒で合計2回しました。1回目は両方の子に葉っぱを渡したら、2人目のほとんどの子が始めの早い段階で「これ葉っぱ」と分かっちゃってしまっ。線でものの形を描く際に、伝えられた言葉を全て“葉っぱ”として受け取っていました。そのため、1人目の子と2人目の子にかなり差があったんです。なので2回目は、1人目の子に葉っぱを渡し、2人目の子に洗濯バサミ



インタビューネットワーク図



を渡したんですね。1回目の様な先入観で言葉を受け取ることは無くなったのですが、洗濯バサミの構造が複雑すぎて、複雑なものを言葉で表すのはめっちゃめっちゃ難しいやな、と改めて感じました。「丸があって、2本生えていて」とか、全体を一言で表せないで、沢山の生徒がどのように同じ形の物体を言葉で伝えようとするのかの違いがすごい面白いなと思いました。

**高坂:**「そのもの」として、それをどう表して、どう捉えるかというところですよ。

**堀川:**そうですね。高校でやった、言葉で人に伝えることがstudy?が終わった今でもずっと残って発展していますね。

**高坂:**アーティストによってはワークショップ自体、ハードルに感じることも少なからずあると思いますが、なんとかやってみようと思ってくれる人こそ応募してほしいと。そう考えワークショップをこのプログラムの特徴として残しています。study?におけるワークショップはトライであったり、リサーチであったり、という位置づけをイメージしています。

**堀川:**こういうところでやれることのメリットは人と繋がれることだと思います。1人で制作を黙々とやっていたら、日本であっても海外であっても、どこにいても変わらないじゃないですか。出会った人との関わりとか、おもしろい意見が頭のどこかに残っていてアイデアになっていたり、そういうことかなと思っています。

**高坂:**堀川さんは滞在制作記録があって、これが面白くて。この事業をやる上で、オープンにしておくことっていうのがひとつの大きなテーマなんです。作家が考えていることってなかなか分からないし、伝わらないことも多いじゃないですか。なので、思考を少し垣間見ることができた方が作家に対する一般の方の理解も進むかなということ公開する。嫌がる人もいるかもしれないけど、それは条件にしています。そういったところから次への思考も見えてくると、専門家にとっても面白いと思いますし。

**堀川:**enocoに応募する前は「どういう風にものを見て、解釈しているのか」という意識だったんですけど、study?を通

して「見る」から「捉える」に変わったな、というのが大きな違いだと思います。その捉えるということは、ワークショップや展示の期間に毎日在廊して他人と関わることで、自分の先入観にも気付くことができ、今でも人の話や行動から何か少しでも新しい気付きを得られないかという姿勢に繋がっています。これはstudy?の「社会と関わりオープンにしていく」という考えがなかったら気付かなかったことかもしれません。公開されている滞在記録を読んでくれた方がいて、そこから何かまた話が出てくるのがあれば、それはすごく嬉しいです。

**高坂:**「捉える」というところに行っただけは面白いですが。自分ひとりだったら「見ている」だけど、「捉える」はひとりの作業だとなかなか意識が向かない。

—日常的なものを多角的に見て、作品に反映するという制作の方針はいつ頃から？

**堀川:**京都精華大学に通っていたんですけど、2008年にニューヨークのクーパー・

ユニオンに半年間行っていたことがきっかけになっています。ニューヨークに行く前までは、全く違うことをしていました。ずっと制作はしていたんですけど、どこかで「自分のやることではないな」という思いがあったんです。それでニューヨークに行った時に、自分は本当に制作を通して何をすべきかを思案していたんです。学校ではスタジオとして真っ白いキューブが与えられて、机も椅子も白いんですが、そこにコンセントが埋まってたんですよ。「このコンセントでも描こうかな」と思って描いたんです。その後食堂へ行った時に日本の100均ライターと形が同じものがあって、それを見た時に言葉が通じにくい場所でも、そのもの持っている共有性、共通の使い方、イメージなど、言葉を越えてものの持っている強さがあるのではないかと思います。そこからその考えを探るためにものを観察して、一体、目の前にあるものとは一体なんなのかということを考え出しました。なので、ニューヨーク行っただけです。

**高坂:**ところで堀川さんはバナナが好きですよね。

**堀川:**バナナは2008年の時に、最初に描き出しました。その後、いろいろなモチーフでものの捉え方を探り続けていて、今の考えで描き出したらどうなるんだろうと思って2014年にもう1回描き出したんです。それぞれの考えにあったモチーフを選んでいますが、バナナは今はその全ての考えの実験場所のようになっていますね。そしてモチーフの選び方は、日常的によく目にし、いろんな国にある

もので、名前を聞いてみんながひとつのイメージを思い浮かべやすいものを選んでます。例えば、リンゴだったら青と赤の色があるけど、バナナだったらひとつのイメージを思いつきやすいと思って。**高坂:**バナナは良さ実験相手ですね！最後にstudy?に参加されてどうでしたか？**堀川:**思い返すと後々から繋がることもstudy?の3ヶ月でたくさんありました。展示方法など、ワークショップのやり方や人との関わり方、今まで制作していたことの展開方法など、この3ヶ月ですごく密に組み込まれていて。その期間で消化はできないですけど、これを土台に発展できる、すごい得られるものがあるプログラムやなと思います。

**高坂:**そういう点では、3ヶ月って、失敗も許されて新しい実験ができる、というスパンなのかもしれませんね。

#### 堀川すなお (アーティスト)

1986年大阪の発明家の家系に生まれる。2008年クーパーユニオン芸術大学(ニューヨーク)交換留学生。2010年京都精華大学芸術学部造形学科洋画専攻卒業。2012年京都市立芸術大学美術研究科絵画専攻油画分野修了。2015~2016年ポーラ美術振興財団在外研修員としてニューヨークにて研修。主な個展に「クリテリウム87 堀川すなお」(水戸芸術館現代美術ギャラリー、2013年)。2017年には「清流の園ぎふ芸術祭—Art Award IN THE CUBE2017」にも出展。

- 46 美術コレクションの新たな活用方法を考案する
- 47 鑑賞するだけではない、市民と美術作品の関わりを生み出す
- 48 学芸員の仕事や美術館の役割についての理解を促す



展覧会の設営にも立ち会い、運送・展示業者に指示を出して作業を進め、自分がイメージする展示をつくりあげていく

事業概要

» 「5人の市民キュレーターによる、大阪府20世紀美術コレクション展」  
(略称:市民キュレーターワークショップ)

公募で選ばれた5名の一般市民がそれぞれの展示空間を与えられ、コンセプトメイキングから作品の選定、展覧会タイトルの決定、展示計画、そして会期中のギャラリートークまで、展覧会の一通りの作業を自ら体験してもらうプログラム。最初に学芸員から計画の進め方と学芸員の仕事について、そして大阪府20世紀美術コレクションに関するレクチャーを受け、学芸員のサポートを受けながら、約2ヶ月間で展覧会を実現させた。

2012年11月20～25日「市民キュレーターによるミニ展覧会」  
主催: 大阪市、大阪府

2013年12月3日～14日「市民キュレーターによるミニ展覧会」  
主催: 大阪新美術館建設準備室、enoco

2014年8月19日～30日「アートをつむぐ、5つのストーリー」  
主催: 大阪新美術館建設準備室 共催: enoco

2015年1月13日～1月24日「OPEN YOUR BOX」  
主催: 大阪新美術館建設準備室 共催: enoco

2015年12月15日～26日「あなたをうつす5つの鏡」  
主催: 大阪新美術館建設準備室 共催: enoco

市民キュレーター数: 26名(のべ)

関連事業

- ▷ 5YEARS 大阪新美術館建設準備室(大阪市)との連携
- ▷ 5YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの活用
- ▷ 2WEEKS 大阪府20世紀美術コレクション展
- ▷ 2DAYS アートフォーラム 〈こどもとアート〉の現場を考える
- ▷ 1DAY enocoアート・キャラバン

実施のコツ!

» 本物を味わう

本物の美術作品を使うことや、チラシ・ポスター、プレスリリースの作成など、通常の展覧会と同じステップを踏むことで、参加者のモチベーションが高まった

» 少数精鋭で進める

社会人がアフターファイブや週末に学芸員と綿密な打ち合わせを個別に重ねるため、定員を絞って丁寧に対応できるようにした

» こまめに議論する

各自の進捗や考えなどを全体で共有できるように、中間報告会やタイトル決めなど、議論の機会を設けた

一般の市民が日常の仕事や家事を行いながら、2ヶ月でゼロから展覧会を完成させる作業は非常にハードなものになりますが、やり遂げたときの達成感や満足は非常に大きく、一緒に苦労した同士の連帯感も生まれ、展覧会終了後も連絡を取り合ったりしているようです。いろいろと難しい面はありますが、特に計画中は作品の画像や図録を主に用い、展示作業が始まって初めて実物と対面することになるので、大きさやテクスチャーがイメージと違ったりして、戸惑うということがよくあります。また、ギャラリートークの際はご家族や友人がたくさん訪れるので、普段美術館等に足を運ばない人にコレクションを観てもらい良い機会にもなっています。



プロセス

1. オリエンテーション



初日は顔合わせと、学芸員の仕事、コレクションについてのレクチャー。参加者は普段から美術館によく通うというアート好きから、思い切って応募してみたという方まで様々

2. 中間発表



作業が始まると基本的に学芸員とのマンツーマンになるので、途中のプランをプレゼンテーションしてもらい、互いに議論してアイデアを共有する場を設定。刺激を受けて計画を変更する人も

3. 設営風景



ここで初めて現物の作品と対面。イメージしていたサイズとの相違に驚き、この場で展示点数を減らしたり、配置を変えたりということも頻繁に起こる

4. ギャラリートーク



これまで3ヶ月間練ってきたコンセプトを「展示作品」を前に発表してもらい、家族や友人が多く集まり温かい雰囲気



## 49 演劇と美術の新しいコラボレーションのかたちをつくる



ワークショップの様子。学芸員の解説付きで作品観賞後、展示空間で演技や身体表現のワークショップを行った

### 事業概要

#### » dracom×大阪府20世紀美術コレクション dracom祭典2014「gallery (extra version)」

美術作品(大阪府20世紀美術コレクション)を展示する空間の中で、演劇作品を上演するという、大阪を拠点に活動する演劇集団 dracomとのコラボレーション事業。美術作品を鑑賞する人々を描いた dracomの「gallery」という作品を enocoでの上演バージョンとしてアレンジした。学芸員による作品解説で「大阪府20世紀美術コレクション」の作品を鑑賞しながら鑑賞者の声を集めるという全3回のワークショップを開催し、その時の感想などを再構成して作・演出した。

2014年9月26日～10月5日(計8回の公演)

ワークショップ「gallery」の声  
2014年5月17日、6月14日、7月5日  
講師:筒井潤(dracomリーダー/演出家・劇作家・俳優)  
作品解説:中塚宏行(大阪府都市魅力創造局文化課 主任研究員)

dracom×大阪府20世紀美術コレクション特別展「gallery」の声  
2014年9月30日～10月2日

共催: dracom

### 関連事業

- ▷ 5YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの活用
- ▷ 2WEEKS 大阪府20世紀美術コレクション展
- ▷ 1DAY enocoアート・キャラバン

### 実施のコツ!

#### » 展覧会そのものを舞台にする

美術展に関連した演劇公演といった従属するコンテンツという扱いではなく、展覧会そのものが内容に深く関わり、舞台となるようなものとした

#### » 新しい鑑賞方法を試みる

公演日ではない期間は展覧会として一般公開し、劇中で使用されている音声聴いて鑑賞するという独自の音声ガイドを提供し、演劇を通して美術を知り、美術を通して演劇を知るといった補完作用を狙った

#### » 異なる専門性を等価に扱う

ワークショップは演技ワークショップと美術鑑賞ワークショップが一体となったものであり、演劇と美術それぞれの専門性が等価に設定された

制作段階で重要な位置を占めるワークショップは演劇ワークショップでもあり、美術(鑑賞)ワークショップでもあるという、美術と演劇のそれぞれの専門性を等価に設定するものでした。そのようなフラットな状況の中で、作品にまつわる様々な「声」を集めていくと、美術の専門家である学芸員も驚くような鑑賞者の見解に出会うことができました。ジャンル横断というよりも、肩を並べてそれぞれの歩みを進めていくという新しいコラボレーションのあり方を提示できたのではないかと感じています。



## 50 地域の子どもたちの居場所をつくる

## 51 前例のないアートワークショップをつくる



発表後に話し合う様子「来場者」である家族やアート関係者の「大人」が見守る

### 事業概要

#### » タチヨナ×enoco企画

##### 「《なんだこれ?》サークル」

enocoとタチヨナの共催企画として行っていた「子どもアートワークショップ」の第6回として実施。編集者の岩淵拓郎が「ブッチーぶちよう」となり、小学5・6年生の児童7名がenocoを部屋に繰り広げた2ヶ月間のサークル活動。最後に公開で「何か」を発表することだけが条件として与えられ、「ぶちよう」との対話を通じて「なんだこれ?」と常識を疑うところから、ナンセンスな表現を自分たちで真剣に練り上げていく体験をもらった。最終日には70名を超える観客を前に、「くりきんとんを体で表現する」「みんなで昨日あったことをいっせいに話す(でもだれも聞いてない!)」「誰かがおたおたおたをほかの人がいていねいに広げてクシャクシャに丸めてする」などが発表された。

第1回ワークショップ:2014年2月9日  
第2回ワークショップ:3月1日  
第3回ワークショップ:3月30日  
成果発表:2014年4月6日  
※ワークショップ以外にも enocoでのミーティング(自由参加)、リハーサルなどを実施  
参加人数:7名

### 関連事業

▷ 5YEARS タチヨナ×enoco

### 実施のコツ!

#### » 最初に道筋を示す

最初に「教科書」のようなものを配布し、考える道筋を提示した

#### » 場所を用意する

活動場所を確保し、放課後など、いつ来ても良い環境を整えた

#### » 適度な緊張感をつくる

成果発表会は50円の有料とし(金額も自分たちで考えた)、会場を設営して正式なイベントとして開催することで、子どもたちに緊張感を与え、終了後の達成感や反省を感じてもらおうようにした

#### » 見えないところはしっかりサポート

子どもたちがフリーに活動するための環境を維持するために、スタッフ間では常に打ち合わせを重ね、保護者とは密に連絡を取り合った

参加してくれた子どもたちは全員女子児童だったため、とても賑やかなワークショップになりました。何より「ブッチーぶちよう」の愛されっぷりが凄かったです。学校も学年も異なる子どもたちが enocoをきっかけに仲良くなり、ぶちようの来ない日でも集まるようになるなど(ほとんど遊んでいるだけですが)、enocoが子どもたちの居場所となる可能性を感じさせたワークショップでした。終了後も、近くに住んでいる子が、何もなくてもふらっと立ち寄ってくれるようになったのが嬉しかったです。





## 52 公共空間の利活用、維持管理のアイデアを地域住民とつくる

## 53 管理運営を担う地域の人材を発掘する



段ボールで実寸大の模型を参加者とともに作り、空間のイメージを膨らませた

### 事業概要

#### » 木津川遊歩空間整備計画ワークショップ

地域から愛され、誇りとされる親水空間を生み出すため、供用開始後の管理、利活用のアイデアと担い手を発掘するワークショップを開催した。プロジェクトの周知をはかるための一般向けイベントと、より主体的に関わる層に向けてのワークショップという構成で、地域の内外から将来の担い手を振り起こした。

2013年11月9日:キックオフイベント「だんだんカフェ」開催  
2014年2月8日:アイデアワークショップ実施  
参加者数:43名(キックオフイベント)、25名(ワークショップ)

#### [前段階として]

2013年4月20日:木津川遊歩空間意見交換会①  
参加者数:25名  
2013年6月2日:木津川遊歩空間意見交換会②  
参加者数:23名

#### [その後の動き]

2014年7~8月:関係者並びに地域住民へのヒアリング  
2015年1~2月:コミュニティ育成事業の説明会の実施

### 関連事業

▷5YEARS プラットフォーム形成支援事業  
▷1YEAR 木津川遊歩空間整備事業における制度設計補助  
▷6MONTHS 木津川遊歩空間アイデアデザインコンペ

### 実施のコツ!

#### » つくる人も混ざる

ワークショップには設計者である建築家も参加し、クリエイターと市民との協働でつくっていく空間であることをアピールした

#### » 参考事例を活用する

維持管理に関する地域住民の不安を解決し、独自の利活用を実現するためのアイデアを出し合う場とするため、参考事例をテーマごとに整理して話題提供を行った

#### » 地域のツボを丁寧に押さえる

ワークショップの前段階では、連合町会をはじめ様々なまちづくり活動やNPO、近隣マンションの管理組合など、漏れないようにきめ細かに調査を行った

地域住民の協力なしに空間の維持管理や利活用は進められません。地域住民への周知はまだ充分とはいえ、認知の輪をどう広げていくか、また、供用開始までの期間、この場に興味を持った人たちのモチベーションを維持し、小さなアクションをいかに積み重ねていくかが課題としてありました。



## 54 地域が持つ資源や魅力をアートで発信する

## 55 市民協働の仕組みと仕掛けをつくる



普段は入園料のいる大阪市立大学附属植物園だが、この日は無料開放した

### 事業概要

#### » かたのキャンパス2013

プラットフォーム形成支援事業「わがまちキャンパス」の1年目に交野で開催したイベント。交野市と、プラットフォーム形成支援事業を手がける大阪府・enocoで協議を重ね、集客目的のイベントではなく、市民協働の仕組みづくりを主眼に置いたアートイベント「かたのキャンパス」を開催することを決定し、enocoがその実施までのサポートを行った。市民大学「交野おりひめ大学」をベースとした住民主導の実施体制を作り、交野市にある学術施設・大阪市立大学理学部附属植物園(植物園)、地域連携事業を検討していた大阪市立大学にも参画を依頼し、植物園を会場として開催することになった。また、産業界・大学、団体などの連携も得て、新しい地域のお祭りをつくった。

ワークショップ:2013年10月~12月

本番:かたのキャンパス2013「森のクリスマスパーティー!〜ビザとアートが森の中」  
2013年12月21日(日)開催

市民サポーター:約340名  
来場者:約3,000名

### 関連事業

▷5YEARS プラットフォーム形成支援事業  
▷4YEARS わがまちキャンパス

### 実施のコツ!

#### » チームづくりを最優先させる

チームビルディングを最優先し、市民サポーターをリーダーとする6チームを編成し、ワークショップを通じてサポーターの意見を反映できる環境をつくった

#### » 自主性に任せる

3回の全体ワークショップでは全体方針や進捗の確認を行い、各チームの準備作業や詳細ミーティングはチームの自主性に任せることで、全体での意識共有と全員参加の環境づくりを行った

#### » ロコミを誘発する

サポーターには年齢制限を設けず、途中参加も可能としたことで、子供から中高年層まで幅広い層のロコミを誘発した

友達を連れてくる...という連鎖によってあれよあれよと300名が集まったことに驚きました。そして、チーム内はもちろんのこと、リーダー同士の良好な関係性もかたのキャンパスの特徴。地縁を活かしながらもオープンな雰囲気をつくる絶妙なバランスとまちの規模感が成功の一因ではないかと思えます。翌年2014年に2回目を開催して以降、諸事情により中断されていましたが、2016年には「夏のキャンパス」として復活。それが叶ったのは、初回の段階で市民が主体となる仕組みづくりと意識づくりができたからではないかと思えます。



56 区民の防災意識を高める

57 官民が一緒になって考える仕組みを生み出す



小学校の校門に張られた「どうぶつものさし」 撮影:森善之

事業概要

» 浸水どうぶつものさしのデザイン

南海トラフ巨大地震が起こった際に想定される、津波の浸水深さを表示したサインのデザイン。0.5mから3.5mまでの7段階の深さを、7種類の動物の体高で表現しており、直感的に高さが把握できるようになっている。西区文化・芸術創造型ラウンドテーブルのメンバーが議論を重ね、各々のプロフェッションを活かした防災ワークショップを区内の小中学校で実施、その成果をデザインに反映させた。2016年時点で区内約100カ所の場所に掲示されている。2014年グッドデザイン賞受賞。

大阪市立九条北小学校5年生47名を対象とした防災まちあるきワークショップの実施  
2013年11月27日、29日

関連事業

▷ 6MONTHS 西区文化・芸術創造型ラウンドテーブル

実施のコツ!

» ゼロからアイデアを生み出す

区の防災担当部署で計画されていた浸水深サインを問題として取り上げ、区民に普段から感心を持ってもらえるサインのデザインとはどのようなものか、ラウンドテーブルで一から議論し直した

» 生活者としての子供の視点を重視する

生活のほとんどを区内で過ごす子供たちに防災の知識を持ってもらうことが重要との意見が出て、当初の予定になかったワークショップを企画し、区内の小中学校の5年生を対象にして、クリエイターたちが防災ワークショップを実施した

» 親しみやすいデザイン

ワークショップでわかった街の様子や子供たちの反応を踏まえ、ラウンドテーブルのメンバーであるデザイナーの増永明子氏が、動物をモチーフにしたサインをデザインした

与えられた情報を美しくデザインするだけでなく、「何をデザインすべきか」から考えるプロセスの重要性を行政に理解してもらうことが重要でした。一方、クリエイターには西区で活動する生活者の視点から、いかに街を良くしていくかを考え、直接街に触れる経験をしてもらいました。今回の成果が行政とクリエイター、そして地域が協働してまちづくりに取り組む仕組みを考えるときの、ひとつのモデルとなればと思います。



プロセス

1. ラウンドテーブル



西区を拠点に活動するクリエイターで構成されたラウンドテーブルを定期的に開催し、課題の抽出から解決に向けてのプロセスの設定、成果のあり方など、議論を重ねながら進めていった

2. まちあるきワークショップ



区内の小中学校で5年生を対象に、4つのチームに分かれて防災まちあるきを実施。建築家チームは避難ビルに指定されたマンションを訪れ、想定される浸水深さを測ってその深さを実感した

3. ワークショップの成果をまとめて発表



ワークショップの2日目はまちあるきの内容を模造紙にまとめ、みんなに発表してもらった。デザイナーチームはまちにあるサインを色毎に分類し、その意味や効果考えた

4. 西区役所を会場にしたどうぶつものさしの展示



どうぶつものさしの認知度を高めるため、転居届で多くの新区民が訪れる3月を狙い、区役所のエントランスホールで実物大のどうぶつものさしを展示した(2016年3月)



58 行政職員にデザインの意味と重要性を認識してもらう

59 クリエイターが公共的な仕事に関わる経路を生み出す



リデザインした人権啓発ポスターを水間鉄道の車内に掲示した 撮影: 栗生田兵吾

事業概要

» パブリック・リデザイン

ポスターやチラシといった広報物の制作を予定している地方自治体と、関西を拠点に活動するデザイナーやイラストレーター等を5組マッチングし、業務として実際にデザイン制作を行うプロジェクト。成果物をenocoで展示し、そのプロセスを巡ってシンポジウムを開催した。加えてeno so done!の一環として、5名のクリエイターがアドバイザーとなり、個別のデザイン相談会を行った。

[デザインワーク]

1. 鯉坂兼充 (SKKY) × 茨木市子ども政策課「子ども・若者自立支援センター周知チラシ」
2. 池田敦 (G\_GRAPHICS INC.) × 生駒市市民課「二人の門出に贈るスペシャル婚姻届」
3. タナカタツヤ × 岸和田市文化国際課「地域アートイベントの開催告知ポスター・チラシ」
4. 増永明子 (マサナガデザイン部) × 八尾市市民ふれあい課「次の世代に伝えたい! 校区まちづくり協議会 PR チラシ」
5. 山内庸資 × 貝塚市人権政策課「ご当地キャラを活用した人権週間の周知ポスター」

[展覧会]

会期: 2016年12月13日~25日

[シンポジウム「公共とデザインのこれまでとこれから」]

日時: 2016年12月17日  
参加者数: 73名

[デザイン相談会 (eno so done! として実施)]

2016年12月14日: 増永明子  
2016年12月15日: 山内庸資  
2016年12月20日: 池田敦  
2016年12月21日: タナカタツヤ  
2016年12月22日: 鯉坂兼充  
相談件数: 6件

関連事業

▷ 1.5HOURS enocoのそうだん [eno so done!] 個別相談会

実施のコツ!

» enocoがデザイン料を負担する

行政が特定のデザイナーに業務を発注する困難さを回避した

» コーディネーターを入れる

enocoのスタッフがコーディネーターとして制作に入り、双方のコミュニケーションが円滑に進むようにした

» デザインの本質を共有する

ターゲットの設定や情報の整理、広報戦略など、紙面のビジュアルだけでなく、デザインの考え方やプロセスを理解してもらうことを重視した

情報発信におけるデザインの重要性は認識されていますが、実際にデザイナーが行政の仕事に関わる機会は限られています。このような状況を打開するためには、実際に体験してもらうことが何より大切だと考えました。当初は意図していなかったのですが、クリエイターがいわゆる「業者」ではなく、行政と対等な立場に立つ状況をつくることが、良い成果を生みだすことに繋がったと思います。今回の経験を踏まえ、いくつかの自治体では、デザイナーを起用した具体的な業務を検討し始めました。



鯉坂兼充 (SKKY) × 茨木市子ども政策課  
「子ども・若者自立支援センター周知チラシ」

細かい情報を羅列するのではなく、とにかく手にとってもらうこと、そして必要になる時が訪れるまで、手元に置いてもらえるデザインを重視。手にしたときの紙質の感触にもこだわった



池田敦 (G\_GRAPHICS INC.) × 生駒市市民課  
「二人の門出に贈るスペシャル婚姻届」

デザイン婚姻届がブームのなか、単に美しいだけでなく、相手に向けて書いた手紙が3年後に送られてくという仕組みを提案。婚姻届の用紙に加えて、封筒やポスターまでトータルでデザインした



タナカタツヤ × 岸和田市文化国際課

「地域アートイベントの開催告知ポスター・チラシ」

アートイベントのテーマである「竹」を使ったアート作品をモチーフに、ポスターとフライヤーをデザイン。フライヤーはタテに開く仕様にする事で、竹の成長するイメージを込めた



増永明子 (マサナガデザイン部) × 八尾市市民ふれあい課

「次の世代に伝えたい! 校区まちづくり協議会 PR チラシ」

非常に複雑な仕組みと膨大な情報をそぎ落とし、不特定多数の「市民」ではなく、明確なターゲットを設定するようにした。八尾市の担当者とデザイナーが繰り返し議論を重ねて生まれたデザイン



山内庸資 × 貝塚市人権政策課  
「ご当地キャラを活用した人権週間の周知ポスター」

貝塚市のご当地キャラである「つげさん」を、イラストレーターがまさにリ・デザイン。人権週間のための「つげさん」が誕生した。電車の中吊り広告だけでなく、車両のヘッドマークにも展開



展覧会の会期中にシンポジウムを開催。参加クリエイターと行政職員のペアで登壇し、デザインワークの振り返り、行政の業務の中でのデザインの必要性や役割について議論した



## 増永明子

(デザイナー)

2017年1月26日 @ マスナガデザイン部

聞き手: 榎原充大(RAD) + 高岡伸一 / 高坂玲子(enoco)

### —増永さんと enoco との関わりは？

増永：「100OSAKA」にもお声がけいただきましたが、大きいのは2013年の西区ラウンドテーブルですね。ちょうど天王寺区が無報酬でデザイナーを募集していたことに対して、極端な募集方法に疑問を抱き撤回いただくよう抗議していました。その後、天王寺区長と対話を重ねていくうちに、ますます行政と市民の温度差を感じることに。「なんでこんなに距離ができてしまったのだろう」と考え始めるところに、西区ラウンドテーブルへの参加のお声がけをいただきました。

高岡：2013年に enoco が西区のプロポーザルを取りました。西区で活動しているクリエイターを集めて西区の課題を議論し、解決してもらうためのラウンドテーブルをつくりなさい、という業務だったんです。増永さんにお声がけしたのは、最初は後藤哲也さんの推薦でした。

増永：そこで最初の会議のときに「西区の課題をデザインの方で解決してほしいんです」という説明があったんですが、行政側がふわっとしたところで問題を考えている感があって。

高岡：その時に増永さんが言われたことが印象的でしたね。「デザイナーは与えられた課題に対して応えるのが仕事であって、課題はあなたたちで見つけてください」と。

増永：求められてることがあって初めて動けるわけですからね。

高岡：そこから南海トラフ巨大地震が起きた際の災害対策など、具体的に課題を探って、初年度は浸水どうぶつものさし

のデザインという方向性が固まってきました。

### —災害対策という課題は enoco と西区の間で決めていったんですか？

高岡：最初から西区としては想定していたと思います。ただ、それを前面に出さずに議論してもらおうとしていたんですけど、具体的な課題があった方が良さそうだとすることで、出てきたものだと思います。

### —その際どういうプロセスでどうぶつものさしが生まれてきたんですか？

増永：私たちの仕事は通常、まずターゲットを設定します。行政の人たちは満遍なく全員に、と考えるとしますが、一番伝えたい人を設定しないとどのようにアプローチすればいいのか分からなくなってしまおうと思うんです。

それで、ターゲットを「常に西区にいる人」と想定したとき、「それって子供じゃないか」という話になったんです。子供に意識を持ってもらって次の世代につなげてもらうということでも将来性がある。でもいきなり南海トラフ巨大地震のことを子供に話しても難しいので、小学校でワークショップを企画しました。高岡：4つのグループに分かれて、参加するクリエイターの職能に沿ったワークショップをするという。

増永：私はグラフィックデザインチームだったんですが、まちあるきをして子供たちが一番気付くものを採集していくこ

とにしました。どうぶつものさしをつくる中で、私にとってこのワークショップはすごく大きかったです。子供たちの目に一番付きやすいのはやはりキャラクターなんですよ。それに反して驚くほどに青いサインには全く目がいかない。黄色や赤は目につくのですが。

そこから、「サイレントなサイン」というか、世の中に馴染ませながらも気づいてもらうサインができた面白いなと思いました。全く気づかない色と動物の2つを合わせたどうぶつものさしをついたらどうだろう、というのはその子供たちの反応から抽出されたものなんです。

### —キャラクターだと見やすい、ということと動物になったのですか？

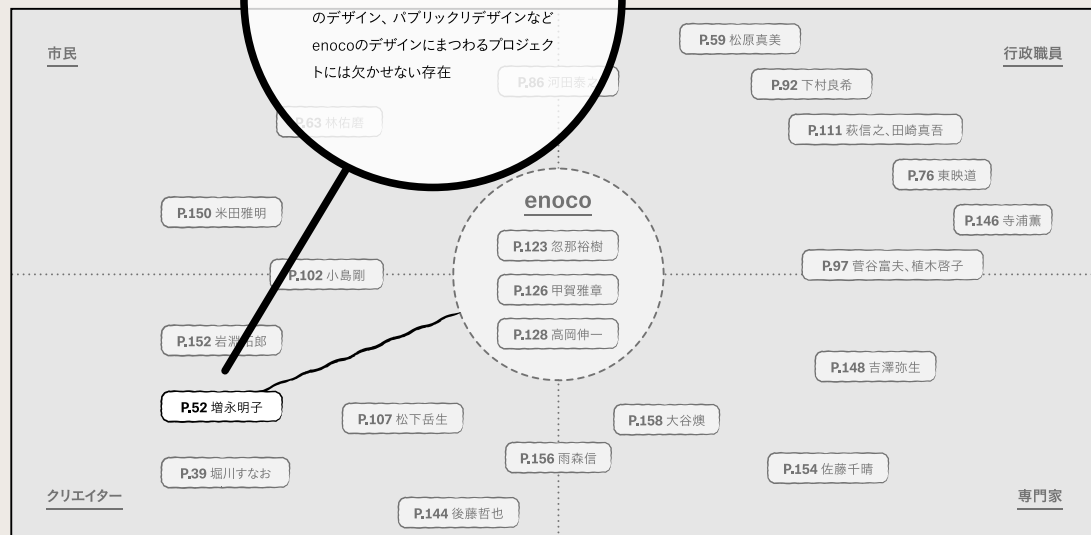
増永：そうです。こういう種類のサインには「海拔何m」と書いてあるものが多いんですけど、「だから何がどうなるのか」がわかりづらいんですよ。今回のテーマでは南海トラフ地震が来たら何m沈んでしまうのか、が具体的に分かり方がいいのではないかと。

### —2年目以降はどうでしたか？

高岡：2年目は不法駐輪問題、3年目は複数の社会課題を取り上げるというお題だったのですが、成果は1年目ほどには出ていなくて……。

増永：行政のプロジェクトは単年度ごとじゃないですか。どうぶつものさしが、区民から80%以上の認知があるのも3年継続できた結果だと思います。ただでさ

インタビューネットワーク図



え行政のプロジェクトは時間がかかることが多いのに、1年で成果を出すのは難しいと思います。

### —行政的には何かを出さなければならなくなってしまっただけですよね。

増永：行政との関わりではそれがネックですね。行政の担当の方が数年で変わってしまいがちですが、西区ラウンドテーブルの場合は西区役所の松原さんがずっと関わってくださって関係性が築けているので、それがすごく良かったですね。

### —その後、増永さんは「パブリック・リデザイン」にも関わっていますが、これはどんなスタートだったんですか？

高岡：行政からデザイナーへの直接発注が難しい状況の中で、enocoに何ができるかを考えたときに、すごくシンプルに「ウチがお金払ったらええんちゃう？」となったんですよ。それで5組の行政とクリエイターのペアを設定して。行政側は公募ですが、クリエイターはenocoの

方で直接声をかけました。

### —企画段階で増永さんと高岡さんはどんなやりとりをしたんですか？

増永：デザイナーを誰にしようか、という話をしましたね。私はイラストレーターの山内庸資くんが入っていると面白いなと思いました。この企画の理念をしっかり理解した上で、わかりにくい行政PRをイラストレーションで表してくれるのではないかと。

### —良いセッティングでしたね。

高岡：行政の人はデザインに関する一般的な用語がわからなくて、行政とはコミュニケーションがうまく取れないと言われてがちですけど、もちろんクリエイター側にも課題はあるわけです。彼らにとっても、行政と仕事をするのはこういうことかと思ってもらう、逆に教育的な意味もありましたね。

増永：ビジュアルだけでジャンプさせるよりは、相手が伝えたいことを丁寧にヒ

アリングし、問題の抽出と解決法を共有して進めることで考え方を残していける方が、お互いの勉強になるのではと思います。進めていくうちに、私と行政のそれぞれの当たり前が露呈してきて、固定観念を外して違う視点を持つことがポイントになってきました。また、「ターゲットを絞る」ということはここでも言っていました。

高岡：増永さんと組んだ八尾市市民ふれあい課は、最初の資料は多いんですけど、読んでも読んでも何にも頭に入ってきましたね。

増永：「なんでかな？」と思うと、それは向こうがこちら側も分かっているだろう、という前提で話しているからなんですね。「伝えたい！」という気持ちも分かる、でも伝わってないぞ、という。じゃあ彼女たちが伝えたいことを伝えられるようにしてあげよう、というのがまず最初のきっかけでしたね。

高岡：まずはひたすら質問していくっていうスタイルで。「これとこれは関係あるの？」など、どンドン浮き彫りになっていく感じでした。

—そういうプロセスが大事なんですね。

**増永**：いろんな部署にまたがって行われているプロジェクトなので担当の方も把握しきれいでなくて、でも私が質問すると他部署を回って聞いてくれたり、そういうことが何度かありましたね。

**高岡**：そうでしたね。そうやって何度もやりとりをしているうちに見えてきたという感じですね。でも、なかなかビジュアルのデザインがあがってこない。

**増永**：ビジュアルがまとまっていらないんですよ。「ここの素材が集まってない」とか。

**高岡**：担当の方は「こんな感じです」という絵を早く上司に出したいんだけど、増永さんは意識的に出さない（笑）。

**増永**：そこを簡単にやってしまうと「相手はやってくれるもんだ」と思われると感じたので。

—中途半端な状態で、提案を出さないわけですね。

**高岡**：挙句の果てには写真のダメ出しまでしてもらって。

**増永**：それもヘトヘトになるぐらいダメ出しして。記録じゃなくて「人に伝える」広報の視点で写真の撮り方をレクチャーしたら、改めて撮影しに行ってくださいってカットもありました。そんな前向きなエネルギーを持っている方が行政の中にいないと新しいことはできないなと感じましたね。担当者が上司との間で攻防するエネルギーはなかなか生まれません。

—そういう存在が行政の中にあることが重要ですよ。

**増永**：やっぱり同じ「つくる」なら、市民に伝わらないものをつくっても意味がない、ということがベースにあります。だからターゲットを決めて、伝えるものをつくろうと。初めての取り組みで頑張って吸収いただいたと思うので次にどうつながるかが大事ですね。

そして、主催側の取り組み方として今回の「パブリック・リデザイン」は、プロセスを重視するのか、アウトプットを重視するのか、そこは議論しないといけなかった部分ではあると思います。アウトプットも大事なんですけど、私は今回はプロセスを重視するべきだと思いました。

—八尾市の担当の方には、デザインとは何かを理解してもらえたようですね。

**増永**：そうですね。現場のヒアリングを重ねて必要な情報を精査して仕上げていく。そういう役割もデザイナーの仕事と理解いただけたと思います。

**高岡**：ただ、増永さんのような考え方のデザイナーばかりではないですよ。

**増永**：もちろんそうなんですけどね。でもこのままでは、デザイナーが誤解されたままになってしまうんじゃないかと思うんです。最初の無報酬の話も造形者、アーティストという認識があったんじゃないかなと。デザイナーがそれを言語化なりしてちゃんと伝えていかないとダメですね。これだけ世の中でデザイン、デザインと言われているけど、本当にデザ

インのことを理解している人がどれくらいいるんだろう、と。だからこそデザイナーとして行政と関わることはやるべきことと思っています。

**増永明子（デザイナー）**

ブランディングを軸にグラフィック、パッケージ、空間等を通じて本質的な解決を目指したコミュニケーションデザインを展開。教育、地域、社会に関わる展覧会、ワークショップ、講演多数。国内外のコンペティションにて多数入選・受賞。大阪芸術大学短期大学部講師、東京2020エンブレム委員会審査員。共著書「デザインのプロセス」(MdN)

## 6MONTHS

- 60 デザイン面を重視した新しい公共事業の実施体制をつくる
- 61 市民の意見を反映し、先進的なデザインコンペスキームを構築する
- 62 施設周辺エリアの歴史や特性を楽しく学ぶ
- 63 地域のキーパーソンと仲良くなる
- 64 行政とクリエイターがまちの課題に対しフラットにコミュニケーションする
- 65 クリエイターのアイデアを社会に実装する
- 66 創造性をもって社会課題の解決に取り組む人材を育成する
- 67 地域の課題を抽出し、その解決方法を提案する
- 68 参加者による継続的な活動を生み出す
- 69 新規住民と近隣の既存住民のための交流の場をつくる
- 70 工事現場の壁面を彩り、コミュニケーションツールへ変える

## 60 デザイン面を重視した新しい公共事業の実施体制をつくる

### 61 市民の意見を反映し、先進的なデザインコンペスキームを構築する



最優秀賞の建築家・岩瀬諒子による案。「だんだんばたけ」のような構造になっている

#### 事業概要

##### » 木津川遊歩空間アイデアデザインコンペ

都市魅力を高める河岸の遊歩空間を整備するため、公募のコンペによってデザインアイデアを募集した。アイデアがあれば誰でも応募できるように、応募資格要件を基本的に設けなかった。その結果全国から40件の応募があり、公開プレゼンテーション審査を経て、若手建築家の岩瀬諒子氏による「だんだんばたけでハマベをつくる—立売堀のマーケットプレイス—」が選ばれた。詳細設計は別途土木設計を受託した事業者が行うが、岩瀬氏はデザイン責任者として継続して遊歩空間整備に関わるようにした。

2012年9月28日～10月23日：コンペ募集期間

2012年11月9日～12月1日：enocoにて一次審査を通過した優秀作5作品の公開

2012年12月11日～2013年1月31日：

津波・高潮ステーションにて一次審査を通過した優秀作5作品の公開

2013年2月1日：公開プレゼンテーションの実施、岩瀬諒子氏の案を最優秀デザイン提案に決定

2013年3月2日～3月31日：enocoにて最優秀デザインプランの公開展示

#### 実施のコツ！

##### » コンペ要項に地域の想いを込める

コンペの実施に先立って地域住民を対象としたワークショップを重ね、地域の想いを公募の要件に盛り込んだ

##### » 個人での応募を可能にする

個人で活動している若手デザイナーにも門戸を広げることで、既存にはない斬新なアイデアが多数集まった

##### » 実現可能性を見据えたスキームを用意する

コンペの選考は2段階とし、一次審査を通過した5作品については、土木設計の専門家が技術やコストについて検証を行い、実現可能なアイデアへとブラッシュアップした上で、二次審査へと臨むというスキームを開発した

##### » 最優秀提案をさらに発展させる

最優秀提案者はデザインだけでなく、地域を対象としたワークショップへの参加を義務づけ、意見交換を通じて地域の想いをデザインに反映することを求めた

通常であれば行政主導で標準的な土ホインフラが整備されることを、若手建築家の斬新なアイデアが採用されることになりました。岩瀬氏は土木設計に関する知識や実績はありませんでしたが、アイデア検証委員会を設置し、土木設計施工を担う事業者と連携するスキームとしたことで、そのアイデアを具現化することができました。設計時にも地域住民とのワークショップを重ね、デザイナーと住民、そして行政が三位一体となって空間整備を進めていきました。



## 62 施設周辺エリアの歴史や特性を楽しく学ぶ

### 63 地域のキーパーソンと仲良くなる



西区には工場が集積するエリアもあるため、若手経営者(西工業会青年部)にも講師として登壇してもらった

#### 事業概要

##### » enocoクリエイティブカフェ「西区発見！」

enocoが位置する、日本で最も古い「西区」と言われる大阪市西区をenocoなりの視点から、その特性やネットワークをあぶりだすためのトークイベント。歴史から現在進行形のまちづくりまで多様なゲストを講師に招き、7回シリーズで実施した。

2013年6月6日 vol.1「西から文明開化の音がする～モダン大阪はじまりの地・川口」

ゲスト：堀田暁生(大阪歴史博物館所長)

2013年7月10日 vol.2「西でつながり、西からつながり、文化が生まれる～新町・立売堀」

ゲスト：奥山天堂(コーディネーター/「欧州食堂 millibar(ミリバール)」オーナー)

2013年8月8日 vol.3「アメ村から西へ～日限萬里子を通してみる堀江」

江弘毅(編集者・著述家/140B)

2013年9月12日 vol.4「町工場が集積する西のもののづくり拠点～九条」

ゲスト：西工業会青年部

2013年10月5日 vol.5「水都大阪、つぎの拠点は中之島の西端～中之島GATE」

ゲスト：忽那裕樹(水都大阪パートナーズプロデューサー)

2013年11月7日 vol.6「靱公園パークサイドのお洒落な街角～京町堀」

ゲスト：前波豊(デザインプロデューサー)

2013年12月11日 vol.7「クロストーク：編集者がみる、西区という「まち」

ゲスト：竹内厚(Re:s)、藤本和剛(Meets Regional)、松村貴樹(IN/SECTS)

参加人数：180名(のべ)

#### 関連事業

▷2YEARS エノコジマ・クリエイティブ・カフェ

#### 実施のコツ！

##### » ローカルを突き詰める

「府立」施設であるenocoにとっての地域を考えるにあたり「区」という単位に注目し、区をさらにエリアに分け、西区が持つ多様な側面を知る手がかりとした

##### » 旬の動きもフォローする

「今」の西区を知るために「中之島GATE」など当時最新のまちづくりの動きも取り上げた

居留地があったという歴史的なエリアから堀江や京町堀といったファッションブルなエリア、そしてものづくりがさかんな九条というエリアまで、様々な特徴がある西区で活動する人々との出会いがあり、当時まだ2年目のenocoを知っていただいていた機会となりました。西区長も毎回来場してくださり、その後の西区の魅力発信に少しお役に立つことができたのではないかと思います。





## 64 行政とクリエイターがまちの課題に対し フラットにコミュニケーションする

## 65 クリエイターのアイデアを社会に実装する



2014年度はプランターボックスを兼ね備えた自転車ラック「グリーンサイクルパーキング」をデザイン

### 事業概要

#### » 西区文化・芸術創造型ラウンドテーブル

大阪市西区役所の公募型事業プロポーザルによって、enocoの指定管理者である長谷工コミュニティ・E-DESIGNプラットフォームグループが受託した事業のひとつ。西区を拠点に活動するクリエイターによって会議体を構成し、西区のまちが抱える課題を見出し、その解決のアイデアを考案し、実際に反映するまでのプロセスをコーディネートする。初年度は防災対策の一環として事業化されていた「浸水深サイン」が取り上げられ、「どうぶつものさし」がデザインされた。

#### [2013年度]

テーマ: 防災対策  
参加クリエイター数: 7名

#### [2014年度]

テーマ: 路上駐輪対策  
参加クリエイター数: 7名

#### [2015年度]

テーマ: 若年層への「投票率アップ」「健康意識」「子育て支援」等の訴求  
参加クリエイター数: 6名

### 関連事業

▷ 3MONTHS 浸水どうぶつものさしのデザイン

### 実施のコツ!

#### » ジャンルを横断する

多様な意見やアイデアを吸い上げるため、デザイナーやアートディレクター、建築家、カフェオーナーや映画館の支配人など、様々なクリエイターで会議体を構成した

#### » 専門言語を通訳する

クリエイターには行政特有の言い回しや規制について説明し、行政にはクリエイターの専門用語や考え方を伝える通訳者の役割をenocoが担い、議論の活発化と円滑化に努めた

#### » 部門横断的な情報を集める

西区役所の担当部局に行政側のキー局を担ってもらい、区内他部署や大阪市の課題を横断的に聞き出したり、必要な情報を収集してもらうようにした

#### » アイデアにとどまらない

ラウンドテーブルで出たアイデアは出来る限り尊重し、区役所とenocoで協力しながら、実現可能な方法を模索していった

普段の問題意識や業界に固有の言語の違いなどから、ラウンドテーブルの最初の数回はクリエイターと行政の間に溝がありましたが、回数を重ねて課題が修練していくなかで、議論も活発になっていきました。クリエイターからは行政の常識を超えるアイデアが出てきますが、行政側がそれは無理だと頭から否定せず、どのように応えられるかを考えることが重要です。行政の事業は1年間の期間限定であるのに対し(実際は半年程度)、社会課題の多くは1年で解決できるような簡単なものではないなど、単年度事業としての問題も浮き彫りになりました。



プロジェクト関係者に尋ねる

## Project Related Interview 03

西区文化・芸術創造型ラウンドテーブル

### 松原真美

(西区役所 まち魅力創造課 課長)

2016年6月15日 @enoco

聞き手: 榊原充大(RAD) + 高岡伸一 / 高坂玲子(enoco)

—enocoとの最初の関わりはどんなものだったんですか？

松原: enocoがオープンした年の8月に区長が変わったんです。西区内にはクリエイターの事務所が結構あるということに区長が非常に興味を持たれ、何かできないかなど。その当時ちょうど、区長が使える予算が増額されるという状況になっていたんです。

高岡: 統計を取っているわけではないんですけど、個人で活動されている建築家が事務所を構えていることが多かったり、阿波座や靉公園のあたりにクリエイティブな仕事をしている方やデザイナーが多かったりするんです。それを区長もなんとなく感じていらっちゃって、西区の活性化につなげられないかということを考えていたらしいんですね。

松原: 区役所とクリエイティブな方々とのネットワークや接点はなかなかないので、一緒に何かお仕事をしたいと思って、直接は難しいんですね。その時に架け橋になってくれるenocoができたというのは、西区にとっても大きかったです。

高岡: 松原さんは西区役所にはどれくらい？

松原: 西区は今年で9年目です。この事業を担当するようになったのが、enocoができてからなので4年目なんです。それまでは文化活動やまちづくりに関することはあまりありませんでした。

大阪市役所の方には文化振興課があるので、そこが大阪市の文化的な事業全体をやって、地域の住民の方と協働で文化活

動をするのは区役所、というももとの分担がありました。前市長の時から、市民協働という言葉をよく使い出して、自治会を中心とした連携だけではなく、NPOや自主的にまちづくりをやっているようなグループとも一緒にやっていきましたよという動きがその頃からできてきたんですね。その中でも西区は文化的な活動は活発ではなかったので、やっぱりenocoができたことが一番大きいと思います。

高岡: 公募区長になって、どこの区も、区の独自性を出さなくてはいけないということを強く意識されていたのだと思います。

—enocoが一番最初どういう存在でしたか？

松原: 単に美術展をするところだけではない、ということは聞いていたのですが、その後視察にうかがった際にプラットフォーム形成支援事業という斬新な事業をやることを知り、今までにない施設だろうな、と感じました。

そもそも大阪府と大阪市の連携が以前はあまりなく、長く役所にいる人間としては、こうして同じ方向性でやっていることがすごく画期的だと感じます。

—連携の実現には何か理由があったんですか？

高岡: enocoはこのエリア全体の再開発事業としてスタートしているので、施設自体「まちをつくる」というプロジェク

トでしたから、地元の西区との関係は重要だろうと。西区内の文化施設としてここはあるんだけど、単なる文化施設では生き残れないので、やっぱり地域に貢献できるようなことをしていかなければいけない、という危機感があったんだと思いますね。

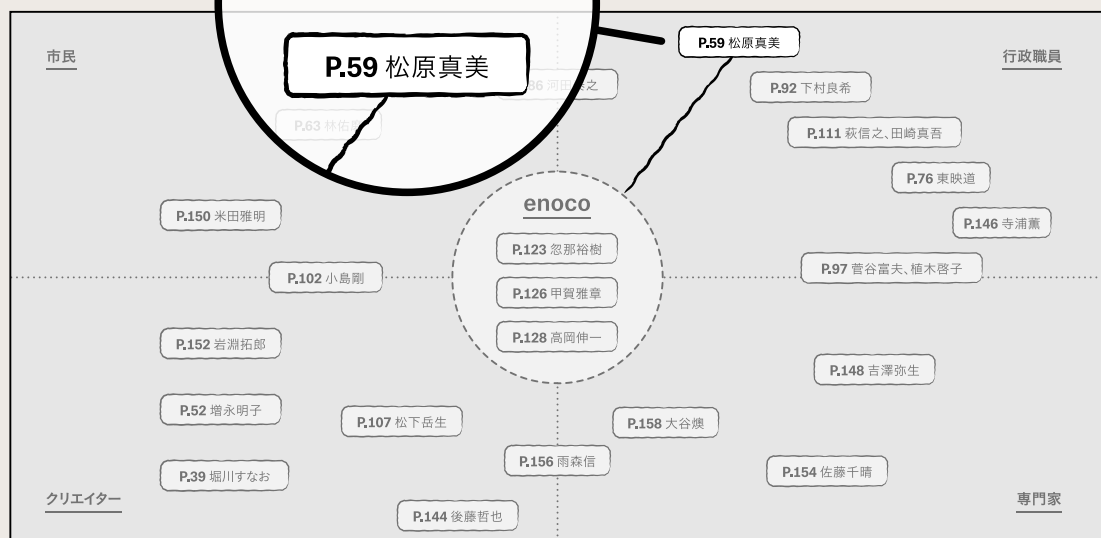
—西区ラウンドテーブルはどういうきっかけで生まれましたか？

松原: 「クリエイターの方と意見交換できる場をつくってください」「行政的な施策をデザイン的な視点で一緒に考えて欲しい」ということを条件とする、どなたでも応募していただける事業プロポーザルだったんです。何組か手を挙げていただいた結果、enocoになりました。

もともと西区役所の方で、アーティストやデザイナーといったクリエイターの方々と何かできないかという話があって、一方で区の防災担当が津波の浸水サインをつくろうとしていたのですが、それをくつつけられないか、オリジナルのものをつくることからスタートできないか、というところからだったように思います。

高岡: 西区内で活動されている、デザイナー、グラフィックデザイナー、建築家、カフェオーナー、アーティストなどに集まってもらい、月に1回ぐらいのペースで会議体を運営し、西区の課題をクリエイターの視点で見出して、それをどう解決していったらいいのかを議論していくという目論見がありました。最初は議論の中から課題を引き出していくことが大事でしたね。

インタビューネットワーク図



ただ、集まってもらったクリエイターの方々も、そういう行政との協働を経験したことがなかったんですね。デザイナーは与えられた課題に対して回答を出すのが仕事だから、課題を見つけるのは仕事ではない、という意見も出ましたね。

**松原**：それが結構衝撃だったんですが、一方で、「課題を解決する」「価値を変化させる」、そういうことをデザインと捉えていることがとても新鮮だなと思いました。

**高岡**：そうして津波浸水サイン「どうぶつものさし」のプロジェクトがはじまるんですが、実際に土木工事で高低差を測る機械を借りてきて、子供たちと一緒に測定してもらいまちの高低差を色分けしたり、高い建物を探して避難時にはどうしたらいいかを考えたり。昔から西区に住んでいる人にヒアリングに行って、かつの台風での水害の経験についてうかがうようなワークショップをクリエイターで実施しました。

**松原**：デザインするにしてもプロセスがすごく大事ということで、子供たちの意見を聞くために小学校でワークショップ

できないか、という意見が出たんです。結構調整が大変だったんですが、「良いことだ」と思ってくれた担任の先生が存在が大きくて実現することができました。区役所だけだったら無理だったと思います。

**高岡**：ワークショップで出た気付きを持って、そこからはグラフィックデザイナーが作業として進めていくことになるんです。危険を知らせるためには普通赤や黄色といった強い色を使いますが、日常に溶け込む色ながらどこか気になる、という「動物」と「ブルー」という組み合わせが出てきたんですね。

—他の区役所でもラウンドテーブルみたいなものはよくあるものなんですか？

**松原**：専門家が集まったラウンドテーブルはあまり聞きませんね。自由参加で、このお題で意見交換しませんか、という「場」を運営する区はいくつかありますが、クリエイターが集まって意見交換をしつつ、課題解決につなげて行動を起こすという仕組みは、西区独特のものになったんじゃないかな、と思いますね。

**高岡**：区役所で別の事業があった時に、enocoを通さなくてもクリエイターとの協働が実現できるようになるといいなと。それまでは持っていなかったチャンネルをenocoを介して広げていくことは、私たちとしても求めていることです。

**松原**：実際ありましたしね。市議会議員選挙の時、投票率を上げるための取組みと一緒に考えてもらえませんか。

**高岡**：選挙の投票率がすごく低く、それを区長が気にされていて、enocoを通さずに直接デザイナーに依頼をされましたね。

—課題をあらかじめ制限することなく、個々人が「私はこれが課題だと思っている」と意見を出せる場所はとても価値があると思います。

**松原**：クリエイターの皆さんがどう思われるのかなというところは気になりますね。西区に住んでいたり働いたりしている中で「こういうところが課題じゃないの？」という気付きをいろいろと出してもらい、その中で何かひとつみんなて解

決に向けてやろう、というところまで行くような仕掛けになればいいな、と今は思っていますね。

**高岡**：結果的に3年間、enocoがプロポーザルを取ってできたんですけど、一応3年間をひとくくりとして、今年度(2016年度)は事業としてはないんですね。むしろ望ましい仕組みをどうつくっていいのかを考える1年間にしようと思っています。

**松原**：1年目は「どうぶつものさし」という、目に見える形でとても良い成果ができたのですが、2年目3年目は難しかったんですね。すぐには解決できない、奥が深い課題だったので。単年度という制限もありましたし。このままで終わらせるにはもったいない積み上げができたので、良い方向に向かうような仕組みづくりを行えたらと思います。

**高岡**：2年目は不法駐輪対策でしたね。

**松原**：デザインで解決できるかという、難しい…

—もちろんデザインでできることもあると思うんですけどね。自分たちを縛る条例をどうやって考えていくかということも1つのデザインだと言えるのではないのでしょうか。

**高岡**：それでいうと、区役所の職員の方にとってもクリエイターの人たちにとってもいろいろな気づきがあったと思います。普段お互いに仕事をする機会がないので、行政の方々が使う言葉や、なぜこういう仕組みや制度になっているのかという背景を把握することができるというか。

デザイナーの増永明子さんが良いことを言ってくれたのですが、デザインを大学なりで習った人間が全員デザイナーになるわけではないわけです。その中で、学んだことをどう生かせるのかと。例えば、役所で職員になって生かすとかもできる。そういうこともデザイナーの職域として考えていかなければならない、っていうのを考えるいいチャンスになったとおっしゃっていました。

—単年度で終わってしまうという問題点に関しては、改善に向けた案や目処は立っているのでしょうか？

**松原**：区役所から事業をお願いする委託ではなくて、区役所とenocoで協定を結びながらお互いのできることを役割分担しながら、一緒に仕組みをつくっていくことはできないかと話しています。

—enocoとの連携の結果、松原さんの視点から見た成果をどう捉えていますか？

**松原**：「どうぶつものさし」が区民の方だけではなくて、様々なところからすごく良い取り組みだと注目されたことですね。ユニバーサルデザインにもなっていて、外国の方でも子供でも読み取れる。デザインの視点を加えることで、こんなに注目度が上がるということを目に感じて感じました。「うちにもどんどん貼ったら良いよ」とすごく協力的になってもらっていますし。一度、区民まつりで防災担当がアンケートを取ったんですけど、認知度も高かったんです。

**高坂**：松原さんの動きに対して区役所内での理解はあるんですか？

**松原**：担当者や自分の周りはずごく理解があります。ただ、課題を抱えている担当も自分たちの業務として考えてもらわないと難しいのですが、良い例があってなかなか浸透はしない、というのも事実で、いわゆる縦割りの弊害みたいなものもありますね。「デザイン」はそっちの部署の仕事でしょ、と。自分たちの業務にどう良い影響があるのか、ということがなかなか理解しづらいところはあるんですね。

**高岡**：一番最後のプログラムでは、カンフル剤的に、区役所のエントランスにこれを実物大で展示して、区民だけでなく、職員になかば強制的に知ってもらう機会をつくったんです。

**松原**：結構お子さんのいる若い世代の区民の方にも見ていただけましたし、その時は「今日で終わりなの？もったいない」という声も職員からあがっていましたね。

**松原真美 (西区役所 まち魅力創造課 課長)**  
1989年大阪市役所入職。天王寺区役所で保育所の入所関係事務等を担当。その後市民局指導課(現人権啓発・相談センター)で人権啓発関係業務を、市長室(現政策企画室)広報課で主にテレビ・ラジオを活用した市政情報の発信業務等を担当。2008年西区役所に異動し、広聴・広報関係業務を中心に担当。2013年4月から現職。まちづくりに関わる企画や支援業務、区の広聴・広報業務、人権啓発関係業務を所管する課を総括。



## 66 創造性をもって社会課題の解決に取り組む人材を育成する

## 67 地域の課題を抽出し、その解決方法を提案する

## 68 参加者による継続的な活動を生み出す



enoco 館長の甲賀が学長となり、授業やワークショップ時の指導を積極的に行っている

## 事業概要

## » enocoの学校

若者層を主な対象とした、クリエイティブな発想で課題の解決に取り組む半年間の人材育成講座。ソーシャルデザインとその周辺で活躍する多彩な人材を講師陣に迎え、その発想や思考方法を学びながら、チームで大阪の課題に挑戦し、リサーチを踏まえて解決方法を提案、最後は社会に向けてその成果をプレゼンする。

## 第1期「Be Creative コース2013」

2013年9月13日～2014年3月21日(全20回/定員30名)

テーマ:「大阪を変えるー水と光の首都『大阪』を国際都市にするには」

## 第2期「Be Creative コース2014」

2014年8月29日～2015年3月28日(全20回/定員30名)

テーマ:「大阪の未来を考える」

## 第3期「ソーシャルデザイン入門コース2015」

2015年8月1日～2016年3月19日(全20回/定員30名)

全体テーマを設定せず、それぞれの興味関心・問題意識からテーマを抽出

## 第4期「ソーシャルデザイン入門コース2016」

2016年7月8日～2017年3月4日(全21回/定員20名)

全体テーマを設定せず、それぞれの興味関心・問題意識からテーマを抽出  
 (「まちづくり」「アート」「はたらく」「子育て」「マナー」)

受講人数:78名(のべ)

## 実施のコツ!

## » 館長ネットワーク力を生かす

enoco 館長が校長を務め、そのネットワークを活かして魅力的な講師陣でカリキュラムを編成した

## » 複数の学習方法を混ぜる

講義だけでなく、フィールドワークとワークショップ、そしてチーム作業による演習課題など学習方法を組み合わせ、プレゼンテーションスキルの習得にも力を入れた

## » 現場の声を聞く

最後のプレゼンテーションは公開とし、社会課題に取り組む行政職員や専門家を講師に招くことで、リアルな批評と議論を実現した

## » 卒業生を大事にする

卒業生にはTAとして次期の学校運営に携ってもらい、卒業後の自主的な活動を enoco がサポートすることで、卒業後も関係を維持して enoco の輪が広がるようにした

開校当初は受講者の確保に苦労しましたが、徐々に認知が拡がり、4年目にして定員を超える応募が来るようになりました。参加者は行政職員や社会福祉・教育系、学生やフリーランスなど多彩で、夕方から始まる授業の後に、館長が受講生を率いて「夜学」へと連れ出すことで、打ち解けたなかにも真剣な議論が交わされるようになりました。卒業生のなかにはグループを結成して社会活動を始めたり、引き続き enoco を活用して eno so done! やプラットフォーム形成支援事業を業務改善に活用したりと、徐々に具体的な成果が出てきています。



プロジェクト関係者に尋ねる

## Project Related Interview 04

enocoの学校

## 林佑磨

(大阪おせっかい研究所所長 / enocoの学校2期生)

2016年9月21日 @enoco

聞き手: 榊原亮太(RAD) + 松本拓(enoco)

—enocoとはどういう接点があったんですか?

林: 水都大阪フェスのボランティアで出会った人が「enocoの学校」の1期生で、その方がこのプログラムを薦めてくれて知りました。もともと実家が名古屋の方なので、こっちに就職で来たけど知り合いは会社の同期ぐらいしかいなかったですし、もっといろんな人に出会ってみたい、ということで2014年の第2期に応募してみました。もうひとつの理由はTACT/FESTのプロデューサーの甲賀さんが学長をされていることですね。TACT/FESTで一度お会いしたことがあったんですが、「あの甲賀さんにまた会えるなら」ということで参加しました。

—名古屋から就職で大阪に来られたとのことですが、どういう業種の会社なんですか?

林: 会社は電動アシスト自転車をつくらしている会社で、事業企画という名前の部署でソーシャルメディアの分析をしていました。会社に入ったのが2013年の4月でした。

—実際に授業を受けてみてどうでしたか?

林: 「社会課題のクリエイティブな解決方法を見つけよう」をテーマに講座を受けたりワークショップをしたり、グループに分かれてアイデアをまとめたり発表し

たり、全20回のカリキュラムでした。僕たちは「おせっかいLab.」というアイデアをまとめて、甲賀さんからの指導も受けながら、なんとか最終のプレゼンテーションに間に合わせました。

—甲賀さんから指導を受けたのは、どういうところだったんですか?

林: 最初、実際に僕たちのグループが提案したのは「おせっかい電車」というアイデアでした。大阪に来る外国人観光客と、大阪の人たちとの間に摩擦があるなと思っていて、英語の分からない人にも気軽に英語が喋れるように、何かガイドを吊り下げたり貼ったり、電車の中を少し変えて英語に触れられるようにしようという企画でした。電車を半分貸し切って交流できるスペースにして、半分は普通にみんな電車に乗っていると。英語はちゃんとした文法じゃなくても伝わるんだな、というのがわかるようにというアイデアだったんですね。割と具体的な企画にできたなと思ったんです。

ただ中間発表の段階で、甲賀さんに何が「いいおせっかい」なのか考えないまま押し付けちゃうのはどうか、という疑問を投げかけられました。この提案で本当におせっかいしたい気持ちになるのか、もっと行動に訴えかけられるようなことをしたいんじゃないか、と。「おせっかいについて研究をしてからそういう企画をやるべきでしょ」と言われて。だったら研究所ということにして、そこで得られたノウハウを企画に活かしていこう、という話になりました。

そして、大阪の人はおせっかいなのに、それを活かしていないのは、英語ができないことが1つの壁だと思ったので、それを解決するための後押しとして簡単なフレーズで外国人に対応する、というアイデアを提案しました。

—おせっかい研究所のチームは何人でしたか?

林: 5人ですね。2期生は全部で3つグループがあって、「お手紙食堂」という企画をまとめたグループは印象に残ってません。同じマンションにいて交流がないために生まれる、老人の孤独死や鍵っ子の問題を解決するために、マンションの1階にご飯を食べられるスペースをつくり、そこに郵便物が届いていたら配ってあげる、というアイデアでした。

—「enocoの学校」に参加してenocoのイメージはどう変わりましたか?

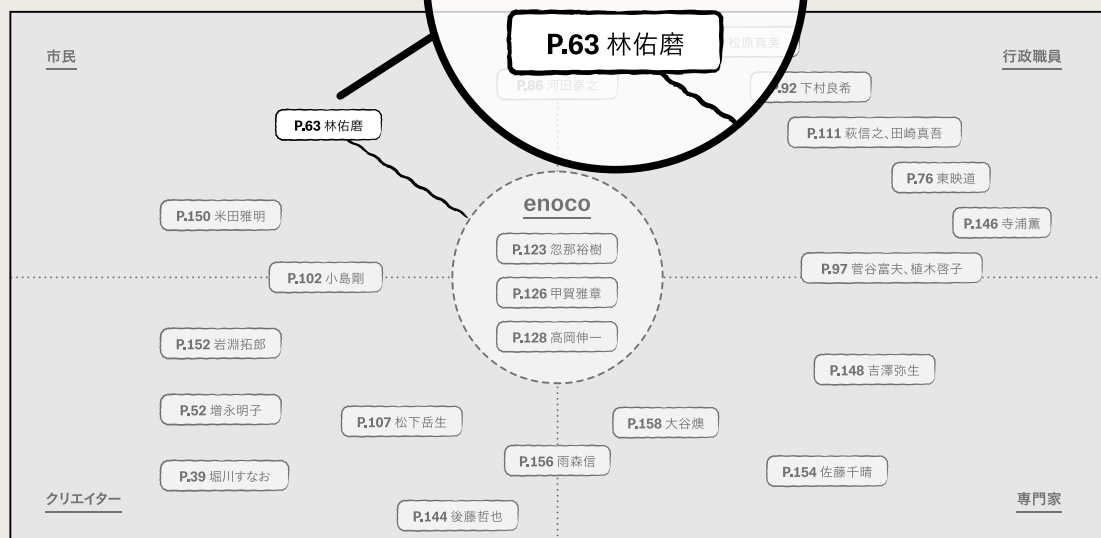
林: enocoは、水都大阪の事務所がある場所、みたいな認識でした。でも「enocoの学校」に参加して、館内のギャラリーで展覧会やイベントが行われているのがわかって印象が変わりましたね。

—ネットワークも広がりましたか?

林: 広がりました。水都大阪のボランティアでもだいたい広がったんですけど、「enocoの学校」ではさらに。おせっかい研究所の活動を事業化しようと決断してからもいろんな人と出会っていますね。



インタビューネットワーク図



英語の監修をしてくれる人、最初に「3フレーズでできる英会話」というイベントをさせてくれた縁活など。そのときに来てくれた王子商店街の人と、その企画を王子商店街で展開しようという話になったり。

—「おせっかい研究所」を法人化されたんですね？

林：いえ、実際にはまだ任意団体です。この活動をしっかり事業化したいと思って、2014年の9月に会社を辞め、2015年の3月に「大阪おせっかい研究所」として正式に立ち上げましたが、事業化にはまだまだです。

—今実際にどういことをされてるんですか？

林：今まで「3フレーズ英会話」の企画をやっていたんですけど、4回やってみて、みんな働きながらなので「ちょっとしんどいね」という話になったんです。それと英語を教えるばっかりの団体にな

りつつあったんで、それは見直して「長期的視点でやっていこう」となりました。それでこの前の6月に、文の里商店街でお弁当をみんなでつくろう、というイベントをしました。おせっかいな人が多い商店街との関わりを強めていきたいと僕は思っていて、文の里商店街の事業部長さんと一緒に進めていけたのはよかったです。他にも直近では、9月に心理学の専門家をお呼びして、おせっかいと心の関係を勉強するようなイベントを行いました。

ただ、おせっかいの定義や「どういうおせっかいがいいのか」ということがまだちゃんと言えてないんです。僕はおせっかい研究所の所長なんですけど、所長自身が「何がいいおせっかいか」が分からなくなってきてしまっている状況なんです。名刺には「相手が喜ぶおせっかいを研究する」と書いているんですが、本当にいろんな人が、いろんなおせっかいのイメージを持ってるんですよね。なので、外部からも興味があると声をかけてくれるんですけど、うちの研究所と関わってもらおうか、というところの判断が

難しいんです。「自分たちの活動は今後こうあるべきだ」というメンバー間での共有もできていない。1年経ってみて、ちょっとやばいと感じています。

メンバーもモチベーションが下がってきているかもしれませんし。結局ビジネスの方向にするか、ボランティアの方向にするか。会社勤めしながらやっているメンバーと僕みたいに会社を辞めてしまっているメンバーとは立場が違うんですよね。そして実際はお金は稼げてないわけですよ。今、結構瀬戸際です。

—enocoから新しい取り組みが生まれました、よかったです。だけじゃないですね。

林：ただ、「enocoの学校」の講師にも来られていた、「ハローライフ」という就職支援活動を行っているスマイルスタイル代表の塩山さんとお話をさせてもらって、大阪府の就労支援事業にも巻き込んでもらったんですよ。東京からの移住希望の人と一緒に商店街のツアー事業をやろう、と。今後の活動の軸にして、お金

を稼げるところまで持って行きたいんですね。

一方で、事業とは関係なく、もっといろんな人が話せる場所も欲しいなと思ってます。事業性を持ってやっていくところ、みんなでワイワイ語る場をつくるところ、その二つを進めていきたいなと思います。

—おせっかい電車のときにもあったコンセプトですね。

林：enocoの学校で講座の後に「夜学」というのをやってるんですよ。講師の方と講義終了後に飲みに行くんですけど、その時間が意外と大事だったりするんですね。講義受けてるだけだと質問ができないことも多くて。「打ち上げ」や「飲み会」じゃなくて、「夜学」と言ってしまうところが「enocoの学校」の隠れた大事なところなんじゃないかなと。

松本：古今東西、どこでも本音で語れる場はやっぱりお酒が入る場ですよ。そういうところで思いがけないつながりができたりとか、縁が生まれたりとか。どんな飲み方をしたらいいとか、誰を呼び込むとか、目的を考えるようになるんですよ。単に飲むんじゃなくて場所がツールになっていくというか。

林：今まで夜学やらなかった先生いないですね。

松本：フラットな立場で話し合いができるお酒の席も学びの時間なんですよ。人との掛け合い、やりとりから出来事が起こることもあって、クリエイティブ分野の人は、なんとなくそういうことを感

じている気がします。習慣的なことだと思うんですけど、そういうところが縁がない人から見たら「ただの打ち上げじゃないか」みたいに思われるでしょうけど。その良さを感じてもらいたいな、という思いがあるんだと思います。

林：本当にそう思います。

林佑磨（大阪おせっかい研究所 所長）

1988年愛知県生まれ。就職のため、大阪に移住して4年。2014年にenocoの主催する「enocoの学校」への参加をきっかけとして受講生の有志と「大阪おせっかい研究所」を設立。おせっかいについて研究することで、人がおせっかいになる要因を探り出し、大阪のおせっかい文化の発信と普及に注力。現在は「おせっかい診断」など、人が気軽におせっかいできるようになる仕掛けづくりを検討中。

## 69 新規住民と近隣の既存住民のための交流の場をつくる

## 70 工事現場の壁面を彩り、コミュニケーションツールへ変える



マグネットシートを動かしてコマ撮りアニメを撮影。参加した子どもたちにも出演してもらった

### 事業概要

#### » DECO×enoco 壁画プロジェクト

enoco 北側のタワーマンションの建設工事にともなって設置されていた仮設塀に、東隣のマンション住民などとともにカラフルに絵付けされた磁石シートを使って、動物や植物、建物や道や川など「enoco 島という(想像の)まち」の壁画を描くプロジェクト。磁石シートを動かしてコマ撮りアニメをつくる、アニメにあわせた物語と音楽をつくるという数回のワークショップを経て、最後に壁画やそれにつながる創作物をお披露目する地域住民のためのお祭りを開催した。

2013年12月15日 vol.1「ふしぎな enoco 島をつくろう！」  
 2014年1月12日 vol.2「ふしぎな enoco 島のアニメーションをつくろう！」  
 2014年4月20日 vol.3「ふしぎな enoco 島のものがたりと音楽をつくろう！」  
 2014年8月2日 vol.4「ふしぎな江之子島のまちをつくって、お祭をひらこう。」  
 参加人数:97名(のべ)

アーティスト:井上信太(美術作家、アートディレクター)、海上梓(アニメーション作家)、  
 小島剛(音楽家)、井上サトシ(音楽家)  
 主催:enoco、DECO(江之子島A&Lマネジメント)

### 関連事業

▷4YEARS 江之子島まちづくり事業との協働

### 実施のコツ!

#### » 磁石シートで遊びを生み出す

仮設塀の性質を活かし磁石シートを使って、住民や通行人がそれを動かして遊ぶなど多様な関わり方を促した。また、原状復旧も容易にできるように考慮した

#### » 徐々に盛り上げる

壁画から派生するプログラム(アニメ、音楽など)をつくり、次第にまちの活動が増えていく期待感を醸成した

#### » 交流の機会を確保する

参加者を広く募り、新規住民がマンション内住民だけでなく近隣住民などとも交流できる機会とした

真っ白な万能塀に何か出来ないかと思い始めたプロジェクトです。タワーマンションも竣工し、壁画はすでに撤去されてしまいましたし、参加してくれた子供たちも成長し、まちの様子はこの数年で随分変わりましたが、この時制作したアニメーションがまちの一つの記録として残っていればと思います。



## 1YEAR

- 71 アート・デザイン実践者とのネットワークをつくる
- 72 施設立ち上げ期の認知度向上・来館促進を行う
- 73 周辺地域と顔の見える関係をつくる
- 74 学生にアートの実践現場を提供し、社会との接点をつくる
- 75 将来的に美術教育や  
アートマネジメントを担う人材を育成する
- 76 キャラクターを通じて  
次世代を担う子供たちにも事業内容を伝える
- 77 ダム認知度向上や環境教育に活用できる広報ツールをつくる
- 78 市民による公共空間の自主的な運営の仕組みをつくる
- 79 空間整備事業を通じて  
市民側からのコミュニティづくりを促進する

## 71 アート・デザイン実践者とのネットワークをつくる

## 72 施設立ち上げ期の認知度向上・来館促進を行う



カフェ横スペースを活用し、カフェのドリンクを飲みながら聴くことができるようにした

## 事業概要

## » エノコジマ・クリエイティブ・カフェ

(2013年度より「enocoクリエイティブカフェ」)

アートやデザインによる地域づくりや課題解決等、enocoの事業内容や目的に近い分野で関西を中心に活動するゲストを招いてのトークイベント。2年目からは「西区発見!」というシリーズを展開した。

2012度~2013年度  
計22回開催

## 【開催例(一部)】

2012年6月4日「都市とアート・プロジェクト~実践の現場から」  
ゲスト:林泰子(アートマネージャー)、吉澤弥生(社会学者/NPO法人[recip]代表理事)

2012年8月10日「まなざしのデザインから創造性の共有社会へ」  
ゲスト:ハナムラチカヒロ(ランドスケープアーティスト)

2013年1月18日「大阪と瀬戸内文化圏—瀬戸内国際芸術祭2013」  
ゲスト:北川フラム(瀬戸内国際芸術祭総合ディレクター)

2013年3月2日「万城目学と語る大阪近代建築の魅力」  
ゲスト:万城目学(作家)

参加人数:615名(のべ)

## 関連事業

▷ 6MONTHS 西区発見!

## 実施のコツ!

## » 今後のつながりを意識する

ジャンルを限定せず、大阪を中心に活発に活動しているクリエイターや協働の可能性のある実践者などをゲストに招く

## » 気軽な雰囲気をつくる

平日の夜を中心に、仕事帰り等にふらっと立ち寄ってもらえるようにする

クリエイターにも府民の方にも、とにかく一度来てもらうということが課題だった立ち上げ期。トークイベントは気軽に足を運びやすいコンテンツのひとつですので、初動期に集中して開催しました。「今後enocoとして何か連携・協働できる人や動きを拾う・つながる」という観点からゲストをお招きしたのですが、1年目はとにかく多様に、2年目はテーマを絞って、と趣向を変えて実施したのも、ネットワークが広がってよかったように思います。



## 73 周辺地域と顔の見える関係をつくる



ラジオ型ブースをマンション前に設置し、顔の見える場所で放送を行っている

## 事業概要

## » えのこじま凸凹ラジオ

enocoと隣接するマンションエリア(江之子島2丁目エリア)でのみ聴くことのできるローカルなミニFM放送局。周波数は89.2MHz。インターネット等での放送ではなく、実際にenoco北側タワーマンションエントランス前から電波を飛ばして放送しており、ラジオ受信機でのみ聴くことができる(一部の放送は後日Webサイトにて発信)。DJはenocoスタッフやenocoサポーターが務めている。ラジオ自体は顔の見えないメディアだが、狭い範囲にしか電波が届かないため、聴くためにはenoco周辺に來なければいけないという逆説的な状況を生み出すことで、ラジオを通して人が集うきっかけづくりを行っている。テーマは「みんなでつかう、みんなのラジオ」とし、住民や近隣施設などによる番組放送も可能としている。

2015年11月23日開局

2016年6月~本放送開始

共催:江之子島A&Lマネジメント(DECOBOCO)

協力:毛原大樹(ラジオ・アーティスト)

## 【提供番組】

今月のenoco(週1回放送) DJ:enocoスタッフ

ランチタイムラジオ(月1回放送)DJ:enocoスタッフ

オヤラジオ!(月1回放送)DJ:enoco & DECOBOCOスタッフ

夢をかなえる おかねのはなし(月2回放送)DJ:ねこまね、メトロン(enocoサポーター)

チョビヒゲさんのアートな散歩、(月1回放送)DJ:チョビヒゲ(enocoサポーター)

ぼうさいラジオ(不定期放送)DJ:大西一輝(ゲストDJ:津波・高潮ステーション)

今月のDECOBOCO(不定期放送)DJ:DECOBOCOスタッフ

DOUBLE GOOD RADIO(不定期放送)DJ:迎口芳典、水内義人

他、特別放送番組あり

## 関連事業

▷ 4YEARS 江之子島まちづくり事業との連携

▷ 1DAY えのこdeマルシェ

▷ 1DAY えのこじま文化祭

## 実施のコツ!

## » ローテクであることを大切にする

インターネット配信ではなく、実際に電波を飛ばして発信する

## » アートと生活情報のバランスを保つ

アート情報だけでなく、生活に密着した情報(お金の話、防災の話など)も発信する

## » 自主制作番組を持つ

誰でもDJやディレクターになることができる仕組みとし、enocoサポーターによる自主制作番組も放送している

## » 災害への意識を持つ

ラジオは災害時に有効なメディアであるため、隣接施設である「津波・高潮センター」による番組も放送している

放送しながらまちを見守るというスタンスでゆるやかに運営しています。ラジオブースが目立つため、放送していると住民の方にも声をかけていただけるようになりました。顔の見えるメディアとして、江之子島のまちの人々にこれからもっと活用していただけたらと思います。





## 74 学生にアートの実践現場を提供し、社会との接点をつくる

## 75 将来的に美術教育やアートマネジメントを担う人材を育成する



会期中は学生が会場に待機。地域の子供がふらりと遊びにくる姿がよく見られた

### 事業概要

#### » 大阪成蹊大学×enoco連携アートプロジェクト

大阪成蹊大学芸術学部表現教育コースの学生が、enocoスタッフのサポートを受けながらenocoの展示室を活用する企画を立て、実際に展示するまでを体験するプログラム。美術を通じたコミュニケーション力の養成に重点を置き、学校や地域社会における美術の実践方法を学ぶ「表現教育コース」の授業の一環として実施。教員とも連携を取りながら公立施設という開かれた場所でのプログラム実践を通して学生が社会と美術の接点を考える機会をつくる。

2015年度～2016年度

2015年2月9日～14日 エノコどここの?「アートのこども!!」展

2016年7月12～17日

「かならず いつも そばに ちかくに ここにある でも期間がある たくさんの個」展

2017年1月10～15日「ひょうきょう eno 国」展

主催：大阪成蹊大学芸術学部、enoco

### 実施のコツ!

#### » 学生のアイデアを活かす

enocoは場所の指定と実務的なアドバイスはするが、企画自体は学生のアイデアを活かすことで学生の主体性と責任感を高める

#### » いつも同じ会場を活用する

学生間(上級生/下級生)で情報やノウハウが蓄積されるようにする

#### » 大学の授業の一環にする

大学と協定書を結び、授業の一環として設定することで学生が集中して取り組むことのできる環境をつくる

アーティストでもなく美術の先生でもない、“セミプロ”とも言える学生という存在は、市民の方にとっては親しみやすい存在のようで、美術や文化施設と人をつなぐ良き媒介者となってくれました。また柔軟なアイデアとこだわりで普段とは異なる展示室の使いこなしを見せてくれることもあり、施設活用の良いモデルケースづくりにも役立っています。実社会での実践教育の現場を求めている大学と、市民に開かれた場となり様々な人々の創造性や参加度を高めていくことを目指す公立施設の連携は今後さらに強化が必要だと考えています。



## 76 キャラクターを通じて次世代を担う子供たちにも事業内容を伝える

## 77 ダム認知度向上や環境教育に活用できる広報ツールをつくる



絵本の表紙。読み聞かせなどを通して子供たちにダムや地域のことを知ってもらうツールとした

### 事業概要

#### » 安威川地域マスコットキャラクターの展開

安威川ダム完成までの間に、市民、特に児童や青少年がダムや周辺エリアに親しみを持つことができるようにダムのマスコットキャラクターを制作した。キャラクターは一般に公募し、197点の応募の中から最優秀作品を決定。安威川流域に生息するオオサンショウウオをモチーフにした架空の生きもの「オーサン」というキャラクターが選ばれた。その後、「オーサン」がより親しみを持って市民に受け入れられるように、参加型のプロセスを経て「絵本づくり」が行われた。具体的には、大学生とともに安威川流域の自然環境とダム建設の関係を防災の視点からリサーチし、その内容を元にディスカッションやワークショップを重ね、ストーリーを組み立て、小学校やフェスティバルなどで市民に「オーサン」のイラストを描いてもらい、それらを組み合わせることで絵本をつくった。

2013年度～2015年度

2013年9月～2014年1月：マスコットキャラクター公募

2014年4月8日 入賞作品表彰式

2014年度 大学生によるリサーチ等

2015年度 絵本づくりワークショップの実施、絵本の完成

### 関連事業

▷ 4YEARS 安威川ダム周辺整備基本構想(案)作成事業

▷ 4YEARS 安威川ダムファンづくり会

▷ 1DAY 安威川フェスティバル

### 実施のコツ!

#### » 応募のための下準備を行う

公募を行う前に学校などでワークショップを行い、ターゲットとなる子供たちからの応募を促した

#### » 学びのツールをつくる

子供たちがキャラクターを通じて環境教育を学べるツール(絵本)とした

#### » 絵本づくりを学びの入り口にする

地域の子供たちが参加して絵本づくりに関わるとともに、自然環境や地域社会について学ぶ機会を提供した

#### » キャラクターが成長する

地域とともに、成長し変化するキャラクターブランドの構築を目指した

キャラクターづくりのプロセスから地域の子供たちに関わってもらい、子供たちとともに成長し、変化するイメージをもってキャラクターをつくっていきました。キャラクターが登場する絵本をつくったことで、この先、読み聞かせなどを通して大阪府域全体へ広げることができる教育ツールとなったと思います。



78 市民による公共空間の自主的な運営の仕組みをつくる

79 空間整備事業を通じて  
市民側からのコミュニティづくりを促進する



使いこなしの一事例「あおぞらヨガ」。今後、広場も含めた空間の活用を展開していく

事業概要

» 木津川遊歩道空間整備事業における制度設計補助

現地説明会や住民説明会を開催し、木津川遊歩道の供用開始に向け、地域で活動をしている人、緑に関する活動をしている人、クリエイター等の地域人材の発掘をさらに促進した。地域人材のマッチング、交流のプラットフォームとして、木津川遊歩道の維持管理・利活用のための任意団体『木津川遊歩道を楽しむ会』を発足した。当会では、花壇の植栽への散水といった維持管理のほか、地域住民同士や利用者との交流、ヨガなど利活用のアイデアを実現していく。

- 2015年5月28日 第1回 現地説明会  
参加者：20名
- 2015年12月19日 第2回 現地説明会  
参加者：37名
- 2016年3月19日 オープニングセレモニー  
参加者：87名

2016年4月1日『木津川遊歩道を楽しむ会』発足

構成団体(2017年3月現在)：広教連合振興町会、特定非営利活動法人トイボックス、大阪府立江之子島文化芸術創造センター

関連事業

- ▷ 5YEARS 木津川遊歩道空間整備
- ▷ 6MONTHS 木津川遊歩道空間アイデアデザインコンペ
- ▷ 3MONTHS 木津川遊歩道空間整備計画ワークショップ

実施のコツ！

» モデルケースを意識する

公共工事に伴う市民参加について実施検討し、他地域にも応用が可能なモデルケースとして手法をまとめ、発信する

» まちづくりとして位置付ける

地域住民とクリエイターやNPO等の協働によるまちづくりを進めるための団体を発足した

» 管理運営を同時に考える

今後の管理運営の体制構築検討をさらに進める

近隣の自治会の理事会へ意欲的に参加し、工事の進捗報告や疑問点について模型等を用いて説明を行い、様々な課題について話し合うことでお互いが納得しながら事業を進めることが出来ました。また、現地説明会や住民説明会を開催したことにより、近隣住民を始めとする様々な方たちから意見を頂くことが出来ました。今後は、『木津川遊歩道を楽しむ会』を中心に、木津川遊歩道の環境保全と緑化推進、及び地域住民や利用者同士の交流促進を行い、地域全体の活性化を図っていきます。



3YEARS

- 80 親と子どもの新しい関係性や対話を引き出す
- 81 地域課題の解決の糸口を得る
- 82 文化芸術に関する都市施策の相談窓口として機能する
- 83 施設の認知度をアップし、ブランド力を強化する
- 84 地域のクリエイターとのネットワークを発展させる

## 80 親と子どもの新しい関係性や対話を引き出す



子どもがつくった人形のキャラクターを親が子どもにヒアリングして考え、お披露目。親の主体性や創造性も引き出す

### 事業概要

#### » タチヨナ×enoco企画「オヤトコエノコ」

親と子どもが互いに関わりながら作品をつくりあげる親子ワークショップシリーズ「オヤトコエノコ」。アートを軸にしたワークショップを通して、親と子がそれぞれ一人一人として協働作業に取り組み、互いの考えや、日常生活ではなかなか見えない側面を見出すきっかけづくりを行った。2015年度、2016年度には親子で参加するワークショップを実施し、2017年度には特別編として、子どもが普段の生活の中で感じたり考えたりしていることを引き出し、そこから親世代を対象とするワークショップを子どもたちだけで企画するというワークショップを開催した。

2015年1月31日「モシモ人形」を作ろう!〜ワタシのボクの分身人形〜

講師: 菊川法子(立体イラストレーター)

2015年2月28日「まる △さんかく □しかく の絵本づくり」

講師: 土居安子(一般財団法人大阪国際児童文学振興財団 主任専門員)

2015年3月7日「カオ!カオ!、(^o^)/写真大絵巻!」

講師: 池田明子(美術家)

2016年1月31日「わが家の…初級編/わが家の曲を作ろう!」

講師: かつふじたまこ(音楽家)

2016年2月28日「わが家の…中級編/ワガヤ体操を作ろう!」

講師: キスヒサタカ(体操の師匠)

2016年3月27日「わが家の…上級編/わが家の…を作ろう!」

講師: S!Q(音楽ユニット)

### 【特別編】

2017年2月4日、2月18日、3月4日「ヒミツの子ども企画会議」

講師: 小川百合(プランナー)

### 関連事業

▷ 5YEARS タチヨナ×enoco

### 実施のコツ!

#### » 親と子をあえて引き離す

親チームと子どもチームに分かれて作業をする時間をつくることで、親が創作を主導することなく互いを客観視する機会をつくった

#### » 親同士の交流を重視する

子どもの発達段階にあわせた複数のプログラムを展開し、同年代の子どもを持つ親同士が交流できる機会をつくった

親子で参加できるワークショップは親が主導して創作を行うという状況がしばしば起こりがちです。このワークショップでは、親と子が別々に作業する時間を持つことにより、子どもからは親の普段とは違う様子を見ることができて面白かったという声や、親は子どもの成長や大人にはない柔軟な発想力を実感できたという声が多数寄せられました。お互いの「こんなところがあるんだ」という発見が、日常の親子関係の中に新しい視点をもたらすことになっていけば、と思います。



## 81 地域課題の解決の糸口を得る

## 82 文化芸術に関する都市施策の相談窓口として機能する



個別相談会はクロードで行い、じっくりと相談できる環境をつくった

### 事業概要

#### » enocoのそうだん[eno so done!]

enocoでは2014年度から、「創造性による都市魅力の向上ならびに都市課題の解決を実現するための拠点」となることを主たる目的に掲げ、中心的事業としてこのeno so done!を実施。アートやデザインのクリエイティビティを活用した行政課題の解決や、ブランディング、シティプロモーションといった都市施策のトレンドに取り組む市町村職員等にとって、enocoが身近な相談窓口となることを目指し、効果的なアドバイスや気付きを提供するプログラムを重ねて実施した。

2014年度 個別相談会(15回開催)

アドバイザー(順不同): 甲賀雅章、大南信也、忽那裕樹、塩山諒、渡辺豊博、茶谷幸治、河井孝仁、日下慶太、中島淳、醍醐孝典、藤原明

2015年度 フォーラム(3回開催)

講師(順不同): 松下啓一、河井孝仁、中島淳、北澤潤、曾我部昌史、廣野研一、甲賀雅章、忽那裕樹

2016年度 相談会(1回開催)

アドバイザー(順不同): 河上友信、甲賀雅章、忽那裕樹

2016年度 大相談会(1回開催)

アドバイザー: 古田菜穂子、影山裕樹、河上友信、甲賀雅章

2016年度 デザイン相談会(1回開催)

アドバイザー: 鯉坂兼充、池田敦、タナカタツヤ、増永明子、山内庸貴

上記の他、随時相談を受け付けている。随時の個別相談については、基本的にenocoスタッフがアドバイザーとなり、必要に応じて専門家やクリエイターを紹介している。(2015年度、2016年度で24件)

### 関連事業

▷ 1.5HOURS enocoのそうだん[eno so done!]個別相談会

▷ 3HOURS enocoのそうだん[eno so done!]フォーラム

### 実施のコツ!

#### » 実務を重視

知識の学習で終わらない、実務に即した個別の事情に役立つ情報が得られることを重視した

#### » 相談だけで終わらない

相談に来て終わりではなく、その後も継続的にenocoがサポートできることを強調した

#### » 成果を共有する

課題やそれに対する専門家のアドバイスをenocoに蓄積して、共有できるようにすることを考えた

様々な事業を行っているenocoは、外部から「何をやっているのかわからない」と言われ、大阪府の文化行政の基本姿勢を明確に打ち出す意味でも、「文化・芸術による社会課題の解決」を前面に打ち出して、事業にメリハリを付けるようにしました。その効果か、2015年くらいから、普段からenocoに様々な相談が持ちかけられるようになってきています。





## 東映道

(河内長野市 総合政策部 都市魅力戦略課 政策戦略係長)

### —東さんと enoco との関わりは？

**東**：2014年度に eno so done! で、シティプロモーションの専門家である東海大学の河井孝仁先生がアドバイザーに来られたときに、相談にきたのが一番最初でした。ちょうどシティプロモーションに悩んでいたところだったので、これだ！と。クリエイティブな力が試されるのに、行政としてそういうノウハウが非常に少ないんです。とても勉強になりました。実はそれ以降、河内長野市でプロモーションをやっている取り組みの大部分が、その時に聞かせてもらった話がベースになっています。

**高岡**：当時河井先生のことはご存知でした？

**東**：全然知らなかったです。

### —東さんは河井先生のお話のどこに面白さを感じたのでしょうか？

**東**：私、都市魅力戦略課という部署の政策戦略係長という肩書きなんですけど、そこにはプロモーションや外向けの発信に力をいれていこうという市の思いがあるんです。でも単に目立てばいい、単に発信すればいいではダメだよねというのが私たちの思いだったので、それで悩んでいたんです。その悩みと河合先生の話とちょうどはまったんですよね。河内長野市は「奥河内」と銘打って、大手広告代理店の力を借りておしゃれな観光プロモーションをやっています。モデルを活用したイメージはとても評価が高く、私も自慢なのですが、でもどれだけきれ

いに見せても市民がついていってない、現実的な観光客の集客にはならない、という意見があって。

### —イメージだけになってしまっている。

**東**：そうですね。それに対して、河井先生が言ってくださった「地域参画総量」という考え方に納得できたんです。つまり街の熱量みたいなもの。それは人口を増やすとか観光客を増やすとか、人数を増やすことで地域のその活動量を増やすのではなく、人数が少なくてもひとりひとりの活動量が增大していけば、街としては活性化していくんじゃないかという考え方です。河内長野市を気に入ってくれている人たちの関わりを増やしていくプロモーションをしないとだめだという話ですね。**高岡**：僕の印象では河井先生のアドバイスがあってからの東さんの動きがめちゃくちゃ早かったんですけど、その後の具体的な動きとしてはどういう展開をしていたのでしょうか？

**東**：その後、市民の方々と一緒に、約1年をかけて「都市ブランド検討会議」を開催し、河内長野市のブランドメッセージを考え、この街を愛するネットワークを広げましょうという取り組みを進めました。河井先生には講師として来ていただきました。そしてパンフレットをつくりました。

### —ワークショップを行った、という感じですか？

**東**：やってることはワークショップです。

広報に載せたりインターネットで情報を出したり。すると興味に興味を呼んで参加者が集まりました。学生ボランティア募集、というかたちで近隣の大学にチラシを撒いたので、若い人たちが来てくれました。テーマが若い人たちにも共感してもらえていたのかなと思います。今でも結構来てくれるんです。実際は「就職活動でこういうことをした経験がほしい」という学生も多いですが。

**高岡**：社会活動をやりました、という。

**東**：そこで、今年はインターンという位置づけにしてみましたよ。そしたら十数人来てくれて大変ではあるのですが、せっかくなので「こういうことができた」という経験を積んでもらいたいと思っています。学生の発想は面白いんですよ。当時来てくれた子たちがちょうど来週イベントをするんですよ。河内長野市のキャラクターでモックルというのがいるんですが、その人形をつくるというイベントです。

**高岡**：それは河内長野市が主催という人たち？

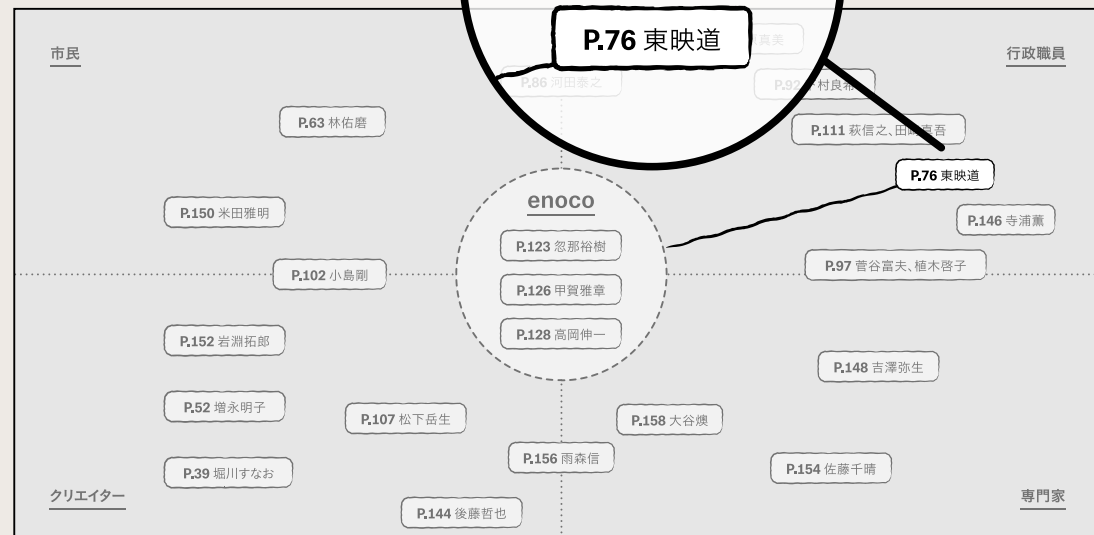
**東**：そうですね。意外とモックル好きな人が関心を持ってくれるんです。ゆるキャラグランプリ何位！というのが重視されて、そのためにどれだけ「バズらす」という話も多いんですけど、モックルは河内長野が好きだと言ってくれる人のシンボル。私は単なる順位じゃなくて、好きだと思ってもらうことが大事だと思っています。

### —都市ブランド検討会議は行政の中でどのような立ち位置なんですか？

2016年8月22日 @enoco

聞き手: 榎原充大 (RAD) + 高岡伸一 / 高坂玲子 (enoco)

インタビューネットワーク図



**東**：当初立ち上げたときは一般的な講座でした。講義形式として参加者を募集しました。立ち上げた1回目、河井先生に講演に来てもらったときに「参加人数が多い」って言われたんですよ。30人くらい参加してくれたんですが、「5人でいい」と。ちいさな輪から広がっていかないとけない、と言われました。

**高岡**：東さんがファシリテーターみたいな役周りをずっとされていたのですか？

**東**：私自身もしてましたし、他にも講師を依頼しました。他にゲストとして『月刊島民』を手がけている編集組織140Bの中島敦社長も来てくれました。当時メッセージをみんなで考えていて集約するのにすごく苦労してたんですけど、中島社長の話がみんなの心にふっと落ちたんですよ。メッセージがある程度まとまったんです。

**高岡**：そうやって市民の人に集まってもらって会議をしていた一方で、行政内部、たとえば都市魅力戦略課内の職員の人たちの意識の共有はできていましたか？

**東**：うーん、庁内自体はまだまだ。縦割りの仕事からは逃れられない。たとえば

観光PRの部署が別にあってそこと連携しながら進める必要があるんですが、現実には難しいです。縦割り庁内の連携は課題ですが、解決はなかなかできません。今の都市魅力戦略課は広報的なポジションで、観光はもっとイベント的なことをしています。どこの市町村でもそんな感じじゃないでしょうか。意見交換や協力体制はもちろん取れるんですけど、がちり一緒になれるかと言われたら、組織の関係があってそう簡単にはできないですね。

**高岡**：一方で東さんは役所内部に留まらず、学会も立ち上げられているんですよね。

**東**：eno so done! に最初に来た時の一番最後の話題が、公共コミュニケーション学会という河井先生が主催されている学会の話だったんです。一度自分たちが考えているようなことを学会で発表してみたらどうか、と提案いただいたので、学会でいろいろと意見交換させてもらいました。ただ、首都圏ですので関西でやる機会がなかなかない。だから関西チームを立ち上げてくれないか、と河井先生に

請われて関西支部を立ち上げました。今は公共コミュニケーション学会関西支部として、年に何回か、意見交換やシンポジウムの機会を持っています。それが、eno so done! スペシャルの時の発表につながるんです。

**高岡**：2015年度ですよ。そのときの eno so done! は個別相談ではなく、フォーラム形式にして、公共コミュニケーション学会関西支部と一緒にやりましょう、という話になりましたね。メンバーの方々に基調講演してもらいました。**高坂**：めっちゃ動き早いですよね。**高岡**：行政の方で、東さんみたいにバババツと動く人はそんなにいないと思います。

**東**：たまたまうまく進んだだけです。いろいろと失敗や悩みは多いです。

### —課題だなど思われているものはなんですか？

**東**：どうやって市民の愛着を増やしていったらいいのかが、ですね。最初はコアな人が集まって、コアな人たち

## 83 施設の認知度をアップし、ブランド力を強化する

## 84 地域のクリエイターとのネットワークを発展させる

の熱量はとても高い。それを1から2、そして3や4にしていく展開のところで、さてどうしようかと課題に感じています。私の中ではやっぱりコンテンツ。みんなと一緒に何かをつくっていく、そしてそれをしっかり見せていくことが鍵かなと思っています。

**高岡**：学会に関わっている地方自治体、職員の人の間でのシティプロモーションにおける課題というのは、皆さんある程度共通しているものなんですか？

**東**：関西近郊に限定すると、住んでもらう人をどのように増やすか、ですね。

**高坂**：移住・定住促進ということですね。

**東**：はい。互いに奪い合いをしているようなじゃ、関西全体で大きく変わらない。プロモーションにしても、例えば子供の医療費は何歳まで無料とか、引っ越ししたらいくらもらえとかを打ち出しても、比較対象になるだけで、それでは将来がないと思っています。それは河井先生もおっしゃっているんです。比較だけで来てくれた人はまた他に有利なところがあったら出ていくだけ。そういう層に向けてプロモーションをするのはあまりよくないよね、という意見はその通りだなと。

**一市内の市民に熱量をあげてもらい取り組みと、外から来てもらうという2つの側面はどういう関連性があるのでしょうか。**

**東**：自分たちのまちに愛着をもっている取り組み自体が、外からくる人への求心力になるんじゃないかと思っています。それを拡張するにあたって、そういう良さを見せるようなコンテンツがあればいい

のかなと。そのときに、暮らしと遊びが一緒になって、ここが楽しいというような雰囲気をつくっていければいいんじゃないかなと思っています。

**高岡**：ちなみに、河内長野市に限らずこの行政でも同じ悩みでしょうけど、もし東さんがこの年度末で異動になってしまったらどうしますか？

**東**：全然気にしていないというか、路線が変わっても私はいいと思います。次の担当者がやりたいようにやっていけばいいと思います。個人的には、公共コミュニケーション学会関西支部の立場として関わり続けることもできますし、自分がやりたいことは自分でやればいいですから。だから私が異動したら、また違う人が違う風を吹かせてくれる、とずっと言っています。もし継続を重視するなら行政計画にするべきです。そういう働きかけはすごくいいと思います。私の方も今年の目標は、そういう推進プランをつくることでもあります。

**東映道(河内長野市 都市魅力戦略課 政策戦略係長)**  
河内長野市に生まれ育って40数年、小中学生になる一男一女を育てながら、地域にどっぷりと根づく市役所職員兼消防団員。1997年に河内長野市役所に入庁。生涯学習推進室、商工観光課などを経て、現在は市の宣伝マン、広報マンとして、人・自然・歴史・文化が輝く河内長野市の魅力を多くの同志と共に、知恵を出し合いながら、日々、地域の魅力を発掘、発信し、愛着づくり、共感を広げるプロモーションに励む。



これまでの enoco ニュースレター。「enoco」のロゴ使用も必須ではない

## 事業概要

## » enoco ニュースレター

enocoの広報誌として、2014年度から年4回(季刊)発行している。多岐に渡るenocoの事業や施設について広く知ってもらうことを目的に創刊した。コンテンツは、特集4ページ/今後開催される展覧会やイベント情報/展覧会・プログラムレビュー/イベントレポート/コラム/江之子島まちづくり事業の告知・レポートページ/カフェトーク/スタッフのつぶやきなど(2016年度現在)。非公式キャラクター「エノケン」はこのニュースレターから生まれた。

2014年度～継続中

年4回発行(1月/4月/7月/10月)

編集: enoco 企画部門

アートディレクション: 後藤哲也(OOO Projects)

デザイン: 小池一馬(OOO Projects)

表紙・特集ページデザイン: 毎月異なるクリエイター

イラスト(エノケン、似顔絵): タダユキヒロ

配布部数: 12000~15000部

配布先: enoco、全国美術館、アートセンター、関西圏のギャラリー、芸術系大学、大阪府立中央図書館はじめ府内公立図書館、府内市町村文化局・企画部局など

これまでのニュースレターはすべてenocoWebサイトからダウンロードが可能

## 実施のコツ!

## » 毎回変わるクリエイター

表紙と特集ページは毎月異なるクリエイターに依頼し、デザイナー等との繋がりをくつくとともに、毎月イメージが変わることによって読者の次号への期待感を高める

## » クリエイターの自由を保つ

表紙や特集ページについて、記載内容はごくわずかな部分のみ統一しているものの、原則クリエイターの自由なアイデアでつくってもらっている

## » オープンな雰囲気をつくる

コラムやスタッフによるイベントレポート、専門家によるプログラムレビューなど複数の視点からenocoの活動をなるべくニュートラルに紹介し、オープンに関わりやすい雰囲気を出す

## » さりげなくPRしてみる

enoco 地下のON THE BOOKS 店主によるコラム、表紙・特集クリエイターによる地下のカフェでのカフェトーク等を掲載し、enoco内のショップのPRも行う

なかなか見えにくいenocoの活動を多くの人に分かりやすく伝えるために創刊しましたが、enoco側にとってもクリエイターや様々な人(読者)との出会いがあるような内容にしたいと思っています。毎月デザインが異なることで統一したイメージを持ってもらいにくいのではないかと懸念も当初はあったのですが、3年目に入り「ニュースレターでenocoのことを知った」という声や、「デザイナーを紹介してほしい」という声が少しずつ寄せられるようになってきており着実に成果が出てきているように思います。





## これまでのenocoニュースレター

※デザインについては表紙と特集ページのデザインのみ。撮影やイラストについても表紙・特集ページのみ。



vol.1  
デザイン:後藤哲也  
撮影:佐伯慎亮  
特集:「enocoのこれまで そしてこれから」  
2014年4月発行



vol.2  
デザイン:増永明子  
撮影:森義之  
特集:「まちをデザインするークリエイターと行政が協働する、これからのまちづくりー」  
2014年7月発行



vol.3  
デザイン:市野孝洋  
撮影:クログユイチ  
エノコヤ制作:スエロ建築研究所  
特集:「enoco×大阪府20世紀美術コレクション」  
2014年10月発行



vol.4  
デザイン・撮影:NPO法人Co.to.hana  
特集:「場をつくる」  
2015年1月発行



vol.5  
デザイン:イガキアキコ  
撮影:有本真紀  
特集:「人がまちをつくるーわがまちカンヴァスとenocoプラットフォーム形成支援事業」  
2015年4月発行



vol.6  
デザイン:三重野龍  
特集:「進化するワークショップ」  
2015年7月発行



vol.7  
デザイン:中崎航  
イラスト:ミヤザキ  
特集:「study???」  
2015年10月発行



vol.8  
デザイン:峠田亮謙 (design tōge(設計峠))  
イラスト:人と人がつながる拠点 enoco「クリエイティブルーム」の住人たち  
2016年1月発行



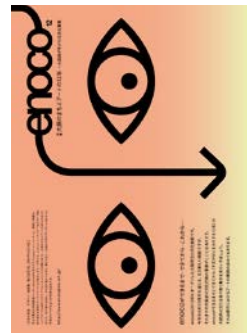
vol.9  
デザイン:赤井佐輔 (paragram)  
特集:「今、ふたたびの江之子島“わがまち”観光」  
2016年4月発行



vol.10  
デザイン:高橋静香  
アートワーク:野原万里絵  
特集:「ひとりの人から広がる未来ーenocoが手がけるソーシャルデザイン」  
2016年7月発行



vol.11  
デザイン:藤坂兼亮・米須清成 (SKKY.Inc)  
撮影(特集ページ内):福家伸哉  
イラスト:マメイケダ  
特集:「デザイナーと歩むパブリックデザイン」  
2016年10月発行



vol.12  
デザイン:池田敦・阪口玄信 (G GRAPHICS INC.)  
特集:「大阪のまちとアートの12年ー大阪府が手がける文化事業」  
2017年1月発行

## 4YEARS

- 85 クリエイティブな交流拠点を生み出す
- 86 クリエイターやまちづくり活動との協働機会を増やす
- 87 新旧住民が出会う場を用意する
- 88 アートやデザインが日常の中にある街をつくる
- 89 文化施設が培ってきた  
公共空間活用のノウハウや理念を普及させる
- 90 アートやデザインを活用した課題への  
取り組み手法を地域に根付かせる
- 91 地域の文化や資源を保全し、完成後多くの人々に  
活用されるダム整備のコンセプトをつくる
- 92 専門家やファンワークショップの意見を反映し、  
ニーズにマッチしたダム整備の方向性や課題を示す
- 93 公共事業がもたらす恩恵を引き出すための  
プラットフォームを構築する
- 94 周辺住民だけでなくその地域に  
魅力を感じている人との協働を生み出す



## 85 クリエイティブな交流拠点を生み出す

## 86 クリエイターやまちづくり活動との協働機会を増やす



什器はenocoで制作。個別のブースと共有のミーティングテーブルがあり、利用者同士で利用時間を調整している

### 事業概要

#### » クリエイティブルーム・クリエイティブ シェアールーム

時間貸しの多目的のルームとして想定されていた2階の部屋のいくつかを、2013年度から月貸しのテナントスペースとして活用。創造的活動やまちづくりなどに携わる個人や組織を対象に、enocoとの協働などを条件として入居者を募集し、常に館内にクリエイターがいる状況をつくった。ルーム7は2m×2mのブースを設置し、4組が共同で使うシェアールームとした。

[クリエイティブルーム] (2017年3月まで)

ルーム9:TSP太陽株式会社

ルーム10:一般社団法人 水都大阪パートナーズ

[クリエイティブシェアールーム(ルーム7)] (2017年3月時点)

Touch on art(一般社団法人タチヨナ)

クリエイティブハウスおくむら

Ashita wo Design

Toi Fleur

### 実施のコツ!

#### » クリエイターが引き寄せる

創造的な活動を行う人が拠点を構えることで、その人や組織とつながる人が訪れると考えた

#### » 情報共有を生み出す

大阪のまちづくりやアート活動に関わる人や組織が入居することで、分野における最新の情報を共有し、気軽に協働できる状況をつくった

#### » 入居者への特典をつける

月貸しにして安定的な収入を確保するだけでなく、入居者が会議や催しで他のルームを借りてくれることを期待した。入居者には特典として、ルームの使用料を半額にした

開館当初のenocoは、イベントや展覧会のない日には人がいない寂しい施設でしたが、クリエイティブルームを設置したことで、常に誰かがいる状況が生まれました。特に青少年のためのアートプロジェクトに取り組むタチヨナとは、様々な事業で協働することになりましたが、やはり近くにいるということでのいろいろとやりやすかったです。



## 87 新旧住民が出会う場を用意する

## 88 アートやデザインが日常の中にある街をつくる



「めぐる」をテーマにまち全体を回遊できるイベントを協働で年1~2回実施している

### 事業概要

#### » 江之子島まちづくり事業との連携

「江之子島地区まちづくり事業」再開発により、「阿波座ライズタワーズ マーク20/フラッグ46」という2棟のマンション、「日生病院」(2017年末竣工予定)が建設され、「アート&ライフスタイル」をコンセプトに新たなまちづくりを進めている。先行してオープンしたenocoは、文化施設としてその一翼を担い江之子島A&L(アートアンドライフ)マネジメントと連携して文化的なまちづくりに関わっている。都心回帰による人口流入の多い大阪市西区だが、2棟のマンションはあわせて750戸以上となり、多くの人が新たにまちに住み始めることになった。また現在、江之子島の南側にある日生病院が再開発エリアの北半分に移転してくることにより、以前からの近隣住民の方も今後、江之子島に通うことになる。新旧住民が行き交うことになるまちで、人と人、人と文化の出会いをつくりだす活動を展開している。

2013年～継続中

共催:江之子島A&Lマネジメント(DEBOCOBO)

[現在の主な連携事業]

えのこじま凸凹ラジオ

えのこじま文化祭

### 関連事業

- ▷ 180YERS 江之子島と大阪
- ▷ 1YEAR えのこじま凸凹ラジオ
- ▷ 6MONTHS DECO × enoco 壁画プロジェクト
- ▷ 1DAY えのこdeマルシェ
- ▷ 1DAY えのこじま文化祭

### 実施のコツ!

#### » 新規世帯の特徴をつかむ

子育て世代などの流入が多く見込まれるため、子供向け、家族向けのプログラムを意識する

#### » 周辺地域を意識する

隣接するマンション住民だけでなく、西区を中心とした近隣住民にも参加してもらえるイベントやワークショップを開催し、新規住民と既存住民が行き交う状況をつくる

#### » きっかけをたくさんつくる

様々な参加の深度を想定したプログラム構成とする(マルシェ:特技や仕事を活かして出店する、ラジオ:趣味や特技を活かして番組を持つなど)

一番最初に新しい江之子島のまちの住民になったenoco。当初の真っ白い工事の塀に囲まれた風景を思い出すと不思議な気持ちになるほど、まちには多くの人が暮らし始めました。都心の大きなマンションなので、住民の皆さんにはそれぞれの生活があり、地域に深く入り込んでいくようなプロジェクトは正直難しいと思います。ですが、マルシェを楽しみにして下さっている方、ラジオ放送中に手を振ってくれる小さなお子さん、enocoの裏側を秘密基地のようにしている小学生たち。そういった様子を見守りながら、ひとつひとつのプログラムを実施していくことで、そこに当たり前のようアートやデザインがあり、ふと何かやってみようかなという思った時に何かできることがあるという日常をつくっていくことができると考えています。



89 文化施設が培ってきた  
公共空間活用のノウハウや理念を普及させる

90 アートやデザインを活用した課題への  
取組み手法を地域に根付かせる



成果発表会と次回実施者を募る公募説明会を開催し、自治体同士の情報・ノウハウ共有も行った

事業概要

» カンヴァスキームの市町村展開「わがまちカンヴァス事業」

(略称:わがまちカンヴァス)

大阪府とenocoが「おおさかカンヴァス推進事業」や「プラットフォーム形成支援事業」で蓄積してきた公共空間活用のノウハウや理念等を府域に活かし、府内市町村における地域課題への取り組みを、アートやデザインを活用して技術的に支援する事業。毎年度市町村から応募を募り2~4件を選定し、各市町村の課題や目標、状況にあわせて支援内容を決定し、半年~1年かけてサポートを行うことで、市町村域の公共空間活用の促進、地域の活性化、魅力発信等を推進した。

2013年度~2016年度  
共催:大阪府

[成果発表会&次年度公募説明会]  
2014年5月22日  
2015年3月17日  
2016年3月4日

関連事業

▷3MONTHS かたのキャンバス

実施のコツ!

» 丁寧にニーズを拾い上げる

市町村のニーズや課題を把握するために、まずヒアリングや調査を実施し適切な課題設定を行う

» 事業の自立を前提にする

1~2年後には市町村等が自立して事業を推進していくことを目指したアドバイスをサポートを行う

» チームをつくりだす

enocoが第3者として関わり、適切なメンバーが集うプラットフォームを構築する

» 話し合いの場をつくる

具体的な解決策やアイデアを抽出する協議の場づくりを行う

この事業を通して、府内の様々な場所に出かけると、多様な大阪が見えてきます。同じ課題を抱えていても状況は違うので、その都度適したサポートを行います。第3者であるenocoが入り、少しの後押しをすることで前に進むことがほとんどです。サポートが終了した翌年に「今年はこういうことを行いました!」という報告をいただくことが何より嬉しいです。



これまでの「わがまちカンヴァス」



「せんなんカンヴァス」(泉南市/2013年度)



「かたのキャンバス」(交野市/2013年度)



「KOTATSU PICNIC」(住吉区/2014年度)



「奥河内100人会議」(河内長野市/2014年度)



「ごかんのおまつり」(泉大津市/2015年度)

2013年度

交野市.....市民協働によるアートイベント「かたのキャンバス」の実施  
泉南市.....泉南市立埋蔵文化財センターによる文化財活用を核とした地域の魅力発信イベント「せんなんカンヴァス」の実施  
高槻市.....「高槻アート博覧会」の更なる発展と継続的な運営に向けた方向性の検討

2014年度

大阪市住吉区...「異文化理解・多文化共生」の場づくりイベント「KOTATSU PICNIC」の実施  
河内長野市.....市民主導の地域づくりのための「奥河内100人会議」の実施  
泉南市(継続)...埋蔵文化財センターと大学との連携推進  
高槻市(継続)...「高槻アート博覧会」の更なる発展と継続的な運営に向けた方向性の検討

2015年度

泉大津市.....多様な世代が参加できる市民文化祭の再構築と「ごかんのおまつり」実施  
大阪狭山市.....狭山池築造1400年事業でのプログラム実施に関するアドバイス

2016年度

枚方市.....モビリティマネジメント施策の発信について推進体制の立ち上げサポート  
茨木市.....「サイクリング×観光」をテーマとしたローカルツーリズム(地域観光)実施に関するアドバイス  
大東市.....市民協働イベントについてのチームビルディングと組織づくりのアドバイス



## 河田泰之

(泉南市埋蔵文化財センター)

### —河田さんがenocoと出会ったのは？

河田：2013年です。大阪府の文化課（当時）からの「わがまちカンヴァスという事業をします」という照会に「やりたい」と答えたのがきっかけです。私は泉南市埋蔵文化財センターという資料館みたいな施設で働いているのですが、ちょうどその頃、空調工事のため2ヶ月休館中で、入館者を取り戻す方法を思案していたので、「アート作品があるとようけ人が来るんじゃないか」と正直そういう気持ちでした。アートとデザインを生かして...とあったんですが、僕「アート」にしか目がいかなかったのです。しかも頼むのはタダや、とそんな軽い気持ちからです。

### —そのとき、enocoという存在はご存知でしたか？

河田：全く知らなかったですね、その役割も。なので、大阪府とenocoの支援が決まり、ヒアリングが始まったのですが、皆さん笑顔で聞いてくれるばかりで、一向に話が進まなくて戸惑いました。

高坂：わがまちカンヴァスで相談に来ても、最終的に決めて実行するのは河田さんなんですよ。何をやりたいのか、どうすればいいのかも考えてもらう。結構突き放すんです...。

河田：正直に言うと、何かを「やってくれる」と思っていました。

高坂：そうですね。最初はみなさん自分がやらないといけなくなるとはあんまり思っていないですよ。誰か紹介してくれて、なんかやってくれて、こっちは

場所さえ用意すればいい」というイメージだったりとか。だから河田さんには当時1期生を募集していた「enocoの学校」の受講を勧めたんです。

### —どういう感じの授業内容なんですか？

河田：座学もあるんですけど、グループをつかってひとつの課題に向かっていこう、というグループワークが主でした。そして最後に「公開プレゼン」。3グループあって、20人弱が参加していましたね。

### —河田さんにとって、授業はどういうものでしたか？

河田：まずグループでひとつの物事を進めるという経験がなかったので新鮮でした。本業では担当は自分だけなので、1人で決めています。だから「みなさんどうしましょう」という合意形成を積み重ねる難しさといったら...。でもそれがとても大切なことだとあとで納得できました。高坂：「せんなんカンヴァス」に向けてのワークショップ3回と、「enocoの学校」の中でのグループワークがほぼ同時並行だったんですよ。泉南の方は一部河田さんがファシリテーションしなくてはいけなく、学んでいることを即座に実践、むしろ先行してやらなくてはいけなく、という感じだったと思います。

河田：しんどかったです。先輩職員の方の助けてもらっていたのですが、3回目の当日にenocoから「はい、あんたらやってね」と。驚きました。けど、それが良かったのだと今は感謝しています。

2016年8月8日 @enoco

聞き手：榊原充大(RAD) + 高坂玲子(enoco)

### —まさにいま自分が向き合っている問題を現場だけでなく座学でも捉え直して、enocoのプログラムをうまく活用されていたんですね。ワークショップ自体は、どうでしたか？

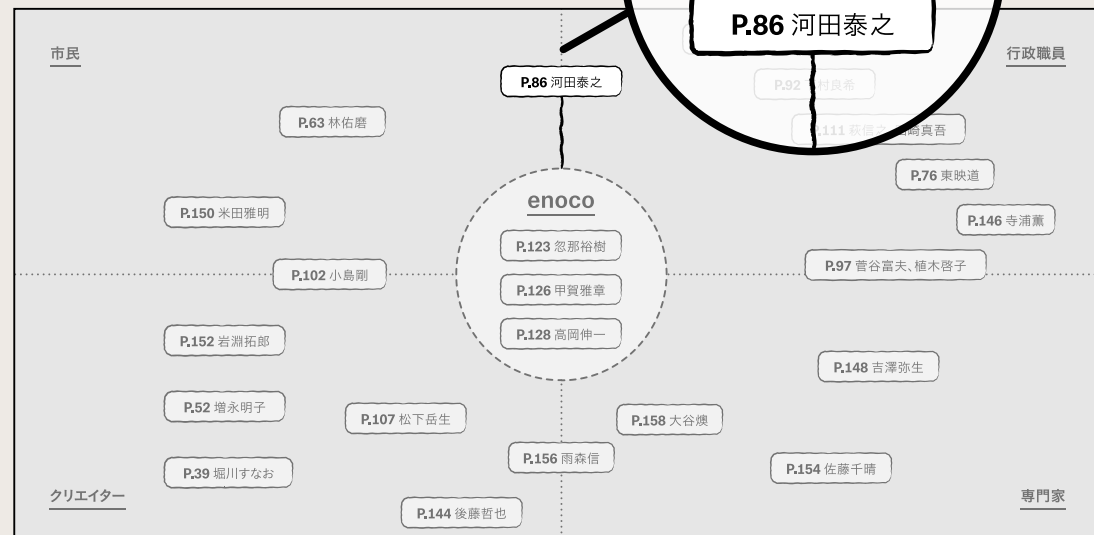
河田：未経験のことを、いきなり、しかもワークショップを仕切れと言われても何が分からないのかも分からない状態でした。ものすごい不安でしたね。でもどうにもならなかったんです。「enocoの学校」での刺激や気づきを活かしながら、ひとりではい込むのではなく、ワークショップに参加していただいた住民の方と楽しむことができたからだと思います。

### —実際、「せんなんカンヴァス」はどのようなものでしたか？

河田：ワークショップの中で「泉南の何がいの？」という問いかけに「レンガ」が挙がったんです。実は泉南地域は明治・大正・昭和ぐらまで、日本屈指のレンガ産地。最盛期には日本中でつくられたレンガの5割に1割ぐらが泉南地域でつくられていたほどだったんです。だから、今でもそこしこにレンガでできたものが多い。住んでいる人は見慣れたまちの景観ですが、泉南らしさ満点です。それを知ってもらおうと、余っている当時のレンガでつくった「かまどベンチ」をつかって、そのお披露目イベントを企画しました。

### —それまでもそういうイベントは行っていたけれども、その時よりもやっぱりこの時の方が、人の入りが良かった？

インタビューネットワーク図



河田：「こんなに来るか」というほどの人の入りだったのでびっくりしましたね。それまでやっていた行事が、講演会とかシンポジウムとか、はたまた体験学習とか、小さいプログラムなので来ても100人ぐらいなんです。その3倍くらいの方が来て...

高坂：どんな人がお客さんで来ていたんですか？

河田：子供、親子連れ、はたまた子供とおじいちゃんおばあちゃん。明らかにこれまで来ない客層ですね。うちはいつもの客層といったら年配の方が多かったんです。あんまり見たことのない、馴染みのない方が来ていただけなんだなあとこの思いはありますね。

### —この経験を経てどうい新しい取り組みが広がっていったのでしょうか。

河田：うちに来ていただく利用者の方を増やしていこうという路線で、古代連を植えて、育てて、そのまわりでいろんな行事をしてみよう、という企画を間髪入れずに始めました。この取組みは今年で

4年目ですが、今では事業の柱のひとつです。初年度は「とにかくお祭りやりましょうよ」とこちらから呼びかけていたのですが、今では住民の方がアイデアを出し、どんどん突っ走っています。うまく合意形成を図ることができたのか、住民発意の独立した企画が次々生まれています。

### —なんで蓮なんですか？

河田：きっかけづくりです。埋蔵文化財センターの隣接地には海会寺跡という史跡公園があり、館内には出土品を展示しているのですが、いきなり国史跡です、出土品は国指定重要文化財なのです、と説明を始めると小難しいだけなので。なんで古代蓮？という質問から展示室にある出土品の説明につながる方がすんなり話を聞いてもらえるかなあと。

### —そのお披露目イベントが「ハスフェスタ」ですね。どれくらいの方がこられました？

河田：700人以上です。いろんな世代の方が来てくれます。赤ちゃんを連れてママさんもいらして「こんな人がセンターに来てくれるんだ」と思っていたら、実は一緒にやってくれていた子育て支援課の貢献だったんです。「出前保育」という市内各地の保育所でやるプログラムを年間スケジュールの中で充ててくれてるんですよ。本当にみなさんにお助けいただいで。

### —協力のおかげですね。

河田：そうですね。これが「誰でもウェルカム」で取り組むことのメリットだと思います。いろんな人とやりましょう、という方ははるかにいいものができるなと思います。そしてもうひとつ大学と何かしようということになったんです。阪南大学という松原市にある大学ですけど、その国際観光学部の和泉先生との雑談で「学生を送り込むフィールドが欲しい」とのことだったので、その場で立候補しました。



## 91 地域の文化や資源を保全し、完成後多くの人々に活用されるダム整備のコンセプトをつくる

## 92 専門家やファンワークショップの意見を反映し、ニーズにマッチしたダム整備の方向性や課題を示す

一取り組みとしては何に着目したんですか？

河田：タコツボです。泉南市は鎌倉時代にタコツボをつくっていた、という遺跡があるんです。そんな遺跡は日本中探してもこの戒畑遺跡だけ。実は世界的な遺跡なんだよということをいろんな人に知ってもらおう、と。2015年からは、住民の方々が主体となって企画し、地元漁業協同組合や市内小学校の協力を得て実施しました。阪南大学の授業でタコツボづくりをしてタコツボ漁をしました。結局タコツボではタコは獲れなかった。でもやってみるみんなめちゃくちゃ楽しいんですよ。今年度からは市内のひとつの小学校の5年生が毎年タコツボ漁をするという授業の組み方をする事になりそうです。地域に根付くというか、そのあたりで評価してもらえたのかもしれないと思っています。

一他にはどんな企画を？

河田：郷土かるたですね。市立図書館の司書さん2人との雑談がきっかけです。泉南市も堺かるたみたいな郷土かるたがあったらいいね、と。で、国語の先生や庁内の観光と人権の担当と、呼びかけに応募して下さった住民の方と一緒に取り組みました。大半は学校などに配布し、残りを販売したのですが即完売の人気でした。でも面白いのはここからで、絶版となった幻のかるたを今度は住民有志が実行委員会を立ち上げ、寄付金を募って再印刷したのです。泉南の「ええとこ」

をこのかるたを使って、普及していただいています。

一蓮・かるた・タコツボ、が「せんなんカンヴァス」で培われたプラットフォームという考え方を展開しながら取り組まれていることなんですね。普段、企画の際に意識されていることは？

河田：友達連れてきてください、とよく言ってますね。あと、私自身もいろんな人に「一緒にしませんか？」と声をかけています。「誰でもウェルカム」で取り組んだほうが、絶対いい結果になるので。何より楽しいですよ。

高坂：enocoもその後、泉南市から委託をうけて、3時間で映画をつくる「ご近所映画」というワークショップをやりました。60代から小さい子供まで、そして子供についてくるお母さんまで参加して下さって面白かったです。それは河田さんのカンヴァス後の動きがあってこそだなと思いました。2カ所で2回やったのですが、リピーターもいらして。enocoも多様な世代の交流を今やりたいなと思っていて、意外といけるなと実験できました。

河田：リピーターいましたね。小学5年生の女の子が2人、2回とも参加してくれました。同じ内容だけど「いいの？」と聞くと「同じだから参加したい！」って。この時はプロの方に泉南市のためのプログラムを実施していただきました。

高坂：「わがまちカンヴァス」で一緒にやった方が自分たちで何かを起こせる人になって、そこで生まれたものが今度は

enocoにお仕事として依頼がくるという循環ができて、嬉しいなと思いました。理想的ですね。

一庁内や教育委員会の中でも、周りからの反応とか、協力者が増えたとか、感じることはありますか？

河田：部署の先輩にもいつも助けてもらっていますし、プロジェクトごとに様々な部署と連携できるようになりました。カンヴァスの時は実感できなかったのですが、その後はプロジェクトを実施していくために連携しやすくなっています。連携することでアイデアやネットワークが広がり、できないと思っていたことも業務として実施できるようになってきています。

河田泰之（泉南市埋蔵文化財センター）

1994年、泉南市役所入職。当初は埋蔵文化財の発掘調査を担当。泉南市埋蔵文化財センターの開設後は、文化財の普及啓発事業（企画展や体験学習、学校園への出前授業など）も担当。2013年からは、大阪府文化課とenocoの支援をきっかけに、住民・市民団体・庁内の関係部署などと連携しながら、文化財の活用促進を目的とした事業を展開。



周辺整備検討専門委員会は設立前の準備会も設定し、現地視察などを行った

### 事業概要

#### » 安威川ダム周辺整備基本構想(案)作成事業

淀川水系安威川の大府茨木市北部に建設する治水ダムである「安威川ダム」。洪水調節、流水の正常な機能の維持、下流河川環境改善を行うが、ダム完成後も地域の文化や資源が保全され、多くの人々に活用してもらうことが目指される。そのために従来の行政主導型ではなく、より市民のニーズにマッチした整備を目指しており、安威川ダム周辺整備について、上位計画(安威川ダム周辺整備基本方針/2009年)に沿った各ゾーンの利活用に向けた基本コンセプト(案)を作成するため、建築やランドスケープ、土木、アートなどの専門家で形成される専門家委員会を設置し、大阪府安威川ダム建設事務所・大阪府文化課・茨木市北部整備推進課と協働しながら、周辺整備の具体的内容について検討した。また、一般のファンワークショップの意見を反映しながら、整備の方向性や整備にあたっての課題を示す安威川ダム周辺整備基本構想(案)(安威川ダム周辺整備検討専門委員会まとめ)を作成した。

2013年～継続中

主催：安威川ダム建設事務所

### 関連事業

- ▷ 4YEARS 安威川ダムファンづくり会
- ▷ 3YEARS 安威川地域マスコットキャラクターの展開
- ▷ 1DAY 安威川フェスティバル

### 実施のコツ！

#### » 各主体の意見を統合する

4回の委員会を通じて、周辺プランワークショップ(市民)、地元、ファンづくり会、行政から出された意見と専門委員の知見を統合整理する

#### » 課題を個別的に抽出する

各ゾーンの周辺整備の計画に対し、計画条件、整備条件、管理運営条件に関する課題を抽出する

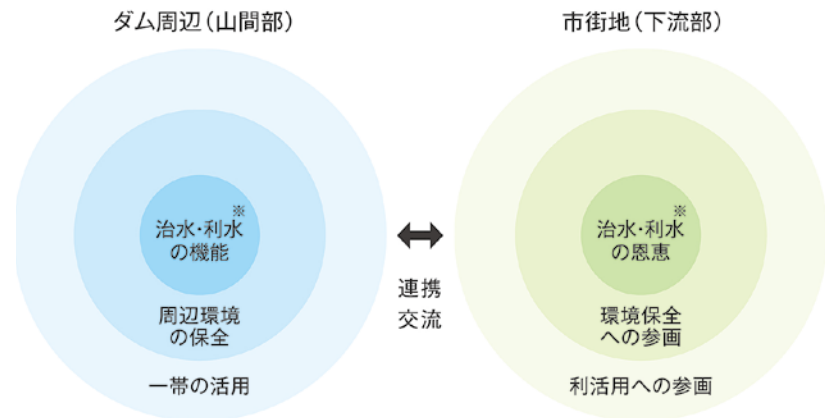
市民ワークショップやファンづくり会で出た意見を反映しながら構想案を作成していくにあたって、周辺整備検討専門委員会と市民ワークショップ、ファンづくり会の開催日程を調整しながら進めていきました。enocoのネットワークを駆使し、さまざまな分野の専門家を招集したことにより、色々な視点からの意見が抽出できたことがひとつの成果だと思います。



ファンづくり会のコンセプト

2つのエリアの連携と交流

山間部と市街地が連携しながら、ダム周辺の活用と保全を推進していく必要がある。



ダム周辺の保全活動促進

山間部では、里山活動をはじめとしたダム周辺の環境保全活動の展開をめざす。

都市部からダムへの活動展開

ダム周辺の活用と保全に係る教育・文化・アート系の活動育成をはかる。



- 安威川ダム周辺整備プラットフォーム形成支援事業の主な取り組み
- ・周辺整備検討専門家委員会
  - ・ファンづくり会(本会、部会)
  - ・安威川フェスティバルの企画会議・実施
  - ・マスコットキャラクターワークショップ
  - ・一般のファンを対象としたワークショップ



【一般府民対象ワークショップ「安威川ダム周辺プランワークショップ」】

2015年6月～11月(登録者:69名)

主催:大阪府 安威川ダム建設事務所、茨木市

協力:enoco

安威川ダム周辺プランに興味のある府民を募集しワークショップを開催。参加者から出された意見に対し、周辺整備検討専門委員会が解析を行い、参加者にフィードバックする方式を採用し、参加者と実務的学術的専門家との対話の機会をつくった。

93 公共事業がもたらす恩恵を引き出すためのプラットフォームを構築する

94 周辺住民だけでなくその地域に魅力を感じている人との協働を生み出す



様々なステークホルダーが集まりファンづくり会を形成している

事業概要

» 安威川ダムファンづくり会

ダムは治水だけでなく、自然環境の提供や地域の活動の舞台になるなど、たくさんの恩恵をもたらす可能性がある。その可能性を引き出すための会を「ファンづくり会」として活動を展開している。ダムや周辺地域に魅力を感じて集まる人々を「ファン」と名付け、ダム完成後によりよい環境を整えることや更なるファンを増やすことを目的に、ダム建設中の段階から地域づくりのアイデアを出し合い、議論することにより、一層府民市民のニーズにマッチした地域づくりを行いダムや周辺地域の活用や保全の取組みを進めるための活動を展開している。

2013年～継続中

主催:大阪府、安威川ダム建設事務所

構成団体:茨木市観光協会、大林組・前田建設工業・奥村組・日本国土開発特定建設工事共同事業体、オプスデザイン、安威川上流漁業協同組合、茨木市環境教育ボランティア、NPO法人 nature works、淀川管内河川レンジャー、茨木芸術中心、大阪府茨木高等学校、NPOcobon、bioa、大阪産業大学、大阪府立江之子島文化芸術創造センター [enoco]、いばらば北部応援隊、千提寺 farm、大阪府、茨木市

関連事業

- ▷ 4YEARS 安威川ダム周辺整備基本構想(案)作成事業
- ▷ 3YEARS 安威川地域マスコットキャラクターの展開
- ▷ 1DAY 安威川フェスティバル

実施のコツ!

» 他地域との連携をつくる

山間部と市街地が連携しながらダム周辺の活用と保全を推進し、相互の交流を図る

» 継続性を重視する

ファンづくり会を通して、継続的な運用を可能とする組織体制の検討をする

» 活動を日常化する

“プロモーション部会”、“環境部会”、“アート・文化・教育部会”の3つの部会を設置し、日常活動の運営を通して継続的な運営の仕組みを検討

通常はダムが建設されてから周辺の利活用について検討がされますが、安威川ダムではダムができる前からプラットフォームを構築し、周辺の利活用について検討をしています。ファンづくり会のメンバーを地元に限定するのではなく、クリエイターや大学、企業も参画することで幅広い視点でアイデアが出たり、課題に対しての解決策も生まれています。





# Project Related Interview 07

安威川ダム周辺整備事業 / 木津川遊歩空間アイデアコンペ

## 下村良希

(大阪市港湾局 営業推進室 開発調整担当部長 / 前安威川ダム建設事務所所長)

—下村さんは土木のご専門なのですね。

下村：今は、2015年から市に出向しているのですが、もともとは、1983年に土木の技術職として大阪府に入庁し、主に治水や河川の問題整備に関わってきました。最初の事務所が、1982年に大和川流域で起きた大きな河川災害の復旧事業を、5年間ほどでやりきろうというところで、そこからずっと河川関係の仕事についています。河川行政も高度経済成長から安定経済になってきた頃に、汚れた川をきれいにし、人々の目を川に向けようと親水空間へのアプローチを始めたんですね。ただ、その頃は「地域」と一緒に考えるという意識はなく、地域の人に使ってもらえたらいいなという思いしかありませんでした。これは、「行政がつくるので住民の皆さん使ってください」という具合に、やっぱり行政目線なんですよね。

私の意識の大きな転機になったのが狭山池でした。狭山池は、2001年にため池のダム化の工事が完成していました。私が2008年にダムを管理している事務所に行き驚いたのが、市民のみなさんが狭山池を地域のシンボル、誇りだと思って活動していたことなんです。月に一度のゴミ拾いをしたり、5月の連休に狭山池まつりという催しをしたり、地域の人々が自らの発意でいろんなことを始められていたんです。まさしく地域の資産であり、地域をつなぐ場になっていました。ちょうど2008年は、橋下徹さんが大阪府知事に就任されて、「全てのハコモノをゼロベースで見直す」という話になり、

狭山池博物館も当時議論の対象になったんです。地域の人々に「自分たちの狭山池博物館や！」という思いが強く、地域、市、府の3者での運営体制でやりましょうということでも話がまとまったんです。その時に、行政から言われたからやるんじゃないくて、自分たちが好きだからやっている人達がいる、ということを知ったことが自分の中で大きかったです。

ただ、どうやって共同運営していくのか、というときに、最初会話が通じないんですよ。行政の言葉と住民の感覚が違うんです。住民の方は、決めたんだからすぐ動くやろ、と思っているのに、行政はチラシひとつつくるにしても契約して発注してと時間がかかる。その齟齬がありましたね。

その後本庁に異動した際に、木津川の遊歩空間のコンペの話があったんです。我々が心配だったのは、デザイナーが提案したデザインで、構造物としてちゃんと安全なものが担保されるのかどうかというところでした。デザイナーと設計コンサルタントをマッチングさせれば、そこで担保できるかと考えていました。当時の印象が残っているのは、(enocoPF部門の) 忽那さんから「ものづくりは、プロセスを大切に！」と聞かされたこと。はっとしました。私たちは土木インフラを整備するのに、計画をつくって、事業化して、住民に提供するものだという考えがあったんですが、一方でそれで造った後に本当に使ってもらえるかなという思いもあったんですね。そこで木津川では、整備プロセスに関わってもらった

2016年9月9日 @enoco

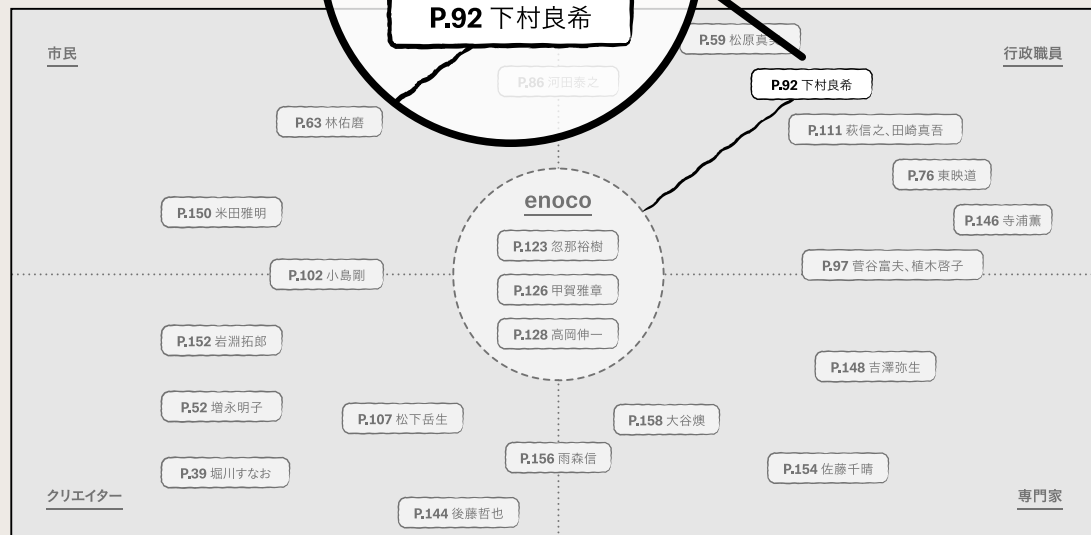
聞き手: 榊原充大 (RAD) + 高坂玲子 (enoco)

ちでワークショップを行い、住民の方からいろいろな要望が出てきました。関わることで住民も「自分たちができた後の面倒見るやん」という思いに繋がってくるんやなあと。木津川はそんな感じで、1年関わりました。

—その後、安威川ダムの担当になってプラットフォーム支援事業に取り組みされるのですね。

下村：そうですね。安威川ダムは治水効果のはっきりとしたわかりやすいダムなので、当時の知事にもそれを認めてもらったし、その検証手続きも終わらせました。ダムはもともと流れていた川をせき止めてつくるので、巨大な湖ができるんですね。地域の環境を大きく変えるので、自然環境の変化もあるんですけど、そこに住んでいる人が集団移転するなど、地域のコミュニティそのものも変化するわけです。そこでプラットフォーム形成支援事業の話を、木津川でつながりがあった府の文化課(当時)の方から聞いて、委託事業としてやってみようと考えたんです。一般的にダム建設ではコミュニティの再構築が必要なことが多く、地域づくりは不可欠で事業費として捻出することができました。そこに住んでいる地域の方々にも、ダム建設中からそのプロセスに関わってもらって、一緒に将来的なつながりを作る段階から始めないといけないなと思って、で、enocoと連携して安威川ダム周辺整備事業を始めました。ファンづくり会やAIGAWAニュースな

インタビューネットワーク図



どで、いろいろつながりをつくり、徐々に広がりも見えてきて成果も出てきています。ですが、一方で行政の中であまり理解されにくいというか、これをやったからどういう成果があったかということの説明が難しい。結局つながっているのは、「組織」というより「人」、なんですよ。なので、事務所の中も含め組織の中で、こういうことをやっている意味を理解してもらうのは結構難しいと感じています。地域や下流域の人であれ、学生であれ、ダムが完成した後も継続してこの地域に関わる人、キーマンが出てきてほしいという思いで、今は後任につなぎ託しています。高坂：こういう取組みは、他の地域でも行われているんですか？ 下村：他の地域でも同じようにあると思います。「公共空間をどう考えるか、どう使いこなすか」という意識は日本全国で徐々に高まっていますし、それはダムに限った話でもないと思います。いろいろな公共空間で、地域がやりたいことをうまくできるようにして、つながりを創る、というのがプラットフォームだと捉えて

います。ただ、大切なのは、行政が上手くサポートし、お互いにキーマンがいる間にその地域の仕組みに楽しくあかんのやな、と。

—具体的にどんな方法がありますか？

下村：ひとつやったことが、意識してもらった仕掛けです。工事発注方法に「技術提案型」というのがありますが、ダムをつくり上げていくための施工方法や品質管理方法について技術提案してもらいます。その中に、完成後の環境保全の取り組みや、ダムができた後の地域の賑わいづくりも提案してください、と設定しておくわけです。そうすると、皆さんよく考えてくれ、しかも「それをやらなあかん」という意識が生まれるじゃないですか。その点では、発注後スムーズに連携しやすかったと思います。あとは、やらされている感が無くなり楽しめるようになれば完璧です(笑) また、enocoのノウハウを活かし、プラットフォームの仕組みづくりに木津川などでの経験を使わせてもらいました。

地元の方との補償交渉もそれまでは複数の地区があっても、個別にやってきたのが、6つの関係地区を一堂に集めてワークショップをしたんです。地区ごとにいろんな想いがあるのですが、ネガティブなこともポジティブなことも、地域の将来のことをみんなで語り合ってもらったことは新鮮でした。この時、大阪府が運営するのではなく、外部のコーディネーターに入って進行してもらったことは、要望型にならずに非常に良かったと思います。

—木津川の時の、忽那さんからのプロ세스が大切だという指摘がきっかけになっているんですね。

下村：そこでだいぶ意識を変えさせられました。狭山池での公共空間が地域の誇りになり、地域のつながりを生み出すプラットフォームになるという気づきと、忽那さんの言葉がしっかりとかみあいました。いい経験をさせてもらいました。私たち土木屋はトンカチ命、みたいな感じでしたから(笑)



一下村さんのように、プロセスが大切に  
関わってくれる人のつながりを意識する  
という考え方は最近多くなっています  
か？

下村：大阪府の中でも、2000年からアド  
プトプログラムというものがスタート  
しました。最初は徳島県の神山町がやり  
始めた先進的な地域おこしです。河川や  
道路を地域の方に空間解放して、掃除し  
てもらったり花を植えてもらったり、楽  
しみながら一定の維持管理をしてもら  
うという仕組みです。正直、行政も維持管  
理費が浮いたらいいな、という発想がメ  
インだったように思います。本来押し付  
けではないので、当ても「やりませんか」  
ということだったと思うんですが、大阪  
府は2010年に「笑働OSAKA」というブ  
ランディングをはじめました。府民協働  
の原点に戻って、みんなで楽しくでき  
ることに取り組もう、というイメージだ  
ったんですね。それがきっかけでだんだ  
うまくいっているように思います。  
当時の小川副知事が、地域防災、地域づ  
くりを意識を持っている方だったんで  
すけど、各市町村に対して協働を促進  
する担当が土木事務所の中にも必要だ  
ろうということで、地域支援課が2009  
年にできたんですね。ただ、本来は土  
木事務所のどの部署だろうと、自分た  
ちの業務の中で地域とのつながりを考  
えてやっていかなきゃいけないはずな  
のに、「笑働OSAKAは地域支援課の事  
事だから」という意識が見られるよう  
です。みんなが外向きの意識をもった  
組織の仕組みにしないといけないな、  
と。ただ、徐々にそ

うした意識も増えていると思います。

高坂：下村さんみたいに行政の立場で  
関わってくださる方は異動が常ですが、  
その方が別の部局に異動された後でも  
一緒にやりましょう、と言ってくださ  
ることもあるんです。もちろん異動があ  
ることでもやりづらい点もありますが、  
人が異動していくことで私たちが関  
わる分野が広がっていくこともあるか  
なと思います。理解者が全体の中で増  
えていくと多少少しずつ変わってい  
くんだろうなと思います。

下村：そういう意味では木津川の取り  
組みでは、いろいろな人に対してその  
意義や価値の認識が広がったらいいな  
、と思っています。お金かかりました  
けど、周りの資産価値が上がったりと  
か、税収が増えたりとか、回り回って  
利益がでることもある。だから、そ  
ういう投資をしてもいいんじゃないか  
、と認知されたいなと思いますけど  
ね。広場の部分はこれから整備しま  
すけど、そのメンテナンスを地域  
の方にやりがいをもってしてもらえ  
るといいですね。やった価値もいろ  
いろな形で情報発信できるから、楽  
しみにしているんです。

高坂：木津川は2016年度に広場も  
整備されます。安威川ダムが完成す  
るのはまだ先なんですよ。

下村：ダムの完成は2020年の東京  
オリンピックの年なんですよ。私は  
ちょうどその年に定年退職なんです  
よ。ちょうど完成を見て辞めれるか  
なあと。その時にうまく地域づくり  
の芽が育っていればいいなと思いま  
す。

下村良希（前安威川ダム建設事務所  
所長 / 大阪市港湾局 営業推進室 開  
発調整担当部長（大阪府都市整備部  
副理事））

大阪市生まれ。1983年京都大学工学部  
土木工学科卒業後、大阪府入庁。主に  
治水や河川環境関係の事業に携わり、  
河川室ダム砂防課長、河川環境課長、  
安威川ダム建設事務所所長を経て、  
2015年より現職。2009年富田林土  
木事務所にて狭山池博物館三者協働  
運営委員会設立に関わり、公共空間  
が地域づくりの核となり得ることを  
知る。その後、2012年河川環境課に  
て木津川遊歩空間整備の設計のし  
くみづくりに関わり、2013年安威  
川ダム建設事務所にて、ダム完成に  
向けた地域の利活用プラットフォーム  
形成に取り組む。

## 5YEARS

- 95 同じ地域内(大阪府と大阪市)で立場の異なる文化施設同士の協働体制をつくる
- 96 建設予定の文化施設との将来的な機能分担や連携について実証的に検証する
- 97 自治体が所蔵する美術作品を適切に管理し、有効に活用する
- 98 展示場所や活用機会を増やす
- 99 作品展示だけでなく、多様な活用方法を試みる
- 100 子ども向け・親子向けの実験的なアートプログラムを生み出す
- 101 地域性や地域課題を意識したアートプログラムを開発する
- 102 建築・都市系の各大学で行われている演習の成果を行政施策の検討や基本構想等の立案に反映させる
- 103 大学間の横断的な活動を可能にするプラットフォームをつくる
- 104 計画から運用まで常に市民が主体的に関わる公共空間整備を行う
- 105 地域の課題等に対して、住民を含めた多様な関係者が連携協働しながら合意形成をはかる
- 106 アートやデザインの創造力で、社会課題を解決する
- 107 課題解決のための新たな行政手法を開発する
- 108 都市開発事業と文化行政が合わさった新しい文化施設を生み出した
- 109 全方位的な事業を担いつつも「社会課題を解決する」という方向性を持つことで独自性を獲得した

## 95 同じ地域内(大阪府と大阪市)で立場の異なる文化施設同士の協働体制をつくる

## 96 建設予定の文化施設との将来的な機能分担や連携について実証的に検証する



アートフォーラムの様子。丸テーブルを囲んで交流しやすい雰囲気にした

### 事業概要

#### » 大阪新美術館建設準備室(大阪市)との連携

大阪新美術館建設準備室は、2012年度に心齋橋展示室を閉鎖したため、2021年度中の美術館開館に向けた準備の中で、活動内容等を検討するための実践の場を求めている。そこで大阪府市連携のもと、enoco 開館当時から大阪新美術館建設準備室(2012年度は「大阪市立近代美術館建設準備室」として)と連携して協働事業を実施し連携体制を構築してきた。具体的な事業としては、双方のコレクションを一体的に展示する展覧会、子供の美術教育や取り巻く環境をテーマにワークショップとディスカッションを行うアートフォーラム、そして市民自らキュレーターとなって、実際に展覧会を企画・実施する市民キュレーターワークショップを実施してきた。互いの特徴や制約を補い合うことで、単独では実施困難なことを試みてきた。

ザ・大阪ベストアート展-府&市モダンアートコレクションから-(2012年度)

会場: 大阪市立近代美術館(仮称)心齋橋展示室

市民キュレーターワークショップ(2012~2015年度)

会場: enoco

アートフォーラム 〈こどもとアート〉の現場を考える(2012~2015年度)

会場: enoco

大阪新美術館×大阪府20世紀美術コレクション「大阪版画百景」

—大阪の版画の歴史をたどる—(2016年度)

会場: enoco

### 関連事業

▷ 5YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの活用

▷ 3MONTHS 市民キュレーターワークショップ

▷ 2WEEKS 大阪府20世紀美術コレクション展

▷ 2DAYS アートフォーラム 〈こどもとアート〉の現場を考える

### 実施のコツ!

#### » 著名作品で知名度アップ

enocoは開館して間もなく知名度も低く、訴求力のあるコレクションを有し、専属の学芸員を複数擁する大阪市と協働することは、広報とスキルアップの点で意義があった

#### » 市民が主体的に関わる企画をつくる

通常の展覧会ではなく、市民に作品を投票で選んでもらう、子供の創造環境を社会全体で考える、市民が自ら展覧会を企画するなど、市民が主体的に美術に参画できることを重視した

#### » 弱点を補い合う

大阪市側は直営のため予算執行の制約が大きく(ポスター制作をデザイナーに発注できない、監視アルバイトを雇えない)、一方enocoは全体予算とマンパワーに限界があるなど、双方の不足を補い合う形で事業を実施することができた

5年間を通じて継続的に具体的な事業を共催することで、普段から情報交換を行い文化行政等について課題を共有する関係を構築することができました。同じ美術コレクションを有する公立の文化施設ですが、指定管理と直営という運営形態の違いから、それぞれのメリット・デメリットを体験を通じて学ぶ機会にもなりました。今後はこれまでの事業の蓄積をベースに、2021年度にenocoからほど近い中之島に新美術館が開館した時、enocoとどのように機能分担を図って相乗効果をあげていくのか、施設連携のあり方を検討していければと思います。



プロジェクト関係者に尋ねる

## Project Related Interview 08

大阪新美術館建設準備室との連携

菅谷 富夫

(大阪新美術館建設準備室 研究主幹)

植木 啓子

(大阪新美術館建設準備室 主任学芸員)

2016年9月9日 @大阪新美術館建設準備室

聞き手: 榊原充大(RAD) + 高岡伸一 / 高坂玲子(enoco)

—enocoとの最初の関わりは?

**植木:** 連携事業を最初に始めたのが2012年。「市民キュレーター」が最初の事業です。

**菅谷:** 我々準備室として活動の場を求めていたんです。また当時の府市統合という行政の大きな流れが後押ししていたのではないかと思います。大阪府の美術館的機能の一端を担っていた現代美術センターもenocoという形になっていて、そこと大阪市の新美術館建設準備室が連携していったということでしょう。

**高岡:** 府市統合で、大学や文化行政も一緒にできるところはほとんど一緒にしていくという流れでしたね。

**植木:** 私たちとenocoとは極めて密接に連動していて、当時私はまだいなかったんですけど、2012年に「ベストアート展」を開催しました。メイン会場は当時、準備室がもっていた「大阪市立近代美術館(仮称)心齋橋展示室」というスペースだったんですが、その中でいくつかの連携が実現していきました。それが非常に良かったんです。

**高岡:** enocoをサブ会場にしましたね。「ベストアート展」というのは、市民に「どの作品を見たいのか」というのをベスト100まで投票してもらって、という仕組みでした。

**植木:** 市民参加の実質的な手応えを感じられましたね。

**菅谷:** 今となっては「enocoとやる」ということですが、当時は大阪府との連携というアプローチだったので、対応する府の文化課(当時)と話をしたのを覚え

ています。しかし連携が進んでだんだんお互いに慣れてきて、なるべく現場同士ということで直接enocoとお話することが多くなったと思います。

**植木:** それが大々然と着したんですね。enocoは指定管理だけど、施設としては「大阪府立」とついているので、大阪市の準備室としては当然、大阪府文化課(当時)とも連絡を取り合っていました。その一方で、現場的にはenocoとの連携が進んでいきました。

**菅谷:** 「府市連携」という言葉が使われるまでは、準備室としては「教育普及」という言葉を使うことが多かったように思います。府市連携という言葉には行政の連携だけでなく、市民との連携という意味も込めていました。また開館後に備えて実際にやってみよう意図もありました。そういった意味で「市民キュレーター」を2012年から実施し、4年間計5回やる中で、ある程度市民と連携する感覚をつかめたというか。私たちが今後の開館後に活かせる部分まで成長できたんじゃないかなということで、2015年度で一応一区切りつけました。

**植木:** 実際、続けてほしいという声もあったのですが、他にもいろいろなかたちの連携をやってみなければいけないという思いもあったので、徐々にシフトさせていきました。enocoとの連携は市民キュレーターではなくて、コレクションの連携というかたちでも継続していけますし。

心齋橋展示室という自前のスペースを閉めてからはずっと外の会場を借りていて、今年は芦屋市立美術館と連携しまし

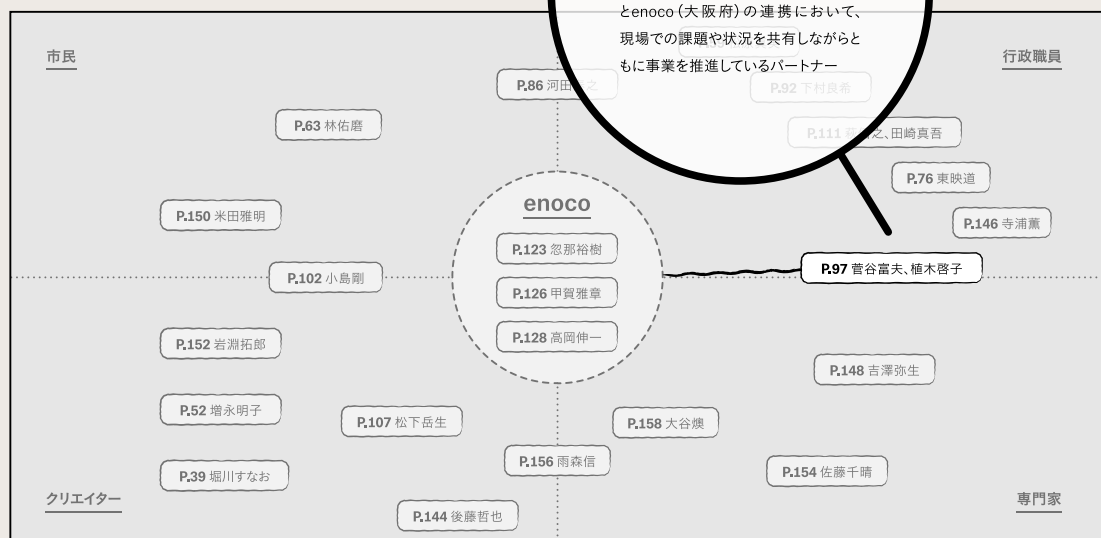
たが、展覧会をenocoと一緒にやるのも自然な形です。ただ、印象的なことですが、enocoは府立のセンターでありながら、かなり地域密着型ですね。市立である我々とは補完関係も取れないのではないかなと思うんです。カバーするアートの領域も、被るところとそうでないところがあります。規模が大きいと小回りがきかない。結局自分たちだけで何でもやろう、というのは10年前の考え方なんですよね。美術館で全部抱える必要はないわけです。だから、美術館はある時はプラットフォームで、ある時はハブで、ある時は自分たちでやると。その時その時に応じてやらなければいけないことがある。大事なのはネットワークで、その繋ぎ方の中でenocoとの関係をどうつくっていくかということがとても重要です。我々も基本設計という入口に立ったばかりなので答えを見つけているわけではありませんが、一緒に答えを見つけよう、というコンセンサスはできている気はしています。

**高岡:** enocoは最初から江之子島のまちづくり事業も担う、ということになっています。日常的な感覚としては地域の方に重きが置かれているようにも感じます。

**菅谷:** enocoの定義は詳しくは把握していないけれど、いわゆるアートセンターと呼ばれる面が強いんだと思います。でもそれは、もっと気軽に、というか、大阪市内に4つか5つあってもいいと思うんですよね。

**高岡:** 私たちの内部でも言っているのは、新しいタイプの公民館、みたいなものが

インタビューネットワーク図



**P.97 菅谷富夫、植木啓子**

大阪新美術館建設準備室(大阪市)とenoco(大阪府)の連携において、現場での課題や状況を共有しながらとにも事業を推進しているパートナー

今enocoに求められているものだろう、ということ。

**菅谷**：だから、そう考えると美術館像も変わってはきていると思います。期待される部分ではありますが、有名作品を持ちたり借りたりというのは費用がかかるので、どうしても美術館は予算規模が大きくなります。だから大阪市の施設として、どうやって市民に還元していくかを考えなくてはなりません。市民とどう接するか、というか。ネットワークの連携事業も大きな柱ですね。

**高岡**：そういう意味では、enocoとの連携事業だけではなく、他の部局との連携も重要ですね。

**植木**：八方美人と見られてしまえばそれまでなんですけど、連携することによってさらに新たな連携の可能性が出てくるんですよね。我々はアートとデザインという分野にいますが、連携先がつながって、最終的には今まで考えてもみなかった切り口が出てくることもあると思うんです。連携してみないとわからないこともありますね。

**菅谷**：1990年の4月に美術館建設準備室

が設置されていますが、当時はまだグラウンドスタイルというか、最終的に学芸員も20人以上抱えて、あらゆる分野のコレクションを持って、教育普及などもして、出版もして、デザイナーも抱えようという話もあったぐらいなんです。当時はそういった計画はおかしくなかった。でも、だんだん財政的にも苦しくなる中、単なる縮小ではなくて、また「自分たちが持てないから」ではなく、自分たちが必要とするものを持っているところと連携することによって、単に自分たちが内部にその部署を持つよりはクリエイティブな仕事の掛け算ができるだろうという考えになっています。その時その時で協働していく相手を変えていくというか。間に合わせて毎回やるという意味ではなくて、その方がよりいいものを提供できるんじゃないかなと思いますし、時代の流れにも適っているように思います。

**高岡**：新美術館建設準備室は何人いるんですか？

**菅谷**：現在、学芸員は6人です。それと事務が3人。建築が3人です。これからもうちょっと増やしますけどね。

**高岡**：市民キュレーターを4年やっていて、お互いにそれなりに大変な事業だったんですが、どういうところが今後の計画につながる成果としてありますか？

**菅谷**：先ほどの「ベストアート展」の時に「なんでこの作品が好きなんですか」というアンケートを取ったんですね。すると、「亡くなった母と行った展覧会にこれがあったから」とか「今の夫とデートで行った展覧会でこの作品を見たから」といったお答えをもらったんです。美術作品の美術史上の価値、学術的な価値をあげた方は思った以上に少なかったんです。みんな個人的な思いとか、思い込みも含めて、そうやって作品を見ているんだということを実感できたんです。そういうことを知らずに、僕は「これはいい作品でしょ」と一生懸命解説を書いていたんですが、どうもそういうものだけではない、と。学術的な研究は必要なことです。でも、僕らが思っているのとは違う美術の関わり方の世界があるんだと。市民キュレーターに学んだことも一緒なんです。

**植木**：我々が学べるのが非常に大きか

ったですね。結局私たちは、思い込みだけで仕事をしてたのかしら、とまで思ってしまったんです。私たちが信じていることってなんだったんだろう、というくらい自由というか。みなさん、表現したいものがいっぱいあるんですね。私たちにないものが。かといって、彼らのような展覧会をやろうとは思わないんですね。それは次元が違うというか、上下ではなくて、私たちは私たちがやらなくてはならないことがあるというか。でも今回のようなことをやれる機会を持って、そこから学べるというのは大きいんですね。本当にありきたりな言葉ですけど。非常に勉強になりました。

**高岡**：そこにもenocoがあった意味はあって。オーソドックスな美術館だとそういうことはできないでしょうし、規模の意味でも、市民キュレーターは1回5、6人の市民相手に結構な時間を割くわけです。見ようによっては効率の悪い無駄なことをやってるんじゃないの、と評価をされかねない。そういう中でenocoは割と実験的なことを求められているように思います。もちろん数字も言われるんですけど、まだやりやすい。

**植木**：美術館は敷居が高いとよく言われるじゃないですか。美術館というのはそういう施設だからこそ、最初の立ち位置がとても重要なんです。ただ、enocoはそれがいいんですね。だから、ある意味ラポです。高岡：今後、箱として新美術館ができてくるじゃないですか。その時にどういった連携や役割分担ができるのがいいのかというのを、考えているところです。

**菅谷**：もちろん、館の運営そのものもしっかりやらなくてはいけない、つまり多くの方々に来てもらわないといけない。その一方で大阪という地域の美術状況に関しては責任を持っていかないといけないと感じています。その時に、どうしても美術館の中だけに納まらないものがあるわけで。それは、美術館とは違う形態であるenocoでもらわなくてはならないこともあるだろうし、逆のこともあるだろうし、そういう形での関係性が出来ればと思っています。

**植木**：建物は大きいのが1つ、小さいのが1つあって、コンテンツもそれぞれのものがあって。それを俯瞰してみた時に最適化を図っていくというようなパートナーシップや関係性をつくっていったらと思います。せっかくなら、大阪だからこれができたよねというようなことが示せるモデルのようなものも、2つの機関が示せるとちょっとかっこいいかなと思います。あとは「こうしなければいけない」という関係にしないで、常に話し合っ共有していくことができたと思います。役割「分担」というか、これは私の仕事ではないということではなくて、定期的に情報交換してお互いに行けるような状況をつくるというのは面白いのではと思っています。展覧会を協力してやってみましょう、とか、enocoがこれを展示する時にはうちではこれを展示しますというレベルの連携ではなくて、アートの状況に対して我々が今何ができるのかということと共有する連携ができればいいですね。

**高岡**：私たちは運営を担う指定管理者の

人間ではありますが、大阪府と大阪市の施設でそういう関係が築けるのは嬉しいですね。

**菅谷**：やはり人と人との関係が基礎にあると思います。制度とか組織ということもありますが、柔軟に対応できるから。人との関係がうまくいってれば、結構うまくいくんじゃないかなということを感じるんですね。長い間にはいろんなことがあると思うけども。

**植木**：あんまり個人の関係を持たせようとすると、その個人がいなくなった時に全てを失ってしまうリスクがあるので、そういった関係が築ける環境はつくっておく必要はありますけどね。

**菅谷**：そうですね。新美術館が立ち上がって最初の時期、3年間ぐらいの間に、そんな環境づくりができるとうと思っています。

**菅谷富夫 (大阪新美術館建設準備室 研究主幹)**  
1990年財団法人滋賀県陶芸の森学芸員、1992年大阪市立近代美術館建設準備室学芸員。2013年より現職。近代デザイン、写真、現代美術の分野を担当する一方、新美術館整備のための準備を行う。担当した主な展覧会は「美術都市・大阪の発見」「早川良雄の時代」展など。著書に『都市デザインの手法』(共著)、『デザイン史を学ぶクリティカルワーズ』(共著)など。

**植木啓子 (大阪新美術館建設準備室 主任学芸員)**  
英マンチェスター大学大学院、仏マルセイユ研究滞在を経て、1997年よりサントリーミュージアム[天保山]学芸員。グラフィックやインダストリアルデザイン、建築などの展覧会を手がけ、2012年から大阪新美術館建設準備室主任学芸員(デザイン)。現在は企業、行政、大学等とのデザイン連携と場の創出に取り組んでいる。



- 97 自治体が所蔵する美術作品を適切に管理し、有効に活用する
- 98 展示場所や活用機会を増やす
- 99 作品展示だけでなく、多様な活用方法を試みる



「津高和一展～抽象のエスプリ」(2014年9月開催)。津高和一作品は90点ほど所蔵

## 事業概要

## » 大阪府20世紀美術コレクションの活用

大阪府立現代美術センターの閉鎖に伴い、大阪府が所蔵する約7,900点の美術作品によって構成された「大阪府20世紀美術コレクション」の管理・活用を継承。作品の活用機会を増やすため、館内での展覧会開催や美術館等への貸出に加え、公共施設やオフィスのエントランスなど、不特定多数の目に触れるパブリックな空間への貸出も積極的に推し進めた。

館内展示 展示室、エントランスホール

外部展示 大阪モノレール駅構内「モノレール美術館」

大阪万博記念公園内「現代美術の森」  
大阪府庁本館「現代美術の回廊 ココア[COCOA]」  
The Corridor of Contemporary Art

大阪府庁新別館地下連絡通路展示コーナー(2013年度まで)

貸出業務 美術館への展示貸出

公共施設や民間ビルのエントランスホール・ロビー等への展示貸出

その他 enocoアートキャラバン等

## 関連事業

▷ 40YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの形成

▷ 5YEARS 大阪新美術館建設準備室(大阪市)との連携

▷ 3MONTHS 市民キュレーターワークショップ

▷ 3MONTHS dracom「gallery (extra version)」

▷ 2WEEKS 大阪府20世紀美術コレクション展

▷ 2WEEKS eno co-labo.

▷ 2DAYS アートフォーラム〈こどもとアート〉の現場を考える

▷ 1DAY enocoアート・キャラバン

▷ 3HOURS 大阪府20世紀美術コレクション 連続講座/ミニコレクション展

## 実施のコツ!

## » 学芸員を配置する

大阪府のコレクションに精通した学芸員を担当スタッフとして配置し、大阪府の研究者と連携を図りながら、収蔵品の管理と活用を進めた

## » 外に向かって展開する

enocoの展示空間だけでは活用の機会に限られるので、大阪府庁等の公共空間への常設展示を行い、民間企業や病院等のエントランスホールなどへの展示を提案するなど、できるだけ多くの場所で展示できるようにした

## » 異なる要素と掛け合わせる

多様なジャンルを扱うenocoらしい企画として、コレクション展示とパフォーマンスのコラボや、コレクションを活用したワークショップの実施といった、創造的な活用にも力を入れた

府の財産であるコレクションの有効活用は公共施設としての使命ですが、展示空間が小さく、大勢の集客が見込める有名な作品があるわけでもないで、活用方法の工夫が必要でした。外部への積極的な貸出や多様な活用展開はその方策のひとつですが、一方で作品のコンディション維持も重要であり、相反する要請をどのようにバランスさせるのかは大きな課題です。



- 100 子ども向け・親子向けの実験的なアートプログラムを生み出す
- 101 地域性や地域課題を意識したアートプログラムを開発する



「自分の分身をつくろう」ワークショップの様子。子どもたちが自由にのびのびと表現できる場をつくる

## 事業概要

## » タチヨナ×enoco企画

学校等でのワークショップを得意とするタチヨナとともに、enoco独自の子ども向けアートプログラムをつくる事業。2012年度に開催した大阪市立明治小学校(大阪市西区)での「バックページ」ワークショップ&展示より開始。当初は子ども向けの単発のアートワークショップを実施してきたが、次第に地域性を意識したプログラムを展開するようになった。enocoがある西区は隣接のマンションをはじめ、「都心回帰」のマンション建設ラッシュによる子育て世帯の流入が急増している地域であり、核家族も多いと見られる。今後も更に子どもの人口が増えることが予想されていることから、enocoの核となるプログラムのひとつである。

2012年度～継続中

共催:NPOcobon(2015年度から一般社団法人タチヨナ)

[実施プログラム]

2012年度「バックページ」ワークショップ&展示 講師:三原美奈子(デザイナー)

2013年度

・タチヨナ × enoco企画 子どもアートワークショップ vol.1

「じぶんの分身をつくろう」講師:池田郎子(アーティスト)

・タチヨナ × enoco企画 子どもアートワークショップ vol.2

中学生のための「アイデアをカタチにするワークショップ」講師:中村征士(アートディレクター)

・タチヨナ × enoco企画 子どもアートワークショップ vol.3

へんな楽器 Kazoo(カズー)をつくろう! 講師:激団モンゴイカ(ジャズバンド)

・タチヨナ × enoco企画 子どもアートワークショップ vol.4

「コンピュータでアニメーションを作ってみよう。」講師:重田佑介(メディアアーティスト)

タチヨナ × enoco企画 子どもアートワークショップ vol.5

セルフポートレート写真ワークショップ「未来の姿を写してみよう」講師:松本美枝子(写真家)など

## 関連事業

▷ 2MONTHS 《なんだこれ?》サークル

▷ 3HOURS 中学生のための「アイデアをカタチにするワークショップ」

▷ 3HOURS ご近所映画クラブ〜3時間で映画をつくる〜

## 実施のコツ!

## » 多様なテーマで継続的な参加を促す

単発でのワークショップだけでなく、テーマを設定し講師となるアーティストを変えながら実施するシリーズも展開し、より継続的に参加できる枠組みをつくった

## » 同じ施設内で連携

共催相手のタチヨナはenoco内シェアオフィスに同居し密な連携を取っている

## » 小学校への事前のリサーチ

子育て世帯が急増する西区の状況についてもタチヨナが持つ近隣の学校ネットワークを使ってリサーチ等を実施した

## » 意外なクリエイターとも協働

新たなターゲット向けプログラム、子ども向けワークショップ経験のないクリエイターと協働してのプログラム開発など実験的な要素を取り入れた

地域の学校でのワークショップ経験もあり、学校とのネットワークやノウハウを持つ最強のパートナー・タチヨナとともに進めてきたプログラムです。子どもを取り巻く状況、特にenoco近隣の状況を踏まえたプログラム開発を意識しているのですが、アーティストがすでにどこかで実施しているワークショップではなく、このプログラムにあわせて内容を新しくつくっています。打ち合わせを何度も重ね、リハールもするので、アーティストにとっても私たちにとってもハードなプログラムです。ここで生まれたプログラムが他の地域に飛び火していくことも目標にしている、2016年度には「オヤトコエノコ」を府内の自治体公民館にて実施するなどの動きも生まれています。



## 小島剛

(一般社団法人タチヨナ代表理事)

### —enocoとの最初の関わりは？

小島：2012年にはもうここにいました。当時、おおさかカンヴァスのスタッフをしていてカンヴァスの事務所にいたんですよ。それでそのままここに。

高坂：カンヴァスはenocoに事務所がありますからね。

小島：そうですね。その前は、築港赤レンガ倉庫とPiaNPOに拠点があったNPO大阪アートアポリアのアートディレクターをしていました。その経験があったので今個人としても動いているところがあって。現在はプレーカブプロジェクトの担当ディレクターもしています。

高坂：小島さんは2011年にタチヨナ(Touch On Art)を始めたんですよね？

小島：「中之島4117」という大阪市のアートインフォメーションセンターがあったのですが、そこは団体であったり個人であったり、寄り合いで運営されていました。で、その4117がタチヨナという学校への出張事業を始めることになって、子ども向けのプログラムに長けていたNPO cobonが加わりました。

高坂：で、今は、cobonの中にあつたタチヨナが法人化した、と。

小島：cobonのタチヨナという事業を、2015年にそれだけ独立化させてつくったんですよ。

高坂：「NPO cobonの中にあるタチヨナ」と「一般社団法人タチヨナ」があるわけですね。

小島：同じ名称なんですけど「非営利団体」としての法人格を持つところと「株式会社」や「任意団体」としての法人格を持

つところの名称を使い分けるといような形に似ています。

高坂：イコールかと思ってました。

小島：違うんです。具体的に言うと中身が違うんですね。NPO cobonの方は、もともと「こども盆栽」という名前だったので、ターゲットが子どもなんです。最近、世代的にいろんな人が交わるプログラムを受けることもあるので、NPO cobonで大人も対象にしているのは少しおかしな話やろう、と。それで一般社団法人タチヨナをつくって、大人も対象となる事業はそちらで受けています。事業内容として分けているんです。その方が僕らとしても動きやすい。市民講座や市民活動をサポートする事業では一般社団法人タチヨナを使って、子どもの教育に近いもののアートプログラムであるものはNPO cobonで受けているというわけです。

高坂：2012年にenocoがグランドオープンした時に、小島さんたちと初めて協働して。その時はまだcobon名義だったんですけど、近隣の小学校でワークショップをしてつくったものをenocoで展示するという企画でした。

小島：前年にもやっているんですけど、同じものを別の学校でもやってみようか、という話になったんです。前年の「中之島4117」での学校出張事業でenocoのすぐ近くにある明治小学校の先生と仲良くなって、ここにenocoがあるから先生にも声がかけやすかったですよ。「学校でつくってそれを地域で見せられるんですよ」と。「やりませんか?」という話を持って行って。

2016年9月21日 @enocoクリエイティブシェアールーム

聞き手: 榎原充大(RAD) + 高坂玲子(enoco)

高坂：逆に私たちは当初学校へのチャンネルを何ら持っていなかったのが、小島さんたちが頼りでした。提案を受けて、「そういう取り組みも大事だよ」ということで一緒にやったんだと思います。

### —それぞれにとって利点のある取り組みになったわけですね。

高坂：そうですね。初年度のその取り組みがスタートでしたね。そしてシェアオフィスができたのが2013年の4月でしたっけ？

小島：そう。その年の3月までカンヴァスの事務所がこのスペースにありました。

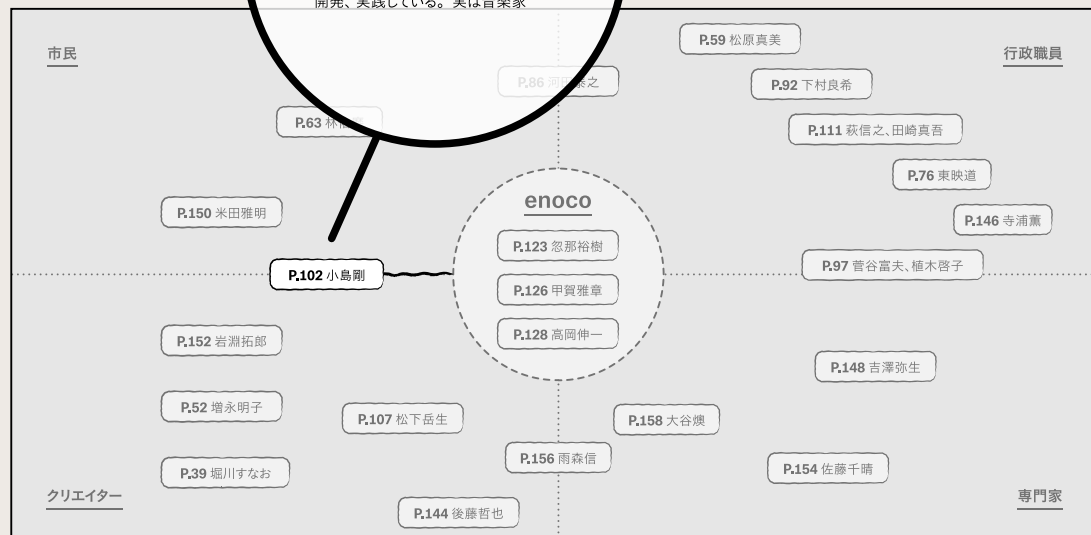
### —小島さんがenocoを知ったのはいつだったんですか？

小島：ここの事業計画はずっと知っていました。現美センター時代も知っていました。ここに来ることも知っていました。ただ、シェアオフィスになるかならないかという時点で、オフィス利用としておおさかカンヴァスで入ってきていたので、このままオフィスで使えたらいいなという思いはありました。

### —このままenocoを使いたいという思いがあったんです。

小島：シェアオフィスにならなくても、何かしらでこのスペースを使えないかと思っていました。この場所は大阪の中でも中心部なので、アクセスがすごくいいんですよ。みんな「ちょっと遠い」とか言うんですけど、僕にとっては全然そん

インタビューネットワーク図



なことないですね。もったいないと思います。もっとみんな使えばいいのに。

### —ここに来る前は、西区との関わりはありましたか？

小島：西区との関わりはなかったですね。cobonの事務所はもともとここから東南の天王寺区にあったので。個人事業に近い形だったので特定の事務所を持たずに、事業の兼ね合いとしてそこに居候しているというような感じでした。

### —西区に対しては、それまでどういうイメージだったんですか？

小島：まちな真ん中、ですね。西区は中央区のすぐ隣で、本当に中心に近いところですね。

### —アートの拠点というイメージはありましたか？

小島：西区にもenocoにもアートの拠点というイメージは持っていない。ア

トの拠点という、ギャラリーのように先鋭的な企画をバンバン打っているようなイメージがあるんですが、enocoは広く府民に貸し出しているレンタルスペースみたいだと思っていて。多分みんなそういう認識が強いと思うんです。クリエイティブセンターに近い感じ。行っている事業に即して考えてみると、NPO cobon自体がキャリアや子どもの学びといった教育的視点から考えるNPOなんです。ね。「アート」も入っているけれど、それはタチヨナの事業だけで、ほぼ「子どもが考えるまちづくり」というものを大きな中心として考えています。例えば僕らがインキュベーション施設に入ったら、教育の方に振れがちなんですけど、アートセンターに入っていることによって子どもの教育とアートというものをダイレクトに結びつけやすいですよ。アートと言った時に、ちゃんとアートセンターにいるということが必然性を持つ。これはなかなかないと思います。

### —そういう共生の仕方というか。

小島：だからenocoの存在は僕らにとって大きかったですよ。他の場所をレンタルオフィスとして借りるのは意味合いが違うんですよ。それに住所も、公の施設から来ました、という学校などに入るハードルも下がりやすいんですよ。高坂：お互いにうまく利用し合っていると、経験のある小島さんたちと一緒にやっている、ということが強みになるんです。

### —関わってもらう人たちの変化、というか、enocoができて変わったことはありますか？

小島：子どものプログラムで面白いのは、子どもは成長していくからすぐにニューカマーが入ってきて、すぐに抜けるんですよ。大人だったらずっといるじゃないですか。「enocoができた当初から来てます」とか。でも子どもはそうはいかないんですよ。初期のタイミングでよく来ていた子どもはもう中学生です。高坂：年齢があがって、部活などで忙しくて来れないという子もいますからね。



## 102 建築・都市系の各大学で行われている演習の成果を行政施策の検討や基本構想等の立案に反映させる

## 103 大学間の横断的な活動を可能にするプラットフォームをつくる

だいたい来て2〜3年です。行政並みに入れ替わりがあります。

小島：だから、小学校高学年をターゲットにしたプログラムは多かったんですよ。2〜3年というスパンでプログラムに参加してくれて、そこでの学びをもって進学する、というイメージで。

高坂：次にその兄弟姉妹が参加することはありますけど。2014年の「なんだこれ？サークル」はそのいい例でしたね。

小島：アートのパフォーマンスにはどんなものがあるかな、と思った時に、そういう「教科書」みたいなものをつくって最初に配って「これやってみよう」と促すことをしてみました。そして、子どもたちに場所を解放したんですね。

高坂：今は、それに参加してくれていた子が中学生になって受験を迎えていたり。enocoの地下の休憩スペースによく宿題をしに来てくれることもあって、ちょくちょく顔出してくれていますね。でもワークショップなどには忙しくてなかなか来れない子もいます。ただ、「なんだこれ？サークル」などに参加することで、enocoに足を踏み入れるハードルが下がって日常的に来るようになったと思うんです。

—cobonとしてはそういう子どもたちが遊べるような場所づくりのプログラムが多いのですか？

小島：それはいいですね。基本的にはそのようにはつくってなくて、立ち上げてそこに集めることの方が多いですね。別に子どもの居場所をつくるわけでもなくて、あくまでプロジェクトの中で

の成果、というか、居場所づくり的なプログラムはこのケースだけですね。

そして、最近は、低学年でも参加できるプログラムとして、親子向けのプログラムを始めました。親子で参加できるプログラムは世の中にたくさんあるんですよ。ただ、つくるものに対して、親の意向というものがだいぶ入りやすい気がします。そこに何かできないかと思い、子どもが自分の意思をもってできること、そして同時にそれを親がサポートするんじゃないかとひとりの人間として一緒につくること、その両方をあわせて親子の対話を生み出すことを目論む「オヤトコエノコ」というプログラムをつくっています。

高坂：子ども向けのプログラムは、教育普及とか展示会の連携プログラムとか、手堅い感じでやることが多いと思うんですが、タチヨナとの事業はお互いに実験だと思ってやっています。特に高学年向けは集客にも苦労するんですが、やってみないとわからないことがあると思うので、集客よりも、実験する・開発するという点を重視しています。「オヤトコエノコ」もマンション建設ラッシュで、子育て世代の流入が増えている西区の状況も踏まえた上での、新しい親子向けプログラムとして考えています。

小島：一般社団法人をつくった理由でもあるんですが、今は子ども・親子からさらに高齢者の福祉に興味があるんです。このエリアに住んでいる人たちの層を意識していますが、独居であったり、核家族であったりする、様々な世代の問題をなんとか拾い集めていけるプログラムも考えています。

—それは、子どもたちと高齢者が一緒になって行なうようなものですか？

小島：この半年ぐらい別のプロジェクトで、偶然にも高齢者の役割が見えてきたりすることもあったので、ミックスさせた方が良いんじゃないかと思っています。高齢者だけでプログラムをつくるのではなくて、子どもや若い世代と組み合わせることで高齢者のアクティブさを引き出すことができるんじゃないかな、と。

—今後の展開としてどんなプロジェクトを考えていますか？

小島：市の塾代助成制度などを使って、しっかりとアートの学びの場所をつくりたいと思っています。子どもたちが利用するための手続きは難しいようですが、使えるプログラムは広がっていて、大阪市にしかないシステムだと思うので、これを使わないともったいないですよ。他には家庭や社会で様々な課題をもつ子どもたちにもアートを学ぶことで個々の自立や創意工夫を促し、社会性を養えるような学びの場を提供したいと考えています。

小島剛（一般社団法人タチヨナ代表理事）  
大阪音楽大学非常勤講師、音楽家。IT企業での勤務の傍ら、即興音楽やコンピュータ音楽の音楽家として国内外で活動。退職後、NPO大阪アーツポリアにて大阪築港赤レンガ倉庫でのアートイベントやライブを企画。2011年から「NPO cobon」で小学生向けのアートプログラムのコーディネートに関わり、2015年に一般社団法人タチヨナを立ち上げる。現在も音楽家として活動しながら、小中学校やアート・センターなどで実験的なアートプログラムの企画・コーディネートを行なっている。



各大学の提案をまとめて展示するとともに、合同講評会とシンポジウムを同時開催した

### 事業概要

» 大学間連携の設計演習による社会に近接した教育現場の充実と、地域課題の解決や行政課題化に向けたプラットフォームのあり方検討事業（略称：大学間連携）

建築・都市系の各学部・学科で取り組まれている設計演習を、共通のテーマのもとで取り組んだ。社会背景についての学習、フィールドワーク、中間エスキスの実施から展示会の開催、プレゼンテーションからシンポジウムに至るまでの一連のプロセスを、大学を超えて共同で実施。演習の各ステップで現実の社会課題に取り組む行政機関や専門家へのプレゼンや議論の場が設定され、学内のバーチャルな課題ではなく、アクチュアルな実践となるようなプログラムとした。

### [2012年度]

大阪市立大学と立命館大学の2校による課題の連携と合同展示会の開催  
参加大学数：2大学

### [2013・4年度]

5大学による課題の連携と合同フィールドワーク、中間エスキス、展示会&シンポジウムの開催  
参加大学数：5大学

### [2015年度]

前年度のプログラムに加え、ミズベリグ世界会議inOSAKAでの作品展示及びプレゼンテーション  
参加大学数：6大学

### [2016年度]

「大阪・関西での『滞在』を考える」を共通テーマとして企画提案とプレゼンテーション  
参加大学数：10大学(22グループ)

### 関連事業

▷ 5YEARS プラットフォーム形成支援事業

### 実施のコツ！

#### » 事務局を受け持つ

各大学の教員と緊密に連携しつつ、プラットフォーム形成支援事業が事務局の役割を担った

#### » ゆとりを持つ

演習課題のテーマやスケジュールを完全に一致させるのは困難なので、大学の事情に応じて参加できる緩やかなプログラムとした

#### » 徐々に仲間を増やす

2大学間の連携から初めて、徐々に賛同者を増やしていった

#### » 学生の活躍の場をつくる

会場構成や成果のとりまとめなど、学生にも役割を与えた

#### » フィードバックの準備

行政機関等に予めりサーチを行い、現実の問題や取り組みを演習と関連づけ、学生のリサーチや提案が行政にフィードバックされやすいようにした

大学教員と学生、そして行政機関が三位一体となって進めてきたプロジェクトで、enocoのプラットフォーム形成支援事業がプラットフォームの形成を担いました。2016年度に企画から協働した大阪府企画室の狙いとしては、大阪の課題解決に関心をもってもらう学生の定住を促進するために、就職先となりうる在阪企業との連携も強化しています。





## プロセスの1例



複数の大学から学生が一堂に会し、計画対象地とその周辺について、現在進行形で進められているプロジェクトのレクチャーを受ける



フィールドワークで感じた地域の課題や可能性を、チームで議論しながら洗い出す



課題制作の途中段階で実施する中間エスキスの様子。他大学の先生や学生から様々な意見が投げかけられ、計画を更に練り上げていく



優秀作に選ばれた作品の最終プレゼンテーション。聴講している学生も他大学の発表から多くのことを学び取る。行政職員も聴講に参加



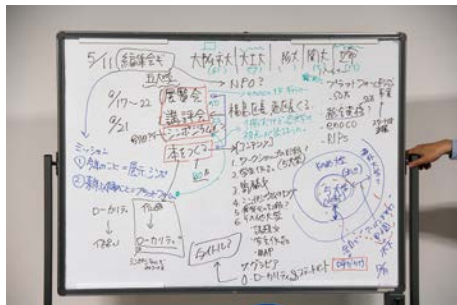
enocoを拠点に、大学の混成チームで対象地のフィールドワークを実施



フィールドワークの結果を発表、参加者全員で共有していく



完成した演習課題を集めた合同展覧会。各大学の先生にゲストとして建築家などが加わり、ひとつひとつの作品についてクリティークが行われる



学生によって運営チームが構成され、課題の制作だけでなく、様々な役割が与えられる

プロジェクト関係者に尋ねる

## Project Related Interview<sup>10</sup>

大学間連携

### 松下岳生

(大学間連携プロジェクト事務局長)

2016年8月22日 @enoco

聞き手: 榊原充大 (RAD) + 高岡伸一 / 高坂玲子 (enoco)

—松下さんと enoco との関わりは？

松下：大学間連携の事務局長をしています。建築や都市系の大学では設計演習課題というのが重視されていて、僕自身も教えているのですが、せっかく学生が一生懸命考えた計画でも社会との接点が少ないため、学内の発表だけで終わってしまってもったいないんですよね。もっと社会に近接させながら、うまくいけば行政のパブリックコメントのオルタナティブな提案にできるくらいのクオリティまで高めることができなかな、と。それを目指しているのが大学間連携ですね。

—初年度から明確なミッションがあったのですか。

松下：初年度の2012年は立命館と大阪市大だけの参加でしたし、正直それほど明確ではなかったです。設計課題の成果を共有する合同展覧会ぐらいの意味合いしかなかったんですね。参加大学が5大学まで増えた2年目からは、課題に取り組む最初から一緒にやっというということで、一緒に集まってフィールドワークもしました。

高坂：課題を共有するところからはじまったのですか。

松下：そうですね。発表の前に中間講習会を設けてるんですね。そこで一度学生に発表してもらって、他大学の先生に自分のつくった内容を評価してもらいます。そして最終講習会でバージョンアップさせて展示する、という流れですね。「地域の課題」という部分に着目している

ので、2013年は西区長と福島区長にもお越し頂いて、いろいろとコメントをもらいました。その時の対象エリアは中之島GATEで、西区、福島区、そして北区と色々な行政区域にまたがっているんです。行政も区の周縁部で他区にまたがるような場所には手をつけにくいのですが、そこをつなぐことで魅力的な場所になると考えたわけですね。

—そういった難しいエリアについて、各大学で共通して設計演習課題にすることができるのですか。

松下：難しいところもありますね。高岡：大学ごとにカリキュラムが違うので、課題やスケジュールをかつちりと合わせるのは難しいとか。松下：大学間連携では、いつも立地型とテーマ型の2つ用意しています。この場合、テーマ型は水辺、立地型は中之島、特に中之島GATEと、なるべく幅を持たせて連携しやすい方法を考えています。

—プラットフォーム形成支援事業のひとつに組み入れられたのがこの2年目で、この年から府の予算もついているのですか。

松下：そうですね。やっぱりお金も大事です。極力、行政等からのお金に頼らず自立してうまく回るような仕組みをつくれな、今探っているところです。3年目である2014年のテーマは「エリアマネジメント」で、少しアーバンデザインの視点を入れながら、エリアを運営

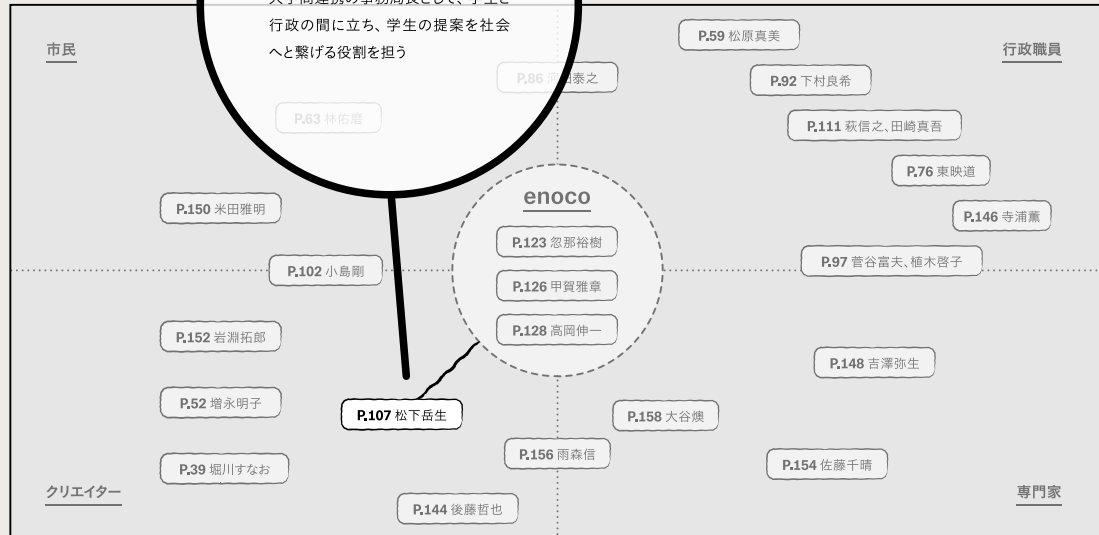
していくような提案を考えてもらう機会にしました。この時の講習会とシンポジウムに建築家の藤村龍至さんや、大阪市の副市長に来ていただきました。地域にも歩み寄りつつ、行政にも近寄りつつということを意識しましたね。

2015年は「ミズベリング世界会議」という、国土交通省の近畿地方整備局が主催の水辺活用に関するシンポジウムの中で、15提案の模型とパネルを3日間展示しました。3日目にプレゼンテーションの機会を設けて学生に発表してもらったのですが、近畿地方整備局の方に絶賛いただきましたね。いろいろなことを考えて、ここまで整理して、繋いでいくスタンスは素晴らしいと。実際に実現できるかどうかを調べるという動きにまで発展しました。結局実現までは至らなかったのですが、なかなか有意義な提案になったと思います。

—課題を見出して解決するという形の提案が多いですか？

松下：そうですね。結構多様なので、実際に提案を聞いてもらう相手もしっかりと選んでいきたいと思っています。行政職員や建築家を呼んでいるのですが、まだまだ社会へのフィードバックができていないんです。例えばどこかで展示をする、とか役所のエントランスホールで模型を並べて見せる、とか。学生が一生懸命つくった模型なのでなかなか迫力あるし、わかりやすくつくっているんです。そのクリエイティブさを社会に届けたいと思っています。

インタビューネットワーク図



—そうした成果の「活用のされ方」のイメージについて、松下さんはどう考えていますか？

松下：学生提案は、法令も意外と細かく押さえた実現可能性の高いものもありますし、行政の施策に対してクリエイティブな視点を提供したり、オルタナティブな提案となるような活用のされ方もあると思います。行政の基本構想の検討段階にちょうど学生の提案が重なったりすると、うまく行政担当者の耳に入って反映されるかも、と思ったりします。

—2016年度のテーマは？

松下：今年は観光です。大阪府に定住促進をはかるための滞在を考えるというテーマなんですけど、大阪に滞在するとはどういうことなのか、ということから考え直すことが肝心だと思います。  
高坂：それは今、大阪がインバウンドで賑わっているという状況も踏まえてということですか？  
松下：もちろん、それもありますね。あ

と今回ユニークなのは、これまでの成果に大阪府の企画室という部署が興味を持ち「一緒にやりませんか？」と声をかけてくださったことです。enocoのプラットフォーム形成支援事業の中で展開してきた成果かな、というところがありますね。「大阪・関西での滞在を考える観光定住促進の切り札とは」というテーマで、学生なら誰でも参加できるよう枠を広げて、公募で作品・提案を募集しました。都市系・建築系でない学生からの提案もありました。  
高坂：設計演習の中で「定住」を考えるのは面白いですね。  
松下：例えば、病院への入院も滞在と捉えるような提案があったり、あるエリアを民泊できるようにするため、という風に空間を変えるのが効果的かという提案があったり。もちろん、観光の話もあったりね。公募にして建築・都市系でない大学・研究室も参加したことで幅が広がりました。企画室としても、今回の協働を通して、大学生の定住促進ができないか、つまり卒業後に東京で就職するのではなく在阪企業に就職する学生を

増やすことができないかという狙いも持っています。

—enocoとの協働は何がメリットになっていますか？

松下：やっぱり、場所があるというのはすごく生きていましたね。集まって話す場所も必要になりますし、中間講評会のためにも場所がいらすし。だんだん人数が増えていくと、そこそこ広い場所が必要になりますし。こういうスペースがあると非常に意義深いし発信もしやすいなという気がしますね。

—これから先の展開をどう考えておられますか？

松下：学生のプラットフォームと企業のプラットフォームがあって、学生の方は学生主体でも回せるようにしたいですね。学生が講評してもらいたい人を自分たちで選んだり、会場のデザインを考えたり、ということですね。そして企業の方は、優秀な学生と就職活動をする前か

ら知り合えるというメリットがあるので、その機会をうまく活用できるような仕組みをつくりたいと思っています。自分の大学の先生だけに教えてもらうのではなく、他大学の先生も一緒になって議論していくのは、おそらく先生としては大変な部分もあると思うんですけど、社会性が一層あがった提案につながっていると思うんです。僕はすごい意味があることだと考えています。

—提案の実現を目指す取り組みがあっても面白いですね。

松下：いままさに大学間連携での提案を取り上げ、プラットフォーム形成支援事業として行っているものがあります。例えば大阪府のまちづくり施策で計画変更が検討されているエリアにおいてステークホルダーでない大学及び学生が調査から分析、提案を行いながら、ステークホルダーと一緒に検討していくというものです。

高岡：こうした取り組みがプラットフォームとして独立できたら、20年30年と継続していくことは可能だと思いますか？

松下：お金があれば、ですね。だから稼がないとダメだと思っています。稼げる仕組みを整えないといけないのですが、そこまでなかなか手が回ってないんです。  
高岡：毎年の合同設計演習がベースとしてあって、そこに具体的なプロジェクトや依頼が入って来て、うまくマッチングしていくつかの大学で実際に関わってもらう、というのが理想ですね。事務局は

大変ですけど。松下さんの視点から見た課題はどんなものですか？

松下：続けていこうとすると予算がいりますから、そこですね。それから、プラットフォーム形成支援事業などを活用して、行政とのつながりをこれからどうしていくかも課題ですね。

高坂：行政に近いところでありつつ、完全に行政ではないというenocoの存在がポイントになるわけですね。

松下：そうですね。先にあげたまちづくりのプロジェクトでは、行政が抱える課題を、enocoが絶妙かつ程よい距離感で丁寧にはぐしながら動いていただいていますからね。そういう関係を組めるのはありがたいと思います。

松下岳生（大学間連携プロジェクト事務局）  
NPO法人パブリックスタイル研究所事務局長、環境デザイン事務所 素地 (soji) 代表。ひとと自然とのより良い関係を提案するランドスケープのデザインからプログラム、またそれを支える仕組みづくりまで、多岐に渡る活動を展開中。



## 104 計画から運用まで常に市民が主体的に関わる公共空間整備を行う



整備後の遊歩空間。2017年3月末には広場部分の工事も完了し、全体の供用が始まる予定

### 事業概要

#### » 木津川遊歩空間整備

土木施策を担当する大阪府の西大阪治水事務所と文化施策を担当する文化・スポーツ課が連携して、河川の遊歩空間整備支援をプラットフォーム形成支援事業として実施。enocoのそばを流れる木津川の遊歩道の一部の整備について、企画段階から地域の意見を積極的に取り入れ、コンペによってアイデアデザインを募集し設計に反映させた。完成後の管理運営を公民連携で行うため、地域主体の運営体制づくりを進め、2016年4月には「木津川遊歩空間を楽しむ会」を結成した。

2012年度：木津川遊歩空間アイデアデザインコンペの実施

2014年度：活動コミュニティ形成のため近隣に説明とヒアリングを実施

2015年度：木津川遊歩空間一部完成・供用開始

2016年度：NPO主導による地域活動コミュニティの形成

主催：大阪府

### 関連事業

▷ 1YEAR 木津川遊歩空間整備事業における制度設計補助

▷ 6MONTHS 木津川遊歩空間アイデアデザインコンペ

▷ 3MONTHS 木津川遊歩空間整備計画ワークショップ

### 実施のコツ！

#### » スタートからゴールまで伴走する

事業の立案段階から工事の完成を経て供用が始まるまで、長期間にわたって継続してenocoが伴走した

#### » キーマンを見つける

文化・スポーツ課と連携しながら、西大阪治水事務所のキーマンが社会実験として前例のない事業を強力に推進した

#### » 状況に応じてチームを編成する

設計段階、工事段階、そして供用開始と、各ステップに応じて外部の専門家を招聘してチームで事業を進めた

#### » 市民の位置づけを重くする

管理運営のステークホルダーの一員として市民が関わるスキームを構築した

規制の厳しい水辺の土木構築物を、地域の声を取り入れながら運営も含めてデザインしていく一連のプロセスは、関係者の数も多く利害も様々で、その調整には大変な努力を必要とします。何より粘り強く合意形成していくことが大事ですが、ずっと継続して関わることができ良かったと思います。



プロジェクト関係者に尋ねる

## Project Related Interview 11

木津川遊歩空間整備

### 萩信之

(西大阪治水事務所 防災対策課兼水都再生課)

### 田崎真吾

(西大阪治水事務所 防災対策課)

2016年8月22日 @木津川遊歩空間

聞き手：榎原充大 / 川勝真一(RAD) + 高坂玲子(enoco)

—enocoと協働で行った木津川遊歩空間のコンペティションについて教えてください。

萩：大阪はもともと水の街で、区画整備や高潮対策などが進んでいく中で埋め立てをしたり防潮堤を高くしたり、もともと親しんでいた水辺の風景に背を向けて行ってしまったという反省があります。水辺との調和を改めて図っていくべきなんじゃないか、という考えで進めています。

キタは大人のまち、ミナミは道頓堀という商業のまち。これらのエリアは経済的にも恵まれてますから、言ってしまうと「自然に賑わっていく」エリアです。対して木津川遊歩空間は職住連帯地域で少し落ち着いた雰囲気ですから、ここは一線を画して、文化やアートを取り入れながら綺麗に整備していこう、ということを念頭に置いて計画してきました。今回の遊歩空間より下流側からドームの北側までのエリアでは何年も前から「コンペティションをして遊歩道を整備していこう」という話になっていました。ただ、コンペ実施のときに東日本大震災が起きてしまったんです。「その構造は本当に大丈夫なの？」と見た目に住民の方が不安を覚えて、地域との合意形成がうまくいかず中止になってしまいました。歴史を遡ると、阪神高速1号線辺り、四ツ橋筋辺りを流れていた西横堀川から西の木津川へ向かって、立売堀川という幅18mぐらいの堀が1.3から1.4kmほどあったのですが、戦後の戦災瓦礫処理や区画整理で基本的には道路や建物に、ということで

埋めてしまったんですね。木津川へ取りつく手前に130mの一部区間だけは大阪市の船のドックにしたいということで堀を残していたんです。地元の人からは、そこに水鳥が来たり亀がいたり水辺環境としては一定の寄与をしていたと聞いているんですが、我々は耐震事業を行わないといけない中で、ここに杭を打ち、さらには地盤改良もやっけていかないといけないので施工延長をできるだけ縮めるために、堀の部分をショートカットして埋め立てました。大阪市には船を別の場所に移してもらい、この埋め立てた土地と一体で遊歩道空間を整備しよう、ということになりました。ただ、普通に設計しても面白くないので、デザイン案を募集する形式のコンペを行いましょう、と。そしてそのコンペの前に地域とのワークショップを開催して、「どういう空間にしていきたいか」という地域の思いを反映したデザインがなされるように行政も意識しました。その段階からenocoも入っていたいたんです。

—そこで提案が選ばれたのが建築家の岩瀬諒子さんだったんですね。

萩：はい。採用された後もワークショップを重ね、岩瀬さんが住民の方と直接お話ししながら詳細の設計を詰めていきました。そこに土木設計を専門とするコンサルタントが入って技術的にサポートしてもらおう、という体制でした。

実は去年度、予算の問題で一部分しか供用できなかったんですけど、今年度は幸い広場部分の予算もいただくことができ

ました。市民の方にも「ここはどうなるのか」という期待を持っていただきましたし完成が楽しみです。

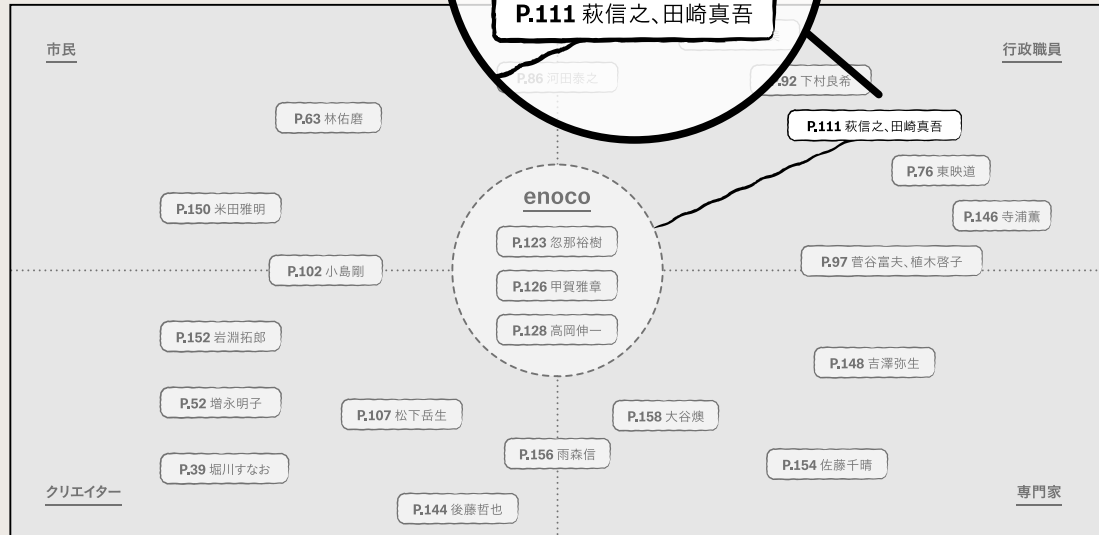
—この遊歩道の特徴はどんなところですか？

萩：まずは居心地の良さ。水辺や光などの恵まれた周辺環境と良く調和していて、全体的な形状や配置などの大きなスケールから、見通しの良いフェンス、かわいいホース巻取機、舗装材の使い方、ブランターなど細かなスケールまでこだわって設計されていることで、空間全体の居心地の良さを生み出している。これらを裏打ちしているのは、ワークショップやデザインコンペ等のスキームはもとより、設計者が近接・中間・遠距離と、ヒューマンスケールから鳥瞰までスケール横断的な視点を持って、緻密なリサーチ、スタディを繰り返し、メーカー協力も得て実証実験もしながら全体デザインとディテールを全てコントロールしてマッチさせていることが大きいですね。そのために大変な努力をかけられており、相当な強い思いがないとできないでしょう。

また、西区には水辺はたくさんあるけど実は近づけるところはほとんどなくて、ここは街中におけるとても貴重な親水空間となっています。それから、ここをまちの新たな資源として地域の人々に愛着をもって使いこなしていただくことも大切で、そのためのこの空間で地域の人々が1年を通じて自然を感じながら、西区ライフのクオリティを高めていけるような



インタビューネットワーク図



場所づくりをしようという取り組みも始めており、これも特徴といえますね。

一事業中の地域とのやりとりで印象に残っているのは？

萩：隣接するマンションの方からは事業に関していろいろご意見をいただくことも多く、生活空間との距離も近いことから「敷地と遊歩道の間に目隠しフェンスをつけてほしい」というご意見もありました。「それではせっかくのお部屋からの景色がもったいない」と思ったので、河川敷地を上手く使って植栽で目隠しをする提案をさせていただきました。2階から4階の全戸にアンケートをとって、最終的に合意をいただきました。

田崎：その時は萩さんたちが行かれたんですけど、2階3階の各部屋に入らせていただいて、各ベランダからの風景はどんなものかも全部見て回りました。

萩：いろんなパターンの完成予想図もつくって、お配りして、仮でフェンスを建ててみたりして「こういう風に見えるようになりますよ」とみなさんに具体的に

お伝えしました。そこまでしないと想像がつかないでしょうから。

一それくらいキーポイントだったんですね。

萩：そうですね。豊かな自然環境との調和が大切ですからね。

一工事をする上で大変だったことは？

萩：事業を引き継いだときには契約上は詳細設計が終わっていたので図面の通りやっていくのかなと思っていましたが、施工しながら設計を随時修正していったところですかね。審査会でも委員の先生方から「構造が複雑だから現場でデザイン管理をきっちりやらないと実現できないよ」と言われていたんです。その言葉が身に染みしましたね。一時は毎週岩瀬さんに大阪に来てもらって、長い時は10日連続で来てもらったこともありました。様々な施工業者やメーカー、コンサルタントと寄ってたかって話し合ってたとか実現しています。

一土木の工事でそんなに柔軟に対応しているものなんですか？

萩：施工業者は一般の土木業者さんなので慣れていない分かなり大変そうでしたね。本当によくやっていただけたと感謝しています。

田崎：工事しながら図面をつくるなんて初めてでしたね。

一enocoプラットフォーム部門との関係についてはどうでしたか？

田崎：うちはつくるのがメインなので、デザインコンペを実施するとなると全くノウハウがなかったです。その点をenocoにかなり補ってもらいました。本当にありがたかったですね。

萩：(PF部門チームの) 忽那さんもマンションの方との会議に何度かお越しくださいましたね。来てくださると雰囲気ガラッと変わって、関係性が良くなったという印象はありますね。説得力あるし、経験値あるし、「さすがやな」と。

田崎：それまで僕がマンションに月に1回

行っていたんですけど。議論が少し止まっていた時に忽那さんが来たので、どっしり感が、安定感がありました。あの時から風向きが変わりましたね。  
萩：忽那さん岩瀬さんのコンビも息合っていてとても良かったですね。

一今後、ということが計画されていますか？

萩：まずは3月末の完成を目指して広場の整備を進めていきます。それから“使いこなし”を充実させるための活動が始まる予定です。その前段として、「木津川遊歩空間を楽しむ会」という任意団体を住民さん、enoco、NPO法人TOYBOXの3者でつくっていただき、今はアドプト活動をしていますね。清掃や水やり、ヨガイベントなどをファーストステップとして実現してもらいましたが、これが発展していくイメージですね。季節ごとに緑を育てたり収穫イベントを開催したり、カフェでお茶をしたり、ヨガやコンサートなど楽しんだりできるように展開していく予定なので、地域のみなさんにどんどん参加していただきたいですね。

一こういった事業の今後の見通しはどうですか？活用されていきそうですか？

萩：デザインコンペを採用した事業がこれから出てくるかどうかは、関連する組織や地域がいかに合意形成を取るかということも鍵になりますね。今回は事業発足当時の関係者が真剣にまちづくりを考え「ここは文化部門と協働していこうか」

と決断してデザインコンペが成立したわけですね。

田崎：この遊歩空間は組織のトップの「水都事業に力を入れるぞ」という大きな流れの中で実施できたと思いますが、国交省でこういうデザイン整備を行う際にはこうしましょう、というガイドラインができればやりやすいと思います。

萩：その点もアイデアコンペの審査員でもある久保田先生や忽那さんなどが土木学会で研究されています。「基本ルール」みだりに浸透していけば良いと思いますね。僕らのチームのメンバーも様々な事業の経験はありますが、ここまで地域の方に喜ばれる事業はないと口を揃えますね。公共空間の整備のためのデザインコンペの条件として地元の思いを反映しようという考え自体が浮かびづらい。通常の広場や公園の整備事業ではコンサルタントが絵を描いて、つくり、そこで市民の方が楽しく遊んでくれれば良い、というぐらゐの感覚だったんです。

田崎：土木の本質は機能ですよ。この遊歩道は安全に歩けるという機能だけではなく、プラスαがある分コストがかかるんです。土木の基本的な考え方いうと、機能さえ満たせばそれ以上の贅沢はいらないよ、となるわけです。そのデザインを導入する基準が今はないので、プラスαのコスト分の必要性を説明しにくくて。「土木行政的には贅沢品だよ」と言われてしまいかねない。

萩：多少贅沢品でも、市民のための本質的な「効果」が期待できて投資に対する明確な意思決定ができればOKと思うんですけどね。それでまちが良くなれば多

くの方々に喜んでいただけるのではないのでしょうか。

**萩信之** (西大阪治水事務所 防災対策課兼水都再生課) 2002年大阪府入庁、2002～2005年度富田林土木事務所、2006～2009年度タウン推進室勤務、2010～2013年度事業管理室勤務を経て、2014年度より西大阪治水事務所勤務。水都再生事業、木津川遊歩空間整備事業、堂島川の遊歩道整備、橋梁のライトアップ、南海トラフ対策事業、防潮堤の耐震補強や水門の補強などを担当している。

**田崎真吾** (西大阪治水事務所 防災対策課) 2006年大阪府入庁。2006～2009年度枚方土木事務所、2010～2012年度河川室勤務を経て、2013年度より西大阪治水事務所。水都再生事業、木津川遊歩空間整備事業、大阪ふれあいの水辺事業、南海トラフ対策事業、防潮堤の耐震補強や鉄扉の補強などを担当している。

105 地域の課題等に対して、住民を含めた多様な関係者が連携協働しながら合意形成をはかる

106 アートやデザインの創造力で、社会課題を解決する

107 課題解決のための新たな行政手法を開発する



ワークショップの様子。外部のファシリテーター等の協力を得ながら、地域住民や関係者の合意形成をはかっている

事業概要

» プラットフォーム形成支援事業

enocoの指定管理者である長谷工コミュニティ・E-DESIGNプラットフォームグループが実施する、大阪府の委託事業。公共空間の利活用、地域の活性化、街づくりなど、単独の部局だけでは解決が困難な複合的な行政課題に対し、アーティストやデザイナー、府民、専門家などの多様な立場の組織や人が「プラットフォーム」を形成して、行政主導ではなく、対等な立場で交流・対話を行い、アートやデザイン等をツールとして、解決策を検討し提案する官民共同の体制づくりを支援する。

[主な実施事業]

- ・公民協働による土木空間整備と継続的な活用の支援
- ・地域主体のまちづくり活動やアートイベントの支援
- ・アートを活かした防災プログラムの開発
- ・大学と社会をむすぶ連携プロジェクトなど

関連事業

- ▷ 5YEARS 木津川遊歩空間整備
- ▷ 5YEARS 大学間連携
- ▷ 4YEARS 安威川ダム周辺整備基本構想(案)作成事業
- ▷ 4YEARS 『安威川ダムの活用と保全』に資するプラットフォームの構築
- ▷ 4YEARS わがまちカンヴァス
- ▷ 3YEARS 安威川地域マスコットキャラクターの展開
- ▷ 1YEAR 木津川遊歩道空間整備事業における制度設計補助
- ▷ 6MONTHS 木津川遊歩空間アイデアデザインコンペ
- ▷ 3MONTHS 木津川遊歩空間整備計画ワークショップ
- ▷ 3MONTHS かののキャンパス
- ▷ 1DAY 安威川フェスティバル
- ▷ 3HOURS Osaka Creative Forum

実施のコツ!

» サポート役に徹する

我々が課題を解決するのではなく、地域住民等の主体が自ら課題を解決したり、事業を実行できるようになる体制や環境づくりをサポートする

» アートで分野を超える

アートやデザインといった「文化」や「創造性」を掲げることで、各行政機関や部局の専門性を超え、横断的な取り組みが可能となる

» 通年で取り組む

単発の事業ではなく、通年で各部局から相談を受け付け、複数の事業を実施することで、ノウハウが蓄積されると共に、行政手法として確立する

» クリエイターの活躍の場を広げる

クリエイターが、行政の事業に参画する機会を提供する

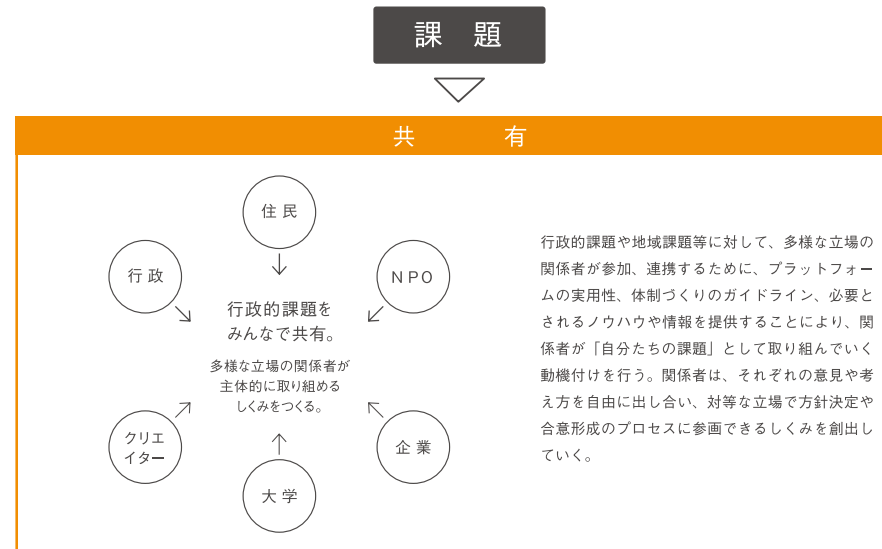
» 施設運営業務と連携する

enocoの指定管理業務と連動させることで、相乗効果を発揮する

硬直化してしまった行政の事業や地域の課題に対して、「文化」という角度から切り込んで、フレキシブルをはかろうという事業です。地域イベントの活性化から防災、河川空間やダムといった土木インフラまで対象は様々ですが、常に地域を主役に考え、enocoが離れた後も活動が持続することを何より大事に考えています。enocoの施設運営と一体的に活動することで、クリエイターとのネットワークを活かしたり、enocoへ来た相談をプラットフォーム形成支援事業で引き受けたり、蓄積したノウハウを相互で共有できるなど、enocoだからこそその成果をあげることができました。外部資金の獲得源にもなります。



プラットフォーム形成支援事業のスキーム



解決 → 自立運営へ



108 都市開発事業と文化行政が合わさった  
新しい文化施設を生み出した

109 全方位的な事業を担いつつも「社会課題を解決する」  
という方向性を持つことで独自性を獲得した



「Be Creative!」をコンセプトに様々な事業を行っている

事業概要

» 大阪府立江之子島文化芸術創造センターについて

[期間]  
2012年4月(開館)～現在

施設名称:大阪府立江之子島文化芸術創造センター  
開館年:2012年(平成24年)  
所在地:大阪市西区江之子島2丁目1番34号  
所管:府民文化部都市魅力創造局文化・スポーツ課(2016年度時)  
指定管理者:長谷工コミュニティ・E-DESIGNプラットフォームグループ  
館長:甲賀雅章  
スタッフ:企画部門6名、施設管理部門3名、マネージャー2名、プラットフォーム形成支援事業3名(2016年度)  
主要諸室:展示室(R1~4)、スタジオ(R5)、多目的ルーム(R6~12)、フリースペース、ライブラリー他  
管理委託料:70,822千円(2012年度)、65,552千円(2013~2016年度)

実施のコツ!

» 社会課題解決手法として文化芸術が認識されてきた  
創造都市論を背景に、文化による都市再生やアートフェスティバルによる地域活性化、アーティストやクリエイターのまちづくりへの参画など、社会課題解決手法としての文化芸術の活用が注目されていた

» 経験豊富な専門家のネットワーク  
多岐に渡る事業を限られた予算のなかで効果的に実施する方策として、経験豊富な多ジャンルの専門家がパートタイムで事業運営にあたる、ネットワーク型の組織が編成された

» 時代の変化に対応したい行政側のニーズ  
各地方自治体が文化芸術を活用した都市再生や地域創造、シティプロモーションなどを施策に掲げるなか、門外漢の担当職員が見よう見まねで事業を進めざるを得ない状況にあって、そのような地方自治体職員をサポートする公的機関のニーズがあった

5年間の活動とその成果を振り返れば、次の5年間はenocoの独自性を更に強く打ち出して唯一無二の存在を確立するべきことは明確です。しかし府所蔵の美術コレクションの活用や江之子島まちづくり事業との連携においても高い成果が同時に求められ、更に指定管理の予算は削減されてしまいました。次期5年間の施設運営は、非常に難しい状況に置かれています。



スタッフ (2016年度末現在)



館長  
甲賀雅章(こうがまさあき)  
2012年～現在

enoco(主に館の企画運営)



企画部門チーフディレクター  
高岡伸一(たかおかしんいち)  
2012年～現在



企画部門プログラムディレクター  
高坂玲子(こうさかれいこ)  
2012年～現在



企画部門アートコーディネーター  
高橋真理子(たかはしまりこ)  
2012年～現在



企画部門アートコーディネーター  
吉原和音(よしはらわおん)  
2012年～現在



企画部門プログラムディレクター  
松本拓(まつもとたく)  
2015年～現在



企画部門アートコーディネーター  
/ 広報  
近藤美智子(こんどうみちこ)  
2016年～現在

施設管理部門チーフディレクター  
中嶋賢次(なかしまけんじ)  
2012年～現在

施設管理部門  
森田滋樹(もりたしげき)  
2012年～現在

施設管理部門  
石井明音(いしいあかね)  
2014年～現在

マネージメント

統括マネージャー  
北川好志(きたがわたくし)  
2012年～現在

担当マネージャー  
石川英樹(いしかわひでき)  
2014年～現在

プラットフォーム形成支援事業



プラットフォーム部門チーフディレクター  
忽那裕樹(くつなひろき)  
2012年～現在



プラットフォーム部門ディレクター  
濱本庄太郎(はまもとしょうたろう)  
2012年～現在



プラットフォーム部門  
石塚育代(いしづかやすよ)  
2012年～現在

過去スタッフ



企画部門アートコーディネーター  
峯恵子(みねけいこ)  
2014年～2016年



企画部門アートコーディネーター  
福元葉子(ふくもとようこ)  
2014年～2015年

施設管理部門  
大津翔里(おおつしょうり)  
2012年～2014年

企画部門(アルバイト)  
岩澤豊子(いわざわとよこ)  
2014年～2015年

# enocoについて

## 設立に至るまでの背景

大阪府立江之子島文化芸術創造センター(enoco)は、「文化芸術の創造及び振興を図り、もって大阪の都市の魅力の向上に資する」ことを目的に、大阪府の条例に基づいて設置された新しい文化施設で、2012年4月に開館した。文化芸術が府民の心を豊かにするだけでなく、現実の都市の魅力向上に資するとした点に、この施設の大きな特徴がある。その背景には大阪府の厳しい財政状況下、2008(平成20)年に就任した橋下徹府知事(当時)による全庁的な「財政再建プログラム(案)」によって、文化行政の大幅な見直し・縮小の方向性が打ち出されたことがある。大手前にあった大阪府立現代美術センターの閉鎖が検討され、このままでは府立の文化芸術施設がゼロになってしまうとの危機感のなか、2010(平成22)年3月に策定された「大阪文化振興新戦略(第2次大阪府文化振興計画)」に沿った形で、従来の「社会に支えられる文化」、つまり税金や公共によって保護される文化ではなく、「社会を支える文化」、実際に社

## 指定管理者の選定

施設運営については、指定管理者制度による5年間の期間が設定され、プロポーザルによって事業者が選定された。公募に対して4組の応募があり、審査の結果、株式会社長谷工コミュニティと株式会社E-DESIGNの共同企業体である長谷工コミュニティ・E-DESIGNプラットフォームグループが選ばれた。長谷工コミュニティは主にマンション管理を業務とする長谷工コーポレーションのグループ企業であり、E-DESIGNは建築の外構や公園などのランドスケープデザインを主たる業務としながら、大阪を中心にまちづくりや社会実験事業にも実績のある企業である。なお、旧大阪府立産業技術総合

会の役に立つ文化を標榜することで、文化行政の生き残りをかけたのが、この江之子島文化芸術創造センターの設立であった。

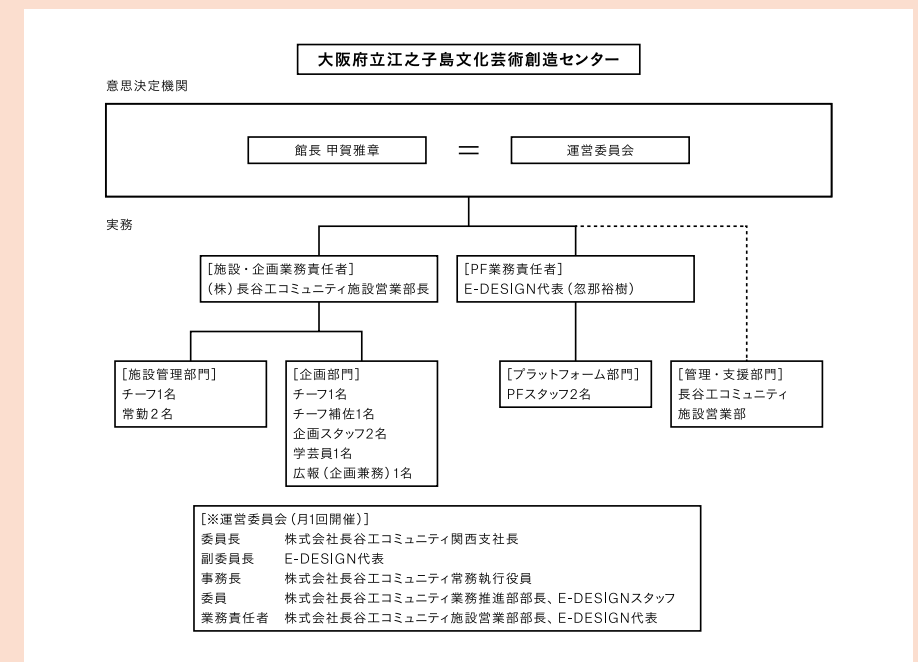
センター設立にあたって2011(平成23)年2月に設置された「アートセンター構想検討会」では、イギリスのニューキャッスル/ゲイツヘッドやフランスのナントなど、文化による都市再生を果たしたいいわゆる創造都市や、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」といった地域活性化手法としてのアートイベント、そして横浜市のドヤ街であった寿町の再生において、アーティストやクリエイターの果たした役割などを事例として挙げることで、文化芸術が都市再生を牽引し、社会課題を解決することを示している。そしてそのような成功の背景には、地域やクリエイター、そして行政などが協働するプラットフォームが構築されていることを強調して、江之子島のセンターにその拠点としての役割を果たすことを求めた。

研究所跡地を対象とした再開発事業である「江之子島地区まちづくり事業」では、長谷工コーポレーションを含む企業JVが事業者を選定されたが、センターの指定管理業務はこれとは切り離された独立の事業である。長谷工グループは文化施設の指定管理の実績はなかったが、「江之子島地区まちづくり事業」では再開発エリア(マンション等)とセンターの有機的な連携が不可欠であることなどから、水都大阪2009などで大阪府市の文化事業に実績のあるE-DESIGNと組むことで、指定管理の獲得を目指した。

## 施設運営の概要と組織体制

指定管理者募集が2012(平成24)年1月23日に締め切られた後、2月3日にプレゼンテーションによる審査が行われ、4月1日の開館時にはオープニングイベントの実施が求められるという、極めてタイトなスケジュールのなか、施設の開館準備は進められた。センターの主な業務として求められたのは、①展示室や多目的ルームの貸館業務②大阪府所蔵美術作品の維持管理と活用③「交流・対話・協働の拠点づくり」などを目的とした自主事業の実施④前述の江之子島まちづくり事業との連携・協働⑤プラットフォーム形成支援事業(以下「PF事業」という、多岐に渡る内容となっている。なお、最後のPF事業については指定管理業務の一環ではなく、別途大阪府から指定管理者に対して業務委託として発注するという形態が取られた。PF事業だけ切り離されたのは、指定管理業務は5年間の予算が予め決められているのに対し、年度ごとに予算や実施内容、協働すべき部署や市町村が変わっていくためである。人員については貸館業務や日常の施設管理業務を長谷工コミュニティが中心となって担い、企画事業や所蔵品の管理については、学芸員資格をもったアートコーデ

ィネーターや、まちづくりや地域活性化に実績のある建築家などによって新たなチームを編成し、別途発注されるPF事業は主にE-DESIGNが担当した。また館長にはあえて大阪府外から人材を招聘し、アジア有数のパフォーマンスアートフェスティバルとして海外からも注目される「大道芸ワールドカップ in 静岡」を立ち上げた、甲賀雅章が着任した。企画部門とPF事業の人員は館長を含め、アート、建築、パフォーマンス、そしてまちづくりと、多ジャンルの専門家によって構成されたが、それぞれに既に異ジャンルや行政、地域との協働に経験のある人材で固めた。また専従のスタッフが一人もおらず、全員が非常勤又はそれに類した契約形態になっている。これは人件費に割くことのできる予算が限られていることが第一の理由ではあるが、企画部門のスタッフが皆それぞれの分野において別の仕事を並行して続けることで、そこで得られる経験や人的ネットワークを、センターの運営にフィードバックさせ、あるいはリンクさせることで、センターの運営を活性化させる効果を期待したからでもある。



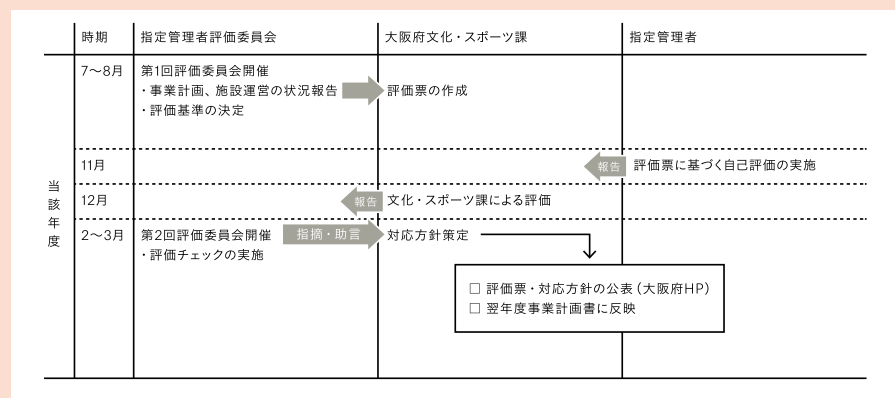
enoco 運営体制(2016年度)

## 事業のPDCAサイクルと指定管理者評価委員会

事業のサイクルは、毎年度冒頭に指定管理者が年間の事業計画書を作成し、府の承認を得た上で事業を実施、外部有識者によって構成される評価委員会の評価を年2回受けて、次年度へ向けた改善を図るとい、いわゆるPDCAサイクルになっている。評価はまず指定管理者が自己評価を行い、それを受けて大阪府が府の事業として評価を重ね、評価委員はあくまで大阪府に対する評価を下す階層構造となっている。自主事業などの実施内容は基本的に指定管理者の発案によるものが尊重され、貸館によって得られる収入は指定管理者の収入として計上されるので、再投下によって事業内容を更に充

実させることも可能になっている。例えば当初は貸会議室のように時間貸しを想定していた多目的のルームのいくつかを、創造的活動やまちづくりに関わる個人・団体にに対して月極のオフィスルームとして貸し出すことで、安定的な収入を確保すると共に、クリエイターの交流や協働を促すことを目的に、2013年からクリエイティブルームとクリエイティブシェアルームという事業を実施するなど、事業は柔軟に変更されていった。

※PDCAサイクル：事業活動の方法のひとつ。P=Plan(計画)→D=Do(実行)→C=Check(評価)→A=Act(改善)のサイクルを繰り返すことで事業改善をはかる。



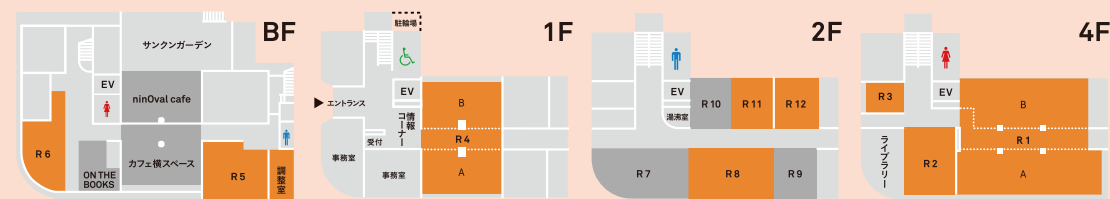
事業評価の方法とサイクル

## enocoの強みづくり

個々の事業の具体的な内容や、PF事業の独自性についてはここでは触れないが、5年間の活動を概括すると、最初の2年間はまさに模索の期間であったといえる。評価委員会の評価も第三者の意見も、おおよそ共通して聞かれたのは「何をしている施設がよくわからない」というコメントであった。コレクションを活用したオーソドックスな展覧会から実験的なイベントまで、また施設近隣のまちづくり活動から大阪府内の広域に関わる事業まで、そしてそれらがアートやデザイン、建築やまちづくりといった多ジャンルに拡散した結果、外部からみれば散漫な印象になってしまった。その背景には限られた予算と人員という問題があり、加えて評価委員会での評価項目の全てで高評価を得ようとしたため、どの項目も凡庸な結

果となってしまい、施設の独自性を打ち出すに至らなかったということがある。そのような反省のもと、3年目からはenocoの強みづくりをテーマに掲げ、「アートやデザインによる社会課題解決の拠点化」を目指すことを前面に打ち出して、事業内容にメリハリを付けた計画に変更した。とりわけ府立の文化施設という立場から、社会課題のなかでも特に市町村が抱える課題や職員の悩みを重点的に扱うことで、他の文化施設とは異なる独自の特徴を生みだそうとした。その結果、4年目くらいから市町村の間を中心に認知度も高まり、普段から地域活性化や文化事業の見直しなどの相談が持ちかけられるようになり、評価委員会においてもその点が大きく評価された。

## enoco館内マップ



### レンタルルーム クリエイティブルーム

**4F\_ROOM 1**  
用途:ギャラリー 面積:281.2㎡  
天井が高く、enocoで最も広いスペース

**4F\_ROOM 2**  
用途:ギャラリー 面積:61.0㎡  
個展などに適した中規模スペース

**4F\_ROOM 3**  
用途:ギャラリー 面積:19.4㎡  
最も小さなスペース

**1F\_ROOM 4**  
用途:ギャラリー 面積:158.2㎡  
1Fエントランス奥にあるスペース

**BF\_ROOM 5**  
用途:スタジオ 面積:66.8㎡  
音響・照明設備を備えたスタジオ

**BF\_ROOM 6**  
用途:多目的ルーム 面積:49.0㎡  
会議や勉強会に適したスペース

**2F\_ROOM 7**  
用途:クリエイティブシェアルーム 面積:74.3㎡  
クリエイターなどが共同で入居するシェアオフィス

**2F\_ROOM 8**  
用途:多目的ルーム 面積:68.5㎡  
多目的のルームの中では最も広いスペース

**2F\_ROOM 9**  
用途:クリエイティブルーム 面積:34.2㎡  
創造的活動を行う団体・クリエイター向けのオフィススペース

**2F\_ROOM 10**  
用途:クリエイティブルーム 面積:33.3㎡  
創造的活動を行う団体・クリエイター向けのオフィススペース

**2F\_ROOM 11**  
用途:アトリエルーム 面積:35.3㎡  
作品の制作や小規模の教室に適したスペース

**2F\_ROOM 12**  
用途:アトリエルーム 面積:37.1㎡  
作品の制作や小規模の教室に適したスペース

### BF Cafe & Bookstore

**[カフェ] ninOval cafe**  
営業時間:11:00-18:30(月曜休)  
電話:06-6447-1515  
コーヒーと軽食を提供

**[古本屋] ON THE BOOKS**  
営業時間:11:00-20:00(月曜休)  
電話:06-6443-8108  
<http://www.on-the-books.info/>  
アートブック、サブカルチャー等の古書店

### 情報発信コーナー

**4Fライブラリー**  
ご利用時間:原則 火曜~日曜(金曜日を除く) 11時~19時  
アート関連書籍、雑誌、図録等を配架したライブラリー

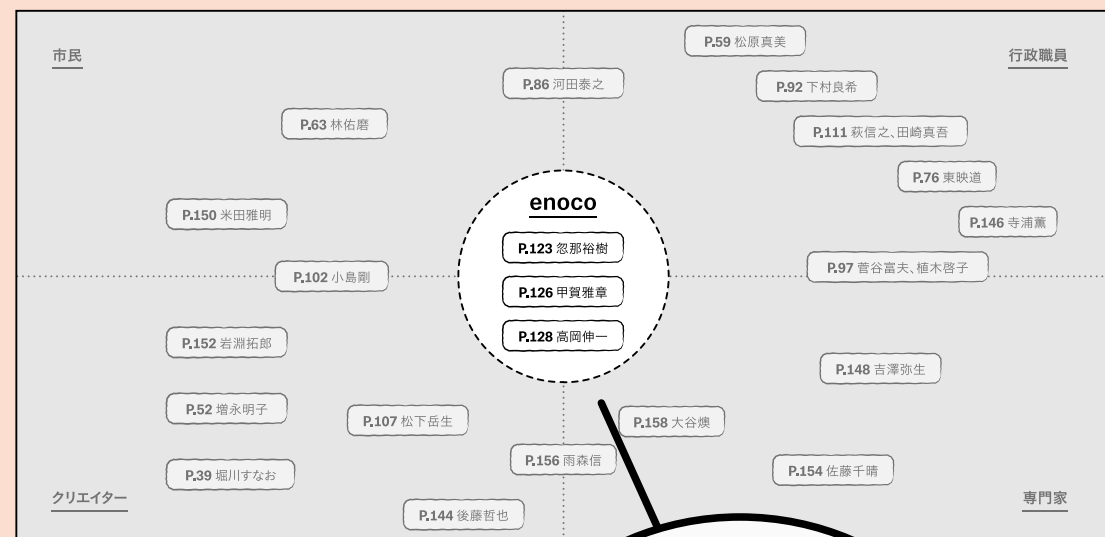
**1F/2F情報コーナー**  
全国の美術館・アートスペースからのチラシやポスターを配架・掲示



# enocoの人

開館からの5年間運営をしてきた（そしてこれからも）、enocoメンバー3人に聞く、大阪のこと、enocoのこと、そしてこれからのこと

インタビューネットワーク図



## 忽那裕樹

(enocoプラットフォーム部門チーフディレクター)

2017年2月6日 @E-DESIGN

聞き手: 榊原充大 (RAD)

—enoco設立に至る経緯についてお聞きできますか？

忽那：2009年が水都大阪のシンボルイヤーということでひとつの節目になっているのですが、実はenocoに繋がるといえる意味では2001年が重要です。当時、大阪の都市再生のためには水の都としての再生、つまり水辺の再生が重要だと決定されたんです。これまでは経済界、大阪府、大阪市がバラバラだったんだけど、全部が協働してプラットフォームをつくりましょうということになったのが、実は2001年だったんです。

そこでやっと府と市と一緒にやってみよう、という枠組みができたんですね。そして一番最初に議題に挙がったのは船着場の整備。今、大阪は船着場が18箇所あって、建物も河川に背中を向けていたのだけれど、それを表に向け、そこに人が関わる仕掛けをつくりましょう、としました。それまではハード整備だけで終わっていたんですけど、そこにソフトをきっちり入れて「都市を徹底的に使いこなそう」となったんです。つまり、僕らが常に言っていることですね。魅力的な人たちが過ごしていれば都市に愛着がわきます。市民の活動、アートなどの活動、都市政策...バラバラだったものを一緒にして、その「一緒にできたこと」をプロモーションしていきましょう、というのが2009年でした。そして「水都大阪2009」が開催されます。僕たちE-DESIGNもメイン会場である中之島公園の会場計画などに関わりました。それまでも、水都大阪2009のプロデュ-

サーでもある北川フラムさんが関わった「大阪・アート・カレイドスコープ」など、大阪の行政もいろいろな試みをしていて、それが「ここで一気につなげてやっていきましょう」という流れになったわけですね。

—アートと都市政策が並走したわけですね。

忽那：ひとつで考えてやってみませんか、ということですね。実は2008年に当時の府知事などの提案で、計画の見直しがされたんです。その中で「ハードとして残していくものがアートだ」という意見もあり、一方で僕はリソースを視覚化できる力がアートにはある、ということを行いました。「潜在的な価値を可視化するんですよ」と。アートによって地域の資源を発掘して未来の可能性を描く、そしてその先に規制緩和が起こり、水辺を含めた都市再生の大阪の未来を見ることができると。アートと都市を同時に語らなければならないと、それが2009年に起こった一番大きなことかもしれないですね。

—そういった流れを経てenocoが立ち上がってくるんですね。

忽那：2010年度に構想検討会というものがあったのですが、その中で出てきたのが、社会の問題をクリエイティブに解決する拠点にする、ということですね。水都大阪など都市の中でアートを展開することにに関わり、一緒に都市の問題を解決

することが語られることの意義が見えた。特に僕の中では、「小さなまちづくり」と「大きな都市計画」と言っていますが、分断されていたその2つを統合しないと、思っていたんですね。enocoはそれを結びつける拠点になるべきではないかという思いがありました。

—当時の大阪の行政の状況が施設の役割を再検討させたわけですね。

忽那：そうですね。2009年くらいまでは行政が主導で、経済界も頑張ってきたという構図があったんですね。一方で民間や市民側がつくったプラットフォームが持続性を持ちながらまちをつくっていく方法はないのか、という議論も出てきていました。そして、そういった議論を踏まえて、enocoの指定管理者のプロポーザルが組まれたのだと思います。当時の大阪で一番足りないところは市民をエンパワーメントして何か起こしていく、というところだからそれをなんとかしよう、という意見が大阪府の文化振興計画の中に取り込まれていました。ですので、そこを力強くするためにenocoがあるべき、というのが僕たちのプロポーザルの内容でした。

—そこを行政側もプロポーザルに組み込むのは一つの決断ですよ。

忽那：大きな決断ですよ。都市政策やまちづくりをアートや文化が支えている、という理念を盛り込んでるんですから。なので、府民市民がしっかりプロセスを

共有できて、自分にもチャンスがあるという社会をつくっていく、大きな都市計画と小さなまちづくりが繋がり、それが大阪の愛着と誇りのプロセスになる、と提案するチャンスをくれたんですよ。

大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭など、アートの視点からみた成果はもちろん素晴らしいけれど、僕は、それがより都市というフィールドでどう活かされ、どう未来の都市をつくることになるのか、というストーリーをつくり、クリエイターもアーティストももっと社会参加できる仕組みとつながりをつくって共有しようという思いでした。

#### — こうした新しいミッションに対応するのも大変だったんじゃないですか？

忽那：そうですね。僕らの提案は、enocoの指定管理とプラットフォーム形成支援事業と一緒にやっていくというところに重きを置いたのが特徴でした。指定管理は、一般的に結局「ハコ」の運営ですよ。そこにもっと外に出て行く仕組みをつくってみよう、と。それを受け入れてくれたのは大きかったなと思います。enocoは民間としては全然儲からない施設ですが、民間も入るべきところなので、「割が合わないよね」で終わらせてはいけないという思いがありました。「enocoから出て行く部隊」は、アートだったりクリエイティブな問題解決だったり専門性があるものですから、デザインだけでなくパフォーミングアーツにも関わりの深い甲賀さん、アートの分野で水都大阪2009やおおさかカンヴァス、瀬戸内国際芸術祭の現場にいた高坂さん、そして近代建築の専門家でもあり、都市計画にも通じている高岡さんといったアート系と都市系の人たちが連携していくチームビルディングをしました。プロポーザルは「長谷工コミュニティ・E-DESIGNプラットフォームグループ」というかたち

で提出しました。

— そのねらいはどのようところにあったんですか？

忽那：僕はもともとランドスケープデザインの会社で、まちづくりにも多く関わっています。河川や公園をもっと使いこなしてピクニックとかしたらええねん、という都市を使いこなす活動をしているんです。そんな中で誰も欲しがっていない施設をつくっても仕方ない、みんなでカフェつくって利益をあげるとか、使いこなす人たちが欲しい施設をデザインしないといけないという思いが強いですね。そうしていつも「本当の公共とはなにか」を市民と共有して進めています。使いこなしの都市計画は、全部更地にして建て直すような時代じゃない今こそ、必要な考え方だと思っています。

#### — enoco5年間の成果をどう見えていますか？

忽那：まず前提として、僕らはデザインを「かたち」「仕組み」「プログラム」という3つで考えています。今までは「かたち」だけがデザインだと捉えられてきたように思います。そういうわけでenocoもそれ以外の「仕組み」と「プログラム」の面からこの5年の成果を考えてみたいと思っています。

#### — 「仕組み」の方から教えてください。

忽那：日本は資源がない国だけど人がたくさんいるので、アイデアを持っている人やそのアイデア自体が活かされる社会の仕組みをつくるということが、enocoでやりたかったことです。そのいい例が木津川遊歩空間整備だと思っています。今までは一番安く入札してくれた専門業者に発注する際に「市民参画でアイデア聞きましょう」みたいなことを依頼していたわけです。その都市が世界に誇れるデザ

イン性の高いものをつくってください、でも管理が大変だから住民にしてもらいましょう、その仕組みを考えてください、と河川の技術者に頼んでいるわけです。それは難しいですよ。そのときに、資格がないから提案できない、じゃなくて、専門家でない市民でも「こうしたらどうか？」と提案したり、そのアイデアをみんなで共有したりするファーストステップがまず必要だと思うんです。そして専門家には専門家の仕事に集中してもらおう。もちろんその前後に「どんなものをつくったらいいか？」を考える市民と専門家が一緒になって行うワークショップがあった方がいいと思いますが、そういう仕組み自体がアイデアを取り込む社会づくりだと思うんですよ。そのやり方のひとつを木津川遊歩空間で提示できました。

そして現在この木津川の仕組みを国の仕組みにしようとしているんですよ。プロポーザル、アイデアコンペのガイドラインをつくっています。「コンペだめんどくさいしお金かかるし」という声に対して「いやこういう形でやったらすぐつくれるよ」と教えてあげるわけです。これはものすごい広がっていくと思いますよ。都市や地域が疲弊している今、新しい風を入れていかないといけない。そしてそれがenocoの役割だと思います。

#### — 木津川も、割と地域から見ると大規模な整備であると思うんですけど、広い大阪全体で見ると、まだスモールスケールというか。そういったスケールから、仕組みやガイドラインをつくって国レベルでそれを参照できるようにするということですね。では「プログラム」の方は？

忽那：いろんなところでアーティストと出会うのですが、彼らは例えば子どもたちのために真剣にプログラムを考えたりするじゃないですか？アーティストのことを「何するかわからんやつ」とか「変

なやつ」と言う人もいますが、1回でもどう楽しんでもらえるかを真剣に考えたことのある人たちは、アーティストのやっていることを見て感動するんですよ。「こんなやり方があるんや！」と。それがプログラムの源泉だと思いますし、enocoができる貢献だと思います。そこに参加した人たちの中から「これ真似してええですか？」と言い出す人が出てくる。その企画を自分たちだけでやってみるんだけど、なかなかうまくいなくて、そうするとさらにアーティストのことをリスペクトするんです。「将来的にはきちんとフィーを払ってアーティストを呼びなさいね」と言うんですが、そうして楽しくリスペクトして、市民と専門家がwin-winになるような仕組みをつくっていくことに、enocoがやっていることがつながっていったらいいなと思います。これから先の5年は「シーズン2」と呼んでいますが、それをもう少しみんなに知ってもらいたい。僕らでなくてもその仕組みをつくれる人をつくったり、出会いをつくっていったりできたらなと思っています。

#### — シーズン2の展望を最後に聞かせてください。

忽那：より多様なクリエイターやジャンルが関わるチャンスをつくっていききたいですね。医療、福祉など、クリエイティブな問題解決の余地は世の中にまだまだたくさんあると思います。それをひとつずつ形にしてちゃんと見せていきたいなと思いますし、つくってきたものに関わり続けるような方法で、いろんな人たちと一緒に考えていける場所をつくれたらな、と思っているところです。そして大事なのは教育だと思っています。とりわけ「ソーシャル・エデュケーション」。その言葉は日本では「生涯学習」と訳されて、少し意味合いも違ったかたちで輸入されてしまって、個人が教

育を受ける権利のようなことになってしまったんですね。でもソーシャル・エデュケーションはもともと、自分が引退しようが何しようが、最期まで社会に参画できる機会を持つことが重要なんです。歳をとってからもまちに誇りを持って関わって、リスペクトされて、最期まで元気に生きようと。それが本当の生涯学習の目的なんです。社会参画するための勉強の機会、とりわけ座学じゃなくてジムトレーニング的に参加できるような機会は死ぬまで提供されるべきなんですよ。お年寄りが「保護の対象」じゃなくて、元気に社会の中で機能してほしい。そういうチャンスを社会の中で作り合おう、と。そういうことで、教育のプラットフォームをつくっていききたいと思っています。

アーティストがちゃんとお金をもらって教育プログラムに関わるのも理想ですね。例えばフォトグラファーから写真をしっかり学べる機会をつくるとか。写真がうまく撮れるようになったら、その技術をさらにのばせる場もつくれますしね。高齢者の方々でもすごい技術を持っている人もいるのに、引退した瞬間から全く使っていないのはあまりにももったいない。だからその技術水準が下がらないようにすると、その技術や知恵を交換しあい、使える場所や後世に伝えていくチャンスをつくっていききたいと思っています。

#### — 個人がどういう学びを得るかと言うよりも、自分が社会というコミュニティに入っていきかたちですね。

忽那：役割の持ち方だと思うんですよ。人から頼まれるって、役割を与えられる、と思うかどうかだと思います。誰かに何かを頼まれて、できるという仕組みをまちづくりとか、いろんなところでできるようにしていかないと、と思うんですよ。社会参画の機会を考えていき

ましよう、そういったプラットフォームの形成を支援していきましょう、ということが次のenoco役割だと思います。

忽那裕樹（enocoプラットフォーム部門チーフディレクター／E-DESIGN代表）  
1966年大阪生まれ。庭園をはじめ公園や広場、大学キャンパス、商業・集合住宅・病院などのランドスケープのデザインとプログラムを国内外で展開。また、パークマネージメント、タウンマネージメントを通して、地域の改善や魅力向上に様々な立場で関わっている。enocoのプラットフォーム形成支援事業を手掛けたとともに、民主導の水と光のまちづくり推進組織「水都大阪パートナーズ」のプロデューサーとして数々の事業の企画・運営も行ってきた。

## 甲賀雅章

(enoco 館長)

—まず甲賀さんがなぜenocoの館長になったかという経緯を教えてくださいか？

甲賀：2000年代の後半に、このあたりの再開発の話があって、そのプロポーザルコンペに東京の企画チームのクリエイティブメンバーとして参加し、「アート＆ライフ」というテーマを全面的に打ち出して、採用されたんです。

その後、現在のenocoの指定管理者を募集するという情報が入ってきたんです。それでプロポーザルに参加し、この施設をまとめていくのは関西人よりも、むしろ広範なネットワークを持った「よそもの」の僕のほうがいい、ということで企画提案の段階から館長候補になり、今にいたります。

—「Be Creative！」っていうenocoのコンセプトはいつ頃から決まったんですか？

甲賀：最初から決まっていた。日々の暮らしや社会環境の中にCreative発想を浸透させたい。この館が美術展示の機能だけでも、デザイナーのための施設でも意味がなく、もっと一般にも開かれている施設であるべきだと。1人でも多くの人がクリエイティブの素晴らしさを知り、自らもクリエイティブに物事を考えられるようになる。ひいては、地域や社会が抱える課題解決にも繋がっていく、と。

—それは、いつ頃から考えていたことなんですか？

甲賀：Creative発想が企業の活性化に必

要であるという持論は、デザインビジネスを通してかなり前から持っていました。それが社会変革においても重要であると確信したのは、まちづくりに興味を持ち、ヨーロッパなどの先進事例に触れた時からです。30年以上前になりますかね。1992年から25年間、僕は大道芸ワールドカップin静岡という国際的フェスティバルのプロデューサーをやっています。このフェスのひとつの特異性は、プロのイベント会社に任せるのではなく、様々な職業や年齢の市民ボランティアスタッフにより企画運営されている点です。Creative発想というのは、デザイナーやアーティストといった限られた人々だけに与えられたものではなく、トレーニング次第で誰にでも出来るということを実感しました。そして、社会にもっとクリエイティブに物事を捉えられる人が増えたら、社会はもっと素敵になるなど。

—それは、大道芸ワールドカップが目指していることと関係ありますか？

甲賀：そうだね。僕が大道芸を通して達成したいことは、何人集客したとか、何億円の経済効果とかよりも、静岡市の豊穰化、つまり何十年後に国際的な文化創造都市「静岡」を誕生させることなんです。文化創造都市には、クリエイティブな市民が欠かせないと思っています。これは、ヨーロッパの都市を巡ってみて実感したことです。Creativeとは、従来の仕組みや価値観に疑問を持ち、壊すものは壊し、新たな価値を創造していく思考、行為だと思っています。地域が大胆

2016年12月2日 @enoco

聞き手: 榊原充大 (RAD) + 高坂玲子 (enoco)

素敵に生まれ変わっていくには、それを支える市民が必要なんです。その意味で、大道芸ワールドカップは単なる一過的なイベントではなく、都市デザインのひとつの戦略ツールなんです。誰もが文化芸術の素晴らしさを享受できる仕組み。ずっと言い続けている「まちが劇場」なんです。今では週末の街角でパフォーマンスが見られるようになりました。最近では静岡市も政策の中心に据え、市を挙げて取り組んでいます。

—enocoの5年間を振り返って、はじめの思いと比べて現状はどうですか？

甲賀：僕が「これをしたいな」と思っていたことを考えると少し時間的に遅れている。もうちょっといろんなコトが起っていてもおかしくなかったかな。一方で、個人的には、本当に多くの様々なジャンルの方とお会いできました。大阪に来なければ、ダンスを始めることも役者として舞台に立つこともなかったように思います。ただ、やはりもっと多くの方と会う頻度を増やし、間合いを詰めないといけないですね。よそのだからできる役割があるような気がしています。

—5年の蓄積ができてきたから、これからということですか？

甲賀：僕自身もenocoも5年間で社会的な資本を蓄積したと思います。それを今後もっとうまく紡いでいったらもっと面白くなっていくと思いますけどね。それが、僕に課せられた一番の使命だと思います。

—当初、静岡から大阪へ来たときのイメージはどんなものでしたか？

甲賀：大阪は自分が持っていたイメージとは全然違ったんですね。ひとつには大阪人は言葉が乱暴で人間性も怖いイメージがあった。それとド派手。でもいざ新大阪に降りたつと「えっ？」と。ここ大阪？日本で3番目に大きな都市だよな？みんな暗い色合いの服を着ているし、車内吊りポスターもセンスない。東京と比べたらすごく地味じゃん、と。すごいところに来ちゃったなと最初は思いました。大阪の派手なイメージは本当に一部で、実際は違った。いろんな人と話していくうちに、大阪の人って意外とシャイなんだな、と。こちらから懐に入っていくと、みんなウェルカム。仲良くなれば、飲んでいても実に明るい。シャイなラテンだった。これは、とても僕にも似ているなど。食のイメージも全然違っていた。上品ですよ、大阪料理って。コクがあって。ソースと粉もののイメージしかなかったし。大阪は損しているなって思いました。本質がしっかり伝わっていない。伝えようとしていないのかもしれない。

—大阪固有の環境について何か感じられることはありますか？

甲賀：人にもよるけど、ものすごい硬い面と、こんなことよくできちゃうという柔軟な面と、両面を持っている気がする。例えば、2015年の「おおさかカンヴァス」で巨大な回転ずしが道頓堀に流れるというのがあったけど、僕から見たら異常なんですよ。アートとしてどうかじゃなくて、あれをアートのくくりのなかで、しかも公共空間でやるのがすごいな、と。行き着くところまで行っているな、と。「これがアートだ！」と言えるのは、ある意味で柔らかくて、すごいなと。突き抜けていますよね。でも道路使用など、細かな規制まで見ていくと意外な程

が感じらめ。その境目が分からないんですよ。未だに。

高坂：厳しい状況だから突き抜けたいのかも。enocoも普通のアートセンターではできないことを目指していますよね。

甲賀：そう考えると、enocoはもっと突き抜けた方がいいと思う。もっと、冒険や実験をするべきですね。

—収益を上げるという目標も一筋縄ではいかないと思いますが、どう考えていますか？

甲賀：今もやっている行政相手の「enso done!」は、ひとつの方向性だと思っています。NPOを支援しようとか、民間の活動の相談を受けようというのは結構あるんですけど、行政の相談窓口というのは全国的にあまりないんですよ。でも、相談を受けた後のフォローをしていくところまでは、まだ入り込めていない。ここが今後の課題だし、収益獲得の鍵を握っているとも言える。本当の効果を出すにはもう少しメンテナンスがいる。ただ、これができたら、全国的にも画期的な公共施設になると思いますよ。

高坂：あとは、コンテンツだけでなくマネージメントやコーディネートにもフィーを支払ってもらえるように動いていかないといけませんね。

—甲賀さんは次の5年間でどんなところに力を入れていこうと思っていますか？

甲賀：行政の仕組み改革にまで働きかけられる運動体になる、ということまでいけたらいいなと思っています。そういう運動体は民間だと出づらいでパブリックな施設が担えとすごく面白いと思います。そのやり方として、物申すという方法もあるだろうし、フェスなどメッセージ性の強い形で出すという方法もあると思う。アーティストとしての個人メッセージではなくて、社会や地域との関

わりの中でのメッセージというか。あくまでも、Creative思考で大阪を素敵に変え、新しい大阪を創ろうというのが、enocoの役割だと思っているので。そのためには、私たちだけでは力が弱いかもしれない。様々な公共施設や活動家たちとの連携をとっていき、関係性を深めていくことが必要だと思う。次の5年間の僕自身の役割というのは、自らがプラットフォームとして分散している大阪のパワーを連結していくことかなと、思っている。

—今後大阪がこうなっていけばいいなと甲賀さんが思い描いているビジョンを教えてください。

甲賀：大阪に来て、外から見ていた曖昧な大阪像は崩れたんですよ。だけど、アイデンティティがあるかという、なかなか見えない。僕はひとつの鍵として、上方文化の骨頂である「粋(すい)」を、もう一度読み解く必要があると思っている。江戸時代、文化的中心地であった大阪。陰翳に富み、優雅さを身上とし、衣・食・住・性・美など、あらゆる文化、生き方にまで影響を与えた上方文化。そこに未来の大阪が見えてくるような気がしていますね。

—甲賀さんとしては、大阪発信で面白いことはまだ起こってないぞ、と。

甲賀：これから創造的破壊とリデザインする5年間ですね。

甲賀雅章 (enoco 館長)  
1951年静岡市生まれ。1991年株式会社シーアイセンターを設立。広義の意味でのデザイン、文化戦略を21世紀型経営の最重要資源として位置づけ、企業、組合、商店街、地方自治体等の活性化におけるコンサルティング活動を展開。1992年から大道芸ワールドカップIN静岡を立ち上げ、現在もプロデューサーを務める。2009年地域・社会の問題をデザイン思考で解決すべく、ソーシャルデザイン研究所を設立。2011年4月から静岡県榛原郡川根本町文化会館の事業パートナー。2012年からenoco館長。



## 高岡伸一

(企画部門チーフディレクター)

—enocoとの最初の関わりは？

高岡：プロポーザルの提案書をつくる段階から関わりました。僕は2006年から大阪市立大学の都市研究プラザに特任講師という立場で籍を置いているんですが、北浜の近くに小さいスペースを大学が借りていて、文化創造をテーマに、地域の課題に地域と大学と一緒に取り組む「船場アートカフェ」という実践型の研究プロジェクトをやっているんです。周辺にある近代建築をうまく活用してイベントを行い地域の魅力を発信するとか。僕の専門は建築なんですけど、アートの力を使って地域を元気にするみたいなこともやっていたので、それで声をかけもらったんだと思います。

—enocoのオープン後はどういう役割を？

高岡：企画部門のチーフディレクターという肩書きで、最近は大阪府との折衝係みたいな感じですかね。館長は常時いるわけではないので、企画チームの現場の責任者という立場です。幾つかのプロジェクトも受け持っています。

—行政との折衝ではどういうところが最も難しいなと感じますか？

高岡：enocoは指定管理という制度で運営されているんですが、指定管理と業務委託がどう違うかは、結構曖昧なんですよね。指定管理は民間のノウハウを最大限活かして、裁量のかなりの部分を現場に託す、というわけなんですけど、本当に

自由気ままにできるわけではない。最終的には府の了解が必要になってきます。その裁量の線引きをどこで引くか、それは府の担当者や決裁権者の考え方で変わってしまうところがある。指定管理は5年間ですが、文化の成果は出るのに時間がかかるわけです。でも、行政の職員は大体3年くらいで異動してしまう。そうすると、5年間の方針を立てても、途中で府側の考えが突然に変わってしまうことがあります。これはenocoに限らず、行政一般に言えることですけど。

—業務委託的にならないように指定管理を、という対策はどうできるんでしょう？

高岡：最終的な決定権は行政側にあるので難しいですね。僕たちとしては基本方針やプロジェクト毎に、その必要性や効果をしっかり説明していくことですが、違うと言われたらそれに抗う手段はない。次年度からは新しい指定管理の期間になるので、その前にきっちり僕たち指定管理者と大阪府との間で、話しておかないと、と思ってます。行政の人ももちろん人間ですから、人によって考えややりたいことは違うでしょうけど、前任の考え方や、やってきたことがリセットされるということが、結構起こるんですよね。なかなか行政と付き合う難しさはあるし、現場レベルでも気心知れた担当者が異動してしまっ、新しい人と信頼関係を再び一からつくらないといけないという状況は、どうしても出てきますよね。

2017年1月26日 @大阪市西区某所

聞き手:榊原充大(RAD) + 高坂玲子(enoco)

—行政やクリエイターの間に入るenocoのような役割が今後より重要になってくると思うんですが、高岡さんにとってその目的は何でしょう？

高岡：大阪という都市が少しでも良くなればいいな、というのが根っこにあります。そのためには、行政の仕事にもっとクリエイターが入ったほうがいいと思うし。地域の人たちと行政の人たちもお互いにらぬ誤解は解けたほうがいいし、一緒にもうちょっとうまくできるんじゃないの？ということをいろんなところで感じるの、それをつなぐ役回りができると思っています。

—高岡さんは生まれも育ちも大阪ですか？

高岡：そうです。今も住んでいます。でも「大阪が好き」というよりは、自分が暮らしている街だから、ですね。

—5年間の中で変えていこうとした部分はどんなところでしたか？

高岡：意識的に変えなければ、と思ったことはないんですけど、振り返ってみると組織体制ですかね。enocoの企画チームはフルタイムの人がいないんですね。お金がないのが最大の原因なんですけど、僕のように他の仕事をしながらenocoの仕事をしている人もいるし、育児中で短時間勤務をしている人もいる。いろんな状況と職能を持った人たちがちょっとずつ重なって、enocoを動かすという働き方。これはなかなかいいなと思ってます。

enocoにとってみれば、僕の持っているリソースをenocoに活用できるし、僕にとってはenocoで得た知識や経験を他のところで活用することができる。人的なネットワークも広がる。結構危ういバランスではあると思うし、細かな部分では不満もあるけど。指定管理の仕事は、次期の業務が取れなければ突然に仕事を失ってしまうリスクがあります。そういう職場だから、セーフティネットという意味でもenocoに100%で働くのは良くないと思っているんです。

—チームのつくり方として面白いですね。

高岡：3~4年目ぐらいからできてきたものですが、なかなか面白いワークスタイルになっているなと思っています。ただ、それはある程度経験を持っている人たちが集まらないと難しく、全くの新人を一から育成しますってなると、それはなかなか難しい。施設としてのアウトラインがしっかりあるわけではなく、そのアウトラインがぼやっとして、たまたま折り重なったところがenocoっていう。プラットフォームともつながるかもしれないですね。

—そんなenocoの5年間の評価はもう既に出ているんですか？

高岡：enocoはDANCEBOXの大谷煥さんを座長とする、外部委員で構成された評価委員会が評価するというやり方です。2~3年目は、何をやっている施設か良く分からんという評価でした。そこから「社会課題を解決する文化の拠点であれ」というテーマが出てきて、後半の3年はそこに特化しました。それも最初の頃は評価委員会には弁護士や会計士の方など文化に馴染みのない人も入っているので、例えばアートで社会課題を解決するとはどういうことなのか分かってもらえなかった。最後の4~5年目でやっと、そういうことかと理解をしていただ

けるようになって、結果的には現状のやり方はすごくいい、と非常に高い評価をいただきました。

ただ行政の評価としては、評価が出るほど予算が削られるというよく分からない現象があって、「この予算でこれだけのことができたのだから、まだ下げても大丈夫でしょう？」と。予算を最終的に決めるのは担当の部署ではなく財務の部署なので、そういう発想になりがちなんですよね。実際、来年度からの5年間は予算減ってるんですよ。評価委員会にだけ評価されているのに。府の担当もいろいろ大変だとは思いますが、指定管理者がそれなりの成果を上げたのなら、次は府の担当者が庁内でがんばってくれないと、現場はやはり疲弊します。

高坂：根本的なところでアートやデザインは余剰的なもので「好きでやっていることだからお金はいらなくてしょ」という考え方があるのかもしれないですね。もちろん好きではありますが、あくまでも仕事だし、社会に対する一つの役割だと思っているのですが...やはりなかなか理解は得難いですし、パブリックな施設である以上、そういった定量的な評価が定まらないものに対して、予算を増やしていくことは難しいとは思いますが。

高岡：なかなか根深いですよね。予算10%カットしました、というのはわかりやすく評価されますよね。でも予算を削られると現場は人を切らないといけなくなる。残った人も給料は上がらない。指定管理制度が予算カットの手段となり、その結果行政が自らワーキングプアを生みだしている、ということのはっきりと言っておきたい。

高坂：評価しづらいけど必要なことを支援し、仕組みとして落としこんでいく、またそういう仕事をする人たちに報酬を支払うことやプロとして活動する場をつくっていくことが、行政の重要な仕事でもあるんじゃないかなと思います。

高岡：次期の指定管理を決めるプロポー

ザルは、結局、僕たちのチームしか出さなかったんですね。与えられている条件と予算で事業計画を立てれば、利益が出ないのは明らかです。求められている事業と予算が全くリンクしていない。むしろ赤字になるぐらいで。そんなのどこも手を挙げないですよ。行政側には、それでもあそこは出してくれるだろう、そんな甘えもあると思います。実際、僕たちも出すのを辞めようかと、一時期真剣に議論しました。

—enocoをやっているからこそ見えてきた大阪の状況というのは何かありますか？

高岡：何だかネガティブなことばかり話しているので、最後に少しポジティブな話をすると、enocoであったりカンヴァスであったり、水都大阪であったりと、大阪って実際よくやってると思うですよ。それが見えているし、がんばっている人が身近にたくさんいるので、僕もいろいろ言いながらもやっているところがあります。もうちょっと、大阪を褒めてくれてもいいんじゃないかなって。

—一次の5年の展望は？

高岡：僕や高坂さんがずっとプレイヤーとして動いていくわけにはいかないんですよ。だから次の5年間では、この流動的な組織運営のなかで、下の世代を育てないといけなと思っています。enocoは属人的なところで、みんなちょっとずつ無理して頑張ってることでかろうじて成り立っているんで、次はそれが仕組みとして機能するようになればと思っています。

高岡伸一 (企画部門チーフディレクター)  
1970年大阪生まれ。高岡伸一建築設計事務所主宰。大阪市立大学都市研究プラザ特任講師。設計活動と並行しながら、大阪をフィールドに建築ストックを活用した都市再生や、クリエイターと協働した地域課題の解決などに取り組んでいる。2016年に設立された「生きた建築ミュージアム大阪実行委員会」では事務局長を務める。主な著書に『生きた建築 大阪』(共著、2015)など。

## 110 大阪府の文化行政が社会や地域の課題解決という独自の方向性を見出した

## 111 都市整備や都市再生といった流れと連携しつつ、都市の可能性を拓いた



水都大阪2009のメイン会場(中之島公園)。アート、建築、まちづくり等、様々な人々が協働する場となった

### 概要

#### » 大阪府の文化行政

大阪府の文化行政は、財政難という厳しい状況下において、2005年頃から都市の中でのアートの実践を意識し、多様なステークホルダーとつながりながら、都市再生といったハード事業と、アートやデザイン、まちづくりといったソフト事業を一体的に構想し、文化が社会に果たすべき役割を追求してきた。アートやデザインによって社会や地域の課題解決に取り組み、都市の可能性を拓いてきた。

### [期間]

2005年～現在

### ポイント

#### » 継続的なネットワークの形

enocoの前身施設である大阪府立現代美術センター時代から、大阪で活動する様々なアーティスト・クリエイター、まちづくり団体・NPOといった人々のネットワークを築いてきた

#### » 都市イベントを変化のきっかけにする

2009年に開催された大阪府・市・経済界による都市再生事業「水都大阪2009」が大きな契機となり、アート・デザインを活用し都市の課題をクリエイティブに解決していく仕組みと拠点づくりが強化された

#### » 拠点と事業の両輪

2010年以降、enocoと「おおさかカンファス推進事業」という「拠点」と「事業」の両輪が生み出され、「水都大阪」等といった都市づくりとの協働の中で、都市におけるアートの実践が展開されてきた

#### » ノウハウやネットワークを地域に還元

広域行政として、蓄積されてきたノウハウやネットワークを府内の市町村にも還元する仕組みづくりにも注力し、アートやデザインが地域の課題に活かされる場を切り開いてきた

文化を取り巻く厳しい状況の中、文化芸術を保護し維持していくという観点ではなく、文化芸術が新たな価値をつくり、社会や経済を牽引していくという観点から、アート・デザインが都市の発展、地域課題の解決において重要な役割を担うことが期待され、そのための仕組みや拠点づくりが行われてきました。



## 大阪のまちとアートの12年

enocoは2012年にアーティストやデザイナーなど創造的な活動を行う人々の拠点施設として開館したが、大阪府が手がける文化事業は、enoco開館以前の約10年間、主として都市におけるアートの実践を軸にして展開されてきており、その延長戦上にenocoが存在している。

その歴史はenocoの前身組織である大阪府立現代美術センター(2012年3月閉館、以下現美センター)時代に遡る。

### 行政とNPOによる協働

2005年度、現美センターにおいて大阪現代芸術フェスティバル《大阪・アート・カレイドスコープ第3回『do art yourself～すべての人は表現者』》が開催された。それまでプロデューサー制度をとっていたこの事業における新たな試みとして、大阪の8つのアート系NPOによる協働事業体(コンソーシアム)が企画運営するという形態で開催され、「架空のアートセンターをつくる」というテーマのもと、様々な専門性や活動領域をもつ人々とのネットワークを活用しながら、現美センターを中心に展示、トークイベント等が実施された。



《大阪・アート・カレイドスコープ2007「大おおに会いたい」》  
フェリチェ・ヴァリエニ「Vingt et une droites en spirale」(大阪府庁本館) 撮影:高嶋清俊

### ハード・ソフトが一体となった都市再生(水都大阪2009)

現美センターでの試みと前後して、2001年頃から大阪という都市を「水の都」として再生する動きが大阪府・市・経済界等で始まり、その中で2009年をシンボルイヤーとし《水都大阪2009》という都市再生イベントが開催されることになった。その運営組織として、2007年に実行委員会が発足する。《水都大阪2009》は「川と生きる都市・大阪」をコンセプトとし、アートと市民参加を軸に展開されることになり、アートのプロデューサーに北川フラム氏が就任。同年と翌2008年に北川氏とともに《大阪・アート・カレイドスコープ》を実施した現美センターがそのノウハウを活かすべく、アート部門の中核を担うチームとして加わった。

《水都大阪2009》は、当時の府知事によって2008年に計画修正が提案されたことにより、水辺を中心とした都市の景観整備というハード面と、アートを活用した都市の魅力発信というソフト面の協働が強化されることとなり、これまで現美センターが形成してきたネットワークをさらに拡大するあたりに協働者を得ていった。メイン会場となる中之島公園では「水辺の文化座」と題して、150組以上のアーティスト・団体による参加型プログラムが多数展開され、アートによる多様な場の使いこなしが実施された。この《水都大阪2009》が大きな契機となり、まちづくりや都市計画、建築といったジャンルで活動する人々とアートの実践者などが協働する仕組みやネットワークが形成され、大阪府の文化事業はここから、アート・デザインを活用し都市の課題をクリエイティブに解決していく仕組みと拠点づくりを目指して新たな局面を拓いていくこととなる。



《大阪・アート・カレイドスコープ『do art yourself～すべての人は表現者』》会場 撮影:八久保敬弘

### 都市の中でのアートの展開

翌2006年度、《大阪・アート・カレイドスコープ》は再度プロデューサー制度をとるが、その際越後妻有アトリエンナーレなどを手がける北川フラム氏をプロデューサーに迎え、大阪市内の船場エリア等に残る現役の近代建築等で作品展示をするという新たな試みを行った。都市部において歴史的建築物や場所を活用した展覧会は今でこそ一般的ではあるが、当時はまだそれほど前例がない試みだったため、場所選定や使用交渉などに建築家や船場エリア等でのまちづくり活動を行う人々の協力を得ながら進めることとなった。



《水都大阪2009》ヤノハチジロ「ラッキードラゴン」 写真提供:ヤノハチジロ

### 北川フラム(アートディレクター/水都大阪2009プロデューサー)

大阪・アート・カレイドスコープの時に大阪のまちに入っていくと、様々な元気のいいNPOなどの人々に多数出会いました。アート、建築、まちあるき、水辺での活動…別々に動いているけれど、ひとつひとつは質が高く活発で、東京よりも数が多い。そういった人々の動きとともに、大阪が東洋のマンチェスターと呼ばれた大正時代の近代建築、そして川・水辺といった資源を活用しない手はないと思いました。「水都大阪2009」では更に多くの人々に協力を呼びかけ、様々なアーティストや団体による五感を使って

水辺を楽しむプログラムを展開しました。あの時の密度や濃度が、その後の大阪の動きに繋がっているのではないのでしょうか。水辺に目を向け、まだら模様のように存在する多様な都市の様相をアートの実践の場としていくことで、都市の未来が拓かれる可能性がまだまだ大阪にはあると思います。



Photo: Junya Ikeda



公共空間を使いこなし、アートで都市の可能性を拓く

《水都大阪2009》が開催された2009年、大阪府は独自の連携プログラムとして、木津川護岸をアーティストの発表の場として活用し、人と川の繋がりを生み、アートで新しい水辺の風景をつくりだす事業《木津川ウォールペインティング》を実施した。さらに翌2010年、活動領域を大阪府内全域に広げ、大阪のまちをアーティストのアイデアや想いを実現できる場として活用することで、大阪の新たな都市魅力を創造・発信していく《おおさかカンヴァス推進事業》(以下、《おおさかカンヴァス》)を開始した。アーティストやクリエイターから制作したい作品と場所についてアイデアを募集し、大阪府内の様々な場所での作品展示を行った。

《おおさかカンヴァス》は以降、まちなかの公共空間にかかる様々な規制やルールに挑戦しながら、アートが多様な場の使いこなし方、魅力の発掘を先導して提示し、都市の新たな可能性を拓くこととなった。



《おおさかカンヴァス2010》Yotta Groove「イッテキキマSIPPON シリーズ“花子”」(中之島公園)

水都大阪とおおさかカンヴァスの連携

「水都大阪」の動きは、2011年に府民市民が積極的に参加することを通じ、互いに楽しみを分かち合い、水辺を使いこなし、水都大阪に愛着を持つ環境を創造することを目標に《水都大阪フェス》として再始動した。2012年以降は、この《水都大阪フェス》と《おおさかカンヴァス》が連携を強化し、アートやデザインを活用した都市の魅力づくりを推進していく。

2013年には「水都大阪」を推進する民間事業者として一般社団法人水都大阪パートナーズが発足、中之島西端の安治川沿いの埋立地を「中之島GATE」として、新たな水辺の賑わいづくりと社会実験の拠点として位置づけた。その地で2013年に《おおさかカンヴァス》を開催し、5万人を超える人を集め、まだ見えなかった場所の魅力を提示した(それがきっかけとなり翌年には大阪を代表する劇団「維新派」が野外公演を実施するという成果も生み出した)。



《おおさかカンヴァス2013》MuDA「MuDA特区」(中之島GATE)

アートやデザインを活用した社会課題解決拠点「enoco」

2012年、これまでの大阪府の文化事業の中で培ってきたネットワークを活かし、アートやデザインの持つ力で社会課題や行政課題などの解決を試みる拠点として、大阪府立江之子島文化芸術創造センター(enoco)が開館。同時に、多様なステークホルダーとともにクリエイティブな発想で、都市・地域の課題解決や枠組みづくりに取り組むべく、「プラットフォーム形成支援事業」も開始し、enocoがそれを担うこととなる。大阪府は事業としての《おおさかカンヴァス》と拠点としての《enoco》の両輪を抱えて、文化による都市の魅力創造をさらに展開していくこととなる。

ネットワークとノウハウの拡がり

enocoは府という広域行政の施設として、enocoや《おおさかカンヴァス》に蓄積されるノウハウやネットワークを活かし府内の自治体などが抱える課題の解決のサポートも実施し、大阪府内の市町村等にもアートやデザインによる地域課題への取り組みを水平展開していく。《おおさかカンヴァス》も2016年までに7回開催、水都大阪との連携以外にも道頓堀川や万博記念公園など大阪を代表するエリアの更なる魅力発信に寄与した。大阪府の文化事業はこうして、都市の中でのアートの展開を軸に推進され、他の都市にはない独自性を切り拓いてきた。なお、《おおさかカンヴァス》は2016年度末をもって事業を終了する。



《おおさかカンヴァス2015》Class株式会社「ローリングシー」(道頓堀)

ヤノベケンジ(美術作家/おおさかカンヴァス審査員)

「水都大阪2009」は当時の府知事によって計画の再考を求められたのですが、その時に船を改造し、実際に乗って大阪の川を巡ることの出来る作品「ラッキードラゴン」をつくりました。これが人々のイマジネーションをかきたて、大阪の街を新たな視点で見る起爆剤となったのではないのでしょうか。それが契機となり、その後の「おおさかカンヴァス」では、アーティストのアイデアを都市の中で具体化できる仕組みがつけられました。カンヴァスは他の芸術祭とは違い「都市の可能性を拓く役割をアートがいかに担うのか」ということを問われます。アートの専門家でない人でも行政のサポートを受けて発表をすることができます。それにより今までにないアートの価値観や概念を発明したプロジェクトと言えると思います。



112 国内外の20世紀後半の美術作品を中心としたコレクションを形成した

113 コレクションを活用し、府民が現代美術に触れる多様な機会を生み出した



具体美術協会に参加していた上野智祐など関西を拠点とする作家の作品も多い

概要

» 大阪府20世紀美術コレクションの形成

大阪府では国内外の20世紀後半の美術作品を中心に、約7900点に及ぶ様々な美術作品を「大阪府20世紀美術コレクション」として所蔵している。当初は大阪府が設立を計画していた「芸術文化センター(仮称)」に収蔵される予定で、国内外の美術作品を収集してきたが、同センターの構想が2001年に中止となり、2007年を最後に美術品の収集は行っていない。コレクションの管理と活用は、大阪府立現代美術センターが担ってきたが、2012年3月に現代美術センターが閉館し、その後2012年4月からはenocoがコレクションを管理・活用する業務を行っている。

[期間]

1974年～2007年

作品点数:約7900点

所蔵:大阪府

収蔵:enoco

関連事業

- ▷ 5YEARS 大阪府20世紀美術コレクションの活用
- ▷ 5YEARS 大阪新美術館建設準備室(大阪市)との連携
- ▷ 4MONTHS dracom「gallery (extra version)」
- ▷ 3MONTHS 市民キュレーターワークショップ
- ▷ 2WEEKS 大阪府20世紀美術コレクション展
- ▷ 2WEEKS eno co-labo.
- ▷ 2DAYS アートフォーラム(子どもとアート)の現場を考える
- ▷ 1DAY enocoアート・キャラバン
- ▷ 3HOURS 大阪府20世紀美術コレクション 連続講座 / ミニコレクション展

ポイント

» 展覧会と連携し収集する

コンクールや美術館と連携した展覧会を開催しながら、作品収集を行ってきた

» 偏りをつくらない

関西を中心とした日本の作家の作品はもとより、欧米が主導する現代美術の潮流に片寄らない、世界各国の多様な作家の作品を幅広く集めた

7900点ものコレクションは貴重な財産ではありますが、大阪府には府立の美術館がないため、コレクション形成と並走するかたちで、いかに広く府民の方々にみってもらうかが問われ、試みがなされてきました。現在のenocoでも他にはないコレクション活用のかたちを模索しています。





## コレクション紹介

コレクションを大きく分類すると、絵画が全体の半分以上を占め、次に写真、版画の順となっており、それらは主に「関西の現代作家コレクション」「世界の現代美術」「現代版画コレクション」「現代写真コレクション」により構成している。ここでは、代表的なコレクションについて紹介する。



第1回「現代版画コンクール」(1975年)の展示風景

### 現代版画コレクション

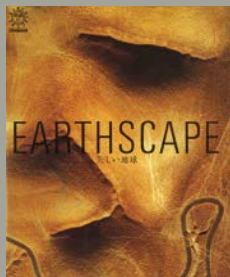
1974年、大阪府民ギャラリーが堂島に開設、その際、現代版画の収集と展示を活動方針のひとつに掲げた。翌年、ビエンナーレによる現代版画コンクールを創設、受賞作品の収集をはじめた。第1回展の大賞賞金は20万円、2回展(1977年)から30万円に、第10回展(1994年)からは50万円になった。応募点数は約300~500点の中から50~100点の入選作品を選定した。第14回展(2002年)を最後に現代美術コンクールに変更された。主な所蔵作品として、浅野竹二、前田藤四郎、川西英、泉茂、吉原英雄、粟津潔、池田満寿夫、横尾忠則、宇佐見圭司、井田照一などの作品がある。



第1回の「大阪トリエンナーレ」(1990年)のチラシ。1回目は「絵画」部門だった

### 世界の現代美術(大阪トリエンナーレ等)

1990年から2001年まで毎年、絵画・版画・彫刻とジャンルを変えながら「大阪トリエンナーレ」という名の国際現代造形コンクールを計10回開催し、それらの受賞作品を中心にコレクションを収集してきた。グランプリ(1点)は1,000万円、銀賞(2点)各500万円、銅賞(5点)各150万円の賞金が主催者賞となり(絵画の場合)、その他協賛の企業団体特別賞や、関西ドイツ文化センター・デュッセルドルフ市特別賞としてドイツ留学賞などが授与された。欧米の現代美術の潮流に片寄らない東欧・アジア・アフリカ・ラテンアメリカ・オーストラリアなど世界各国の作家の作品が幅広く集められた。



1990年花博での展覧会のカタログ表紙。この時の出展作品が寄贈され、「現代写真コレクション」の一部となっている

### 現代写真コレクション

1990年に大阪・鶴見緑地で「国際花と緑の博覧会(花博)」が開催された。会場内での「花博写真美術館」では「花と緑と自然」「EARTHSCAPE/美しい地球」というテーマで日本と海外の写真作品の展示が行われた。大阪府は当時の出展委員会から作品の寄贈を受け、それらを花博写真コレクションとした。主な作品として、海外ではE.アージュ(フランス)、A.ステューグリッツ(アメリカ)、E.ウェストン(アメリカ)、A.アダムス(アメリカ)、A.C.ブレッソン(アメリカ)など、日本では岩宮武二、秋山庄太郎、三木淳、入江泰吉などがある。また大阪を拠点に戦後の写真界で活躍した岩宮武二、田中幸太郎、津田洋甫については、花博写真コレクションとは別に購入と寄贈によってまとめて収集している。



「今日の作家シリーズ」第1回「前田藤四郎版画の50年」(1978年)の展示風景

### 関西の現代作家コレクション

戦後から1970年代に関西を拠点として活躍した美術作家たちの作品を収集してきた。作家からまとまった作品数の寄贈を受ける・購入するほか、「吉原治良美術コンクール」の受賞作品や「今日の作家シリーズ」展(1978~2007年)の作家などの作品も収蔵してきた。浅野竹二、伊藤継郎、須田剋太、津高一、上智智祐、井原康雄、金光松美、清水九兵衛、三尾公三、森口宏一など、関西のみならず、関東や海外などでも活躍した作家の作品が多い。

## 114 次々と解体の憂き目にある昭和初期のモダニズム建築が、文化施設として保存・活用された



大阪府工業奨励館付属工業会館

### 概要

#### » 大阪府工業奨励館付属工業会館の変遷

### 【期間】

1938年3月(竣工)~現在

旧称:大阪府工業奨励館付属工業会館

建設年:1938年(昭和13年)

構造・規模:鉄筋コンクリート造、地上4階・地下1階

設計:大阪府営繕課(島野七郎)

施工:大林組

改修設計・施工:長谷工コーポレーション

工事種別:改修一部増築(建築基準法第86条の7及び令第137の2適用)

敷地面積:1866.50㎡

建築面積:668.48㎡

延床面積:2943.57㎡

### ポイント

#### » 昭和初期の先駆的な建築を今に伝える

工業会館は大阪に現存する昭和初期モダニズム建築として貴重であるのみならず、当時の大阪府営繕課の先駆的な仕事としても重要な建築である

#### » 戦禍をくぐり抜けた

旧大阪府庁舎をはじめ工業奨励館の施設のほとんどが空襲で失われたなか、鉄筋コンクリート造の工業会館だけが戦禍をくぐり抜けた

#### » 解体されずに放置された

大阪府立産業技術総合研究所が移転した後も施設が解体されずに放置されたことが、結果的には幸いした(ただし廃墟と化した建築の損傷は激しかった)

いくつもの困難な条件のなか、民間に土地を売却しながら工業会館を残す手段としてはこの方法しかなかったのかもしれないが、改修設計に際して専門家を正式な監修者に付けるなど、もっとやりようはあったのではないかと悔やまれます。



## 工業会館のこれまで



大阪府工業奨励館

enocoの建物は、1938（昭和13）年に建てられた大阪府工業奨励館付属工業会館をコンバージョン（用途転用）したものである。工業奨励館の付属棟として、各種工業団体を入居させて業界の連携を図る目的で計画された。1938年といえば既に戦局が進み、前年の鉄鋼工作物築造許可規則等によって、国内の建築物の建設が著しく制限されていた時期で、翌1939年に竣工した大阪中央郵便局（現存せず）あたりを期に大阪市内の建設活動はストップしていく。御堂筋沿いに建設中であった日本生命新本館は建物の北半分を仮の外装で一旦竣工させ（1938）、大阪駅前の梅田阪神ビルは、当初8階建の計画であったところを4階建、面積にして1/4の規模で仮開業せざるを得なかった（1941）。工業会館も当初の使用目的を変更し、団体の入居や4階ホールに想定していた技術者倶楽部の設置等を見送り、施設の業務機能をここに集約することになった。しかし1階の工業図書館だけは予定通りに設置され、本館にあった発明図書館を移設し、合わせて鳥井信次郎から

寄贈を受けていた2万冊の工業図書を移管して、広く一般の閲覧に供した。工業会館を設計したのは、大阪府営繕課に所属していた技手の島野七郎。島野は1900（明治33）年に佐賀県で生まれ、1925（大正14）年に京都高等工芸学校図案科（現在の京都工芸繊維大学）を卒業してすぐ大阪府営繕課に入っている。学生時代、日本のモダニズム建築の先駆者の1人である本野精吾に出会ったことが、島野の建築デザインに大きな影響を与えたとされる。工業会館の他には天王寺中学（1929）や堺中学（1932）などを設計し、工業会館竣工翌年の1939年に大阪府を退職して大陸へ渡った。現存する工業会館の建物は、大阪における昭和初期のモダニズム建築として貴重な存在といえる。木津川に面して大きなアールを取った南西角の外壁と水平連続窓、そして屋上に設けられた塔屋のデザインに特徴があるが、同時代に建てられた中之島の朝日ビル（1931・現存せず）や、西横堀川と長堀川が交差する四つ橋にあった大阪市立電気科学館（1937・現

存せず）などと同様、全体のシルエットが船舶をイメージさせるのが面白い。大阪のモダニズム建築といえば、安井武雄が設計した大阪ガスビル（1933）や、竹中工務店の石川純一郎による前述の朝日ビルなど、民間の建築家による建築の他に、日本インターナショナル建築会に所属していた伊藤正文や新名種夫を擁した大阪市建築課による旧大阪商科大学（1933～34、伊藤）や前述の電気科学館（1937、新名）などが知られるが、大阪府営繕課にも西田勇や島野らが昭和の早い時期にモダニズム建築を生みだしていたことは、もっと注目されていだろう。1945（昭和20）年の大阪大空襲によって工業奨励館の本館は焼失して建て替えられたが、工業会館は残って活用され続けた。新たに建てられた新築部分とは、建物北側にある階段の踊り場に開口を開けて接続されていた。その後工業奨励館は大阪府立工業技術研究所（1973）、大阪府立産業技術総合研究所（1987）と名称を変えつつ活動が続くが、1996（平成8）年に和泉市へと全面移転した後に跡地は放置され、建物はガラスが割れて外壁のタイルが剥落するなど、廃墟のような姿を長らく晒すことになった。その後2007年に府有地を民間に売却する事業コンペが実施されることとなり、工業会館はその建築的価値が認められ、府所有のままアートセンターとして保存・活用することが決定した。改修は事業を実施する企業グループが担い、大阪府に寄付することとされた。新たなアートセンターの建築計画は、7000点を超える大阪府の美術コレクションを保管する収蔵室と展示室、会議やワークショップなどを行う複数の多目的室などで構成され、事業者グループの一員であった長谷工コーポレーションが大

阪府の定めた仕様に基づき設計・施工を行い、2012年に大阪府立江之子島文化芸術創造センターとして新たに開館した。考えてみれば、元々江之子島に建てられた大阪府庁舎（1868）は、府庁の移転に伴い1929（昭和4）年に大阪府工業奨励館へとコンバージョンされ、旧府庁舎は焼失したものの、その付属棟が次はアートセンターにコンバージョンされたことになる。増築を挟んで歴史的建築の保存・活用が継承されたユニークな再生事例といえるだろう。しかしアートセンターへのコンバージョンは、府の所有する近代建築の保存・活用の先駆としては評価に値するものの、改修設計としては問

題が多いと言わざるを得ない。最寄り駅からのアプローチに対してエントランスが背を向けていることや、展示室の真ん中に柱が立つといった機能的な問題は、既存建築の配置や構造上仕方がないが、外内装共にオリジナルの部材や仕上げをほとんど撤去してしまい、新築同然に仕上げしてしまったことは、この建築の歴史的価値と魅力を大きく損ねてしまった。エントランスや階段部分にはオリジナルの意匠が残り残されたものの、新しい部分との取り合いがうまく処理されておらず唐突な印象はぬぐえない。なお、玄関扉の欄間に飾られていた、歯車や煙突をモチーフにしたアールデコ風のガラ

スレーフは額装して保存され、地下のフリースペースに展示されている。コンバージョンがうまくいかなかったのは、設計・施工を担当した長谷工コーポレーションと大阪府の担当課の双方が、歴史的建築の保存・活用についての理解に乏しかったことが原因だが、外壁タイルの浮きが激しく鋼製建具の腐食もひどいなど、長らく放置したことによる損傷が改修を更に困難なものにした。加えて開発業者に改修費用を負担させて府が寄付を受けるというスキーム自体が、改修コストの低減を優先する方向に作用したことは想像に難くない。

※歴史写真提供：大阪府立産業技術総合研究所



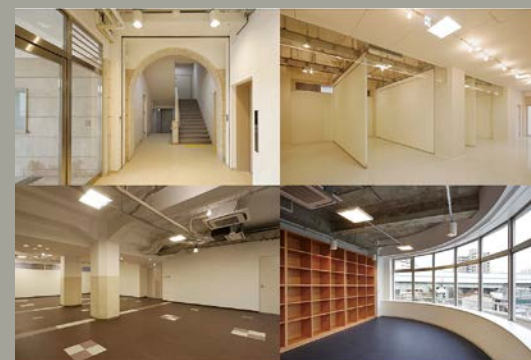
改修前の工業会館



放置され廃墟ようになっていた



改修前の建物内部



改修後の建物内部



**115** 江之子島は大阪における近世と近代、あるいは日本と西洋の結節点として歴史的な役割を果たしてきた

**116** 拠点機能が外部へ移転したことが、21世紀の新たなまちづくりのフィールドを用意した



空襲の傷跡が色濃く残る戦後の江之子島周辺。この頃はまだ「島」だった

概要

» 江之子島と大阪

[期間]

1868年7月15日(大阪開港)～現在

ポイント

» 水運の要衝として発展した

そのため交易の拠点であり、大阪の近代化の中心地となった

» 行政の中心から工業支援の中心へ

江之子島は明治からの約半世紀を行政の中心、第二次世界大戦を挟んで高度経済成長期までの約半世紀を、大阪の工業を下支えしてきた中小工業支援の拠点として機能してきた

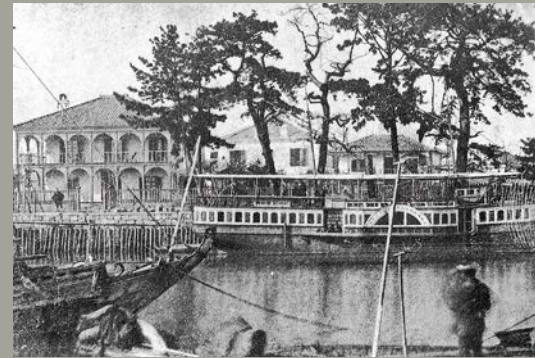
» 一時の忘却を経て

一時、大阪の歴史や人々の記憶から姿を消すが、都心の広大な土地が長らく大阪府の所有地であったことが、逆に実験的なまちづくりへの挑戦を可能にした

歴史的にみれば、次の半世紀はアート&ライフスタイルという、文化と都心居住と医療が融合した、新しいまちづくりのフロンティアとなることが期待されていることになります。



江之子島の変遷



川口居留地の様子

近世の江之子島とその周辺

enocoがある江之子島はその名が示す通り、かつては川に挟まれた三角州だった。江之子島の西が木津川で、東側には百間堀川という堀川が流れていた。百間堀川の対岸には、近世大阪の三大市場のひとつといわれた雑喉場(ざごぼ)の魚市場があり、1931(昭和6)年に中央卸売市場が設立して統合されるまで、大阪の台所を支えていた。

大阪湾に至る安治川と、市中を流れる堀川の合流地点という立地から、江之子島は幕府の監船や塩船などの繋留地として活用され、木津川沿いには船大工が集まり、対岸の川口には、大阪に入津する諸国の船舶を監視する船番所が設けられていた。

明治の近代化と大阪府庁舎の建設

大阪湾の玄関口として、1868(明治元)年に川口に外国人居留地が設けられ、並木道と街灯の並ぶ道路が整備された、洋館の街並みが形成された。居留地とその南に設けられた本田の雑居地は、大阪における文明開化の中心地となり、カフェや西洋料理のレストラン、本格的な中華料理店などが生まれ、文化人が集まるエリアとなった。

しかし河口港である川口は水深が浅く、大型船の入港が困難であったことなどから、貿易の拠点は神戸港へと移り、外国商人は次第に神戸の居留地へと移転していった。その後キリスト教の各派が入れ替わるようにして教会堂を建て、川口は布教の拠点となり、数多くのミッションスクールや病院が設立された。1899(明治32)年の条例改正によって居留地は廃止され、規模を拡大した学校などは川口から移転していったが、1920(大

正9)年に建て替えられた煉瓦造の川口基督教会が、その名残をかりうじて今に伝えている。

一方、江之子島には1874(明治7)年に大阪府庁舎が建てられた。現在の中央区本町橋にあった西奉行所が最初の府庁舎として使われたが、手狭であったため江之子島に2代目を新築することになったのである。市街の西端であった江之子島が選ばれた理由は、交易と西洋文化の玄関口であり、今後大阪湾に向かって大阪が発展していけば、この地が大阪の中心になると、当時の府知事が考えたためとされている。その意思を表すかのように、府庁舎は正面玄関を西の大阪湾に向け、市街地に背を向けて建てられた。

新庁舎は中央に列柱を配して屋根にドームを戴く煉瓦造石張の2階建て、設計には造幣局の建設に携わったキンドルあるいはウォートルスが関わったと考えられている。明治一桁代の本格的西洋建築としては最大級の規模を誇り、同時代に建てられた他の都道府県庁舎の多くが瓦屋根の木造和風建築であったなか、規模・意匠共に別格の存在であった。あまりの壮さに当時庶民からは「江之子島政府」と呼ばれ、多くの人々が物珍しさに訪れたという。なお、1916(大正5)年には南北両翼部が木造によって増築された。

大阪府に遅れて1889(明治22)年に大阪市が誕生するが、当時は府知事が市長を代行したため府庁舎に間借りするところから始まり、1899(明治32)年、府庁舎の北西に小さな洋館の市庁舎が建設された。1912(明治45)年に堂島の木造仮庁舎に移転するまで、大阪市役所は江之子島にあったことになる。加えて1893(明治26)年から1934(昭和9)年までの間、西区役所も江之子島に設けられていた。1926(大正15)年に新しい大阪府庁が大手前に完成するまでの約半世紀の間、江之子島は文字通り行政の中心地だったのである。



江之子島の中央に位置する府庁と対岸の川口居留地



## 大阪府庁の移転と工業奨励館の設立

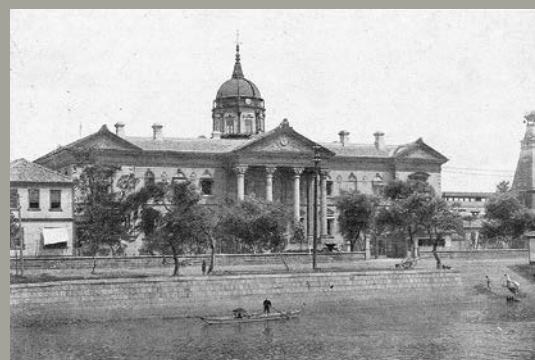
府の業務量が増加して江之子島の庁舎が手狭になったため、大阪城の西の大手前にあった陸軍の土地を取得し、3代目の庁舎を建設、大阪府庁は1926（大正15）年に移転した。当初大阪府は、江之子島の旧庁舎とその敷地を売却する予定であったが、大阪商工会議所などから存置の陳情などがあって方針を転換、府内の各部課から活用を募った結果、内務部工務課から提案のあった「工業奨励館」として用途転用することが決定、1929（昭和4）年に改めて開館した。府庁の執務室であった部屋にヨーロッパから輸入した工作機械や計測器などが並べられ、府下の中小の工業者に対して技術指導を行い、大阪の工業の近代化とその発展を推進した。そして1938（昭和13）年には、庁舎の南に工業関連の図書室等を設けた工業奨励館付属工業会館が建てられた。

これが現在のenocoである。

## 戦後の江之子島

1945（昭和20）年の大阪大空襲によって江之子島とその周辺は焼け野原と化し、旧府庁舎をはじめとする工業奨励館の施設は、付属工業会館を除いてほとんどが焼失した。その後旧府庁舎の跡地に鉄筋コンクリート造の施設が新築され、1973（昭和48）年に大阪府立工業技術研究所、1987（昭和62）年には大阪府立産業技術総合研究所と、再編整備によって名称を変えながらも施設は維持されたが、1996（平成8）年に和泉市へ全面移転したことで、2000（平成12）年以降この土地は完全に閉鎖され、敷地全体が仮囲いによって覆われた。

一方、江之子島周辺も戦後に大きく変化した。百間堀川に流れ込んでいた堀川がまず埋め立てられていき、百間堀川も1964（昭和39）年に埋め立てられて、江之子島は島でなくなった。工業奨励館の敷地の南には復興都市計画街路として、築港深江線（現在の中央大通）が大阪の東西を繋ぐ幹線道路として計画された。幅80mの大道路が建設され、1964（昭和39）年には弁天町～本町間で地下鉄が開通した（現在の中央線）。ちょうど江之子島が、地下鉄が高架から地下へと潜り込む地点となっている。



大阪府庁（明治7年建設、大正5年増改築）



戦後に再建された本館部分



昭和41年当時の工業奨励館

## enocoの開館とアート&ライフスタイルのまちづくり

大阪府は遊休地と化した約1.5ヘクタールの土地を民間に売却する方針を固め、2006（平成18）年に「旧大阪府立産業技術総合研究所跡地活用企画委員会」を設置、歴史と文化の視点から府庁ゆかりの地にふさわしい魅力あるまちづくりを目指すという方針のもと、アートと都心居住が融合する「江之子島アート&ライフスタイル」を開発コンセプトとして、2007（平成19）年に「江之子島地区まちづくり事業コンペ」を実施した。その際の条件として、昭和初期のモダニズム建築として貴重な元工業奨励館付属工業会館とその敷地部分を府の所有としたまま残し、事業者がアートセンターにコンバージョンすることが求められた。

コンペには民間4グループが応募し、審査の結果長谷工コーポレーション等で構成された企業グループが選定され、民間による再開発が進むこととなった。分譲マンションの建設に先立ってまずアートセンターの改修が完了し、大阪府立江之子島文化芸術創造センターと名付けられ、指定管理者制度による運営のもと、2012（平成24）年にオープンした。enocoというのは、オープン後に公募によって決められた愛称である。

その後2013（平成25）年に20階建187戸、2016年に46階建565戸のタワーマンションが竣工し、西区全体の人口増の流れによって、江之子島2丁目も人の暮らす街となった。また2012（平成24）年には事業計画の変更があり、敷地の北半分に総合病院の日生病院が移転してくることが決定、350床の新病院が2017（平成29）年中に完成予定である。江之子島まちづくり事業は文化施設とマンション、そして病院が有機的に連携しつつ、アート&ライフスタイルをキーワードに、これまでにない新たなまちづくりを目指している。



閉鎖されていた頃の工業会館



大阪府立江之子島文化芸術創造センターへと生まれ変わった工業会館



アート&ライフスタイルをキーワードにしたまちづくりが進められている



年表

年度	江之子島とenocoの歴史・動き	大阪府の文化行政	大阪その他の動き
1868年 (明治元年)	・大阪開港、川口居留地設置		
1874年	・江之子島に大阪府庁舎開庁		
1889年	・府庁舎内に大阪市役所設置		
1899年	・川口居留地廃止		
1912年	・大阪市役所堂島へ移転		
1926年	・大阪府庁大手前へ移転		
1929年 (昭和4年)	・旧庁舎を改修し、大阪府工業奨励館を開設		
1938年	・工業奨励館付属工業会館を新設 (現在のenocoの建物)		
1945年	・戦災により大部分が焼失(工業会館は焼け残る)		
1950年	・本館の復興		
1970年			・大阪万博開催
1973年	・大阪府立工業技術研究所に名称変更		
1974年		・現代美術センターの前身である府民ギャラリーが堂島に開設	
1980年		・大阪府立現代美術センターが中之島に開設	
1987年	・組織再編により大阪府立産業技術総合研究所に名称変更		
1990年		・大阪トリエンナーレ(国際現代造形コンクール)開始	・国際花と緑の博覧会開催
1996年 (平成8年)	・大阪府立産業技術総合研究所が和泉市に全面移転		
2000年		・大阪府立現代美術センターが谷町四丁目の府庁新別館に移転	
2001年			・内閣官房都市再生本部によって「水都大阪の再生」が都市再生プロジェクトに指定
2002年			・水の都大阪再生協議会、花と緑・光と水懇話会設立
2003年			・水の都大阪再生構想策定、大阪花と緑・光と水まちづくり提言
2004年		・現代芸術フェスティバル(大阪・アート・カレイドスコープ)スタート	
2005年		・現代芸術フェスティバル(大阪・アート・カレイドスコープ)2005「do art yourself～すべての人は表現者」	
2006年	・旧工業会館の保存・活用、現代美術センターの移転・再構築について庁内の基本方針確定		
2007年	・江之子島地区まちづくり事業コンペ	・現代芸術フェスティバル(大阪・アート・カレイドスコープ)2007「大大阪に会いたい」	・水都大阪2009実行委員会発足
2008年		・現代芸術フェスティバル(大阪・アート・カレイドスコープ)2008「大阪時間」	
2009年		・木津川ウォールペインティングスタート	・水都大阪2009開催(大阪府・市・経済界)
2010年		・おおさかカンヴァス推進事業スタート	・水都大阪推進委員会設立
2011年	・江之子島アートセンター構想検討会設置 ・江之子島アートセンター(仮称)検討会設置 ・指定管理者募集・選定		・水都大阪水と光のまちづくり構想策定 ・水都大阪フェスタート
2012年	・大阪府立江之子島文化芸術創造センター(enoco)開館	・現代美術センター閉館	
2013年		・大阪アーツカウンシル設立	・一般社団法人水都大阪パートナーズ設立 ・水と光のまちづくり推進会議設立
2014年		・おおさかカンヴァスが全国知事会主催の都道府県政策コンテストで大賞受賞	
2016年	・enoco1期指定管理者最終年度		・「水都大阪のまちづくり」日本都市計画学会「石川賞」受賞
2017年	・enoco開館5周年	・おおさかカンヴァス推進事業終了	・一般社団法人水都大阪パートナーズ解散



enocoをより深く知るためのインタビュー

enocoをより深く知ってもらうため、いつもお世話になっている方々に「enocoと」の関係性を聞いてみました。「そういえばどうだったっけ?」という基本的なことについてエノケンに尋ねる「教えて、エノケン!」もあわせてどうぞ。

## INTERVIEW

### 後藤哲也

(デザイナー / 江之子島アート&ライフ事業ディレクター)

2016年8月8日 @enoco

聞き手: 榊原充大 (RAD) + 高岡伸一 / 高坂玲子 (enoco)

#### —enoco との最初の関わりは？

後藤：デュッセルドルフの市の文化局とアーティストのエクステンジブプログラムをやったんですけど、日本からドイツに派遣したアーティストが日本での帰国展の際に選んだのがenocoだったんです。

高坂：その3ヶ月後ぐらいにデュッセルドルフのアーティストが来て、enoco でやるといので、その後にもまた展示をしたんですよね。それが2013年でした。

後藤：無理にギャラリーやオルタナティブなスペースでやるよりも、こういうセンターがあるならそれを使った方がいいという思いがあって使わせてもらったんです。お金の問題よりも「その方が面白いんじゃないか」という。自然に発生するオルタナティブな動きだけでなく、パブリックな施設も関わる海外交流ができるといいなと思って。

高坂：当時はきちんと事業としての位置付けができなかったのですが、元々、大阪府がドイツとのエクステンジブをやっていたという縁もあって、オファーがあったからには、そういった国際交流もやるべきでは、という思いはありましたね。

#### —後藤さんは江之子島一帯の再開発に伴う「江之子島アート&ライフ事業」を進められていますが、そこではどういう役割を担っているんですか？

後藤：所管である大阪府財産活用課とenocoの調整役というか、プログラムを考えて理念を打ち出す、と言うよりは、調整したり翻訳したりというのが僕の役割ですね。

高岡：なんせステークホルダーの数が多いんですね。まず大阪府、マンション開発をしているディベロッパー、出資者、enocoの指定管理をしている長谷工コミュニティ。他にもコンペを出したりとかプログラム考えたりする際にいろんなコンサルが入っていてなかなか複雑なんですよ。

後藤：以前「これはまちづくりですか？」と言われたんですけど、僕は全然そういう意識はないんですよ。それぞれの施設・プログラムを運営している人たちとどう意思を揃えていくかがゴールですね。その最大公約数的な部分を地域の人たちに還元していくというか。

今後移転してくる日生病院、ディベロッパー、行政など、何個「縦割り」があるんだという感じですが、そこをどうにか繋げていくという課題に、楽しみながら取り組んでいる感じです。

高坂：enocoのまちへの関わり方としては、こういったエリアにある施設の使命として、考えていかないといけないなと思っています。制限なども多少あるんですが。

後藤：あとはenocoではできないことを江之子島アート&ライフ事業が持っているスペースを使って行う、ということもありますね。

高坂：逆に、ご一緒したほうがいいこともあって、それは私たちにとってもネットワークづくりに繋がるので、乗っかってもらっています。

後藤：アーティストがやりたいことを考えたときに、パブリックな場所でやったほうがよいことは必ずあるので、その使い分けを意識していますね。

#### —後藤さんは、大阪のアーティストやデザイナーなどクリエイターとのネットワークをお持ちですが、大阪のクリエイターにとってenocoができたことへのリアクションはどのようなものでしたか？

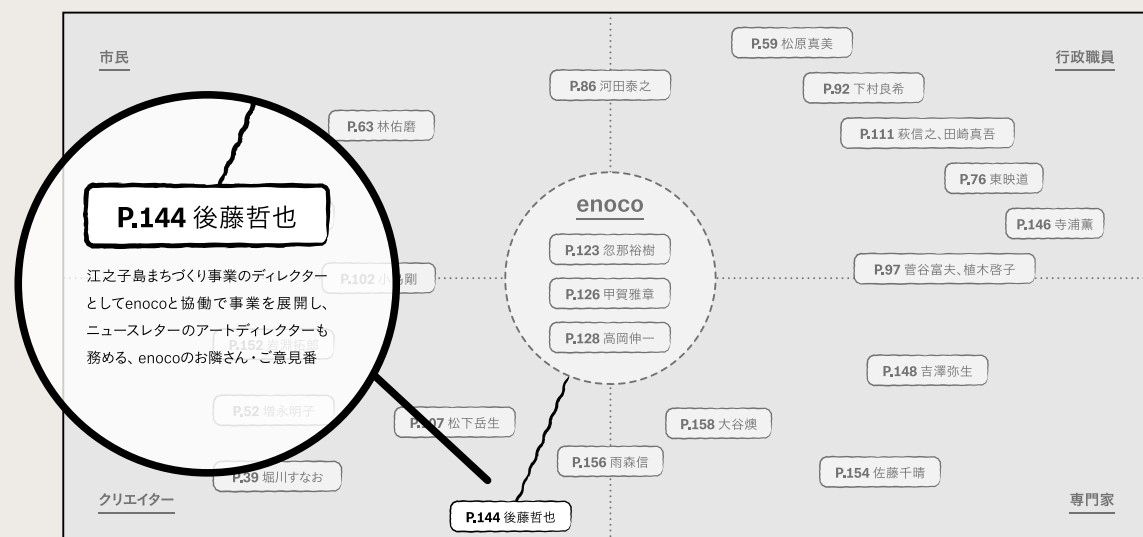
後藤：斜に構える人が多いのかな、という印象はありますね。行政がやっていることに対して関わることにあんまり積極的じゃないというか。それはどの地域でもあるとは思いますが。だからenocoをもっとうまく使える仕組みができた方がいいなと思っています。いかに自分たちの文脈で使うことができるか、ということが面白いと思うんですよ。

enocoは色が無いというか、めちゃくちゃダサイわけでも、めちゃくちゃ格好良いわけでもなくて、ニュートラルな感じだと思うんですよ。やり方によってかっこよく使うこともできるし、ダサく使うこともできる場所。そういう意味で可能性が広がりますね。

#### —後藤さんは施設の理念に対してどう感じますか？

後藤：理念は良いと思いますし時代に即していると思うんですけど、それがもっと広く知られたら良いなと思います。現

インタビューネットワーク図



美センターから文化芸術創造センターになって、現代美術だけを扱う場所ではなくなったがゆえに、デザイナーや建築家などが入る余地ができました。機会を待っているんじゃないかと、それを使うというのが大事。でもやっぱり「府立の何とかセンター」である、という壁はありますよね。レンタル利用はできるけど、自分たちの場所という思いにはなかなか至らない、というか。

高岡：一方で、現代美術を専門にしている人からすると、それは我々とは関係ないことをやっているという風に見られている方もいるだろうし。行政と何かやることに対するアレレギーみたいなものはある気がしますね。

#### —今後のenocoについてどんなことをお考えですか？

後藤：もう4年ぐらい関わりながらenocoがやろうとしていることを理解してきた部分もありますが、個人的にはすごく面白いと思ってます。できることを関係者に筋を通してその中でやっていく、という現実的なところも良いなと。そういう意味では現代美術はここじゃなくてもよいんじゃないかと個人的には思っています。

一方でもうちょっと「余白」があるというか、この部屋は誰でも使ってOK、みたいなスペースがあったりするとより良いのかなと。勝手にロゴがデザインされて、それが貼られ、結果的に公式に採用されてしまった、というような、周りからのウイルスを取り入れるみたいなことがあるとみんなもって使うんじゃないかと。

不公平でないようにする行政的な配慮も必要だと思うんですけど、どう考えても使わないだろうというスペースを自由に使ってよくなるか、プランを出したらenocoが検討してくれるとかそういう懐の広さっていうか。もっと勝手に使うことができて、「行政でこんなことできるの？」というようなことがもっとあったらいいなと思いますね。

後藤哲也 (デザイナー / 江之子島アート&ライフ事業ディレクター)  
江之子島アート&ライフ事業DECOCO、ならびに、OOO Projectsディレクター。主にグラフィックデザイン周辺の実践と研究を行いながら、江之子島では太極拳から美術展まで、幅広いプログラムの企画・運営を行っている。近畿大学文芸学部専任講師。大阪芸術大学デザイン学科非常勤講師。

## enocoって誰でも使えるの？

もちろん、誰でも使える。入館にお金はいらん。地下にはカフェや古本屋があって、そこだけ利用するのでも構わへん。展示会も無料のものも多くて、誰でもみることができねんで。ボクもふらっと遊びにいったら、子供たちが宿題しに来てたりするわ。展示室と多目的ルームはレンタルもやって、文化的な活動をしている人は、展示会やイベントとか、発表の場としても使える。会議や勉強会でも使える。各スペースの利用期間・時間や料金はホームページに載ってるねんで。





## INTERVIEW

### 寺浦薫

(大阪府 都市魅力創造局 文化・スポーツ課 主任研究員)

—寺浦さんは大阪府の職員としてenocoの立ち上げから関わっておられますが、enocoはどういう流れで今のようなかたちになったのでしょうか。

寺浦：府政の見直し作業の一環で、現実センターの移転が検討されるなか、もともと府庁舎があった江之子島エリア内の歴史的な建物を活用し、機能を移転させることになりました。ただ、芸術振興のみを軸とするのではなく、文化振興計画の改訂とも連動し、文化が社会を支えていくための機能を持ったアートセンターが必要だという議論になり、2010年度に「アートセンター構想検討会」にて、文化を社会に活かす活動をプラットフォーム型で進める拠点づくりというコンセプトが固まりました。このような方向にたどり着いたのは、2009年に府市経済界が連携して「水都大阪2009」という、アートと市民参加を軸にした都市再生プロジェクトを開催したことが大きかったです。この事業を進める中で、都市と人の多様なリソースが見えてきたのです。市内各所を舞台に様々なアートプログラムや社会実験を展開したのですが、まちづくりやデザイン、建築など多様な分野の人が関わることで、大きな成果を生み出しました。そういったステークホルダーやリソースを活かしながら都市を再生していく拠点が必要だよね、という議論が高まり、enocoの構想が固っていきました。

—「水都大阪2009」があった2009年には、木津川ウォールペインティングも実施されたんですね。

寺浦：その前年に「水都大阪2009」のプラン見直しを府単独で行い、新たな計画を提案しなければならない事態となり、そこで始めて都市整備部門と文化部門がひとつのプロジェクト・チームとして一緒に検討する機会が生まれました。「水都という都市魅力の発信」をするには、ソフトとハードを一体的に検討・推進する、つまりは縦割りを乗り越える以外に方法がなかったのです。そこで、当時の府知事から指示のあった木津川ウォールペインティング事業についても、都市整備部の遊歩道整備事業と連携し、一体的に進めることで、水都の魅力アップさせようと試みました。このような流れがあったことから、「木津川遊歩空間整備事業」も、単なる整備事

2016年8月8日 @enoco

聞き手: 榎原充大 (RAD) + 高岡伸一 / 高坂玲子 (enoco)

業にせず、我々文化セクションと都市整備部門が組んで、地域とも連携するプラットフォーム型で新しい仕組みづくりを進めることになったわけです。

—それまでは都市のインフラをつくる都市整備部と組むことはなかったんですか？

寺浦：なかったです。ただ、全国的に見ても、インフラ整備に地域の人々も関わり一緒につくっていくという流れが出てきていたので、大阪は文化と組むことで新しい展開ができるのでは、ということで仕組みづくりを進めました。

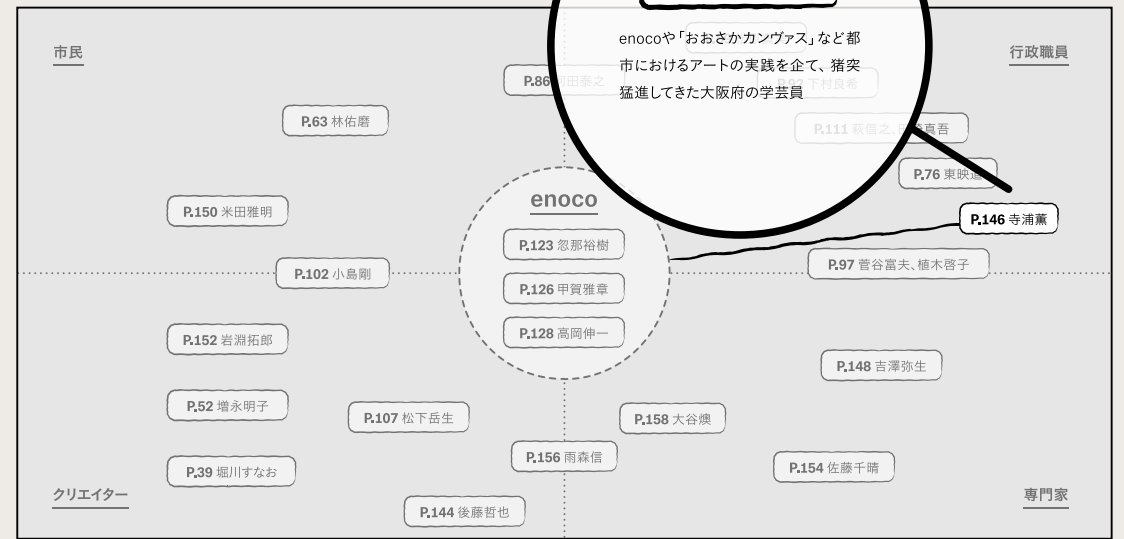
—日本での先行事例は何かあったんですか？

寺浦：プラットフォーム型の事例はいろいろあるのですが、それを文化系部局が中心になって部局横断的に横串を刺して動く仕組みをつくったところはないと思います。大阪府は2009年度に文化振興計画を見直して、文化が社会に支えられるのではなく、文化が社会を支える、という視点を打ち出しました。その計画を実現するために、enocoやenocoと一緒にやっているプラットフォーム形成支援事業でいろいろな課題解決をする事業をやっていきましょう、様々な分野にクリエイティブな発想を入れることで、社会を変え、文化が社会を支えていきましょう、という方向性が共有されていきました。

—寺浦さんから見て、東京などと比べて、大阪の文化の特徴というものは何かありますか。

寺浦：東京は人口と予算の桁がまず違いますね。ですので、先進的なものでもニッチなものでも成り立つ土壌があるとします。ですが、企業グループや組織で分断され、横のつながりが薄いということをよく聞きます。京都は美術館や芸術系大学、ギャラリーなど、コンパクトな都市規模の中に文化装置がしっかりあって、それらが連携しながら、マーケットも受け皿もしっかりつくっていると思います。一方、大阪は予算規模も小さいし、インフラ的なものも整っていませんが、NPOや民間の分野で独自かつ自由な活動がとてもアクティブ

インタビューネットワーク図



で、担い手同士の顔がそれぞれ見えている環境だと思います。インフラが整っていない分、人やソフトが有機的につながって活動できている、という印象を持っています。

—実際にenocoも、大阪におけるソフトや人と人のつながりが体现されているように思います。

寺浦：囲い込み型ではなくプロジェクト型を基本とし、「ここで活かされるのはこのチーム」、とケースごとに判断・設計するという、公共的な視点とマインドが貫かれているからこそだと思います。

—5年目に入り、これから先、enocoやプラットフォーム形成支援事業がどういった状況になっていけばいいと思われませんか。

寺浦：やはり市町村の武器になればいいな、と思います。もともと府内の市町村から続々とenocoに相談が来る状況になれば...と考えていて、実際にそうなりつつあるのが嬉しいですね。それと、文化とは直接的には関係ない部局、例えば農政や土木、商工などといった分野の部局が、クリエイティ

ブな発想のもとに事業や制度を設計する動きが生まれて、それが当たり前になっていけばいいなと思っています。

高岡：文化・スポーツ課のみなさんは、庁内営業というか、他部局に対してこんな仕組みがあるよ、と働きかけや呼びかけをしてくださっていますね。もちろん、市町村に対しても。

—最後に、寺浦さんのモチベーションはどこからくるんですか？

寺浦：やはり仕組みづくりをしなければ、ということですね。アーティストやクリエイターといった職能を持った人が都市の中にきちんと位置付けられて、力を発揮できる仕組みや社会をつくっていききたいと思います。行政の役割はそういった仕組みを整備することにあると考えています。

寺浦薫 (大阪府 都市魅力創造局 文化・スポーツ課 主任研究員)  
大阪生まれ。1994年に大阪府に入庁し、文化施策の立案、府立現代美術センター企画運営、府立江之子島文化芸術創造センターの立ち上げ等に携わる。「大阪・アート・カレイドスコープ」、ヨーロッパとの芸術家交流事業「ART-EX」、「水都大阪2009」、「おおさかカンヴァス推進事業」、「プラットフォーム形成支援事業」等を主担。

## プラットフォーム形成支援事業ってなんだっけ？

地域の人が自ら課題を解決できるように環境を整える事業やで。「プラットフォーム」っちゃうのは、「議論と合意形成の場」と「課題解決の場」という2つの側面を持つ。会議の場にクリエイターといった第3者が入ることで、冷静に視野を広げた議論ができるようになるんや。そんで地域の人たちが第3者と課題について議論し、自分たちでその解決策に気付くということが大事なんや。運営する側としては答えを全く言わへんのも、全て言ってしまうのもあかんし、第3者で入ってもらう人たちにもミッションいうもんをうまく理解してもらわなあかんから、そのあたりのコントロールは難しいところやな。



## INTERVIEW

### 吉澤弥生

(共立女子大学文学部准教授/社会学者)

**吉澤**：一般的に、大阪は橋下府知事（当時）が来てから文化行政が縮小したというイメージがあると思うんですけど、実はもう少し前からなんです。まず2000年代の大阪のアートシーンを考える上で、2001年の大阪市「芸術文化アクションプラン」の果たした役割は見逃せません。「商業ベースに乗らない実験的芸術こそ行政が支援するべきだ」と10年計画で複数の事業を開始したんです。2002年には当時空き店舗スペースが増えていたフェスティバルゲートに複数のNPOを招聘し「新世界アーツパーク」として現代アートの拠点をつくりました。それから1年、2年と活動する中でいい感じになってきたなと思ったら、3年目に市が財政難を理由に計画変更を打診してきたんです。一方的な通達に現場も抵抗しましたが、結果的に10年の予定が5年で事業は終わりました。

**高坂**：「現場の抵抗」というのは？

**吉澤**：まず公開シンポジウムを複数回設け、全国から文化政策や芸術文化の専門家や地元の方々を招いて話し合う機会をつくりました。自分たちの味方だけでなくさまざまな立場から意見をもらって、どう動くべきかを具体的に考えていったんですね。シンポジウムの記録も毎回発信して、大阪で起きていることをさまざまな人に検証してもらえるようにしました。こうして材料を公にしながら市との交渉を試みたんですが、対話は成り立たなかったです。

—それが2002年から2007年の5年間だったんですね。

2016年9月1日 @ 大阪市内某所

聞き手: 榎原充大 (RAD) + 高岡伸一 / 高坂玲子 (enoco)

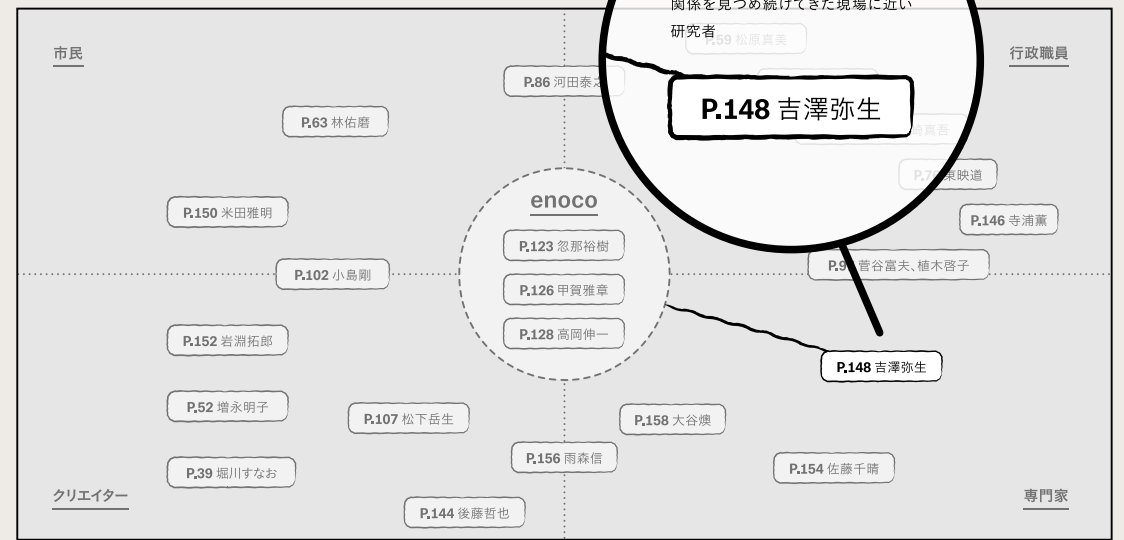
**吉澤**：フェスゲを出たのが2007年で、その時点で1つのNPOは解散。ほか3つのNPOは新大阪でもう1年続けましたが、その後は移転し、今はそれぞれ別の場所で活動しています。そして少し時期が前後しますが、大阪府の方とはいうと、現美センターで2005年に「大阪・アート・カレイドスコープ」と題し、展覧会を8つの在阪NPOのコンソーシアムで企画運営するという実験的な試みを行いました。これにはフェスゲに入っていたNPOも含まれます。また、そのコンソーシアムにも参加していた私が所属しているNPO recipは2006～2009年度の現美センターの指定管理を他社と共同受託していました。当時、府はNPOと組むということを意識的に進めていた印象があります。また2009年に「水都大阪2009」という府市経財界の絡む大きな事業がありましたが、市の文化政策は縮小傾向が続きます。築港ARC、そして中之島4117というアートに関する情報スペースを運営する事業などはありましたが、中之島4117も2012年度末で閉じてしまいます。

**高坂**：中之島4117の蔵書と什器の一部をenocoが譲り受けています。

**吉澤**：府と市、それぞれの事業が入れ替わる中で人材やリソースのバトンがギリギリつながってきた感じですね。府にも市にも美術の専門職の方がいますが、大阪には美術館がないということも、こうした苦境の要因として結構大きかったのかもしれない。

**高坂**：ハコがないのでソフトや事業、人材というところにい

インタビューネットワーク図



かざるを得ないのかもしれないですね。それでなんとかギリギリつながってきている、と。

**吉澤**：現場としては、とにかく一貫性のある文化政策はいかにして可能なかが共有課題としてありました。そして2007年に「アーツカウンシルをつくる会」という有志による組織が発足します。これまで府市の文化事業に関わってきたNPOのメンバーなどが中心となり、イギリスなどにある文化政策の専門機関「アーツカウンシル」に関する勉強会を始めました。1年間の活動を報告書にまとめた後は活動を休止していたんですが、2011年に「アートNPOフォーラム」という全国のアートNPOの集まりを大阪でやることになり、その受け皿として集まったメンバーが「つくる会」のメンバーとほぼ重なっていた。それをきっかけに再始動するんです。すると直後、就任したばかりの当時の市長から、大阪府と市でアーツカウンシルをつくるという話が降りてきて、結果、2013年に大阪アーツカウンシルができるわけです。2012年度には大阪府と市からアーツカウンシルをつくるための実態調査とフォーラムの事業を3つのNPOで共同受託し、活動を報告書にまとめました。数年間の「下からの」アーツカウンシルの運動が形になったわけです。enocoでもフォーラムをやらせてもらいましたね。

**高坂**：現在は週1回、enocoのライブラリーに大阪アーツカウンシルが詰めてくださってます。

**高岡**：拠点の事務所がないんですね。トップの佐藤千晴さんも非常勤で、すごい宙ぶらりんな状態ながら「どこかに窓口を持たなくてはいけない」という思いから週に1回enocoで話ができるようにしているんです。

**吉澤**：アーツカウンシルの人が現場の人たちと直接話ができるというのは画期的です。親しみやすいというか、フラットというか。こうしたアーツカウンシルのあり方はなかなかないでしょうね。さきの「つくる会」ですが、アーツカウンシルができた後は「大阪でアーツカウンシルを考える会」として活動しています。enocoとも協働で勉強会を企画運営して

いましたね。

**高坂**：各地のアーツカウンシル関係者を呼んでネットワークをつくる勉強会をしていました。吉澤さんは、現在は東京に拠点を移されていますが、東京から見た大阪はどうですか？

**吉澤**：東京に行ってから、事業報告書の重要性や記録調査の方法論についてのレクチャーの依頼を受けることが多いです。そこでは、大阪では現場レベルで事後リサーチや検証報告書を自発的につくっていたという話をします。理不尽に事業が中断されたり、予算が減額されたりといったことが続くので、自分たちで事業の成果を説明しなければ、という身体になったんでしょうね。「報告書づくり癖」というか。そうした現場発信の報告書が事業に影響しているかどうかは精査が必要ですが、そういう点では大阪は先を行っている気がします。全国的には2020年のオリンピック・パラリンピックに向けて地域アーツカウンシルが設置されはじめていますが、それが終わってからが正念場でしょうね。そこでは大阪のこの2000年以降の経験が参照されるだろうと思います。そして行政と仕事をするというのは大変なことが多いですが、市民社会や民主主義の実践として重要な経験だと思えます。大阪の事業現場には「公共」を背負って活動していた人が多いので、報告書づくり癖だけでなく、市民社会とか自治とか民主主義といったことに意識的な人が多いようにも思います。

吉澤弥生 (共立女子大学文学部准教授、NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト [recip] 理事、NPO法人アートNPOリンク理事) 大阪大学大学院修了、博士 (人間科学)。近著に対談「芸術生産の現場から考える—労働・キャリア・マネジメント」『社会の芸術/芸術という社会』(フィルムアート社、2016)、単著『芸術は社会を変えるか?』(青弓社、2011)、調査報告書『続々・若い芸術家たちの労働』(2014)、共著『アートNPOデータバンク2016-2017』(アートNPOリンク/文化庁)

## enocoって美術館なの？



ちゃうで。いわばアート・クリエイティブセンターやな。大阪府は府立の美術館を持ってへん。ただ、大阪府20世紀美術コレクションちゅう美術作品を持つとる。enocoはその管理と活用もやっていて、そこは美術館のような役割を担っているけど、レンタルルームの運営や社会課題の解決にも取り組むとか、それ以外の機能も持っている複合施設やねん。ちなみに大阪には国立の「国立国際美術館」が中之島にあって、大阪市には「大阪市立美術館」「大阪市立東洋陶磁美術館」という美術館がある。そんで今、2021年の開館に向けて「大阪新美術館」が準備されとるで。



## INTERVIEW

### 米田雅明

(ON THE BOOKS 店主)

—まず enoco の B1F に入居された経緯から教えてください。

**米田**：前のお店を天満橋でやっていたのですが、家賃が高く移転を考えていました。それで仲の良いお客さんに移転するかもと話をしていた、その話が回り回って enoco の人に届いて、という感じです。

**吉原**：ここのオープンはいつでしたっけ？

**米田**：2012年の10月です。

**吉原**：ちょうど4年くらいということですね。その間、家は西区ですか？

**米田**：家はもともとこの近所で、通っていました。

—米田さんは生まれも大阪なんですか？

**米田**：生まれは奈良です。高校を卒業して大阪の専門学校に実家から通っていました。専門学校を卒業してから大阪のアパレルの仕事に就いて、実家から通勤して。そこを辞めてから24歳か25歳でなぜか大阪に引っ越したんです。そのときは北区でした。特に何しようとは決めていなくて、とりあえず出たら何か面白いことができるかなと。たまたま住んでいた近所の古本屋さんがアルバイトの募集をしていたので、とりあえず働こうと思ってそこに入ったのがきっかけで。

**吉原**：独立したのは？

**米田**：2009年です。西区に引っ越すのも同じ年でした。

—その時西区はどのようなイメージでした？

**米田**：いいイメージですね。それまで天満に住んでいたのですが、奥さんの提案で西区に引っ越すことになりました。

—エリアを変えて西区にお店を出して変わったことはどういうことが一番大きいでしょうか？

**米田**：土地的なことと言えば、正直天満橋もここも変わりはないのですが、前のお店がビルの2階だったのうちを目指してくる人しか入ってこなかった。ここは地下ですけどオープンになっているので全く知らない人も増えたり、雑貨を扱

2016年10月15日 @ON THE BOOKS(enocoB1F)

聞き手:榎原充大(RAD) + 高坂玲子 / 吉原和音(enoco)

っていることもあって本に興味のない人も来て本を見てくれたり、間口は広がりました。天満橋時代の常連さんは移転したらやっぱり離れてしまったんですが、こっちはこっちで常連さんがついて来ています。ここは交通アクセスを考えた時に、お客さんからしたらちょっと手間らしいんですけどね。

—enoco に来たあとにどこかに寄っていきうとはなかなか思わないですもんね。

**米田**：それが西区の課題ですよ。西区は西長堀の方まで含めても人は増えてきていて、新しいお店が新町からちょっとずつこっちに伸びてきています。でもこのあたりの物件めっちゃ高いんですって。不動産屋の人もここ2年くらいで上がっていると言っていて、あげても需要があるようになってきているみたいです。

ここに移転する時に気がかりだったのは、阿波座近辺は本屋がなかったこと。今でこそひとつづつできてはいるのですが、それもここができてからだし。昔からここは古本屋がなかったらしいんです。同業者のおっちゃんに「大丈夫か？」と心配されたくらいで、すごい不安でした。

—地下1階にいと enoco 全体としての動きはどういう風に見えてきますか？

**米田**：案内を見なくても今どういう展覧会を上でやっているのかはお客さんの層でわかりますね。でも、それくらいです。

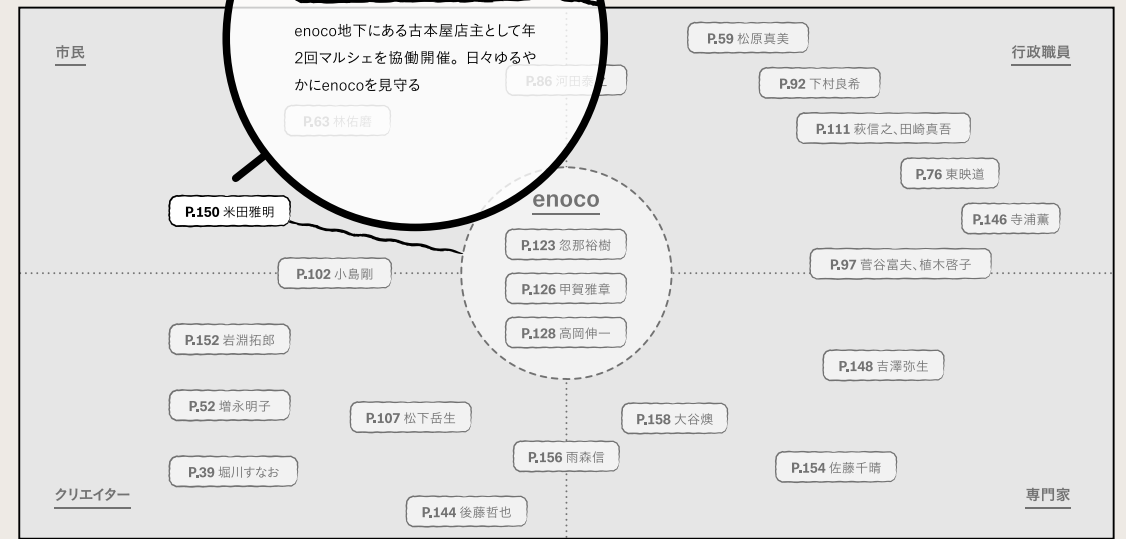
—米田さんは enoco と組んでマルシェをやっていますが、その話はどこからスタートしたんですか？

**米田**：enoco の吉原さんから最初話をもらいました。

**吉原**：前の駐車場がもったいないないつも言ってたんですよ。土日になっても人通りがあまりなくて。それでマルシェやろうというだいたいぶ気楽なノリで、2015年の5月に始めました。

—1回目のマルシェの手応えはどうでした？

インタビューネットワーク図



**米田**：よかったですよ。土曜日の11時から17時までで1000人くらいきました。どっちかという地元の人の方が来ているんです。

**吉原**：そこからイベント関連のオファーが増えましたか？

**米田**：マルシェがきっかけで増えましたね。マルシェで知ってもらって、阪急百貨店がフェアで古本市の企画をしたいということで、うちがまとめ役としてやりとりしていました。今年は3回やったんですが、結果が怖くもある。まとめ役が嫌なんです。

—全国的にマルシェは増えているんですか？

**米田**：めっちゃ増えてます。3年くらい前から増えてきているんですけど、今年の9月10月11月が今までとはケタが違うという話になって。今がピークじゃないですかね。

—これから先 enoco とどういった連携の仕方をしていこうと思っっていますか？

**米田**：マルシェが一番いい形でできていると思うんですけど、

共通点が難しいですね。うちと enoco が協力してやるメリットを探し出すのが。無理矢理な部分もある気がして。変にべったりというのも好きじゃなくて、各々に共通点があれば何か一緒にやったらいいというくらい。協力して何かをすることを目的にすることがあまり好きじゃないかもしれないです。

**吉原**：こちらものほうがやりやすいですけどね。

—米田さんご自身はこれからどう展開していこうと思っっていますか？

**米田**：お店自体をでかくしたいとは思っていません。古本屋自体に細々と長くやっているイメージがあるんですけど、あの感じが理想です。あくまでも仕事なので儲けは大事ですけど、自分の生活の方をもっと充実させたいと思っています。

米田雅明 (ON THE BOOKS 店主)

2009年2月に天満橋に店舗をオープン。ハイソな立地だったため家賃に苦しむ。捨てる神あれば拾う神あり。ひょんなことからお声がかかり2012年10月に enoco に移転し現在に至る。アパレル〜町の古本屋での経験を生かし、アートやサブカルといった好奇心をくすぐる古本屋を邁進中。

## enocoってどんなところにあるの？

大阪府大阪市の西区にあるねんで。結構街の真ん中に近くてアクセスもすげええんやけど、その割に「ちょっと遠いなあ」って言われることも多いねん。あんまり目的地にするところがまわりにないからかもしれんな。でも大きな郵便局も近くにあるし、いろんな市の施設もあるし、大阪市中央卸売市場も朝公園にも近い。人間の足やったら歩こうと思えば国立国際美術館からも歩けるで。自転車があれば梅田にもちゃっと出れるし、よう考えたらなかなかええところやな。ほんでよく「島にあるん？」と聞かれるけど、昔はほんまに島やってん。でも今は川が埋め立てられて、陸続きになってるで。



## INTERVIEW

### 岩淵拓郎

(編集者/メディアビクニック)

2016年11月9日 @radlab.(京都市)

聞き手: 榎原充大(RAD) + 高坂玲子(enoco)

#### —岩淵さんと enoco の最初の接点は？

岩淵：高坂さんから声をかけてもらったんじゃないかなあ。開館した時点では知っていましたが、知っている人がいる、くらいの理解でしたね。高坂さんとはもともと「水都大阪2009」や「おおさかカンヴァス」などのアートの文化事業で知り合った人でした。

#### —enoco ができる前はどんなことをしていましたか？

岩淵：28歳くらいから36か7まで、2001年から2010年ごろまで10年弱アーティストとして活動をしていました。自分がアーティストをやっていた頃は、アートの現場に公共のお金が落ちてきて、なおかつ目の前に問題があって、でも誰もまだ整理できていない中でみんながそれなりの熱量をもって動いている、そういう時期でした。アーティストを辞めたのは、アートマネジメントの考え方が広まって、アートそのものの位置づけがだいぶ変わったことが大きな理由。自分はもともとフリーランスで、編集者としてのチャンネルを持っていたので、「自分を社会で機能させるなら別にアートじゃなくてもいいや」と。当時の大阪には、アートという旗印のもとになんとなく人が集まっていて、場合によっては行政からのお金で成り立っている、そういう「ホットスポット」があった。そのホットスポットとの距離の取り方をみんなが持っていたと思います。それで、その後の個人の動きや文化行政の話や、その間に立っている人たちをなんとなく見ていて、enoco もそういう流れの中で現れて、最初は西の方に何かできたんだというぐらいの認識でしたね。

高坂：もし私が enoco にいなかったら似たような認識だったかもしれません。

岩淵：ホットスポットのひとつであるフェスティバルゲートは10年間やる、と立ち上がったのに「途中で終わり」となっているいろいろな議論がされていた。みんなアートの社会的意義に目覚めて、振り上げた拳を戻せないような状態でしたね。

#### —アートの社会的意義が大阪で高まりを見せたのはその時期なんですか？

岩淵：そう思いますよ。ただ、なぜその頃の話を書きたくないかというと、2000年より前の記憶がみんな無いんです。文脈が切れている。色んなことがガラッと変わってしまって、みんなその前のことを思い出せない。どうしても振り返ったときにその話になってしまうというだけで、結果的にその時期に何かが起こったように見えるだけなのかも。

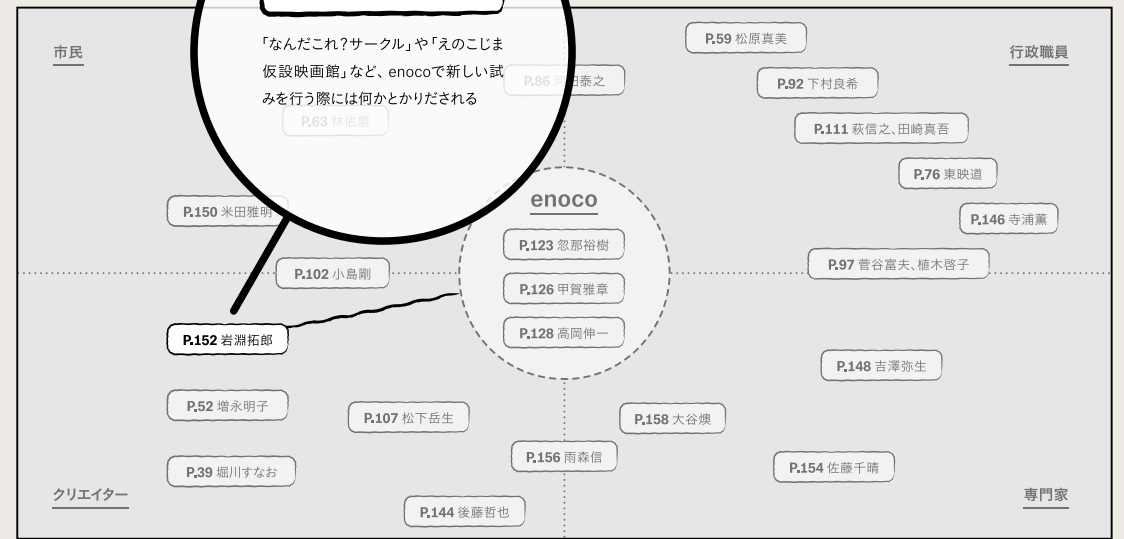
#### —enoco が一定の方向性を持った施設であることを打ち出していたことをどう見ていましたか？

岩淵：シェアオフィス機能があってそこでいろんな人が仕事をしているけど、場としての、熱量がたまっていく理由があるとは思えなかったですね。あと、アートやクリエイションで問題解決をしたいけど解決する問題がない、問題解決のために問題を探しているような印象。立地も含めて「問題解決」という言葉が宙ぶらりんで、これはなかなか難しいことをやっていると。問題が無いのに問題解決をするとなると、問題を仮定してそれを解決するモデルというサンプルをつくるしかないんですよ。僕へのお題は最初、普段展覧会をやっている場所に映画館をつくるという話だったので、いわゆる映画館ではなく新しい地域の場として、ワークショップができたり、アーカイブ機能があったり、上映機能があったり、サロンが行われたり、作家の発表の場となったりするような、映像が真ん中にある地域の複合施設をギャラリーの中に仮設でつくるという企画にした。そこに問題解決の可能性はあるけど、困っている人はその時点ではないので一応サンプルとして。

#### —それで生まれたのが、「えのこじま仮設映画館」ですね。岩淵さんがその前年に enoco でやった「なんだこれサークル」のいきさつは？

岩淵：2013年の年末にタチヨナの小島さんから声がかかり、「子どものワークショップをやってほしい」と言われたんです。

インタビューネットワーク図



「なんのワークショップをしたらいいの？」と聞いたらそれを決めたくないんだという話になって。確かに、アーティストがやるワークショップは作家のデモンストレーションにしかなくて、クリエイションの部分が何ひとつ明け渡されてないという議論があって、わかるわかと。そうやって生まれたのが「なんだこれサークル」。2ヶ月くらい続きましたが、enoco でできたことは本当によかったと思うんです。というのは子どもが集まってくる状況がありながら、地域を向いていない施設だとしたらあまりにも着地点がなさすぎてできなかったと思うんです。実験的にやってみることができた。

高坂：実際どうでしたか？

岩淵：すごく良かったですよ。まだ誰もやっていないけど、確実に新しく核心的なワークショップの雛形がくれたなという手応えがありました。2017年の2月には小島さんとバンコクに呼ばれて、現地のアーティストと一緒に「なんだこれ?サークル タイ版」をやってきました。enoco は子どもたちが都会っ子なもの地域性があった楽しかったです。

高坂：あとから見返すと「なんだこれサークル」はenocoの転換期にありますね。

岩淵：ワークショップをはじめいろんなかたちでアートと触れる機会は増えてるし、それを使って問題を解決しようとする人もたくさんいるけど、肝心のアートをどう味わうかっていう一番面白い部分に軸におく事業はほとんどない。アートをちゃんと味わえるようになるために自分でもアートをやってみる、そういう視点が抜け落ちているんじゃないかと考えてました。でも、小島さんから何をするか決まっていなかったワークショップの話がきたとき、子どもたちと一緒に表現と鑑賞を行き来しながらアートそのものを模索するような実験ができるんじゃないかと思った。仮設映画館のときも思いましたけど、実験をする枠がenocoにはずっと残っているなど。そういう場としては機能していると思います。

岩淵拓郎 (編集者/メディアビクニック)

1973年兵庫県宝塚市生まれ/在住。元美術家。現在はフリーの編集者として、主に文化・芸術などに関する書籍やプロジェクト、イベントなどの企画と編集を手掛ける。編著に『内子座〜地域を支える町の劇場の100年』(学芸出版社、2016)ほか。2001〜2015年、京都造形芸術大学教員。2012〜2014年、宝塚映画祭総合ディレクター。一般批評学会メンバー。趣味は料理(初)

## クリエイティブセンターって何？

クリエイティブって言うのは「創造的」って意味やねんて。やからクリエイティブセンターは広く「創造的なことまわつる場」っていうくらいに捉えるのがええかもしれん。ただ、「創造的なこと」はだいぶ広く捉えることができるから、クリエイターによる作品を展示する、アーティストによるワークショップをやってる、イベントのためにレンタルされてる、起業するために活動しとる人を応援するとか、それぞれの施設によって「クリエイティブ」の意味がちやうように思うわ。ひとつの機能に特化せん複合的な空間やったりすんのもその名前がつけられる理由かもしれんな。





## INTERVIEW

### 佐藤千晴

(大阪アーツカウンシル統括責任者)

**高坂**：2013年に大阪アーツカウンシルができて4年目になりますね。

—アーツカウンシルに着任される前にはenocoとの関わりはありましたか？

**佐藤**：全くなかったです。着任前は文化部の新聞記者だったんですけど、enocoのことはほとんど知らなかったと言っていいですね。enocoがまだ始まったばかりの頃は情報発信もあまりされていなくて。3年目ぐらいからはっきりし出したかな、という印象ですね。

**高坂**：「eno so done!」が始まった頃ですね。

**佐藤**：芸術という看板から自由になったかな、と。enocoは最初から「Be creative!」というコンセプトを掲げていて。アート畑にいる人にとって「クリエイティブ」という言葉はあまり好まれる言葉じゃないと思うのですよね。デザインの人であったり、ビジネスの人であったり、という印象で。だから文化芸術創造センターという名前に対して、「あれ？」という感じはしました。

—齟齬があった？

**佐藤**：そう。ただ、文化全体の潮流というか、アートとデザインの境界線がどんどんなくなってきましたよね。クリエイ

2016年12月2日 @enoco ライブラリー

聞き手：榊原充大(RAD) + 高坂玲子(enoco)

ターがアーティストになるとか、アーティストがクライアントワークをしたりするっていう。どっちにも乗り入れるし、区別をしない人も出てきていると。だからあまり違和感なくなってきたかなと思います。

あとは、プラットフォーム形成事業もひとつこの特色としてあって。最初は「なぜアートセンターで？」というイメージだったのが風向きがガラッと変わって、それがひとつのアートの役割だし、アートセンターのやるべき仕事だし、と流れが変わってきているなと思います。

—では、実際に佐藤さんがenocoと接点を持ち始めたのはいつですか？

**佐藤**：アーツカウンシルに入ってからですね。enocoは大阪府が持っているほとんど唯一無二の府立施設なので活用しています。アーツカウンシルは審議会という仕組みなのですが、委員は会議があるときに集まるものだ、という発想なので固定スタッフも雇用できませんし、事務所のような場所もないので、2年目からenocoを金曜日の午後には借りて、「何か用事や相談のある人は遊びに来てね」という設定にしました。2年目からウェブサイトもつくって情報発信をしています。

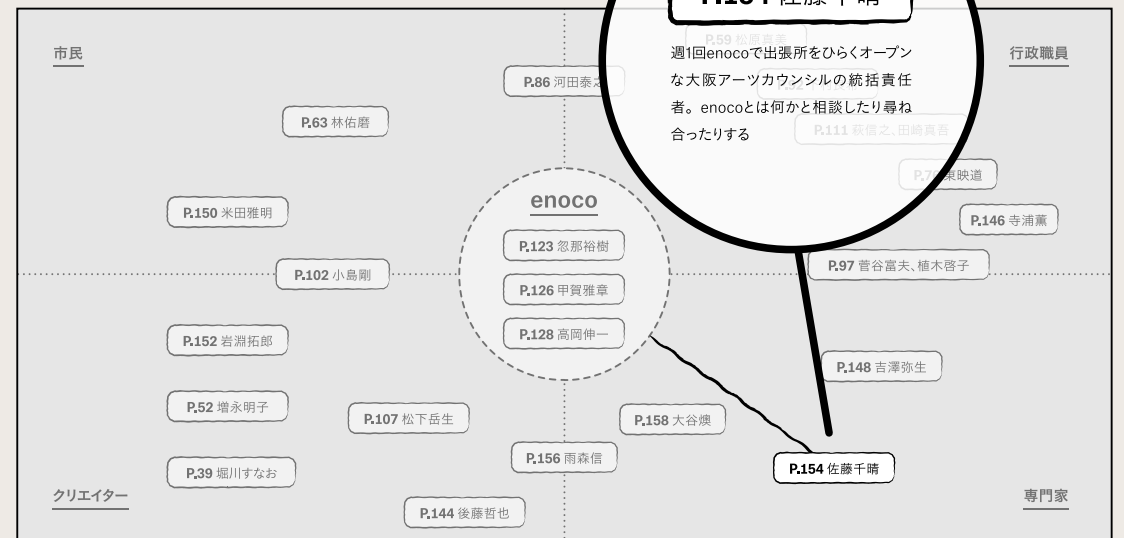
—現場にいる方と直接お話しする、接触する機会をつくろうと。

## enocoのライブラリーってどうやって使われているの？



美術展の図録や美術関連の雑誌、文化芸術に関する資料なんか揃ってて、誰でも自由に読んだり見たりすることができるんや。貸出はしてへんねん。でもいろんな本があって眺めてるだけで楽しいところや。ライブラリーにある本や資料は2012年3月末に閉館した大阪府立現代美術センターや、アートインフォメーションサポートセンター「中之島4117」ちゅうところが持っていたものを引き継いでんて。ほんで今は、大阪アーツカウンシルの統括責任者である佐藤千晴さんが週に1回ライブラリーにおいて、誰からでも相談を受ける環境をつくってるらしいで。ボクもいこかな。

インタビューネットワーク図



**佐藤**：そう。enocoだって毎日開いていて、毎日誰かがいて、人がいるから人の出入りがあるわけで、週に1回だけというのはすごく微弱ですね。ないよりはマシですが、これで足りるかといったら大間違いなわけで。常設拠点化を目指しているんですけど.....

—アーツカウンシルはどんなことをしているんですか？

**佐藤**：府と市の公募型助成金の審査がアーツカウンシルの仕事のひとつです。助成事業の現場にもよく足を運びます。ほかに府・市の文化事業の評価、「調査」「企画」というミッションもあります。セミナーやサロンなど、異分野のアーティストやプロデューサー、制作者が交流する場づくりにも力を入れています。そのために、事業や活動の現場に足を運び、いろいろな人に会うことが大事な仕事なんです。

**高坂**：つなぐ役割なんですね。アーツカウンシルはenocoに関して評価をするということはあるんですか？

**佐藤**：enocoは外部の評価委員会がきちんとあって、会計や経営といった視点も含めて見ていると思うのでアーツカウンシルがやる必要はないと考えています。ご意見番としてアドバイスや意見を述べたりすることはありますが。

ただ、府では指定管理者として、例えば墓地も病院も文化施設もすべて同じ尺度で評価されるので、それに対してはenocoが自分たちで評価軸をつくり、目標を設定し、自己評価をするということが必要になってくるのではないかと思います。そこで何かノウハウを共有できることはあるかもしれない。アーツカウンシルに限らず、文化の拠点は今、行政が運営していくというのは非常に難しいこともありますからね。

**高坂**：運営上の難しさもありますが、文化活動をされている人の中には、行政の組織・施設ということで苦手意識を持つ人も少なからずいますよね。現場と繋がらないといけない立場としては悩ましいです。

**佐藤**：大阪府が「文化行政」を全国で一番早く始めたといわ

れていますが、基本は民間が文化を支えてきた街なんですよ。でも今、民間も苦しい。だから民間も、行政も、アーティストも力を合わせないと大阪は沈んでしまう。なので行政も使いみちがあるよ、例えば地域や学校と関わる時は行政って力になるよ、こういう時は行政とやってみるといいよ、という情報開示ができるといいなと思います。好きなことを思いやりやりたいのなら行政とも距離をとる...など、いわば適切な行政との付き合い方、でしょうか。そういう情報ネットワークをアーツカウンシルが広げていけたら。

**高坂**：enocoが施設としてあって、そこに出入りするアーツカウンシルが情報とネットワークを持っていて、それを共有したり、一緒にアップデートしたりできるといいですね。

**佐藤**：例えば、アートと演劇はつながりがあるようで両方つながっている人は意外と少ない。それにenocoは演劇はあるけれど、例えば古典芸能やクラシック音楽とのつながりはほぼないでしょう？そういうところをアーツカウンシルが繋いでいけたらいいのかもしれない。交流が生まれなくても、お互いの活動は知っているという状態になるといいですね。

佐藤千晴 (大阪アーツカウンシル統括責任者)

1962年東京生まれ。1985年朝日新聞社に入社。徳島支局を振り出しに大阪本社・東京本社学芸部などに勤務。クラシック音楽や宝塚歌劇を中心に、生活文化や街についても取材を重ねた。2013年4月に退社、同年6月に新たに設立された大阪アーツカウンシルの統括責任者に公募で選ばれた。14年から毎週金曜午後はenoco 4階ライブラリーで「アーツカウンシル出張所」を開いている。

## INTERVIEW

### 雨森信

(BreakerProjectディレクター)

—雨森さんはBreakerProject (以下、ブレイカー) を立ち上げられて13年目ですが、設立までの経緯を教えてください。

雨森：ブレイカーの原点は1990年前後、私自身が芸術大学で学んでいた頃まで遡ります。大学に入って初めて現代美術を知って、人生観がガラッと変わるっていう経験をしたんですね。いろんな既成の概念から解放されたというか。だからもっと多くの人が現代美術に出会える機会をつくれれば、世の中はいい方向に変わっていくんじゃないかと。漠然とですけど、そういうことを考えていました。一方で、作品を制作して展覧会で発表して、終わったら作品が大学に戻ってきて、廊下や屋外に放置されていたりする。観に来る人は、関係者がほとんど。そういった状況を見て、あまりにも社会との接点がない、という違和感を持ち始めたのも学生の頃です。卒業してから設計事務所に勤めている時に、アートのスペースを立ち上げるになり、展覧会の企画をするようになりました。屋外の展示として初めて取り組んだのが、地元の人によって毎年開催されている高瀬川の「桜まつり」と連携した企画です。川の中に作品を設置したりその周辺でパフォーマンスをしたんですが、足を止めてくれる人も多かったし、面白がってくれる人にも出会えて。外に出て行くことの重要性を感じました。その数年後、大阪市では2001年に芸術文化アクションプランができて、その一環として現代美術のインフラをつくっていかうという動きがあった中で、フェスティバルゲートの空きスペースを活用した拠点づくり事業があり、その一環でremoというNPOの活動を始めました。ちょうどその頃にremoとは別の事業として、かねてから温めていたドリームプランとして大阪市に提出したのがブレイカーの企画書です。それがフェスティバルゲートの市民還元プロジェクトに位置付けられて、2003年よりスタートしました。

—2000年代の大阪のアートシーンはどうでしたか？

雨森：フェスティバルゲートにNPOが誘致されたのが2002年。この場所ができたおかげで人が集まってくるっていうか、流れができたんじゃないかなと思います。remoのほかに、ダンスボックスやブリッジ、コロシアムといったスペースがあって、様々なジャンルで実験的なことをやっている人たちが集まっていました。公設民営での手法で、それぞれの活動が独立して行われていると

2016年12月24日 @旧・今宮小学校作業場(西成区)

聞き手: 榎原充大 (RAD) + 高坂玲子 (enoco)

いう理想的な創造活動の拠点だったのではないのでしょうか。ただその当時、ブレイカーのようにまちに出て活動する組織やプロジェクトは関西にほとんどなかったと思います。

—10年以上大阪で地域の方とアーティストとの間に立って活動を続けて来られて、一番変わったことは何でしょう？

雨森：プロジェクトが断然やりやすくなりました。5年目、6年目ぐらいから急にハードルが下がったというか。「ようわからん」と言いながらも、協力してくれる人が増えていきました。継続していくことで、私たちのような存在が、まちと共存できている実感が持てるようになりましたね。ただ、まちにどのような変化がありましたか？という質問もよく受けるんですけど、実際には目に見える数値化できるような変化はありません。例えば数年前から取り組んでいる「西成こどもオーケストラ」に参加している子供たちが大人になる頃、何か変わっていくんじゃないかと密かに期待しています。既に数人の子供たちや大人の小さな変化は日々の活動の中でもありますね。

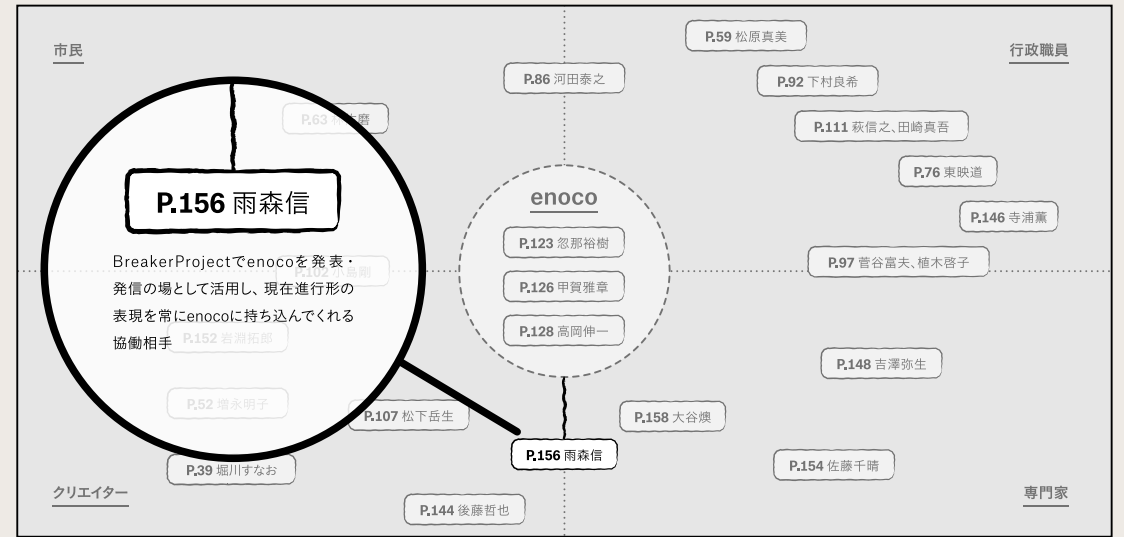
—「種」が蒔かれることの意義は間違いなくありますよね。

雨森：こういったことを同じ地域で30年続けて、人の意識や場所がどう変化していくのか、その効果や成果をみるためには、やり続ける必要があると考えています。実践研究でもあるんですよ。その意義を実証するためにも。

—雨森さんにとってブレイカーは場をつくっていかうという意識が強いのか、作品をつくっていくということを主眼に置かれているのか、どちらでしょう。

雨森：アーティストの表現活動としては、場そのものが作品であったり、いろんな人が関わって作るプロジェクトであったりもします。それぞれの作家にとって必然性のある表現活動をこの地域で行っていくことで、場が生まれやすくなる。その結果として、kioku手芸館「たんす」があったり、旧・今宮小学校の作業場があるのかなと。ブレイカーとしては、地域の人に関わってもらうことを重視しているので、単に「参加」してもらうだけでなく、さまざま

インタビューネットワーク図



な関わり方については常に意識して考えています。最初からプラットフォームをつくるんだという意識があったわけではないんですけど、そういうことなんだというのはやりながら見えてきました。

—enocoについてはどう見えていますか？

雨森：ブレイカーももっと、まちづくり系の人と組めばもっと可能性は広がるのかなと思うんですけど、お互いに敬意を持っていないと本当の意味での協働は難しいと思っていて、課題のひとつではあるんですが…。そういう点でenocoはどんなかんじですか？  
高坂：手法や考えも違ったりすることもあるので大変なことはもちろんありますが、今は互いに理解して一緒にできていると思います。やはり現場にいる人が大事ですね。  
雨森：現場ではどういうニーズや課題があって、という視点にたった仕組みが必要であって、トップダウン的にフレームがつけられると、現場の人が思うように動けない状況に陥ってしまう危険性がありますよね。だから枠組みづくりには、現場が分かっている人も関わっていく必要があると思います。

—展示場所としてenocoを使われているのはなぜでしょう？

## enocoのあたらしさって何？

課題解決拠点として打ち出した文化施設ちゅうところちゅうかな。作品を展示したり発表したりすることだけでなく、アーティストやデザイナーのクリエイティブな視点を、あらゆる課題解決に使っていくことをどんなプログラムにも組み込んでやっていかうという方針を持った施設は、ボクが知るかぎり例がないとちゅうかな。特に「府」という広域行政体として、市町村の課題を一緒に考えて解決しようとしたり、市町村が自分たちで自立できるような技術移転や担い手づくりまで一緒にやろうとしたりする機関は他にはないとちゅうか。それがenocoのあたらしさやと思うで。





## INTERVIEW

### 大谷燠

(DANCEBOX エグゼクティブディレクター)

—大谷さんが最初に enoco に関わるのはいつですか？

**大谷**：まだ工事が始まる前の2009年くらいに建物を見学させてもらいました。初めて enoco の建物を見た時は「いい建築物だな」と思いました。阿波座や対岸の川口のあたりは1980年代後半に、倉庫などを改装してアトリエにしたりショップにしたり、といったまちづくりが進んでいたんですよ。今はそういったスペースはなくなっていますが、僕自身も出入りしていたことがあったのですが、こんな建物があるのは知らなかったです。ですが、川がそばにある地域のおいのようなものは昔から感じていました。

—大谷さんは NPO 法人ダンスボックスを立ち上げられ、2002年頃にはフェスティバルゲートに入居されるんですね。大谷さんから見て、当時の状況はどうでしたか？

**大谷**：フェスティバルゲートは当時としては画期的な行政と NPO の協働でした。「評価の定まらないアートこそ行政は支援すべきだ」という芸術文化アクションプランに沿って、3つの NPO がフェスティバルゲートに入って、1年遅れてコキルームが入居しました。ジャンルは違いますが、それぞれご近所さんで活動していて、いい意味で影響し合っていました。新しいかたちのおおの大阪のアートセンターが始まるな、という空気がありました。短い期間でしたけど。

—そして、2011年には enoco の指定管理者選定委員を務められています。様々な提案の中で現行チームの案はどう見えましたか？

**大谷**：総合的に考えて、現行のチームは考えがよくまとまっているなと思った。他のところもすごく特化しているなと思うところもあったけど、総合点で良かった。あとはチームとしての成熟度や結束力みたいなものがありましたね。

—その後も指定管理者評価委員を務められるわけですが、enoco の「地域課題に取り組む」というテーマについて大谷さんはどう思われていましたか？

2017年1月11日 @ダンスボックス(神戸市長田区)

聞き手: 榎原充大 (RAD) + 高坂玲子 (enoco)

**大谷**：そのテーマは僕の中でも大きなポイントでした。府の施設でありながら地域とどう関わっていくのか。地域住民たちをつないでいく時にアートはどう機能していけるのか、という問題だと思います。

**高坂**：評価委員会の中でも、府立の施設だけど「地域」と言う時に、どこを意識するのかということは頻りに議論がされていましたね。「私たちにとっての地域はどこか」と考えた時に、ひとつは西区ということが出てきました。ちょうど公募区長が開館の年に就任されたことも大きかったです。

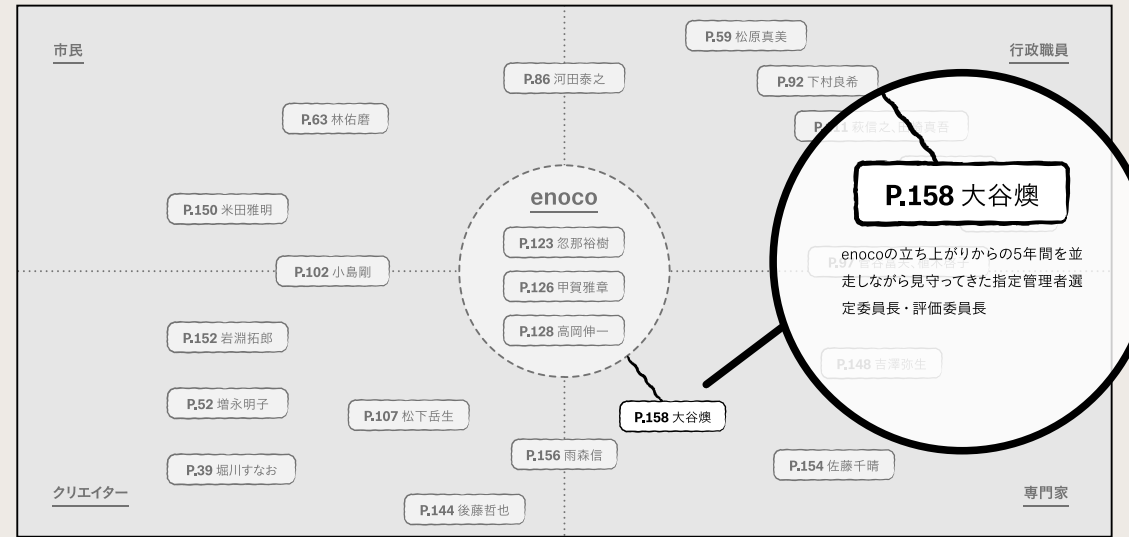
**大谷**：ダンスボックスも新長田にきて8年目になるんですけど、その中で4回区長が変わっているんです。歴代面白い区長で、公演もよく見てくださっています。そういった体制が変わっていく中でローカルティとどう関わるかは重要ですね。enoco は公立ですが、うちは半公立なんですよ。使用料を神戸市に払っています。事業予算はゼロなので、助成金や補助金を集めています。もちろん厳しいですが、自由度が高いですよ。ただやはり、パブリックな側面を持つ施設として、地域に対しての信頼度をどうやって深めていくのか、相互の関係をどうやってつくっていくのかっていうのは考えなければいけないと思います。

—enoco の5年間をどう見えていますか？

**大谷**：もともとは現代美術センターの代わりになるような大きなギャラリーという感覚だったのが、そうではなく、ただ作品を展示をする場所ではない、地域の人たちが参加する枠組みが大事だ、という意識を生み出したのはひとつ成果だと思います。ただ、enoco は使える場所が少ない。展示室を全部使ってダンスをすとか、もう少し思い切ってやってもいいんじゃないかなとは思っています。ただ、施設自体の管理や大阪府のコレクションの管理活用といった継続していかないといけない業務もあり、限られた予算とスペースにしては面白いことをやって頑張っているなとは思っています。

一方で僕らが持っているのは劇場とスタジオとレジデンスできる一軒家なんですけど、enoco と比べても圧倒的に床面積が狭い。じゃあどうしたら地域と連携できるかを考えた時に、他の場所を使っていくしかない。そうすると逆に地域が主催

インタビューネットワーク図



する催しものに我々が参加するんですよ。もちろん僕らだけでなく「国内ダンス留学」として受け入れている10人くらいの学生も地域に入る。アウトリーチとして学校などでダンスを教える、インリーチとして劇場体験やバックステージツアーもやるんです。夏休みなんかはほぼ毎日子供たちが来ていますよ。公演がある日は「今日は公演あるんよ」って子供に言うと、隅の方に居てくれたりとか。そんな具合です。**高坂**：enoco も最近小学生が地下のスペースで宿題をしていたりしますが、まだ絡みは少ないですよ。そういうひらき方は課題ですね。

**大谷**：ダンス留学生には18歳の子もいるし、スタッフなら僕が一番年上で60歳を過ぎている。年齢層が幅広いんですよ。子供たちもいろんな大人たちと付き合う機会を持っています。今の子供たちって、核家族で地域社会もなく、学校と家と塾の往復が多く、非常に狭い価値観の中で暮らしています。子供たちの文脈を増やすこともアートができることだと思います。

ダンス留学生の子たちも5期目なんで、卒業してからも7人くらいまだこのエリアに住んで、ここから東京とか海外の仕事に行くんですよ。地域課題の少子高齢化に対して、少しは

寄与できているかなと思います。交流人口を増やすということですが、もしかしたら今後ここがコンテンポラリーダンスの街になっていくかもしれないです。だから、施設の中だけでなく施設の外に何をどう残していけるのかは重要です。地域の人が自慢できるように新しい財産をつくっていく、とか。アートって何も意味がないところに意味があって、それをなくすと社会が面白くないものになると思うんです。常にも実験性とか前衛性っていうものをアートは持っていないとダメだし、同時にそういうものと古典的なものがうまくコラボレーションできる場所があればいいなと思います。そして、へたらずに、地域にしっかり目を向けながら関わっていくことが大事ですね。

**大谷燠 (DANCEBOX エグゼクティブディレクター)**  
大阪生まれ。1996年に大阪で DANCE BOX を立ち上げ、多数のコンテンポラリーダンスの公演、ワークショップをプロデュース。2009年4月、神戸・新長田に拠点を移し、劇場「ArtTheater dB 神戸」をオープン。新進の振付家・ダンサー・制作者を育成する「国内ダンス留学@神戸」や、「KOBÉ-Asia Contemporary Dance Festival」など国際交流事業のほか、アートによるまちづくり事業も多数行う。2015年 KOBÉ ART AWARD 受賞。神戸大学、近畿大学非常勤講師。

### enoco ってどれくらいのお金がかかっているの？

1年間運営するのに9000万円くらいかかっているらしい。大阪府からの予算が約6700万円やから残りは展示室や多目的ルームの賃館などの収入を充ててらしい。公共施設では、賃館は直接行政の収入になることが多いんだけど、enoco は指定管理者の収入になるから、施設運営に再投下できる仕組みになっとるらしい。一番お金のかかる経費はスタッフの人件費で3000万くらい。府の美術品を管理する収蔵庫もあるから、その温湿度管理のための光熱費、警備費、保険料なんかも比率としては大きくなるわな。enoco が主催してる展覧会やイベントに使える予算は実際のところ広報の予算も含めて毎年800~900万円くらいやねんて。あ、ボクは enoco の飼い犬ちゃうからエサ代はかからんで！



**enoco 的キーワード解説**

enocoの5年を整理する中で、そしてenocoと関わりのある方々のお話の中で、見えてきたキーワードから50をピックアップして、enoco的な解説を加えました。

キーワード	解説	参照
アーツカウンシル	文化芸術に対する助成や評価を軸に、政府や行政と一定の距離を保ちながら芸術文化の振興や支援を行う専門機関。1946年に英国で誕生し、その後、欧米各国や韓国、シンガポールなどでも取り入れられ、日本では芸術文化振興基金で「日本版アーツカウンシル」の試行が始まっており、地域アーツカウンシルとしては東京、横浜、沖縄、静岡、新潟、大分で設置が進んでいる。大阪は大阪府市が共同で設置した諮問機関「大阪文化振興会議」の専門部会として「大阪アーツカウンシル」が2013年に設置された。	P.148、P.154
アート	ギリシャ語の「テクネ(techne)」、またラテン語の「アルス(ars)」を語源とし、自然に對置される人工のもの、技術・技を意味するものであった。日本語では「芸術」と訳されることが多い。enocoは、いわゆる視覚芸術、美術だけでなく、建築、音楽、パフォーマンスアーツ、イラストレーション、工芸、写真、映像・映画、ラジオやテレビ、ファッション、文芸、食などの領域も幅広く「アート」として捉えている。	P.26、P.36、P.97、P.101、P.114、P.123、P.130、P.146、P.148、P.152、P.154、P.156、P.158
アートセンター	文化芸術の拠点。ハードとしては展示室やホール、多様な用途で使える部屋、ライブラリーなどを兼ね備えた複合施設、ソフトとしては美術だけではなく複数のジャンルを扱う拠点であることが多い。設置者は地方自治体、民間団体、大学などの教育機関など多岐に渡る。一般に美術館(▷「美術館」の項を参照)が美術作品や資料の収集、保存、展示、調査研究を担う一方、アートセンターはコレクションを持たずに活動をする事が多いが、enocoは大阪府所蔵の美術コレクションの管理活用も行っている。	P.97、P.102、P.116、P.130、P.154
アドプト	アド(ダ)プト・プログラム。市民と行政が協働で進めるまち美化プログラムのこと。アドプトとは英語で「養子にする(Adopt)」の意味。市民が公共空間の清掃、除草、花植え、違法広告撤去などを行い、行政がこれを支援する制度。1985年にアメリカ・テキサス州で行われた、高速道路周辺の清掃を沿道住民に依頼した「アドプト・ア・ハイウェイ」が起源とされている。日本では1998年の徳島県神山町が最初の事例となっている。	P.92、P.111
委託	行政が、ある事業やサービスを民間の企業や団体に依頼すること。行政側は事業を民間に委託することで、民間の能力をいかしたサービスを市民に対して提供できるというメリットがある。しかし、天王寺区がデザイナーへの委託を無給としようとした一件など、行政側と民間側に齟齬が起こり、円滑に事業が進まないケースもある。なお、「業務委託」は契約に基づく個別の事務または業務の執行を委託、「指定管理者制度(▷「指定管理」の項を参照)」は「管理代行」(行政処分的一种)により公的施設の管理権限を指定を受けたものに委任するという違いがある。enocoは館の運営は指定管理者制度をとっているが、プラットフォーム形成支援事業に関しては業務委託という扱いである。	P.59、P.92、P.114、P.116、P.128
異動	人事異動。組織の中で職員の配置・地位や勤務状態を変えること。1年を通して時期を問わず実施されるものであるが、日本では年度末を中心に実施される。行政職員はジェネラリスト養成を目的として平均3年程度での異動が多く、担当者と議論や交渉を積み重ね、協働関係を築いていたとしても、異動によって担当者が変わり、対応や方針が変わることもしばしば発生する。なお、土木や建築、農業などといった特定分野の専門家として採用される技術職の職員もおり、その場合、他分野への異動は基本的にはない。enocoを所管する大阪府文化・スポーツ課には文化芸術の技術職としての研究員がいる。	P.76、P.92、P.128



キーワード	解説	参照
インターン	将来のキャリア形成や職業理解のため、学生などが企業や組織で一定期間、実際の職務につくこと。大学で単位認定制度を導入し推進していることが多く、enocoでも夏休み期間を中心に学生インターンを数名受け入れ、10日間程度で実際に文化施設の運営、文化事業の企画運営を体験する機会を設けている。希望する学生に対しては、通年での研修も受け入れている。	P.76
NPO	「Non-Profit Organization」の略で非営利組織のこと。1998年に特定非営利活動促進法が施行されて以降増加し、2015年度末には5万件を突破した。行政とNPOはそれぞれ非営利で公益性の高い分野を担うことから、地域や市民の主体性を活かす取り組みに際して協働が推進されることも多い。大阪では、アートNPOが大阪市の文化事業によって誘致され活動していた(▷「フェスティバルゲート」の項を参照)など、活発に特色のある活動を行っているNPOが多いと言われており、行政とアートやまちづくりNPOとの協働も早くから行われている。	P.72、P.101、P.102、P.130、P.148、P.156、P.158
エリアマネージメント	国土交通省の定義によれば「地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための、住民・事業主・地権者等による主体的な取り組み」のこと。地域に新しいものを付与したり刷新したりする「開発」や「再開発」ではなく、「管理・運営」へと力点が移った現在の潮流を象徴する語のひとつ。「官」の主導ではなく「民」に権限を与え、一定のエリアを対象に行われる点も重要である。	P.107
おおさかカンヴァス	2010年度～2016年度に実施された、まちをアーティストの発表の場としての「カンヴァス」に見立て、大阪の新たな都市魅力を創造・発信する大阪府の文化事業。公共空間に作品を設置することにより、公共空間(▷「公共空間」の項を参照)にかかる様々な規制やルールに挑戦しながら、アートが多様な場の使いこなし方を提示し都市や地域の魅力を発掘・発信することや、アーティストがそのアイデアや想いを都市を舞台に実現するためのサポートを行うことを目的としている。enocoではこの事業で蓄積したノウハウを府内市町村に水平展開していく、「わがまちカンヴァス事業」を大阪府とともに実施している。	P.84、P.102、P.123、P.126、P.130
課題	求められている状態に現状が到達していないことを「問題」の定義とする。通常はその原因を取り除くことが必要とされるのに対して、「課題」は、その問題の中でも、特に今後改善などを行うことによってその状況をよりよいものに変えていけると捉えられる物事。2015年に経済産業省が「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を「社会人基礎力」とした。その中の一つが「課題発見力」で、「現状を分析し目的や課題を明らかにする力」と定義した。しかし、明示されていたり明示し得たりする「課題」のみが課題なのかは問うていかないといけない。	P.52、P.58、P.59、P.62、P.75、P.86、P.114、P.128、P.146、P.150
官民	官庁、いわゆる行政側と民間企業や団体のこと。この二者を対比させて表現する時に使うことが多い。また、官庁と民間企業が共にチームを組み事業に取り組むことを官民協働と呼ぶ。官民が連携して公共サービスを提供する形式を「PPP(Public Private Partnership)」と呼ぶ場面も増え、その手段として、公共施設などの設計・建設・管理運営に民間の資金やノウハウを活用する「PFI(Private Finance Initiative)」や「指定管理者制度(▷「指定管理」の項を参照)」などがある。	P.48、P.114

キーワード	解説	参照
教育普及	博物館・美術館において、収集・保存・研究・展示以外の方法で、鑑賞者と作品・資料の橋渡しをする活動を指す。日本の美術館では、1980年代以降、学校外教育や社会教育への関心の高まりから「開かれた美術館」を目指し、鑑賞教育を中心とした教育普及活動が広がりを見せ、教育普及を主に担当する学芸員やエデュケーターという専門スタッフを置く美術館も増えている。社会における市民参加の増大が進んでいる近年は、鑑賞教育に留まらない、より能動的で双方向な教育普及活動が展開されている。	P.97、P.102
クリエイター	創作者、制作者の意味。enocoにおける「クリエイター」は美術分野のアーティストも「クリエイター」として総称することが多い。また、クリエイティブ領域を生業・活動フィールドとしている人だけでなく、従来の既存概念や仕組みに縛られず創造的思考を持って行動をする人も「クリエイター」であるとしている。enocoの「Be Creative!」というスローガンは社会や地域に「クリエイター」を増やし、社会を変えていこうという姿勢を表している。	P.18、P.34、P.50、P.59、P.79、P.82、P.114、P.123、P.128、P.144、P.154
現場	物事が実際に行われている場所。一定の計画や設計図をもとに実践が行われる場所のことでもあり、プロジェクトや事業の最前線であるとも言える。そこではさまざまな人が動き、実際のものがあり、ことを起こしていく場である以上、計画段階では想定されなかった出来事が起こることも多い。アートプロジェクトやまちづくりにおいては、ノウハウを持ち有機的に動くことのできる現場人材の存在が必要不可欠である。計画や設計はそういった現場のあり方を見据えて作成され、現場はその計画や設計を更に改善・発展させる場としてあることが理想的である。	P.92、P.111、P.128、P.156
現美センター	大阪府立現代美術センターの略。enocoの前身施設でもある。「府民ギャラリー」(1974年～)を経て、1980年に中之島で開館。2000年に大手前の府庁新別館に移転し、2012年3月末日にて閉館。現代美術に関する府民の知識及び教養の向上に資するため、大阪府20世紀美術コレクションの管理活用(現在はenocoに移管)の他、「現代美術コンクール」などの公募展や新進作家を紹介する展覧会企画、海外との芸術家交流事業、「大阪・アート・カレイドスコープ」などの現代美術振興事業を主として行っていた。	P.102、P.116、P.130、P.133、P.144、P.146、P.148
広域	複数の基礎自治体を包括編成した都道府県のことを指す。市町村は「基礎自治体」と呼ばれる。基本的に市町村の区域を超える業務は広域自治体で、地域住民の暮らしに密着した業務は基礎自治体で担うが、その役割分担やあり方についてはさまざまな検討がなされている。enocoは広域自治体である府の施設ではあるが、自らが位置する地域に密着した活動を重視し、そのノウハウやネットワーク(▷「ネットワーク」の項を参照)を府内の市町村に提供し、市町村が抱える課題の解決のサポートなどを行うことを施設の大きな役割と位置づけている。	P.116、P.130
公共空間 (パブリックスペース)	道路や公園、河川など、民間所有ではない公有地だけでなく、民間の所有であっても、駅やビルのアトリウム、ホテルや病院のロビーなど、不特定多数の人々が比較的自由に出入りすることのできる空間を含む場合が多い。近年、規制緩和によって公共空間の活用の幅を広げる取り組みが都市再生の手段として積極的に行われている。例えば、道路や公園の管理・運営を沿道地権者によって構成される民間組織に任せる「BID(Business Improvement District)」という欧米の制度や、小さな規模で実験的に新たな使い方を試みる、タクティカル・アーバニズムと呼ばれる社会実験的手法に注目が集まっている。	P.46、P.84、P.92、P.100、P.110、P.111、P.126、P.130

キーワード	解説	参照
コーディネーター	物事が円滑に行われるように、全体の調整や進行を担当する人。例えば市民協働(▷「市民協働」の項を参照)といっても、一般市民と行政職員をひとつの部屋に入れただけでは何も始まらない。物事を進めるためには両者の価値観や姿勢を理解しつつ、共感と連帯を生みだしていくつなぎ手の存在が不可欠である。文化拠点においても、まちづくり団体においても、組織や地域をつなぐコーディネーターの育成と確保は急務とされている。	P.27、P.92
コンサル	企業や行政など、個人・組織に問わず相談を受け、そこにある課題に対して解決策や具体的な案を提示することを「コンサルティング」と呼ぶ。受けた相談内容の解決や発展に関して専門的な見地からアドバイスを行い、状況の改善や望ましい目標の実現に向けて支援する。またその業務を行う人のことを「コンサルタント」と呼ぶ。	P.92、P.111
コンペ	「コンペティション」の略称。建築においては「設計競技方式」とも呼ばれる。発注者が要項を満たす提案を不特定／特定多数から募集するための仕組み。具体的な案をもって選定がなされるため、提案者は過去の実績を問わず選定される可能性がある。実際に実現が見込まれている「実施コンペ」に対して、まずアイデアを募集してから実現が目指されたり目指されなかったりする「アイデアコンペ」がある。また別の仕組みとして「プロポーザル(▷「プロポーザル」の項を参照)」もある。	P.56、P.92、P.111、P.123、P.138、P.144
資源	人が生活をより良くさせる源泉として、働きかけの対象となりうる事物のこと。リソース。まちづくりにおいては、地域にある潜在的なもの・こと・人、そして場所を「地域資源」と捉え、見過ごされてきた潜在的な価値に光を当てて再評価し、あるいはそれらを有機的に組み合わせて地域の活性化につなげることが重要とされる。景観や自然といった資源、歴史的・文化的な資源など、何を資源とし、それをいかに価値付け、いかに活用するかが鍵である。	P.47、P.89、P.111、P.123
実験	実際に試み、あらかじめ用意していた考え方が有効かどうか調べること。都市計画などの過程で行われる「社会実験」は、計画している内容がその地域、場所に対して実際に有効かどうかを試す実験である。また、芸術作品などにおいて革新的で独自性のある表現に対して「実験的な試み」として評されることもある。	P.36、P.38、P.39、P.101、P.102、P.110、P.152、P.158
指定管理	指定管理者制度、または指定管理者自体を指す。2003年施行の地方自治法の一部改正により、公の施設について、民間のノウハウを活かすことでサービス向上や経費節減を図るべく、管理・運営を民間事業者に委任できる指定管理者制度が開始された。enocoも設置当初から指定管理者によって運営されている(指定期間:5年)。指定管理者制度による課題は多々あるが、とりわけ長期スパンでの活動が必要な文化芸術・まちづくり分野においては、指定管理者が交代となった場合、現場でのノウハウやネットワークの蓄積がリセットされてしまう危険性がある。	P.97、P.116、P.128、P.130、P.154、P.158

キーワード	解説	参照
市民協働	複数の主体が目標を共有し、共に力を合わせて活動すること。市民協働という場合は、市民と行政が対等な立場で地域課題の解決や活性化に取り組むことを指す。従来の市民参加や市民参画では、あくまで主体は行政であり、常に行政のお膳立てした枠組みに市民が加わることで活動が進められるのに対し、市民協働においては、市民も公共の主体として、行政と対等に責任をもって活動に取り組むことが成功の鍵となる。enocoが取り組むプラットフォーム形成支援事業は、まさにそのような市民協働を実現する試みである。	P.14、P.47、P.59、P.86
水都大阪	2001年に政府の都市再生プロジェクトに指定され、大阪府・市・経済界で「水都大阪」による都市再生を目指すことが決まり、水辺のシンボル空間や船着場の整備などが推進された。2009年にはシンボルイヤーとして「水都大阪2009」が開催され、市民参加とアートを軸にソフト面からも水辺の賑わいを生み出した。そこで育まれたネットワークや仕組みを継続していくためにオール大阪での推進体制が築かれ、2013年には民主導の事業推進組織「水都大阪パートナーズ」が設立、行政や企業と連携しながら「水都大阪フェス」の開催、社会実験や水辺の使いこなしの提案などの多様な実践により更なる都市ブランドの醸成がはかられている。	P.63、P.123、P.130、P.146
ステークホルダー	日本語では「利害関係者」と訳され、企業、行政、NPOといった組織の利害に直接的・間接的な利害関係を持つ者を指す。20世紀初頭に使われていた「賭金(stake)の保管者(holder)」という狭い意味から、1990年以降「利害関係者」という現在の広い意味で使われるようになった。enocoでは多様なステークホルダーが集まり、それぞれの活動に関わる課題を抽出し、課題に対する解決策を検討する、あるいは具体的な活動へと発展させるプラットフォーム(▷「プラットフォーム」の項を参照)の構築に力を入れている。	P.91、P.107、P.110、P.130、P.144、P.146
成果	ある取り組みを行った後に得られたよい結果のこと。「アウトカム」と呼ばれることもあり、事業の区切りとなる年度末には「成果物」として報告書などが作成されることが多い。事業を行う際にはどのような成果を得たいのかを決めることが重要とされ、そこから事業の枠組みや計画、評価手法(▷「評価」の項を参照)を検討する必要性が求められつつある。マーケティングの現場では、想定した成果を達成するためのプロセスを管理するために「KPI(Key Performance Indicator)」や事業全体の想定した成果を管理する「KGI(Key Goal Indicator)」などの言葉が使われ、他分野にも流通しつつある。	P.13、P.28、P.59、P.107、P.148、P.158
縦割り	主に行政組織における、上下関係に基づく組織編成のこと。部局と官職によって表された責任範囲の完全なツリー構造で、他部局への関与は責任の所在や予算の執行が不明瞭となるため基本的に歓迎されない。行政の事業において、複数部局の事業の集約や、連携による相乗効果が発揮されにくいのはこの硬直した組織体制のためである。大阪府の文化行政では、どのような事業からも独立し、また結びつけることもできる「アート」を、縦割りを横断していくための「ツール」と位置付けている。部局間を繋いでいくこのような行為は、「横串を刺す」とも言われる。	P.59、P.76、P.92、P.144
単年度	日本では、通常4月から翌年3月末までの1年間を1年度として数える。国や地方自治体においては、通常、前年度の秋(10月頃)から次年度の予算編成の作業を始める。各部局が次年度の事業計画をもとに予算を立て、財政を担当する部局と首長がそれを査定し、3月の議会の議決をもって決定される。そのため、あるプランを来年度に実行するためには、秋までに予算が算出できるだけの計画をまとめる必要がある。1年を超えて継続する事業であっても、年度を跨いだ予算執行が難しい上に、1年度毎に成果を求められることが多いため、長期的な事業展開の妨げになることもある。	P.52、P.59



キーワード	解説	参照
<b>デザイン</b>	ラテン語で「指示する、表示する」という意味を表す「designare」を語源とする。実用面などを考慮した造形作品の製作や、視覚的に訴えかける図案や模様などの要素の考案だけでなく、課題解決や目的に向けて具体的に立案・設計することがデザインの重要な役割である。人によって「デザイン」の定義は様々であり、アーバン・デザイン（都市計画）、建築デザイン、インテリア・デザイン、グラフィック・デザイン、工業デザイン、ファッション・デザイン、コミュニティ・デザインなど、分野にあわせて多様な言葉の使われ方をしている。	P.48、P.50、P.52、P.56、P.79、P.111、P.114、P.123、P.126、P.144
<b>都市再生</b>	高度経済成長期の急激な経済発展とそれに伴う都市化の進展は、環境破壊や交通、福祉といった深刻な諸問題を21世紀に残し、産業構造の転換への対応が遅れグローバルゼーションによる都市間競争の激化に晒される中、持続可能な都市の再生は国家の最重要戦略のひとつとなっている。文化芸術の文脈では、日本に先立ち都市再生が課題となった欧州の「欧州文化都市」など、文化芸術の創造性を活かした都市再生が世界各地で試みられ、国内でも文化庁が「文化芸術創造都市」の取り組みを行っている。enocoはこのような「創造都市論」を背景に、「大阪の都市の魅力の向上に資する」ことを目的に設けられた文化施設である。	P.116、P.123、P.130、P.146
<b>ネットワーク</b>	個々の人、もの、ことをつながり。特に情報の交換を行うグループのことを指す。複数のコンピューターを結び、データなどを共有した上で、情報処理の効率化を図るシステムのことを指す言葉であるが、人や団体が情報共有をするつながりを指す言葉としても使われる。文化芸術の分野では、「京都文化芸術コア・ネットワーク」や、「舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)」など、関係者のネットワーク自体を団体として総称することもある。enocoでは情報共有のみならず、ある地域における意志決定や、プロジェクトベースでチーム編成を行う際の母集団としてのネットワークのあり方を模索している。	P.34、P.63、P.68、P.79、P.97、P.116、P.128、P.130、P.144、P.154
<b>美術館</b>	美術品を主たる対象とする専門博物館の一分野であり、日本における所轄法令は博物館法である。美術作品を中心とした文化遺産や現代の文化的所産を収集・保存・展示し、またそれらの文化に関する教育・普及・研究を行なう施設である。enocoは大阪府の美術コレクションを収蔵し、管理・活用を担い、そのための学芸員も配置しているが、博物館法制度上の博物館(美術館)、相当施設、類似施設にはあたらない。	P.42、P.96、P.97、P.133、P.156
<b>評価</b>	価値や効果を定めること。評価の手法には定量評価と定性評価の2種類がある。定量評価では、数値やデータによって統計を取った上で判定する。一方、定性評価では、インタビュー調査などによって、数値で測定できない質的な評価を行う。文化芸術事業は入場者や参加者、収益の多寡ではなく、その事業の質を評価することが重要である。しかし、定性評価ではその妥当性を関係者以外と共有することが難しいため、参加者数やアンケートによる満足度といった定量評価を採用しがちである。客観的指標に基づいた、文化芸術事業の特質に沿った定性評価の手法を確立することは、文化施設や文化行政にとって極めて重要な課題になっている。	P.28、P.116、P.128、P.154、P.158
<b>ファシリテーション / ファシリテーター</b>	企業や学校、地域のコミュニティなどの組織の会議などで、参加者の発言や行動を引き出して、協働を促進すること。たとえば、質問によって参加者の発言を促して議論を深めるきっかけをつくったり、話の流れを整理し参加者同士の相互理解を助けることなどが挙げられる。こうした手法や技術を持ち、その役割を担う人をファシリテーターと呼ぶ。	P.27、P.76、P.86、P.114

キーワード	解説	参照
<b>フィールドワーク</b>	実地調査、野外調査のこと。特に文化人類学で用いられる。調査者がある土地に出向き、その土地にある事実に実際に触れたり、人と話すことにより情報を収集する行為。複数の人が集まってフィールドワークを行い、得た情報を持ち寄り、より多角的にその土地について理解する手法としても用いられる。アーティストが創作活動の一環としてフィールドワークを行い、得た情報や着想から作品の制作を行うことも多い。	P.27、P.62、P.105、P.107
<b>フェス</b>	フェスティバルの略称。祭典。お祭り。文化芸術分野においては、一定期間に集中的に多数の作品展示を行う、多種多様なプログラムを展開するイベント・芸術祭などを指すことが多い。enocoにおいても多様なジャンルのコンテンツを集約させるイベントを「フェスティバル」を称して実施している。また市民や地域団体など個別の主体が行っている活動を、開催日と場所をあわせて実施することで祝祭性を高め、多様な主体の参画を更に促進したり、回遊性を向上させたりする取組みを「フェス」と呼ぶ、「安威川フェスティバル」「水都大阪フェス」などもある。	P.20、P.35、P.63、P.126、P.130
<b>フェスティバルゲート</b>	大阪市浪速区にあった第三セクターによる都市型遊園地を含む娯楽施設で、1997年にオープンしたが数年で経営不振となり、2007年には閉鎖された。本ドキュメントで出てくる「フェスティバルゲート」は、大阪市の「芸術文化アクションプラン」(2001年)によって、2002年から、施設内の空き店舗にアートNPO(のちに2つの任意団体も加わる)を誘致し、10年計画で現代芸術の実験的・先駆的活動を行う「新世界アートパーク事業」が実施された拠点のことを指している。なお大阪市による事業の見直しに伴い、これらのNPOは2007年で撤退・移転(1つは活動終了)を余儀なくされた。	P.148、P.152、P.156、P.158
<b>フォーラム / シンポジウム</b>	公開討論会のこと。フォーラムは古代ローマの「公共広場」、シンポジウムは古代ギリシアの「饗宴」に由来し、シンポジウムはあるテーマのもとに専門家などが講演や報告を行った後、質疑応答や意見交換を行う形式をとることが多く、フォーラムは、全体での討論会が主となることが多い。展覧会やイベントから派生してフォーラムやシンポジウムが行われることもよくあり、あるテーマについて新しい知識を得たり、考えを深める機会として設定されることもある。	P.14、P.16、P.26、P.28、P.105、P.107、P.148
<b>プラットフォーム</b>	日本では駅の「ホーム」として一般に理解されている言葉。「話者や演技者などが立つ演壇や舞台」という意味とともに「意見を公表するための機会」という意味を持ち、後者のニュアンスで使われる機会を目にすることが増えてきた。ある課題を解決していくために、市民、行政職員、アーティストやデザイナーなどといった専門家など多様な視点を持つ人々を集め、対等な立場で交流・対話を行い、主体的に解決に取り組むための会議や合意形成の場のこと。ネットワークが生まれる場所や交流の場所という広義の意味で使われる場合もある。	P.46、P.84、P.91、P.92、P.97、P.105、P.107、P.114、P.116、P.123、P.146、P.154、P.156
<b>プログラム</b>	ある物事の進行についての順序や、組み合わせなどのこと。構築された計画の内容を指す。教育プログラム、国際交流プログラムなど、プロジェクトや展覧会などに付随して行われるイベントや事業を指すこともある。	P.20、P.22、P.25、P.35、P.36、P.38、P.86、P.101、P.102、P.123、P.144
<b>プロジェクト</b>	組織や団体を超えて、様々な人材が集まり大きなひとつの目標に向かって動いていくこと。ある計画やビジョンを達成するためには、具体的な実践を「プロジェクト」として現場で重ねていくことが重要である。組織よりもプロジェクトを単位として考える、あるいはまずは実行を重視する姿勢を強調する意味で、「プロジェクトベース」ということもある。	P.28、P.50、P.52、P.66、P.70、P.107、P.128、P.146、P.156

キーワード	解説	参照
プロポーザル	「技術提案方式」と呼ばれる場合もある、発注者が複数の提案者から技術提案を求め、必要に応じてプレゼンテーションやヒアリングを行って選定する方法。その内容は、対象プロジェクトの設計業務に関する設計体制、実施方法、プロジェクトに対する考え方などである。コンペティションと異なり(▷「コンペ」の項を参照)、設計委託にふさわしい「人」を選ぶ方法であるため、具体的な「案」を求めることはしないのが本来の形である。提案者の過去の実績なども判断材料となる。	P.59、P.116、P.123、P.126、P.128
プロモーション	もともとは「販売促進」など民間の企業活動で使われてきた用語だが、近年「移住者促進」や「観光振興」など、都市間競争が激化する中、「シティプロモーション」として全国の市町村が地域資源の発掘やその発信に取り組んでいる。本来は地域住民のまちへの関心を高め、街への愛着や誇り、いわゆる「シビックプライド」を醸成していくことが肝心であるが、近年は大手広告代理店などが参入し、対外的な話題先行のプロモーションを競うなど、持続可能性の点で問題も多い。	P.13、P.14、P.76、P.91、P.123
ボランティア / サポーター	元々の語義は自らの意志で参加する志願兵のことで、転じて「自主的に社会活動などに参加し、奉仕する人」を指す。アートプロジェクトやまちづくりの活動においては、予算・人手不足が常である現場の運営に、活動の主旨に賛同し協力してくれるボランティアの存在が欠かせないため、「サポーター」と呼ぶことも多い。近年は特に、「手伝う人員」としてではなく、地域の人々/クリエイターやアーティスト/来場者といった様々な人々をつなぎ場をつくりだしていく、プロジェクトの中心を担う存在としてのボランティアのあり方、そしてその育成とマネジメントが重視されている。	P.47、P.63、P.69、P.76
まちづくり	ある地域に存在する資源を基に、まちの活力と魅力を高め、そこに住む住民の生活の質向上を実現するために行う一連の連続的な活動のこと。市民ないし住民が主体性を持つことがまちづくりのポイントとして挙げられる。行政や専門家が主体となり計画・事業を進めるトップダウン型の都市計画に対して、まちづくりは住民の発意や参加によって計画・事業を進めるボトムアップ型のシステムである。また住民が主体となることから、限定した地域、より身近な居住地域を対象にした取り組みが多い。	P.48、P.59、P.72、P.83、P.111、P.114、P.123、P.138、P.144
ラウンドテーブル	日本では「円卓会議」として使われることもある言葉。数人による小規模な会合や、身分や肩書きなどによる席順を定めない会議のこと。複数の参加者がテーブルを囲み、あるテーマに即して自由に意見を交換する場で、ファシリテーター(▷「ファシリテーション/ファシリテーター」の項を参照)が進行を行う。象徴的な意味合いで用いる場合もあるため、必ずしも円形になった配置で会議を進めるわけではない。	P.52、P.58、P.59
リサーチ	広く「何かを調査すること」を指す。ただ疑問を解消するというわけではなく、ある目的のために行われる調査のことを「リサーチ」と呼ぶこともある。例えば建築の場合、一般的に、ある建物を設計するために敷地の状態や周囲の環境などを調べることをリサーチと呼ぶことが多い。アートの分野では、アーティストが作品制作の前段階として行う下調べやフィールドワーク、インタビューなどを総称してリサーチと呼ぶこともある。また近年では、建築やアートをひとつの手段として用いて、地域社会の資源や課題をリサーチするという実践も増えている。	P.39、P.62、P.105、P.148
ワークショップ	日本では「参加体験型講座」を指す用語で、参加者が実際に手を動かし、体験しながらあるモノゴトを進めていくことを指す。美術館などで行われる教育普及事業などでは、ワークショップが盛んに行われている。まちづくりにおいては、地域社会の様々な立場の人が参加し、課題を解決するための計画を立て、進めていく共同作業、およびその合意形成の場として用いられる。いずれも講師・ファシリテーター(▷「ファシリテーション/ファシリテーター」の項を参照)の役割が重要であり、近年では、大学等にて「コミュニケーションの場づくりの専門家」としての「ワークショップ・デザイナー」の養成講座なども開催されている。	P.11、P.12、P.19、P.38、P.39、P.42、P.44、P.45、P.46、P.62、P.74、P.76、P.86、P.89、P.92、P.101、P.102、P.152



## enoco 事業一覧 2012.4-2017.3

enoco が5年間の間に実施した主催・共催事業の一覧です。タイムスパン別事業紹介などでは紹介しきれなかった事業も多数。このような多種多様な事業の積み重ねによって、今の enoco があります。そして最後に、年表形式でこの5年を振り返りました。



開催年度	日程	プログラム名	ジャンル	主催・共催(enoco以外)
2012年度				
2012	4月1日～4月15日	Opening Festa「創造しい人々」	複合型イベント	
2012	4月21日	オリジナルテポワークショップ「日常の演劇」	WS	
2012	4月25日	オリジナルテポ×ベトナム国際共同制作「オーディション・フォー・ライフ」	パフォーマンス	
2012	5月4日	ドキュメンタリー「プロジェクトFUKUSHIMA!」上映会&トーク	トーク	協力:プロジェクトFUKUSHIMA! 実行委員会/大阪市立大学都市研究プラザ/プレーカープロジェクト実行委員会
2012	5月23日	エノコジマ・クリエイティブ・カフェ 「FLAG ART EXCHANGE 2012」～ドゥーニャ・エヴァース	トーク	主催:FLAG ART EXCHANGE 2012 Düsseldorf × Osaka
2012	6月1日、6月3日	「江之子島でダンス!」～ワークショップと新作プレビュー～	WS/ パフォーマンス	共催:セレノグラフィカ
2012	6月14日	エノコジマ・クリエイティブ・カフェ「都市とアート・プロジェクト～実践の現場から」	トーク	
2012	6月23日	エノコジマ・ワークショップ・ラボ「おいもコロコロ土のいるもようコロコロ土のあと」～土絵具とローラースタンプ作り～	WS	
2012	7月13日～9月30日	コタケマン「セルフ島えのこ島」	滞在制作	
2012	7月15日	Stefan Goldman × .es [dotes] ライブパフォーマンス	ライブ	主催:ギャラリノマル、共催:ドイツ文化センター
2012	8月10日	エノコジマ・クリエイティブ・カフェ「まなざしのデザインから創造性の共有社会へ」	トーク	
2012	8月11日～25日	エノコジマ・ワークショップ・ラボ「RE COLLECTIONS(リコレクションズ)」	WS / 展示	
2012	8月18日～29日	劇団KIO×劇団コープス 国際共同制作プロジェクト	パフォーマンス	共催:一般社団法人KIO、劇団コープス
2012	8月17日	エノコジマ・ワークショップ・ラボ 劇団コープス「空の飛び方!」ワークショップ	WS	共催:一般社団法人KIO、劇団コープス
2012	8月26日	セルフ祭 3 × プロジェクトFUKUSHIMA! ～奇人たちアレヤコレヤと島流し～	イベント	共催:セルフ祭委員会
2012	9月4日～9日	大阪市立大学・立命館大学合同設計演習展 水都大阪のリバイタリゼーション	展示	主催:大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻有志、大阪市立大学工学部都市学科・建築学科有志、立命館大学工学部建築都市デザイン学科有志
2012	9月9日	えほん picnic 2012「お部屋で作ろう編」	イベント	主催:西区役所、西区魅力伝道師の会
2012	9月5日～21日	PIKA☆ドラマ教室	WS	
2012	9月8日	PIKA☆太鼓ワークショップ	WS	
2012	9月22日	エノコジマ・ワークショップ・ラボ「大きな布に描く!～えのこじまのタープをつくろう!ワークショップ～ [RACOA]おとながつくるプログラム第一弾～」	WS	
2012	9月25日	エノコジマ・クリエイティブ・カフェ特別編/ 【緊急開催!!】開幕直前!旅手帖 beppu 編集長が語る混浴温泉世界・別府の旅	トーク	主催:別府現代芸術フェスティバル 「混浴温泉世界」実行委員会
2012	10月9日～28日	Be Creative Festival2012	複合型イベント	
2012	10月9日～28日	100 OSAKA vol.1	展示	
2012	10月9日～28日	大阪府20世紀美術コレクション エノコジマ・セレクション ～ザ・大阪ベストアート展関連作品を中心に～	展示	
2012	10月9日～28日	コタケマン×淀川テクニク	展示	共催:大阪府
2012	10月9日～28日	ニシハラ★ノリオ「カプリモノ・ギャラリー」	展示	
2012	10月12日	エノコジマ ブランディング会議&愛称公開審査会	フォーラム	
2012	10月12～14日	Monochrome Circus「Dance in Building」	WS/ パフォーマンス	
2012	10月13日～28日	タチヨナ「バックージグラー」展	展示	共催:NPO cobon
2012	10月13日～28日	「大阪!してかす観光」上映	展示	

開催年度	日程	プログラム名	ジャンル	主催・共催(enoco以外)
2012	10月13日	創造人を肌で感じるツアー 肌感～hada kan～「釜坂兼光の原点・大人の10年散歩～itohen～星ヶ丘まで～」	イベント	共催:株式会社インプリージョン
2012	10月14日	アートパレード×セルフ祭	イベント	
2012	10月19日	エノコジマ クリエイティブフォーラム&ハッピーパーティー	フォーラム/ パーティー	
2012	10月19～21日	エノコジマ古書ノ市&約100人の本棚展	イベント	
2012	10月20日	肌感～hada kan～「演劇人・中立公平の一期一会～大阪そして世界・空間がつくれるまで～」	イベント	共催:株式会社インプリージョン
2012	10月27日	セレノグラフィカ「絵を踊る/絵と踊る」	パフォーマンス	
2012	10月27日	肌感～hada kan～「江弘毅といく 街めぐり in 神戸元町 ～飲んで、食べて、話そか～」	イベント	共催:株式会社インプリージョン
2012	10月27日	キュレーターズTV カンファレンス サービス・イノベーション オブ アート & ガラパーティー	フォーラム/ パーティー	主催:キュレーターズTV
2012	10月28日	KIO「DOLLS」	パフォーマンス	
2012	10月28日	江之子島デコボコかたち探検 土からつくるクレヨンとフロクタージュ	WS	
2012	11月20日～25日	市民キュレーターによるミニ展覧会	展示	主催:大阪府、大阪市
2012	12月1日	エノコジマ・クリエイティブ・カフェ「七味まゆ味が魅せるグリム童話」	トーク	
2012	12月15日	肌感～hada kan～「村上美香さんと巡る大阪ミナミ」	イベント	共催:株式会社インプリージョン
2012	12月21、22日	日本の空間デザイン展2012	展示/ フォーラム	共催:日本の空間デザイン展2012実行委員会
2012	12月22日	エノコジマ・ワークショップ・ラボ「poRiffでつくる○△□～オリジナルバックをつくる編～」	WS	
2012	1月18日	エノコジマ・クリエイティブ・カフェ 北川フラム「大阪と瀬戸内文化圏—瀬戸内国際芸術祭2013」	トーク	
2012	1月19日	サルサガムテープ Art and Rock	ライブ	
2012	1月20日	エノコジマ・ワークショップ・ラボ 岩村原太「観光会～睦月の会」	WS	
2012	1月26日	肌感～hada kan～「ケイオス澤田充さんと行く中之島と…」	イベント	共催:株式会社インプリージョン
2012	2月1日	木津川遊歩空間アイデアデザインコンペ 公開プレゼンテーション	イベント	主催:西大阪治水事務所
2012	2月1日	エノコジマ・クリエイティブ・カフェ「アートとデザインが大阪のまちを変える～enocoによるプラットフォーム形成支援事業の取り組み～」	トーク	
2012	2月9日	府市連携アートフォーラム〈こどもとアート〉の現場を考える	フォーラム/ WS	主催:大阪府、大阪府
2012	2月15日	肌感～hada kan～ 茂木美佐「ジェラートに魅せられて～美味しさの秘密は、楽しむことから～」	イベント	共催:株式会社インプリージョン
2012	2月17日	エノコジマ・ワークショップ・ラボ 岩村原太「観光会～如月の会」	WS	
2012	2月23日	肌感～hada kan～ 田中宏幸「吉本・笑いの王国とその魅力を見つけて～笑いの殿堂となんばをぶらっといこか～」	イベント	共催:株式会社インプリージョン
2012	2月25日	肌感～hada kan～ 山崎紀子「下町アートシアター“シネ・ヌーヴォ”～舞台裏見学と九条下町ぶらり飲み～」	イベント	共催:株式会社インプリージョン
2012	3月2日	エノコジマ・クリエイティブ・カフェ「万城目学と語る大阪近代建築の魅力」	トーク	
2012	3月12日～24日	韓国の演劇界におけるベルトルト・ブレヒト上演作品写真展 2006～2011	展示	主催:科研費プロジェクト「プレヒト、ヴァイゲルとベルリーナーアンサンブル」、大阪ドイツ文化センター
2012	3月14日	エノコジマ・クリエイティブ・カフェ「デザインの旅人 甲賀雅章『ボクはお金より感動がほしい』」	トーク	
2012	3月15日	エノコジマ・クリエイティブ・カフェ「IRON ∞ MAN ～お楽しみ会!?～」	トーク	
2012	3月15日	絵本のチカラを広げよう～絵本の魅力にふれてみませんか～	トーク	主催:西区役所
2012	3月16日	エノコジマ・ワークショップ・ラボ 岩村原太「観光会～弥生の会」	WS	

開催年度	日程	プログラム名	ジャンル	主催・共催(enoco以外)
2012	3月16日	国際シンポジウム「ドイツ、韓国、日本におけるプレヒト」	シンポジウム	主催: 科研費プロジェクト「プレヒト、ヴァイゲルとベルリナーアンサンブル」、大阪ドイツ文化センター
2012	3月17日	大阪市現代芸術創造事業 Breaker Project 音とあそぶ・音でつくる・音を発見するワークショップ～「大友良英 子どもオーケストラ」	WS / ライブ	主催: プレーカープロジェクト実行委員会
2012	3月20日	「大阪アーツカウンシル」報告・シンポジウム	フォーラム	主催: 大阪府・大阪市
2012	3月24日	grass roots music workshop presents アールの日	WS / ライブ	主催: Grassroots Music Workshop
2013年度				
2013	4月5日～14日	みかえり enoco の一年展 2012 ～ Be More Creative!	展示	
2013	4月5日	開館1周年記念パーティー	パーティー	
2013	6月1日	enoco ワークショップラボ「enoco のつかいこなし講座: 舞台照明編」	WS	
2013	6月2日	GrassRoots music workshop ドックの日	WS/ ライブ	主催: Grassroots Music Workshop
2013	6月6日	enoco クリエイティブカフェ「西区発見!」vol.1 西から文明開化の音がする ～モダン大阪はじまりの地・川口	トーク	
2013	6月15日	enoco ワークショップラボ「enoco のつかいこなし講座: アナログ & デジタル音響 (PA) 編」	WS	
2013	6月22日	En concert at enoco	ライブ	主催: 小島剛
2013	6月30日	タチヨナ × enoco 企画 子どもアートワークショップ vol.1 「じぶんの分身をつくろう」	WS	主催: NPO cobon
2013	7月2日～13日	FLAG ART EXCHANGE Düsseldorf × OSAKA 「二つのおかげでの領収書」 水内義人 報告展	展示	主催: FLAG
2013	7月10日	enoco クリエイティブカフェ「西区発見!」vol.2 「西でつながり、西からつながり、文化が生まれる ～ 新町・立売堀」	トーク	
2013	8月1日～11日	Be Creative Festival 2013	複合型イベント	
2013	8月1日～11日	100 OSAKA vol.2 U35	展示	
2013	8月1日～11日	eno co-lab. vol.1 ふるさかはるか「木版風景: 木はわたしの鏡」	展示	
2013	8月1日～11日	「FIELD TRIP PROJECT / 遠足プロジェクト」展	展示	主催: 遠足プロジェクト実行委員会 (大地プロジェクト、高校生カフェ)
2013	8月1日	「TACT/FEST 2013」連携プログラム: 劇団こぶす「ひつじ」	パフォーマンス	主催: TACT/FEST2013
2013	8月2日	「enoco の学校」説明会&記念セミナー「大阪のど真ん中で、愛を叫んでみないか!」		
2013	8月3日	遠足プロジェクト シンポジウム: アートが境界線を越えるとき ～ 遠足プロジェクトの可能性	シンポジウム	主催: 遠足プロジェクト実行委員会 (大地プロジェクト、高校生カフェ)
2013	8月3日	enoco “女子”ものづくり蚤の市	イベント	
2013	8月4日	「夏休み親子まわしよみ新聞」	WS	共催: DECO (江之子島 A&L マネジメント)
2013	8月4日	「Wonder Town ツアー × 遠足プロジェクト」	イベント	主催: 遠足プロジェクト実行委員会 (大地プロジェクト、高校生カフェ)
2013	8月4日	タチヨナ × enoco 企画 アートワークショップ vol.2 中学生のための「アイデアをカタチにするワークショップ」	WS	主催: NPO cobon
2013	8月8日	enoco クリエイティブカフェ 西区発見! vol.3 「アメ村から西へ ～ 日限萬里子を通して見る堀江」	トーク	
2013	8月9日	100 OSAKA 交流パーティー	パーティー	
2013	8月10日	「TACT/FEST 2013」連携プログラム: トークセッション「アートが次世代に残せるもの」	トーク	主催: TACT/FEST 2013
2013	8月10日	タチヨナ × enoco 企画 アートワークショップ vol.3 へんな楽器 Kazoo (カズー) をつくろう!	WS	主催: NPO cobon

開催年度	日程	プログラム名	ジャンル	主催・共催(enoco以外)
2013	2013年8月28日、31日、9月1日	シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 オープンキャンパス	講座	主催: シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 実行委員会、阿倍野区民センター指定管理連合体
2013	8月31日	タチヨナ × enoco 企画 アートワークショップ vol.5 セルフポートレート写真ワークショップ『未来の姿を写してみる』	WS	主催: NPO cobon
2013	9月7日	アーティスト・サポート事業 enoco [study?] #1 友枝望ワークショップ「置物コラージュ～置物をいじってみよう!」	WS	
2013	9月7日	アーティスト・サポート事業 enoco [study?] #1 友枝望 中間レビュー	トーク	
2013	9月12日	enoco クリエイティブカフェ「西区発見!」vol.4 町工場が集積する西のもののづくり拠点 ～ 九条	トーク	
2013	9月13日～2014年3月21日	enoco の学校第1期「Be Creative コース2013」	講座	
2013	9月15日	タチヨナ × enoco 企画 アートワークショップ vol.4 「コンピュータでアニメーションを作ってみよう。」	WS	主催: NPO cobon
2013	9月17日～22日	第1回大阪インターカレッジ・パブリックスタイル・ワークショップ「水都大阪再生: 水辺からのリ・デザイン-建築都市系5大学が描く「水都大阪」のオルタナティブ・ビジョン」	展示	主催: 大阪インターカレッジ・パブリックスタイル・ワークショップ実行委員会 共催: NPO 法人パブリックスタイル研究所 (RIPS)
2013	9月21日	「水都大阪再生: 水辺からのリ・デザイン-建築都市系5大学が描く「水都大阪」のオルタナティブ・ビジョン」公開プレゼンテーション&シンポジウム	シンポジウム	主催: 大阪インターカレッジ・パブリックスタイル・ワークショップ実行委員会 共催: NPO 法人パブリックスタイル研究所 (RIPS)
2013	9月17日～29日	FLAG ART EXCHANGE Düsseldorf × OSAKA カティア・ストローク&オリバー・ジーバー展 Fax from the Library Do you never feel the need to be another?	展示	主催: FLAG
2013	2013年10月2日～2014年7月26日	シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 第1期生(ベーシッククラス)	講座	主催: シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 実行委員会、阿倍野区民センター指定管理連合体
2013	10月5日	enoco クリエイティブカフェ 「西区発見!」vol.5 西区発見! vol.5「水都大阪、つぎの拠点は中之島の西端～中之島 GATE」	トーク	
2013	10月5日～19日	アーティスト・サポート事業 enoco [study?] #1 友枝望「CLUSTER」	展示	
2013	10月19日	対極メカノ・アコースティック・ナイト - ノルウェー / オーストラリア	ライブ	主催/企画: Tribal Market
2013	10月24日～11月2日	西区水辺のワクワク広場「ふしぎな生きものをつくろう!」展	展示	主催: 西区役所
2013	11月7日	enoco クリエイティブカフェ「西区発見!」vol.6 鞆公園パークサイドのお洒落な街角～京町堀	トーク	
2013	11月9日	木津川遊歩道空間整備 だんだんカフェ	WS	主催: 大阪府(文化課、西大阪治水事務所)
2013	11月12日～12月1日	大阪府20世紀美術コレクション 浅野竹二 展	展示	
2013	11月13日	「大阪府20世紀美術コレクション 連続講座」vol.1 (1) 浅野竹二 ユーモアとベアソ 20世紀を生きた京都の超俗の版画家	講座	
2013	11月15日	Osaka Creative Forum 新しいパブリックの形はここにある: プラットフォーム形成支援事業の試みと可能性	フォーラム	主催: 大阪府
2013	12月3日	市民キュレーターによるミニ展覧会	展示	主催: 大阪新美術館建設準備室
2013	12月7日	チチ松村・バンジョー祭り連載100回記念 ワケもなく、バンジョー好きが集まる会 ～同時開催: 乙女バンジョー祭り～	ライブ	主催: Grassroots music worksho
2013	12月11日	「大阪府20世紀美術コレクション 連続講座 vol.1 (2) 須田烈太 具象と抽象 司馬遼太郎と歩き描いた『街道をゆく』」	講座	
2013	12月10日～22日	大阪府20世紀美術コレクション 須田烈太「司馬遼太郎と歩き描いた『街道をゆく』」	展示	
2013	12月11日	enoco クリエイティブカフェ「西区発見!」vol.7 クロストーク: 編集者がある、西区という“まち”	トーク	



開催年度	日程	プログラム名	ジャンル	主催・共催 (enoco 以外)
2013	12月15日	DECO×enoco 江之子島壁画プロジェクト vol.1「ふしぎな enoco 島をつくらう！」	WS	主催:DECO(江之子島 A&L マネジメント)
2013	12月20日～22日	あごうさとし演劇公演 複製技術の演劇 — パサージュIII	パフォーマンス	主催:あごうさとし
2013	1月8日	「大阪府20世紀美術コレクション 連続講座 vol.1 (3) 上前智祐 具体美術協会と上前智祐 集合と稠密のコスモロジー	講座	
2013	1月9日～25日	大阪府20世紀美術コレクション 「上前智祐展 一時を刻む— 点描・マッチ・縫い・版画」	展示	
2013	1月9日～25日	大阪府20世紀美術コレクションによる『具体』作家展	展示	
2013	1月12日	DECO×enoco 江之子島壁画プロジェクト vol.2「ふしぎな enoco 島のアニメーションをつくらう！」	WS	主催:DECO(江之子島 A&L マネジメント)
2013	1月25日	enocoワークショップ・ラボ「美術品梱包講座: 絵画・額装の日」	講座	
2013	1月26日	enocoワークショップ・ラボ「美術品梱包講座: 彫刻・陶芸・機材の日」	講座	
2013	2月4日～15日	大阪府20世紀美術コレクション「三尾公三『FOCUS』表紙原画展」	展示	
2013	2月12日	「大阪府20世紀美術コレクション 連続講座」vol.1 (4) 三尾公三 70年代具象絵画の変貌、エアブラッシュと雑誌フォーカス	講座	
2013	2月9日～4月6日	タチヨナ×enoco 企画 アートワークショップ vol.6 《なんだこれ?》サークル	WS	主催:タチヨナ
2013	2月15～16日	アートフォーラム〈こどもとアート〉の現場を考える	WS / フォーラム	主催:大阪新美術館建設準備室
2013	2月15日～3月2日	大阪市現代芸術創造事業 BreakerProject「ex・pots 2011-2013」展覧会	展示	主催:ブレイカープロジェクト実行委員会
2013	2月22日	藤田陽介×Open Reel Ensemble コラボレーション公演『未知ナル集合体』Tour 2014	ライブ	主催:藤田陽介
2013	3月2日	『霧はれて光きたる春』上映会&クロストーク / 記者発表会	イベント	主催:一般社団法人 プリコラージュ・ファウンデーション
2013	3月11日～22日	大阪府20世紀美術コレクション 「前田藤四郎 関西モダニズム版画の誕生と変遷」	展示	
2013	3月12日	「大阪府20世紀美術コレクション 連続講座 vol.1 (5) 前田藤四郎 関西モダニズム版画の誕生と変遷	講座	
2013	3月21日	enocoの学校「Be Creative コース2013」第1期生 大阪活性化計画 公開プレゼンテーション	イベント	
2013	3月21日	enoco2周年記念パーティ	パーティー	
2013	3月22日	肌感～hada kan～ 2014 第1回: 関西発! チアリーダーズクラブ! 女性リーダー石原由美子の元気と魅力に迫る	イベント	共催:株式会社インプリージョン
2013	3月23日	肌感～hada kan～ 2014 第2回: 本から本への旅。～スキを集めてイマをつくる～ 中川和彦を讀もう	イベント	共催:株式会社インプリージョン
2013	3月28日	学びと情報共有の場『考えるための勉強会 Vol.1』	トーク	主催:大阪でアーツカウンシルを考える会
2013	3月28日	第2回「アールの日」by 村片和彦&渡辺三郎	ライブ/WS	主催:Grassroots Music Workshop
2013	4月6日	肌感～hada kan～ 2014 第3回: 舞台～映画まで創造の世界。大阪の新しい見方。制作者谷口仁則のひらめきに触れる一日。	イベント	共催:株式会社インプリージョン
2013	4月6日	タチヨナ×enoco《なんだこれ?》サークル発表会	イベント	主催:タチヨナ
2014年度				
2014	4月11日	サロン文化大学のアニメ界隈ニュース	トーク	主催:サロン文化大学
2014	4月13日	もちより!!! 一般批評学会	トーク	主催:一般批評学会
2014	4月27、5月11日	タチヨナ×enoco 子どもアートワークショップ vol.7「?を自動販売機で売ろう!」	WS	主催:タチヨナ
2014	5月11日～8月17日	自動販売機はじめました。	展示	主催:タチヨナ

開催年度	日程	プログラム名	ジャンル	主催・共催 (enoco 以外)
2014	5月17日、6月14日、7月5日	dracom×enoco workshop『gallery』の声	WS	主催:dracom
2014	5月22日	わがまちカンファス事業成果発表&平成26年度事業説明会	フォーラム	主催:大阪府
2014	6月12日	eno so done! 2014 第1期	相談事業	主催:大阪府
2014	6月21日～7月5日	FLAG ART EXCHANGE Düsseldorf—OSAKA 報告展 「あなたがほしい i want you」	展示	主催:FLAG
2014	6月26日	eno so done! 2014 第1期	相談事業	主催:大阪府
2014	6月28日	TACT/FEST 2014 特別企画 Talk Battle about the Arts 「アートで何ができねん!？」	フォーラム	主催:TACT/FEST2014
2014	7月3日	学びと情報共有の場『考えるための勉強会 Vol.2』	トーク	主催:大阪でアーツカウンシルを考える会
2014	7月10日	eno so done! 2014 第1期	相談事業	主催:大阪府
2014	7月24日	eno so done! 2014 第1期	相談事業	主催:大阪府
2014	8月7日	eno so done! 2014 第1期	相談事業	主催:大阪府
2014	8月5日～7日	シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 夏季WS 俳優教育の最高峰ロシアから学ぶ【演技ワークショップ】!	WS	主催:シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 [TCL大阪]
2014	8月8日	アートフォーラム〈こどもとアート〉の現場を考える 「キッズ☆ファンタスティックミュージアム」	WS	主催:大阪新美術館建設準備室
2014	8月19日～30日	アートでつむぐ、5つのストーリー —5人の市民キュレーターによる、大阪府20世紀美術コレクション展—	展示	主催:大阪新美術館建設準備室
2014	8月27日	文化庁文化芸術創造都市振興室 第4回クリエイティブcafé	トーク	主催:文化庁文化芸術創造都市振興室 共催:大阪府民文化部都市魅力創造局文化課、大阪市経済戦略局文化局文化課
2014	8月28日	eno so done! 2014 第1期	相談事業	主催:大阪府
2014	8月29日～2月28日	eno so done! 2014 第1期	相談事業	主催:大阪府
2014	8月31日	サロン文化大学のランドスケープサミット1 団地とビルの秘密を探るお話	トーク	主催:サロン文化大学
2014	8月31日	こども熱帯音楽祭2014	ライブ	主催:大阪市立大学 共催:NPO法人cobonタチヨナプロジェクト
2014	8月31日、9月3日、6日	シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 オープンキャンパス	講座	主催:シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 [TCL大阪]
2014	9月10日～14日	第2回大阪インターカレッジ・パブリックスタイル・ワークショップ 水都大阪再生: まちのつかいこなしのデザイン 建築都市系5大学が描く「水都大阪」のオルタナティブ・ビジョン	展示	主催:大阪インターカレッジ・パブリックスタイル・ワークショップ実行委員会 共催:大阪府都市魅力創造局文化課、NPO法人パブリックスタイル研究所(RIPS)
2014	9月10日	第2回大阪インターカレッジ・パブリックスタイル・ワークショップ 水都大阪再生: まちのつかいこなしのデザイン シンポジウム	シンポジウム	主催:大阪インターカレッジ・パブリックスタイル・ワークショップ実行委員会 共催:大阪府都市魅力創造局文化課、NPO法人パブリックスタイル研究所(RIPS)
2014	9月18日	eno so done! 2014 第2期	相談事業	主催:大阪府
2014	9月20日	enoco Workshop LABO. 「額装のいろは」	WS	
2014	9月23日～10月5日	大阪府20世紀美術コレクション 津高和—展 ～抽象のエスプリ～	展示	
2014	9月26日～28日、10月3日～5日	dracom×大阪府20世紀美術コレクション dracom祭典2014「gallery (extra version)」	パフォーマンス	主催:dracom
2014	9月30日～10月2日	dracom×大阪府20世紀美術コレクション特別展『gallery』の声	展示	

開催年度	日程	プログラム名	ジャンル	主催・共催(enoco以外)
2014	2014年10月1日 ～2015年7月24日	シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 第2期生(ベーシッククラス)	講座	主催:シアター・コミュニケーション・ ラボ大阪 [TCL 大阪]
2014	10月2日	eno so done! 2014 第2期	相談事業	
2014	10月24日	Osaka Creative Forum 「まちの魅力のつむぎ出しかた ～まちが魅力的であり続けるためのプラットフォームとは?～」	フォーラム	主催:大阪府
2014	10月25日	enoco ディスカッション シンガポールの事例に学ぶ、クリエイティブなまちづくり	トーク	共催:大阪ガス
2014	11月1日	アートフォーラム <こどもとアート>の現場を考えるトーク&ディスカッション	フォーラム	主催:大阪新美術館建設準備室
2014	11月6日、7日、 2月6日	enoco わがまち文化コーディネーター講座 ～アートやデザインを活用した地域づくりの担い手育成プログラム～	講座	
2014	11月12日	eno so done! 2014 第2期	相談事業	主催:大阪府
2014	11月16日	安威川フェスティバル2014	イベント	主催:安威川ダム ファンづくり会
2014	11月20日	eno so done! 2014 第2期	相談事業	主催:大阪府
2014	11月21日～12月5 日	大阪府20世紀美術コレクション 齋藤真成展 [パラレル]	展示	
2014	11月25日	学びと情報共有の場『考えるための勉強会 Vol.3』	トーク	主催:大阪でアーツカウンシルを考 える会
2014	11月29日	アーティスト・サポート・プログラム enoco [study?] #2 堀川すなお 中間発表	トーク	
2014	12月11日	eno so done! 2014 第2期	相談事業	主催:大阪府
2014	12月13日	サロン文化大学のランドスケープサミット2 聖地とビルを秘密を探るお話	トーク	主催:サロン文化大学
2014	1月10日～24日	アーティスト・サポート・プログラム enoco [study?] #2 堀川すなお 「解釈と行為 SEEING AND PRACTICING」	展示	
2014	1月10日～24日	MuDA EXHIBITION	展示 / パフォーマンス	主催:MuDA
2014	1月13日～24日	OPEN YOUR BOX ～5人の市民キュレーターによる大阪府20世紀美術コレクション展～	展示	主催:大阪新美術館建設準備室
2014	1月17日	サロン文化大学のランドスケープサミット3 高低差とビルを秘密を探るお話	トーク	主催:サロン文化大学
2014	1月29日	eno so done! 2014 第3期	相談事業	主催:大阪府
2014	1月31日	タチヨナ×enoco 企画 オヤトコエノコ「モシモ人形をつくろう!～ワタシとボクの 分身人形～」	WS	主催:タチヨナ
2014	2月5日、12日、19日、 26日、3月5日	シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 オープン講座	講座	主催:シアター・コミュニケーション・ ラボ大阪 [TCL 大阪]
2014	2月7日	enoco Workshop LABO. 「美樹のいろは」	WS	
2014	2月19日	eno so done! 2014 第3期	相談事業	主催:大阪府
2014	2月21日	クリエイター交流会「こたつ会議」	パーティー	
2014	2月26日	eno so done! 2014 第3期	相談事業	主催:大阪府
2014	2月28日	タチヨナ×enoco 企画 オヤトコエノコ「〇まる △さんかく □しかく の絵本づくり」	WS	主催:タチヨナ
2014	2月28日	サロン文化大学のランドスケープサミット4 関東のビルと関西のビルを秘密を探るお話	トーク	主催:サロン文化大学
2014	3月7日	タチヨナ×enoco 企画オヤトコエノコ「カオ!カオ! (^o^)/写真大絵巻!」	WS	主催:タチヨナ、DECO(江之子島 A&L マネジメント)
2014	3月14日	第17回 KAMO (Konohana Arts Meeting for Osaka) 都市で楽しむアートとは?	トーク	主催:KAMO(Konohana Arts Meeting for Osaka)
2014	3月17日	「わがまちカンファス事業」成果発表・平成27年度募集説明会	フォーラム	主催:大阪府
2014	3月18日	クラウドファンディングセミナー @enoco	イベント	主催:大阪府、FAAVO 大阪
2014	3月19日	大阪市現代芸術創造事業 BreakerProject 「地域に根ざした創造活動拠点の 実験 2014-2015」ラウンドテーブル「地域資源を活用した創造活動拠点」	フォーラム	主催:プレーカープロジェクト実行委 員会
2014	3月20日～4月4日	眼と心とかたち「学芸員N」が出会った大阪府20世紀美術コレクション	展示	

開催年度	日程	プログラム名	ジャンル	主催・共催(enoco以外)
2014	3月21日	タチヨナ×enoco 企画 ～ご近所映画祭～3時間で映画をつくる&ご近所映画を観る	WS	主催:小島剛(NPOcobonタチヨナ プロジェクト)、共催:NPOremo、 NPOcobon
2014	3月26日	eno so done! 2014 第3期	相談事業	主催:大阪府
2014	3月28日	enocoの学校 第2期公開プレゼンテーション:「大阪の未来を考える」	イベント	
2015年度				
2015	4月24日～5月16日	大阪府20世紀美術コレクション 「マイク・カネミツ / 金光松美 - ふたつの居場所」	展示	
2015	5月9日	enoco Workshop LABO. 「作品写真の撮り方ーみんなのカメラの「?」を解決!」	WS	
2015	5月16日	えのこdeマルシェ「春の古本市」	イベント	
2015	6月25日	学びと情報共有の場『考えるための勉強会 Vol.4』「なぜ大阪はアーツカウンシル だったのか」	トーク	主催:大阪でアーツカウンシルを考 える会
2015	7月25日	アートでつなぐみんなの実験場【えのこじま仮設映画館】プライベート 「remoscope」	WS	
2015年	8月1日～3月19日	enocoの学校 第3期「ソーシャルデザイン入門コース2015」	講座	
2015	8月1日～30日	アートでつなぐみんなの実験場【えのこじま仮設映画館】	複合型イベント	
2015	8月1日	【えのこじま仮設映画館】オープニング スペシャル上映会&トーク 「映画館」という存在のこれから	トーク	
2015	8月2日、9日	大力拓哉・三浦崇志「エノコトコトムービー部」	WS	
2015	8月4日～6日	映画館をつくろう - 映画館製作部 -	WS	
2015	8月4日、8月12日	映画のしくみ工作部	WS	
2015	8月12日、8月19日、 8月26日	妄想映画祭の公開ミーティング	トーク	
2015	8月6日	SCOPP「みんなで作ろう!コマドリアニメーション」	WS	
2015	8月8日	林勇気「遠くをみるために」	WS	
2015	8月22日	この夏、みんなが撮った写真を持ち寄り上映する会	イベント	
2015	8月22日	「KANSAI ご近所映画クラブ～大阪編～「3時間で映画をつくる!」&「ご近所 映画をみる」	WS	主催:一般社団法人タチヨナ 共催:NPOremo
2015	8月22日	えのこdeマルシェ「おとなの夜市」	イベント	
2015	8月26日	アートフォーラム(こどもとアート)の現場を考える「キッズ!ファンタスティックミュ ージアム-こどものためのワークショップ-」	WS	主催:大阪新美術館建設準備室
2015	8月27日	学びと情報共有の場『考えるための勉強会 Vol.5』 「基礎自治体におけるアーツカウンシルの限界と可能性～町内会だってアーツカウ ンシル!？」	トーク	主催:大阪でアーツカウンシルを考 える会
2015	8月28日～31日	シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 演劇ワークショップ / レクチャー	WS / トーク	主催:シアター・コミュニケーション・ ラボ大阪 [TCL 大阪]
2015	8月28日	とびだせ!一般批評学会 THE MOVIE	トーク	主催:一般批評学会
2015	8月29日	ジョナス・メカス《ウォールデン》上映会	イベント	
2015	8月29日	アートフォーラム(こどもとアート)の現場を考える こどもとアートの現場のつくりかた - トーク&ディスカッション -	トーク	主催:大阪新美術館建設準備室
2015	8月30日	エノコトコトムービー部作品上映会	イベント	
2015	9月4日	Osaka Creative Forum 「新しいパブリックはいかに持続可能なものとなるのか」 ～まちが魅力的であり続けるためのプラットフォームとは?～」	フォーラム	主催:大阪府
2015	9月5日	eno so done! スペシャルバージョン「都市の価値創造作戦会議」	フォーラム	共催:大阪ガス
2015	10月11日	ミスベリング世界会議における大学間連携の提案プレゼンテーション	フォーラム	
2015	10月22日	学びと情報共有の場『考えるための勉強会 Vol.6』 「これからのアーツカウンシル東京」	トーク	主催:大阪でアーツカウンシルを考 える会
2015	10月31日	安威川フェスティバル2015	イベント	主催:安威川ダム ファンづくり会



開催年度	日程	プログラム名	ジャンル	主催・共催(enoco以外)
2015	11月21日	えのこdeマルシェ「古本市[アートブック特集]」	イベント	
2015	11月21日	えのこじま凸凹ラジオ(FM凸凹)開局記念放送	イベント	主催:DECOBOCO
2015	11月26日	学びと情報共有の場「考えるための勉強会 Vol.7」 「園として取り組むアーツカウンシル」	トーク	主催:大阪でアーツカウンシルを考える会
2015	11月29日	アーティスト・サポート・プログラム enoco[study?] #3湯川洋康・中安恵一 中間報告会&レビュー	トーク	
2015	12月4日	eno so done! 2015 連続フォーラム「市民協働」	フォーラム	主催:大阪府
2015	12月15日～26日	5人の市民キュレーターによる大阪府20世紀美術コレクション展 「あなたをうつす5つの鏡」	展示	主催:大阪新美術館建設準備室
2015	12月21日	eno so done! 2015 連続フォーラム「戦略的広報」	フォーラム	主催:大阪府
2015	1月10～30日	アーティスト・サポート・プログラム enoco[study?]#3 湯川洋康・中安恵一 「流暢な習慣」	展示	
2015	1月22～24日	enoco×KIITO×BRITISH COUNCIL スペシャルセッション 「課題解決に向けたアートとデザインの役割と可能性」	フォーラム/ WS	主催:デザイン・クリエイティブ・センタ ー神戸[KIITO]、ブリティッシュ・カウ ンシル
2015	1月27日	クラウドファンディングセミナー Vol.2	フォーラム	主催:大阪府、FAAVO大阪
2015	1月30日	えのこdeマルシェ「都会の冬に、ちび火とマルシェ。」	イベント	
2015	1月30日	大阪成蹊大学×enoco連携アートプロジェクト2016 エノコこのこ? 「アートのこども!!」プレワークショップ	WS	主催:大阪成蹊大学芸術学部
2015	1月31日	タチヨナ×enoco オヤトコエノコ2016 親子でつくるワークショップ わが家の「…」初級編 / わが家の曲を作ろう!	WS	主催:一般社団法人タチヨナ
2015	2月9日～14日	大阪成蹊大学×enoco連携アートプロジェクト エノコこのこ? 「アートのこども!!」	展示 / WS	主催:大阪成蹊大学芸術学部
2015	2月21日	えのこじま凸凹ラジオ「ラジオ番組をつくろう!」ワークショップ	WS	主催:DECOBOCO
2015	2月25日	学びと情報共有の場「考えるための勉強会 Vol.8」 「どうする、大阪アーツカウンシル」	トーク	主催:大阪でアーツカウンシルを考える会
2015	2月28日	タチヨナ×enoco企画 オヤトコエノコ2016 親子でつくるワークショップ わが家の「…」中級編 / ワガヤ体操を作ろう!	WS	主催:一般社団法人タチヨナ
2015	2月28日	京都造形芸術大学アートプロデュース学科 × enoco 「わたしたちがみた当世美術館事情10 2015年度美術館調査」 報告会&フリーディスカッション	フォーラム	主催:京都造形芸術大学アートプロ デュース学科
2015	3月1日～12日	大阪市現代芸術創造事業 Breaker Project 草本利枝 写真展+連続トーク「ニシナリに fenceはないと猫は言う」	展示 / トーク	主催:プレーカープロジェクト実行委 員会
2015	3月4日	「わがまちカンヴァス事業」成果発表・次年度募集説明会	フォーラム	主催:大阪府
2015	3月4日	eno so done! 2015連続フォーラム「アートは都市に何をもたらすか」	フォーラム	主催:大阪府
2015	3月19日	enocoの学校 第3期 ソーシャルデザイン入門コース公開プレゼンテーション 「創造思考で未来を変える!」	イベント	
2015	3月20日	公開井戸端会議「えのこじま凸凹ラジオのあそびかた」	WS	主催:DECOBOCO
2015	3月20日	大阪水の回廊を巡る enoco 船上パーティ	パーティー	
2015	3月27日	タチヨナ×enoco企画 オヤトコエノコ2016 親子でつくるワークショップ わが家の「…」上級編 / わが家の…を作ろう!	WS	主催:一般社団法人タチヨナ
2016年度				
2016	2016年4月～ 2017年2月	シアター・コミュニケーション・ラボ大阪 第3期生(ベーシッククラス)	講座	主催:シアター・コミュニケーション・ ラボ大阪 [TCL 大阪]
2016	5月14日	えのこdeマルシェ「特集 古本と園芸」	イベント	
2016	5月14日	えのこじま文化祭 2016SS	イベント	主催:DECOBOCO
2016	5月21日	タチヨナ×enoco企画 おとなとこどものワークショップ 「ストーリーテリング・イン・サウンド -英語でコミュニケーションする音楽ワーク ショップ-」	WS	主催:一般社団法人タチヨナ

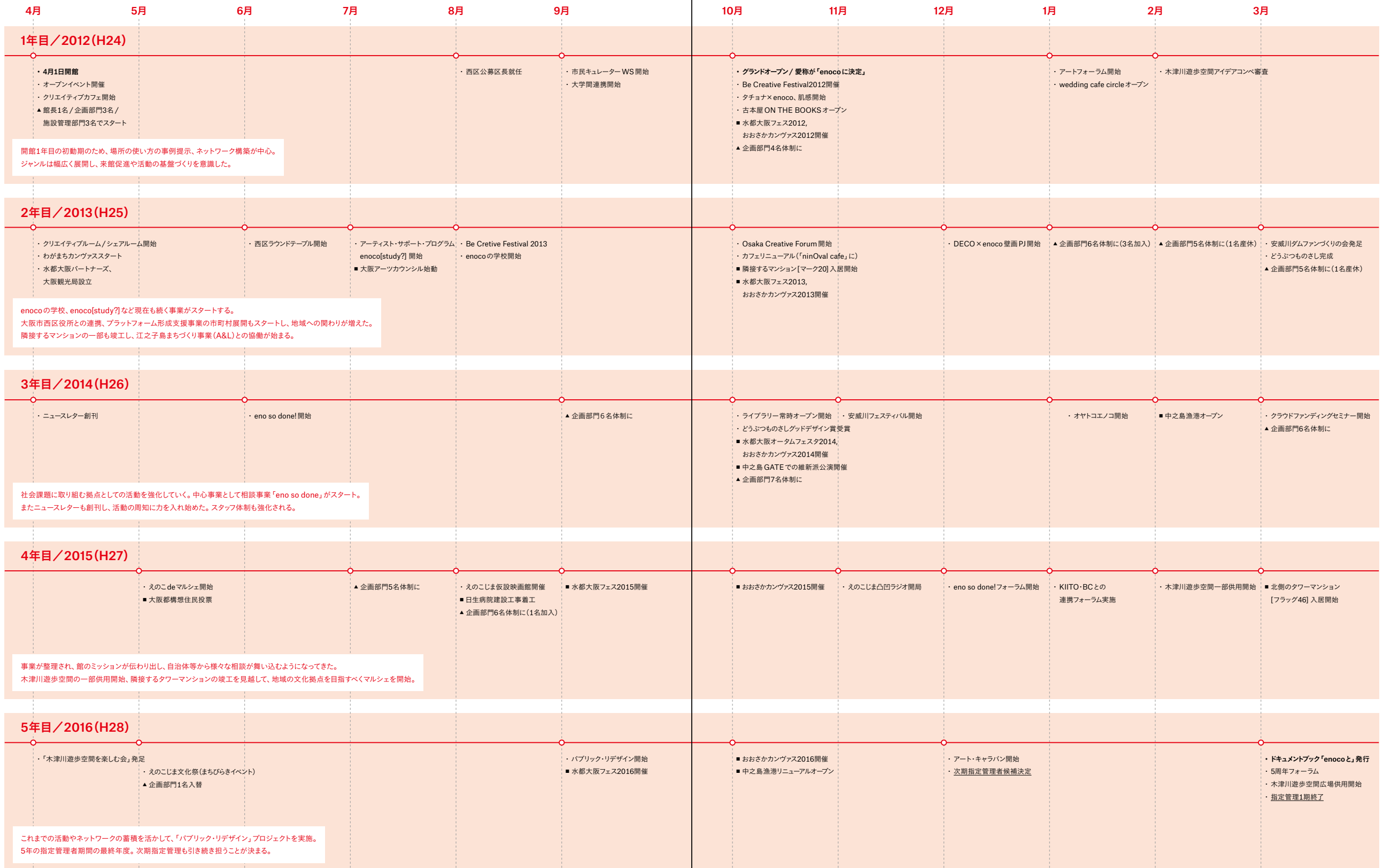
開催年度	日程	プログラム名	ジャンル	主催・共催(enoco以外)
2016	6月～	えのこじま凸凹ラジオ(FM凸凹)定期放送開始	その他	主催:DECOBOCO
2016	6月21日～7月10日	Private Talk	展示 / トーク	主催:DECOBOCO
2016	7月8日～3月4日	enocoの学校第4期 [ソーシャルデザイン入門コース]	講座	
2016	7月12～17日	大阪成蹊大学 × enoco 連携アートプロジェクト 2016 「かならず いつも そばに ちかくに ここにある でも期間がある たくさんの個」	展示	共催:大阪成蹊大学芸術学部
2016	8月25日	eno so done! 2016 #1 (個別相談会)	相談事業	
2016	8月27日	えのこdeマルシェ「おとなの夜市」	イベント	
2016	9月1日～18日	大阪府20世紀美術コレクション須田剋太展 -「街道をゆく」挿絵原画 海外のみちをゆく-	展示	
2016	9月11日	アーティスト・サポート・プログラム enoco [study?] #4 クロストーク・募集説明会	トーク	
2016	10月8日	eno so done! 2016 #2 「enocoの大相談会」	相談事業 / フォーラム	
2016	10月16日	安威川フェスティバル 2016	イベント	主催:安威川ダム ファンづくり会
2016	10月22日	大学間連携プラットフォーム形成支援事業2016「大阪・関西での『滞在』を考 える 最終講評会」	トーク	主催:大阪府
2016	11月11日	Osaka Creative Forum「パブリックスペースが開く、都市の未来」	フォーラム	主催:大阪府
2016	11月12日	eno so done! スペシャルバージョン 都市の「価値創出」作戦会議	トーク	共催:大阪ガス
2016	11月23日	えのこdeマルシェ「読書&食欲の秋」特集	イベント	
2016	11月23日	えのこじま文化祭 2016AW	イベント	主催:DECOBOCO
2016	12月13～25日	パブリック・リデザイン	展示	
2016	12月17日	パブリック・リデザイン シンポジウム「公共とデザインのこれまでとこれから」	シンポジウム	
2016	12月14日、15日、 20日～22日	eno so done! 2016 #03 「デザイン大相談会」	相談事業	主催:大阪府
2016	12月17日	大阪芸術事情・事情聴取	トーク	主催:大阪市
2016	12月17日	enocoクリスマスパーティー	イベント	
2016	1月10～15日	大阪成蹊大学×enoco連携アートプロジェクト2016「ひょうきょう eno 国」	展示	主催:大阪成蹊大学芸術学部
2016	1月18日～2月11日	大阪新美術館×大阪府20世紀美術コレクション「大阪版画百景」	展示	主催:大阪新美術館建設準備室
2016	1月21日	アーティスト・サポート・プログラム enoco[study?]#4 冬木遼太郎「顔のこうかん、 役割のこうかん」	WS	
2016	1月27日	アーティスト・サポート・プログラム enoco[study?]#4 冬木遼太郎 中間発表&レ ビュー	トーク	
2016	2月4日、2月18日、 3月4日	enoco × タチヨナ企画 「ヒミツのこども企画会議」	WS	主催:一般社団法人タチヨナ
2016	2月25日	えのこdeマルシェ「世界旅行」	イベント	
2016	3月4日	enocoの学校 第4期 公開プレゼンテーション「新しい大阪の魅力(スタイル)を 創造する」	イベント	
2016	3月11日～26日	アーティスト・サポート・プログラム enoco[study?]#4 冬木遼太郎 「A NEGATIVE EVAGINATE」	展示	
2016	3月17日	KIITO×enoco×BRITISH COUNCIL フォローアップサロン	フォーラム	
2016	3月25日	enoco × タチヨナ企画 「ヒミツのこども企画会議」によるワークショップ	WS	主催:一般社団法人タチヨナ
2016	3月25日	enoco5周年フォーラム「創造のテーブル 2017」	フォーラム	
2016	3月25日	クリエイティブパーティー	パーティー	

主な協力事業(主催・共催事業外でenocoが支援・協力を行った事業【一部】)

- 1) 中之島GATEにおける劇団・維新派「透視図」公演のための許認可申請協力(2014年10月)
- 2) 大阪府精神障がい者地域交流事業 芸術・文化交流展に実行委員メンバーとして協力(2013年度、2014年度)
- 3) 泉南市「市民居場所づくりのためのアートプログラム」の企画・運営への協力(2016年8月)

# enoco と enoco のまわりの5年間(年表)

■ … enoco 周辺の出来事  
▲ … スタッフ体制について





## あとがきにかえて。

僕の前に道はない  
僕の後ろに道は出来る

私は高村光太郎の道程のこの一節が好きである。  
私自身の座右の銘のひとつである。

このドキュメントは、普通に考えれば、enocoの5年間の足跡である。  
しかし、私自身は、「過去の延長線上に未来はない！」と常々思っているので  
足跡を単にたどるつもりはないし  
記録を残すこともあまり得意ではない。

Be Creative!をスローガンに掲げ、5年間私たちは活動を展開してきた。  
アーティストやデザイナーといった、  
いわゆる、一般的にクリエイターと呼ばれる人たちのための施設にはしたくなかった。  
より多くの人々がCreativeの素晴らしさを享受できる施設を目指し  
様々な事業を企画、実施してきた。

私は、誰もが、Creativeに物事を捉えられるようになった時、  
日本の都市や人々の暮らしは素敵になると信じている。  
言い換えれば、創造性の大切さという点において  
日本人の意識レベルは低いように思う。  
これは、教育の責任かもしれないし  
戦後の日本社会が個性よりも画一を求めてきた結果でもある。  
効率主義で作られた社会から生まれ変わるには創造思考が必要なのである。

では、Creativeとは、創造思考とは一体何なのか？  
私は、「壊して創る行為」のことだと信じている。  
今までの通念や概念、仕組みや価値感に囚われることなく、  
未来をイメージしてから今すべきことを考える。  
創造思考の基本はForecastingではなくBackcastingである。  
継続することにまずは疑問を持ち、その行為や方法論を検証してみる。  
あるいは、設定した未来の社会成果達成に向けてある仮説を立て、実験してみる。

このドキュメントは、そういった観点から見れば、  
創造思考から生まれた活動の、ある種の実験ノートとも言える。  
私たちは、紆余曲折しながらも実に多彩な事業を展開してきた。  
もちろん、それぞれには設定した評価基準があるわけだが、  
全てが成功したとは言えない。  
私はそれで良かったと思っている。

過去の様々な成功事例をひもとき、今に合わせて実施すれば、  
成功打率は上がる。  
しかし、それは私たちがやるべきことだろうか？  
「Creativeの力で社会や地域が抱える課題を解決する」ことを  
ecocoのImpact（社会成果）に掲げた以上、  
私たちには、常に新しい創造活動が求められていると思っている。

新しいことに成功を求めるには、実験が必要だ。  
新しいスキームを確立するには、実験が必要だ。  
Creativeとは、ある意味恐れられない実験的行為の上に成り立つ。  
失敗は大切な宝物である。失敗がなければ新たな発想も起こらない。

このドキュメントには、  
様々な言葉、キーワードが散りばめられている。  
それらを紡いでいくことで、  
ある事業や活動のひとつのヒントになっていくと思う。  
もちろん、それらを編集し、アイデア化し、企画に高めていくのは、  
このドキュメントを読んでいるCreativeな皆さんに他ならない。

このドキュメントに登場する様々なジャンルの多様な人々は  
enocoの財産目録と言っても言い過ぎではない。  
私の手元には関西在住の800人を超える名刺がある。  
1年間で少なくとも160人を超える人々と会ったことになる。  
もちろん、全ての人とお付き合いがあるわけではないが。

この5年間の活動は、  
ある意味、社会資本を形成していくための旅であったのかもしれない。  
しかし、スタッフが丸丸となって蓄積してきた社会資本も  
まだまだ、活かされているとは言えない。  
資本は上手に使わなければ、価値を創造することにはならない。  
まさに宝の持ち腐れである。  
次の5年は、今までのCreativeな実験的行為を通して得たノウハウと  
蓄積された社会資本をさらに増やしつつも、積極的に活用し  
誰からも求められるCreativeな運動体になっていかなければならない。

その先に社会資本が文化資本にも経済資本にも醸成していく可能性がある。

そのためには、私たち自身が「もっと、Creativeに」ならなければならない。  
Creativeに物事を考えられる人々を増やしていかなければならない。  
そして、様々なステークホルダーとのCo-creationを積極的に  
推進していく必要があるだろう。  
その活動は、大阪に限らず、関西、  
あるいはアジアという広がりを見せていくのかも知れない。

まずは、5年後の私達のあるべき姿、達成すべき成果を  
スタッフと議論し、共有することから始めることにしよう。

館長 甲賀雅章



## 編集後記

建築や都市のリサーチを専門とする私たちに、enocoの5年間の活動のドキュメントブックをつくってもええませんかという話が来たとき、高岡さんや高坂さんの懐の深さに驚きつつも、建築的な知見がどのように文化芸術施設のドキュメンテーションで展開できるのかを考えてみたいと思い引き受けました。私たちのenocoへの関心は、軸足を文化芸術にしっかりと置きつつ、都市再生・まちづくり、そして社会の課題解決に取り組む姿勢を明確に打ち出していることにあります。マンション管理を主な事業とする長谷工コミュニティとランドスケープデザイン事務所のE-DESIGNが指定管理者となり、運営メンバーにはアートの特門家のみならず、大阪の近代建築史に詳しい建築家がディレクターとして存在するという運営体制も興味深いところ。文化芸術を個人の趣味性や内面の豊かさのみの問題とせず、都市の中でそれがどのように展開できるのか。そして都市再生やまちづくりに内在する文化や創造性に注目することで都市がどのように変化していくのか。このような問いに対する意識がenocoにはあるように感じます。示唆に富んだ気づきや答えを本書の中で多く見出すことができるでしょう。

編集方針については、時系列に並べたりテーマに分けて紹介したりするような、一般的な記録集の手法は取らずに、「タイムスパン」と「ネットワーク」によってenocoの活動の整理を試みてみました。建築や都市計画では、同じ対象について様々なスケール(縮尺)の図面を描きますが、どの図面も意味や役割が異なります。小さいスケールは「どのようにつく

るか」ということを目的としている場合が多く、対して大きなスケールは「その建物がどのように環境の中に置かれるか」を理解するためのものになります。このように、同じ事象を扱っているにもかかわらず、スケールによって読み取ることができる意味は異なってきます。これをenocoの5年間に置き換えると、事業全体を見るか、もしくはその事業を構成するひとつのプログラムにフォーカスするかによって、異なる成果や役割を見出すことができます。金太郎船のようにどこで切っても一緒ではなく、時間のスケールによって異なる断面が見えてきます。そこに適切な意味や役割が与えられ、それらが関係付けられることでより大きな目的を達成することができます。事業のひとつひとつがより大きな目的に向かうための手段であり、同時に完結した目的を持っています。この複数のスケールからなるタイムスパン別の事業をそれぞれに関係づけているのが、enocoを取り巻く人と組織からなるネットワークです。enocoがこれまでに作りあげてきたこのネットワークは、分野、立場、関わり方問わず、極めて膨大なものです。その全体像を見ることはできませんが、インタビューではそんなネットワークの一端を垣間見ることができでしょう。

また、本書にはenocoが5年間という時間をかけて培ってきた運営のノウハウや知見を広く共有し、社会の中で役立てたいという思いを込めています。事業を考える際、それによって達成したい成果と、そこに対してどの程度のリソースが必要になるかを考

えます。そのときにお金や人材と同様に、時間も重要なリソースのひとつとなるでしょう。単年度毎に予算が執行されるenocoのような施設ではなおさら事業スパンは重要です。タイムスケールとその成果を軸に事業を紹介することで、例えば3時間で何が達成できるのか、またある成果を生み出すためにはどれくらい的时间が必要か、ということが見えてきます。それを具体的な事業計画の参考にもらえればと考えました。そのためなるべくenocoの成果の記載は一般性を持つようにしています。また事業を成功させるコツを提示することで、様々な状況に合わせてアレンジしてもらえるように心がけています。さらには、enocoの5年間にとどまらず、さらに大きな時間のスケールにまで引いた視点を持ち込むことで、enocoを含んだより大きな視野からも理解ができるように考えました。このドキュメントブックが、今後の文化行政、そしてクリエイティブなまちづくりに少しでも役立つものになることを願っています。

最後に、私たちにこのような機会を与えてくださったenocoの皆さん、そしてインタビューにご協力いただいた皆さん、ふわっとしたイメージをデザインに落とし込んでくださった中崎さん、イラストを快く引き受けてくださったタグさん、文字起こしや校正などに協力してくださった野澤美希さんに感謝を表します。ありがとうございました。

2017年3月吉日  
RAD（川勝真一、榎原充大）

開館から5年間という最初の指定管理期間の終わりが見えてきて、「つくらないかん」と思い続けてきたドキュメンテーションに、ようやくとりかかることになりました。enocoはこれまでたくさんのクリエイターの方とお付き合いをしてきましたが、「なにをやっているかようわからん」と言われることも多いenocoを、第3者として客観的に捉えなおしてもらいたいという思いで、あえてこれまで一緒に仕事をしたことのないRADに編集をお願いすることにしま

した。反対にデザインは、enoco初期から関わりのある中崎航さんをお願いすることで、新旧の視点から見たenocoが浮かび上がってくることを狙いました。あわせて、中からの視点と、関係者を含めた外からの視点を交え、様々なスケールやスパン、ネットワークの重なりで構成された事業を解きほぐす作業を重ね、時にその複雑さに悩み、時に改めて見えてくることに驚き、私たちの悲願である(!?)ドキュメントブックが出来上がりました。

これまでenoco「と」関わりのあった皆さま、本ドキュメントブックの制作にご協力いただいた皆さまに改めて感謝いたします。これからも様々な「と」を生み出すべく、次の5年に向かいたいと思います。

高坂玲子（enoco企画部門プログラムディレクター）

enocoと - 江之子島文化芸術創造センターのつかいみち -

2017年3月31日発行

発行者：大阪府立江之子島文化芸術創造センター  
(指定管理者：長谷工コミュニティ・E-DESIGNプラットフォームグループ)  
大阪府大阪市西区江之子島2丁目1-34  
電話：06-6441-8050  
メール：art@enokojima-art.jp  
ホームページ：http://www.enokojima-art.jp

編集：RAD（川勝真一、榎原充大）、enoco（高坂玲子、高岡伸一）  
デザイン：中崎航  
イラスト：タグユキヒロ  
写真クレジット：特記なき場合はenoco提供  
印刷・製本：泰和印刷株式会社





Copyright© Enokojima Art, Culture and Creative Center,  
Osaka Prefecture. All Rights Reserved.